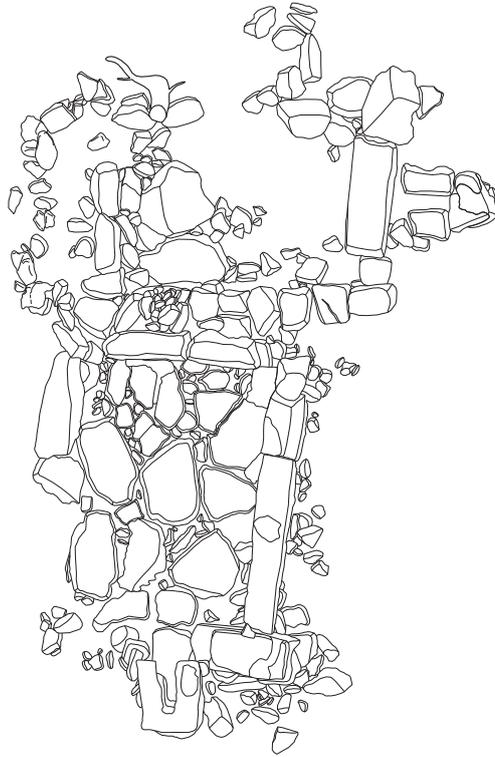


# 大工廻八所集落跡B地点 大工廻上与那原遺跡

-嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内の基地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



2024（令和6）年3月

沖縄市教育委員会

## はじめに

本報告書は2019（令和元）年度に沖縄市が実施した、嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内の基地開発に伴う「大工廻八所集落跡B地点 大工廻上与那原遺跡」の埋蔵文化財発掘調査成果をまとめたものです。

今回の調査地は沖縄市字大工廻上与那原に所在する遺跡です。当該地域は戦後、嘉手納弾薬庫地区の軍用地となり黙認耕作地として利用されていましたが、近年は耕作放棄され、草木が繁茂している状態でした。

過去の研究史や「嘉手納（H27）知花地区文化財試掘調査」の成果により、大工廻八所集落跡B地点では首里・那覇周辺の土族階級が地方に移り居住した近代の屋取集落跡、大工廻上与那原遺跡ではグスク時代から近世にかけての遺跡が確認されていました。

発掘調査の結果、大工廻八所集落跡B地点からは、八所集落の人たちが使用していたと考えられる生活の跡だけではなく、近世から戦後にかけての土地の利用が確認されました。大工廻上与那原遺跡からは、遺構（土坑・ピット）や、遺物（土器や青磁等）も見つかりました。当該地域周辺には戦前の屋取集落よりもっと以前から人々がいたことが解りました。

また、発掘調査に合わせて植生調査・聞き取り調査を行った結果、文献には記されていない生活に密接した植物利用や、周辺集落から見た八所集落の当時の様子も垣間見ることができました。

今回の発掘調査で得られた資料は私たちの歴史や郷土の暮らしを考えるうえで貴重なものです。本報告書が学術研究にとどまらず、地域文化への理解や歴史学習の助けとなり、文化財保護の普及等として市民はもとより多くの方々に活用していただけることを願います。

今回の発掘調査ならびに、本報告書を作成するに際し、ご指導、ご協力をいただいた皆様に、深く感謝の意を表します。

2024（令和6）年3月

沖縄市教育委員会  
教育長 比嘉良憲





巻頭図版 1 遺跡一帯の空中写真（2016年沖縄市撮影）

— 内は調査範囲



巻頭図版2 屋敷1 検出前（南東から）



巻頭図版3 屋敷2 検出前（南から）



巻頭図版 4 屋敷 1 検出状況（南東から）



巻頭図版 5 屋敷 1 焼土坑（SK05）検出状況（南西から）



巻頭図版6 屋敷2 検出状況（南西から）



巻頭図版7 屋敷3 検出状況（南西から）



巻頭図版 8 大工廻八所集落跡 B 地点調査区遠景 (南東から)



巻頭図版 9 道跡 1 検出状況 (北東から)



巻頭図版 10 道跡 2 検出状況 (南西から)



巻頭図版 11 道跡 3 検出状況 (南東から)



巻頭図版 12 道跡 4 検出状況 (南から)

## 例 言

- 本報告書は「嘉手納弾薬庫（H30）知花地区埋蔵文化財調査業務委託」として沖縄市教育委員会が沖縄防衛局と受託契約を行い、「大工廻八所集落跡B地点 大工廻上与那原遺跡」の発掘調査報告書として、その成果をまとめたものである。
- 本書は、2019（令和元）年度に実施した「大工廻八所集落跡B地点他発掘調査」の成果を、2020～2021（令和2～3）年度に資料整理作業、2022～2023（令和4～5）年度に報告書作成業務を行いまとめたものである。
- 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
- 下表は遺構記号の凡例である。

遺構記号	遺構記号種類	遺構記号	遺構記号種類	遺構記号	遺構記号種類	遺構記号	遺構記号種類
SA	土手	SG	水溜め・池	SVP	フール	SS	石敷き・配石・集石
SB	建物跡	SK	土坑・焼土坑	SN	畑	SU	遺物集中部
SD	溝	SKP	シーリ	SP	ピット	SW	土塁
SF	道（土・石敷き）						

- 層序や胎土などの色調は、「新版 標準土色帖 2005年版」を基準に記載している。
- 掲載資料については、資料右下に所蔵・資料名を記載した。
- 資料整理作業にあたり、調査体制の項で示した多くの方々に指導・資料の同定を頂いた。記して謝意を表したい。
- 本書の編集は比嘉 二規の指示のもと沖縄市立郷土博物館の富平 砂綾子・長堂 綾、株式会社パスコの翁長 武司・仲宗根 文子・宮良 知子・石川 千恵・関口 真由美が行った。
- 本書に掲載した各種遺物の分類は沖縄市立郷土博物館が行った。
- 本書に掲載した発掘調査状況と遺物の写真は、沖縄市立郷土博物館・株式会社パスコが撮影した。
- 本書の執筆は沖縄市立郷土博物館の比嘉 二規・大城 千明・長堂 綾、沖縄市文化財調査審議会委員の佐藤 寛之、株式会社パスコの翁長 武司・波木 基真・仲宗根 文子・宮良 知子・石川 千恵、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った。  
執筆分担は下記のとおりである。また遺物の分類については沖縄市立郷土博物館の指導による。
 

第1章・第3章 第1節～第3節・第4章・付編	長堂 綾
第2章・第3章 第7節	大城 千明
第3章 第4節 1（2）、（7）、（10）、2	翁長 武司
1（13）	波木 基真（脊椎動物遺体）
1（1）、（3）、（6）、（9）、（11）、（12）	仲宗根 文子
1（4）、（5）、（8）	宮良 知子・石川 千恵
第3章 第5節	パリノ・サーヴェイ株式会社
第3章 第6節	佐藤 寛之・（佐藤ら2020より）
第5章	比嘉 二規
- 発掘調査で得られた出土遺物・図面・写真等の記録類は、沖縄市立郷土博物館に保管されている。

# 本文目次

はじめに  
巻頭図版  
例言

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 発掘作業の経過	5
第4節 資料整理作業の経過	6
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	11
第3節 八所集落跡と周辺の遺跡の現況	15
第3章 大工廻八所集落跡B地点調査成果	16
第1節 調査の方法	16
第2節 層序	16
第3節 遺構	33
第4節 遺物	59
1. 出土遺物の概要	59
2. 各調査区の出土遺物	130
第5節 自然科学分析	141
第6節 植生調査	143
第7節 聞き取り調査および文献調査のまとめ	161
第4章 大工廻上与那原遺跡調査成果	171
第1節 調査の方法	171
第2節 層序	171
第3節 遺構	172
第4節 遺物	172
第5章 総括	182
第1節 大工廻八所集落跡B地点	182
第2節 大工廻上与那原遺跡	184

付編 製糖窯跡  
報告書抄録

## 挿図目次

第1図	嘉手納 (H27) 知花地区文化財試掘調査 試掘坑位置図	4	第37図	沖縄産施釉陶器：大鉢	79
第2図	沖縄市の遺跡	10	第38図	沖縄産施釉陶器：鍋、蓋、壺	80
第3図	大工廻八所集落跡B地点・ 大工廻上与那原遺跡の調査箇所	12	第39図	沖縄産施釉陶器：蓋、壺、瓶	81
第4図	調査区画	17	第40図	沖縄産施釉陶器：酒注	82
第5図	屋敷1層序	19	第41図	沖縄産施釉陶器：蓋、急須、香炉、火入	83
第6図	屋敷2層序	21	第42図	沖縄産施釉陶器：火鉢、蓋、袋物、尿瓶、 人形	84
第7図	屋敷3層序	23	第43図	沖縄産無釉陶器：播鉢、鉢、瓶、壺	93
第8図	屋敷外（丘陵北部・畑跡）層序	25	第44図	沖縄産無釉陶器：壺	94
第9図	屋敷外（丘陵南東部・道跡1）層序	27	第45図	沖縄産無釉陶器：壺	95
第10図	屋敷1壁面	29	第46図	沖縄産無釉陶器：甕	96
第11図	屋敷2・3壁面	31	第47図	沖縄産無釉陶器：器種不明、火炉、窯道具	97
第12図	八所集落期以前の遺構配置図 （焼土坑・土坑・ピット）	37	第48図	陶質土器：土瓶、水鉢	100
第13図	八所集落期以前の遺構（焼土坑）1	38	第49図	ガラス製品：飲料・調味料瓶	103
第14図	八所集落期以前の遺構（焼土坑）2	39	第50図	ガラス製品：化粧品	104
第15図	八所集落期以前の遺構（土坑・ピット）	40	第51図	ガラス製品：化粧品、薬品瓶・薬瓶	105
第16図	八所集落期の遺構配置図	43	第52図	ガラス製品：薬品瓶・薬瓶	106
第17図	屋敷1 全体平面図	44	第53図	ガラス製品：薬品瓶・薬瓶、文具	107
第18図	屋敷1の遺構1	45	第54図	ガラス製品：日用品、蓋、不明	108
第19図	屋敷1の遺構2	46	第55図	金属製品：農具、馬具、漁労具	113
第20図	屋敷1の遺構3	47	第56図	金属製品：工具・金物	114
第21図	屋敷2 全体平面図	49	第57図	金属製品：工具・金物、日用品・その他	115
第22図	屋敷3 全体平面図	51	第58図	金属製品：日用品・その他、用途不明	116
第23図	屋敷3の遺構	52	第59図	銭貨	119
第24図	畑跡 全体平面図	54	第60図	石製品：硯	120
第25図	八所集落期以降の遺構配置図	55	第61図	石製品：臼	121
第26図	遺跡断面図	57	第62図	石製品など：砥石、剥片	122
第27図	中国産陶磁器：碗、小碗、急須	60	第63図	プラスチック製品：釦（ボタン）	123
第28図	本土産磁器：碗	63	第64図	瓦：丸瓦、平瓦、平瓦片墨書	126
第29図	本土産磁器：小碗	64	第65図	円盤状製品	127
第30図	本土産磁器：小碗、湯呑、杯、小杯	65	第66図	レンガ	128
第31図	本土産磁器：皿、鉢	66	第67図	貝製品	128
第32図	本土産磁器：蓋、急須、瓶	67	第68図	大工廻八所集落跡B地点植生調査範囲	143
第33図	本土産陶器：瓶、蓋、袋物	68	第69図	植生分布状況	153
第34図	沖縄産施釉陶器：碗	76	第70図	沖縄市の位置と調査区の位置	173
第35図	沖縄産施釉陶器：小碗、湯呑、皿	77	第71図	大工廻上与那原遺跡の調査地点	173
第36図	沖縄産施釉陶器：皿、大皿	78	第72図	大工廻上与那原遺跡試掘調査・本調査 平面図・セクション図	175

## 図版目次

巻頭図版 1	遺跡一帯の空中写真 (2016 年沖縄市撮影)	貝製品 ……………	135
巻頭図版 2	屋敷 1 検出前	図版 23 屋敷 2 本土産陶磁器、	
巻頭図版 3	屋敷 2 検出前	ガラス製品 ……………	136
巻頭図版 4	屋敷 1 検出状況	図版 24 屋敷 2 金属製品：漁労具 ……………	136
巻頭図版 5	屋敷 1 焼土坑 (SK05) 検出状況	図版 25 屋敷 2 金属製品、銭貨 ……………	136
巻頭図版 6	屋敷 2 検出状況	図版 26 屋敷 2 金属製品 ……………	136
巻頭図版 7	屋敷 3 検出状況	図版 27 屋敷 3 中国産磁器、本土産陶磁器 ……	137
巻頭図版 8	大工廻八所集落跡 B 地点調査区遠景	図版 28 屋敷 3 沖縄産施釉陶器 ……………	137
巻頭図版 9	道跡 1 検出状況	図版 29 屋敷 3 沖縄産無釉陶器 ……………	138
巻頭図版 10	道跡 2 検出状況	図版 30 屋敷 3 ガラス製品 ……………	139
巻頭図版 11	道跡 3 検出状況	図版 31 屋敷 3 金属製品、銭貨 ……………	139
巻頭図版 12	道跡 4 検出状況	図版 32 屋敷 3 金属製品 ……………	139
図版 1	発掘調査状況……………	図版 33 屋敷 3 石製品、プラスチック製品 ……	139
図版 2	資料整理作業状況……………	図版 34 屋敷外 中国産磁器、本土産陶磁器、	
図版 3	八所集落期以前の遺構 (焼土坑・土坑) ……	沖縄産陶器、ガラス製品、石製品・石材、	
図版 4	八所集落期以前の遺構 (焼土坑・土坑・ピット)	円盤状製品 ……………	140
	……………	図版 35 屋敷外 金属製品 ……………	140
図版 5	屋敷 1 遺構検出状況……………	図版 36 獣骨 解体痕あり ……………	140
図版 6	屋敷 1 遺構……………	図版 37 獣骨 解体痕あり ……………	140
図版 7	屋敷 2 遺構検出状況……………	図版 38 植生 1 ……………	155
図版 8	屋敷 2 遺構・遺物検出状況……………	図版 39 植生 2 ……………	156
図版 9	屋敷 3 遺構検出状況……………	図版 40 植生 3 ……………	157
図版 10	屋敷 3 遺構・遺物検出状況 ……………	図版 41 植生 4 ……………	158
図版 11	畑跡 検出状況 ……………	図版 42 植生 5 ……………	159
図版 12	八所集落期以降の遺構 (道跡・集石・水場)	図版 43 植生 6 ……………	160
図版 13	銭貨 ……………	図版 44 調査区周辺状況	
図版 14	屋敷 1 中国産陶器、本土産陶磁器 ……	(沖縄県公文書館所蔵写真加筆)……………	169
図版 15	屋敷 1 沖縄産施釉陶器 ……………	図版 45 大工廻上与那原遺跡試掘調査	
図版 16	屋敷 1 沖縄産施釉陶器 ……………	(I - TP43) 状況 ……………	177
図版 17	屋敷 1 沖縄産無釉陶器、陶質土器 ……	図版 46 大工廻上与那原遺跡本調査状況 ……	178
図版 18	屋敷 1 沖縄産無釉陶器 ……………	図版 47 大工廻上与那原遺跡試掘調査	
図版 19	屋敷 1 ガラス製品 ……………	(I - TP43) 出土遺物 ……………	179
図版 20	屋敷 1 金属製品、銭貨 ……………	図版 48 大工廻上与那原遺跡試掘調査	
図版 21	屋敷 1 金属製品 ……………	(I - TP43) 出土遺物 ……………	180
図版 22	屋敷 1 石製品、瓦、円盤状製品、レンガ、	図版 49 大工廻上与那原遺跡本調査出土遺物 ……	181

## 表目次

第1表	関連年表	13	第10表	沖縄産無釉陶器観察一覧③	98
第2表	調査区別人工遺物出土点数	59	第11表	沖縄産無釉陶器の窯印一覧	99
第3表	中国産陶磁器出土点数	60	第12表	陶質土器出土点数	100
第4表	本土産陶磁器分類別出土点数	62	第13表	ガラス瓶の用途別出土状況	102
第5表	本土産磁器観察一覧①	68	第14表	ガラス製品出土点数	102
第5表	本土産磁器観察一覧②	69	第15表	ガラス製品計測一覧①	108
第5表	本土産磁器観察一覧③	70	第15表	ガラス製品計測一覧②	109
第5表	本土産磁器観察一覧④	71	第15表	ガラス製品計測一覧③	110
第5表	本土産磁器観察一覧⑤	72	第16表	金属製品（素材別）出土点数	111
第6表	沖縄産陶器の出土一覧	73	第17表	金属製品（用途別）出土点数	112
第7表	沖縄産施釉陶器出土点数	75	第18表	金属製品計測一覧①	112
第8表	沖縄産施釉陶器観察一覧①	85	第18表	金属製品計測一覧②	117
第8表	沖縄産施釉陶器観察一覧②	86	第19表	銭貨出土点数	118
第8表	沖縄産施釉陶器観察一覧③	87	第20表	銭貨計測一覧	118
第8表	沖縄産施釉陶器観察一覧④	88	第21表	プラスチック製品 釦（ボタン）計測一覧	123
第8表	沖縄産施釉陶器観察一覧⑤	89	第22表	瓦出土点数（参考）	124
第8表	沖縄産施釉陶器観察一覧⑥	90	第23表	瓦出土割合（参考）	124
第9表	沖縄産無釉陶器出土点数	92	第24表	瓦計測一覧	125
第10表	沖縄産無釉陶器観察一覧①	92	第25表	獣骨出土一覧	129
第10表	沖縄産無釉陶器観察一覧②	97	第26表	出土遺物一覧	172

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成25年4月に日米両政府より発表された「沖縄における在日米軍施設・区域に関する統合計画」では、嘉手納弾薬庫地区内の知花地区へ牧港補給地区（キャンプ・キンザー）から国防省支援機関、またキャンプ瑞慶覧（キャンプ・フォスター）からスクールバスサービス関連施設の移設が示された。それに基づき、平成27年1月30日の日米合同委員会において、嘉手納弾薬庫地区知花地区マスタープランが承認され、平成28年8月沖縄市長による移設の受け入れが表明された。

平成27年11月12日付文書（沖防企第5044号）では、沖縄防衛局（以下、防衛局）より「嘉手納弾薬庫地区（知花地区）における埋蔵文化財の有無について（照会）」の文書が沖縄市教育委員会（以下、本市教育委員会）教育長あてに提出された。本市教育委員会では平成27年12月14日付文書（沖市博第1214001号）「嘉手納弾薬庫地区（知花地区）における埋蔵文化財の有無について（回答）」に関して照会地域の文化財確認が十分に進んでおらず、埋蔵文化財が確認される可能性があることから、現地踏査及び試掘調査の実施を申し入れる。

平成28年度から現地踏査及び試掘調査が行われた。試掘調査は対象地域を3区画に分け、平成28年度から30年度にわたり「嘉手納（H27）知花地区文化財試掘調査」（第1図）として実施した。30m×30mの大区画（大グリッド）にのせた試掘坑440箇所を確認した。現地踏査及び試掘調査の結果、大工廻上与那原遺跡・白川福地原遺跡・大工廻八所集落跡A地点・B地点、4つの遺跡を確認した。取り扱いに関しては文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」（平成10年9月29日付け庁保記第75号）を参考にした。大工廻上与那原遺跡はグスク時代から近世、白川福地原遺跡はグスク時代から近代の遺跡と判断した。大工廻八所集落跡A地点・B地点は、過去の聞き取り調査の結果から首里・那覇周辺の士族階級が地方に移住して開いた「屋取集落」であることが判明していた。沖縄戦以前の屋敷跡やそれに付随する遺構等が良好な保存状態で確認され、基地外ではこのような状況は残されていないことから「地域において特に重要なもの」と判断した。

その後、防衛局は文化財保護法第94条に基づき、平成31年2月22日付文書（沖防第915号）「埋蔵文化財発掘の通知について」を本市教育委員会を経由して沖縄県教育委員会に提出した。県教育長は平成31年2月27日付（教文第1722号）「埋蔵文化財発掘の通知について（通知）」にて防衛局に対して工事等を行う際には発掘調査をする必要があることを通知すると同時に、保存についても配慮するよう求めた。

以上の調整を経て、平成31年3月4日防衛局と本市教育委員会教育長との間で、敷地造成工事の影響を受ける遺跡の発掘調査を行い、記録保存する旨の協定書を取り交わした。それに基づき、「嘉手納弾薬庫（H30）知花地区埋蔵文化財調査業務委託」として履行期間を平成32年3月31日（令和2年3月31日）までとし、契約書を取り交わした。

平成31年度に大工廻八所集落跡B地点（以下、八所集落跡B地点）と大工廻上与那原遺跡（以下、上与那原遺跡）の2箇所の発掘調査を開始した。発掘調査に先立ち調査区内の植生調査を行った。発掘調査現地作業は令和元年9月2日から令和2年2月25日までの期間（約6箇月間）実施した。なお現地調査における測量・写真撮影・遺物取り上げについては、沖縄市立郷土博物館（以下、当館）職員指導のもと発掘調査支援業務委託として株式会社パスコが実施した。

## 第2節 調査体制

### 2019（令和元）年度 発掘調査業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	比嘉 良憲
	〃	教育部部長	島袋 秀明
	〃	教育部次長	兼本 正人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	松元 司
	〃	副館長	比嘉 清和
調査総括	〃	文化財係係長	縄田 雅重
調査担当者	〃	学芸員	比嘉 二規
指導・助言	沖縄県教育庁文化財課		知念 隆博
	〃		宮城 淳一
植生調査協力	沖縄市文化財調査審議会		佐藤 寛之
	沖縄市立郷土博物館	学芸員	刀禰 浩一（植生調査）
調査補助員	〃	大城 千明・長堂 綾、島田 由利佳	（植生調査）
発掘調査支援業務委託	株式会社パスコ		

### 2020（令和2）年度 資料整理業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	比嘉 良憲
	〃	教育部部長	島袋 秀明
	〃	教育部次長	兼本 正人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	盛島 久代
	〃	副館長	徳嶺 智彦
	〃	副主幹	比嘉 清和
調査総括	〃	文化財係係長	縄田 雅重
	〃	主任主事	島田 慎也
調査担当者	〃	学芸員	比嘉 二規
文化財調査専門員	〃	長堂 綾・横手 伸太郎	

### 2021（令和3）年度 資料整理業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	比嘉 良憲
	〃	教育部部長	島袋 秀明
	〃	教育部次長	兼本 正人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	久場 健史
	〃	副館長	徳嶺 智彦
	〃	副主幹	比嘉 清和

調査総括	〃	文化財係係長	縄田 雅重
調査担当者	〃	学芸員	比嘉 二規
文化財調査専門員	〃	大城 千明・富平 砂綾子・長堂 綾	

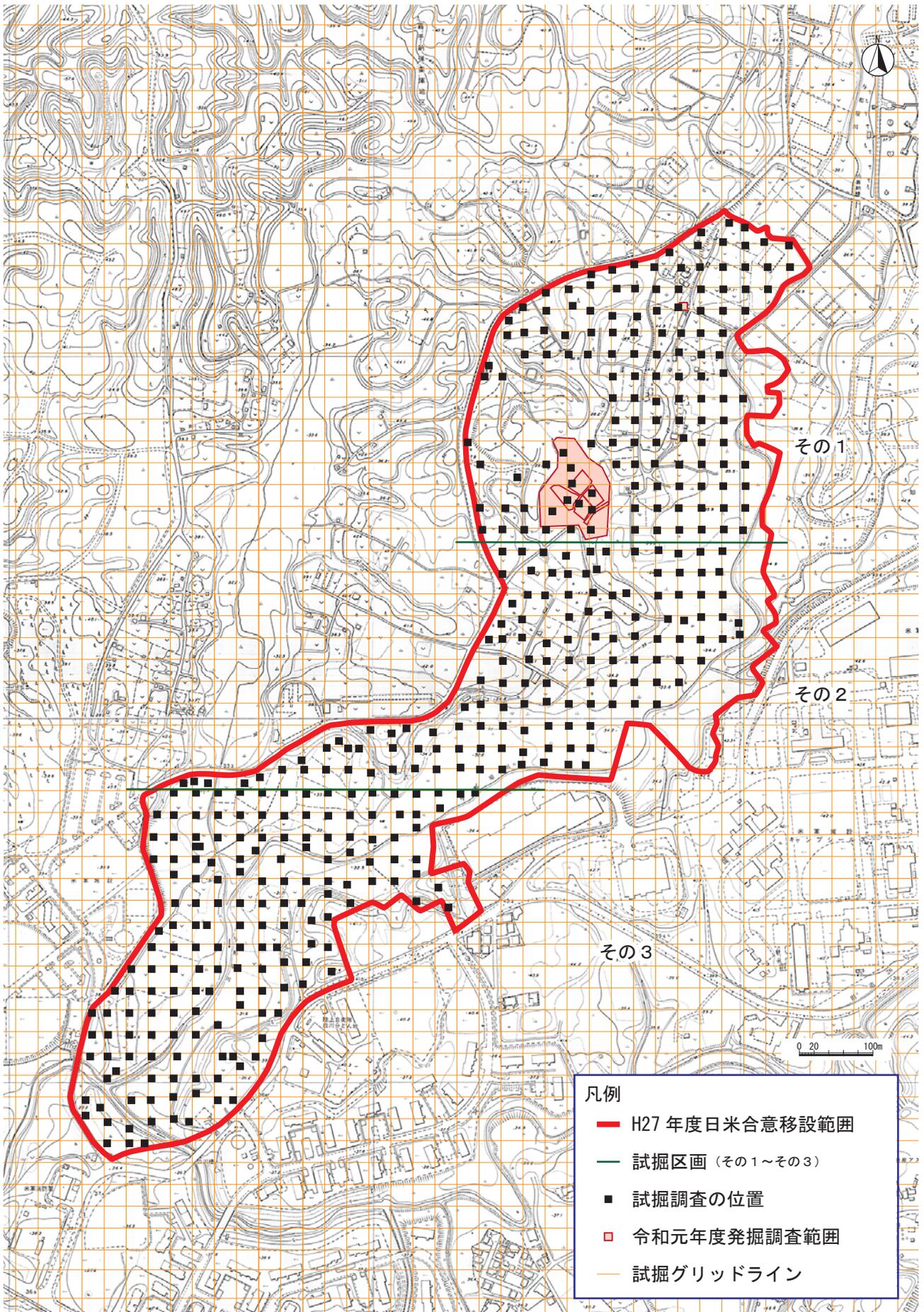
#### 2022（令和4）年度 報告書作成業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	比嘉 良憲
	〃	教育部部長	島袋 秀明
	〃	教育部次長	兼本 正人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	久場 健史
	〃	副館長	比嘉 清和
調査総括	〃	文化財係係長	縄田 雅重
調査担当者	〃	学芸員	比嘉 二規
文化財調査専門員	〃	大城 千明・富平 砂綾子・長堂 綾	
出土遺物整理業務委託	株式会社パスコ		

#### 2023（令和5）年度 報告書作成業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	比嘉 良憲
	〃	教育部部長	兼本 正人
	〃	教育部次長	玉城 恵
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	久場 健史
調査総括	〃	副館長兼文化財係係長	縄田 雅重
調査担当者	〃	主任学芸員	比嘉 二規
文化財調査専門員	〃	大城 千明・富平 砂綾子・長堂 綾	
報告書作成業務委託	株式会社パスコ		
自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社		

事業協力者：阿波根 かおり・上間 愛弓・島田 由利佳・曾木 菊枝・友利 泰子  
 刀禰 浩一・八田 夕香・比嘉 茜



第1図 嘉手納（H27）知花地区文化財試掘調査 試掘坑位置図

### 第3節 発掘作業の経過

本発掘調査における現地作業は、敷地造成工事で遺物包含層・遺構に影響のある一部のみ発掘調査を行うことを防衛局と当市教育委員会で調整し、令和元年9月から八所集落跡B地点と上与那原遺跡の2箇所での現地調査を実施した。発掘調査に先立ち、令和元年5月末から7月の間に5回に分け植生把握・植物相の調査、植物利用形態についての現地踏査を行った。

発掘調査の進捗について調査日誌をもとに記す。

#### 【大工廻八所集落跡B地点】

- 9月2日～ 仮設事務所予定地・調査地区へ向かう通路の草刈り作業開始。
- 9月24日 地形測量範囲・調査区伐採開始。
- 9月30日 基準点測量開始。
- 10月7日 屋敷1検出開始。
- 10月10日 植生現況測量開始。
- 10月15日 小堤設置。
- 10月25日 高所作業車による道跡(SF01)、屋敷1・屋敷3検出前写真撮影。
- 11月6日 屋敷3検出開始。
- 11月7日～ 調査区南東部のトレンチ1掘削、道跡(SF01)検出開始。
- 11月12日 調査区南東部のトレンチ1内、サブトレンチ1とサブトレンチ2を重機掘削で下層確認。上部は大規模な造成と想定。
- 11月25日 高所作業車による道跡(SF01)検出状況写真撮影。
- 12月2日～ 屋敷3のトレンチ3・トレンチ4掘削。交差する地点で焼土坑(SK01)を確認。
- 12月19日 高所作業車による屋敷1・屋敷3検出状況写真撮影。
- 12月23日～ 調査区南東部の道跡(SF01)内トレンチ6・トレンチ7掘削。道跡(SF01)の敷石は戦後と想定。
- 12月24日～ 屋敷1のトレンチ9・トレンチ10掘削。屋敷内の造成状況確認。
- 1月7日～ 屋敷1のトレンチ11・トレンチ12掘削。トレンチ11内で焼土坑(SK05)を確認。
- 1月15日 屋敷2検出開始。
- 1月21日 調査区北東部の畑跡(SN01)検出作業。
- 1月23日 高所作業車による屋敷2等検出状況写真撮影。
- 1月26日 調査区北部のトレンチ13掘削。試掘調査I－TP112焼土坑範囲を確認。
- 1月29日 屋敷1の建物跡(SB01)石柱埋没状況の確認。
- 1月30日～ 屋敷2のトレンチ16・トレンチ17掘削。トレンチ16内で焼土坑(SK08)を確認。
- 2月4日 撤収準備作業開始。
- 2月6日 高所作業車による調査区完掘状況写真撮影。以降、各トレンチの埋戻し。
- 2月12日～ 小堤撤去、屋敷1トレンチ11内で確認した焼土坑(SK05)の範囲確認。
- 2月17日 埋戻し作業完了。
- 2月21日 浸食防止剤吹付(25日完了)。

#### 【大工廻上与那原遺跡】

10月24日	調査範囲伐採。
10月28日	調査区位置設定。
10月29日	磁気探査、小堤設置。
10月30日	表土掘削。
10月31日	遺構検出開始。
11月15日	遺構完掘写真撮影。
11月20日	三次元測量。
12月3日	埋戻し完了。
12月9日	浸食防止剤吹付。

### 第4節 資料整理作業の経過

発掘作業で出土した遺物の整理作業は現地調査期間中の雨天時や現場作業終了後に遺物洗浄・台帳類の作成を行うことで終了した。令和2～3年度は資料整理業務として現地調査時の写真整理、層序・遺構の内容確認、注記・接合・分類、文献調査、分類カード作成、遺物を選定し実測図の作成を行った。

令和4年度は報告書作成業務として層序・遺構の図版作成、遺物集合写真撮影、遺物実測図のトレースを沖縄市が行い、拓本・遺物写真撮影・集計作業等は株式会社パスコが業務を受託し実施した。

令和5年度は前年度までの成果をまとめ原稿執筆・遺構等の図版作成を沖縄市が、選定遺物の原稿執筆、レイアウト編集・校正、印刷製本を株式会社パスコが業務を受託し実施した。



作業通路伐採確認



調査区範囲伐採作業



不発弾磁気探査



検出作業



瓦計測



遺構撮影



埋戻し



浸食防止剤吹付

図版 1 発掘調査状況



注記



分類・遺物カード作成



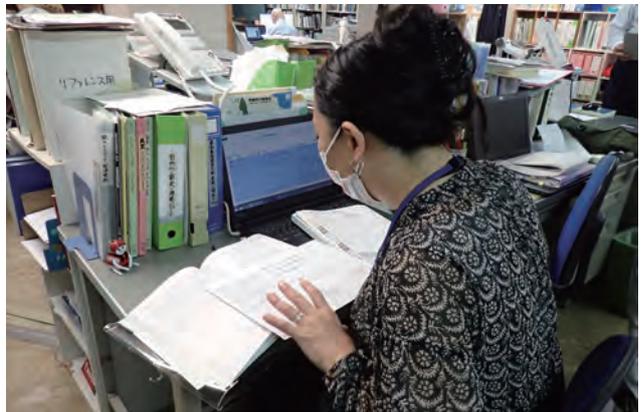
遺物実測



遺物写真編集



遺物集合写真撮影



聞き取りデータ・文献資料まとめ



遺構図作成



報告書編集

図版 2 資料整理作業状況

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

沖縄市は県庁所在地の那覇市から約20 km北東の沖縄島中央部に位置する。東側は中城湾に面する海岸となっており、北東側はうるま市、北側は僅かに恩納村、西側は嘉手納町と北谷町、南側は北中城村とそれぞれ接している。令和5年12月1日現在、総面積は約49 km<sup>2</sup>、総人口142,248人、総世帯数66,550世帯である。東海岸部から西北西の丘陵地に向かって斜面地域が広がる地形で、市域の9割は標高100 m以下である。市域を流れる河川には、比謝川に合流するもの、天願川に合流するもの、中城湾に流れ込むものの大きく3つがある。中でも比謝川の流域面積は49.7 km<sup>2</sup>に及び、沖縄島最大である。比謝川の支流の一つに与那原川があるが、その上流には現在の倉敷ダム<sup>i</sup>があり、利水面でも重要な施設となっている。

沖縄島は、比謝川や天願川をおおよその境として、その北側と南側で地質が異なる。北側は沖縄島北部に広く発達している名護層で、約4000～7000万年前に形成された変成岩からなる。南側は沖縄島南部一帯に広く発達する島尻層で、約200～500万年前に形成された泥岩からなる。本市域はその南北で異なる層の境界部分に位置し、市内の島尻層域中央部（胡屋～知花）では基盤の島尻層を琉球層群石灰岩層と砂礫層が不整合に広く覆っている。この地質に由来して前述の斜面地域が広がる地形が形成されている。特徴的な地形として、石灰岩層の浸食残留地形（円錐カルスト）が列をなして点在する。

八所集落跡B地点及び上与那原遺跡一帯は、ゴヤ十字路から北におよそ4 km、沖縄市霊園や沖縄市養鶏団地組合から南南西におよそ1 km、標高約45 m前後の緩やかな丘陵状の地形に位置している。200 mほど東側には与那原川が北から南に向かってところどころ蛇行しながら流れ、400 mほど西側にもほぼ同様の流路で小川が流れている。川と丘陵地との間にはアマリターブックラーと呼ばれた湿地帯が広がっており、かつては水田として利用されていた。八所集落跡B地点は丘陵地の上部に、上与那原遺跡は丘陵地から湿地帯に向かって緩やかに傾斜する場所に、それぞれ立地している。与那原川は南に下ったところで比謝川に合流しているが、合流部分の上手下手で比謝川の流路も蛇行している。下手側で比謝川を渡ったところに大工廻本集落があった。また、近隣には不透水層があり、南側1 km圏内には嘉手納井戸群<sup>ii</sup>が東西方向に並び、地下水源として利用されている。



第2図 沖縄市の遺跡

(国土地理院地図 加筆)

## 第2節 歴史的環境

八所集落はかつての越来間切の大工廻村の外れを開いて造られた集落である。越来間切は森林の多いところであったという。その環境から大工廻村で炭を作るようになり、王府に献納するようになったことが伝えられている<sup>iii</sup>。

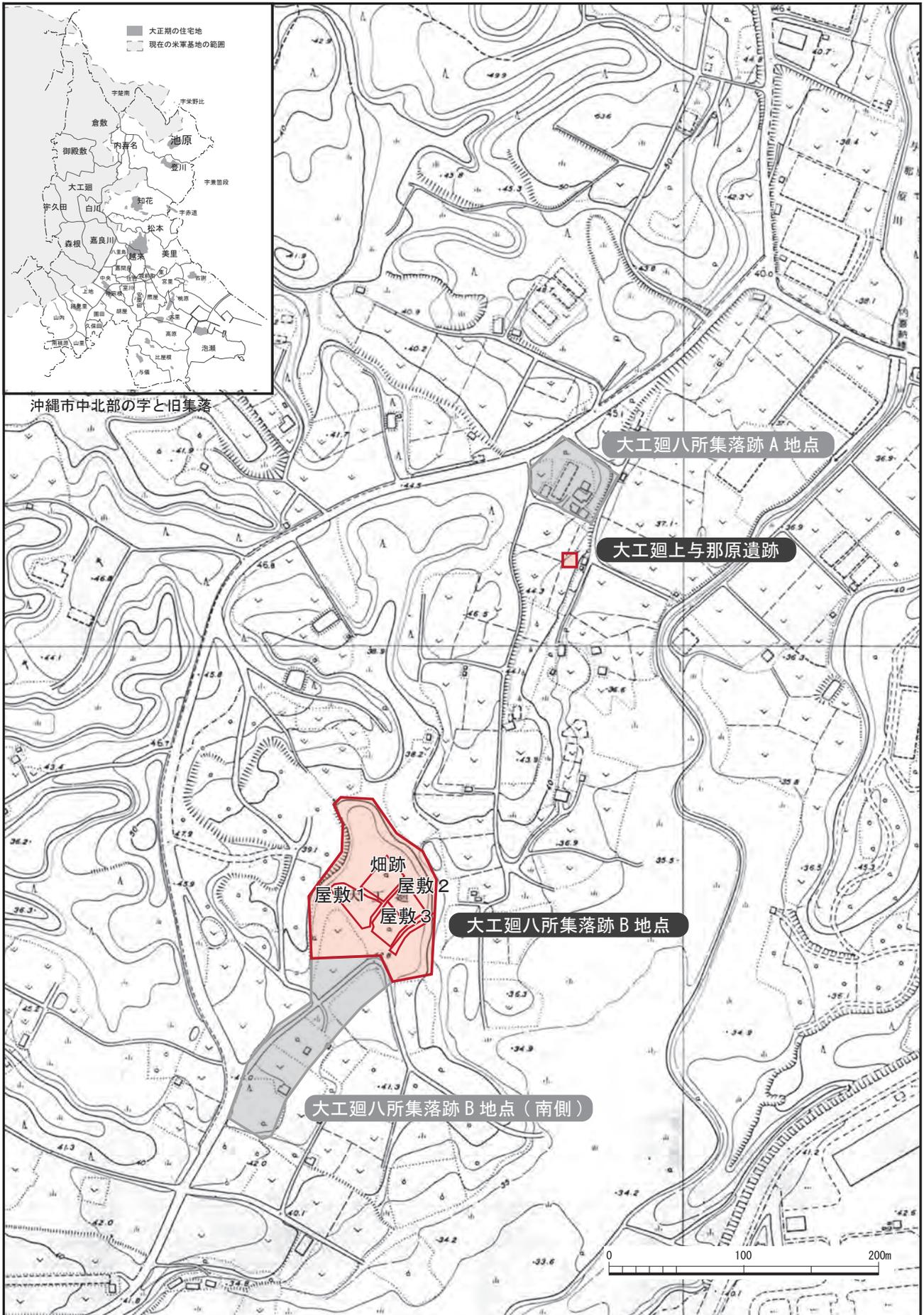
八所集落は「屋取集落」の一つとされる。屋取集落とは、首里・那覇の士族が地方に移り住んで開墾した集落のことをいう。八所集落を開いた元士族たちの多くは首里・那覇から一旦、具志川に移り住んだのち、さらに具志川から居を移してやってきたことから“具志川系”といわれていた。各地での屋取集落の形成は、1730（尚敬33）年に首里王府から出された「転職奨励」によって士族が「田舎下り」を始めたのが大きな端緒であったとされているが、沖縄市史や大工廻の字誌『基地に消えた古里 大工廻誌』（以下『大工廻誌』という）によると八所集落の始まりは、それよりも後世の明治期の廃藩置県の頃だろうと言われている。『具志川市誌』には旧具志川市域の屋取集落は、その多くが1810～20年頃以降に首里・那覇から移住してきて形成されたとある。八所集落にやって来た“具志川系”とされる元士族は、旧具志川市域で何世代か生活した後、廃藩置県の頃になって八所の地に移り住み、集落を形成した、という過程を経たことが推察される。また、八所集落が所在するあたりは琉球王府の杣山<sup>iv</sup>だったとされているため、廃藩置県によって王府の管理が解かれたことで開墾が可能となった地域であったことが考えられる。そこに旧具志川市域などから旧士族の世帯が移住し、新たに作られた集落の一つが八所集落であった。

集落の名の由来としては、八つの世帯〈フーキグラー、イリヤマチグラー、ナカジュニ、サンドウウチマ、ナカンダカリ、サクダ、チナー、トーメグラー〉が最初に移り住んだから、という説がある<sup>v</sup>。その後、八所集落の世帯数は増え、沖縄戦により集落から避難する世帯が出はじめる前には二十世帯ほどが居を構えていたという。

八所集落は戦前の行政区域で字大工廻に属していたとされているが、地理的に大工廻の本集落からは離れた場所に位置しており、廃藩置県以前に成立していた大工廻集落と八所集落とでは、その成り立ちも生活条件も異なっていた部分が多い。また行事なども別々に行われていたもののほうが多かったようである。

米軍上陸の情報を耳にした八所集落を含むこの一帯の住民たちは、他地域（主に沖縄本島北部）へ避難したが、その後、戦後しばらくまでは収容所での生活を余儀なくされることとなった。中には収容所からどうにか抜け出して、かつて住んだ集落の状態をひと目確認しようとした方もいたというが、現在米軍基地内となっている地域は、当時、既に米軍の占有地として柵の向こう側となっていたようで、実際に近づくことはできなかった。収容所での生活を終えても、この地域の住民たちはかつての居住地には戻れず、各地で散り散りに暮らしていくことになった。字大工廻は戦後、郷友会<sup>vi</sup>を結成し、催しものを行ったり、字誌を発刊するなどしてルーツを同じくする者同士のつながりや記憶を留めている。しかし八所集落独自では、そういった活動を行っておらず、以前は八所集落出身者も何名か大工廻郷友会に所属していたそうであるが、残念ながら現在では所属していない。だが、『大工廻誌』には八所集落出身者からの聞き取り等の情報についてもまとめられており、八所集落での暮らしの様子を知るための数少ない直接的な資料となっている。

上与那原遺跡の立地する環境については八所集落のように戦前まで人が生活を続けていた立地ではないため、直接的な情報・資料を得ることはできなかったが、八所集落とは近接しており、環境的に

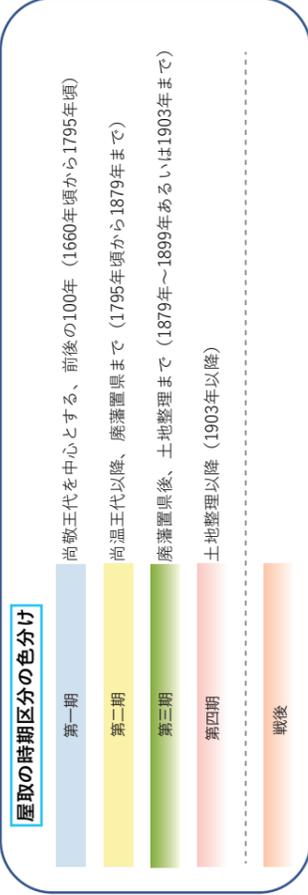


第3図 大工廻八所集落跡 B 地点・大工廻上与那原遺跡の調査箇所

第1表 関連年表

西暦	和暦・元号	月/日	期間	出来事	詳細・関連情報	対照時期
1500年代						
1689年	康熙28年			それまで各地にいた按司が首里に集められた 王府による本格的な家譜の編纂が開始された (第一次家譜編集)	土農分離が初めて明確になった	
18世紀初頭						
1712年	康熙51年			琉球全体の人口：約15万人	★以降、増大	
1725年	雍正3年			第二次家譜編集が行われた 「貧士の転職許可」が出された	新士族として那覇の人々が承認されるなど、土族人口が大幅に増えることになる 労働は低級なものとして選別されてきた土族が階級に身分を落とすまでになり、それらの職に就く許可が下りることになった	
1730年	雍正8年			「転職奨励」が行われた	貧しい土族が農村に生活を求めて「田舎下り」をするようになった	
1735年	雍正13年	11月21日		『諸間切公事帳』が出された	間切や農民を主体とする「自治」が確立⇨土族は間切でのそれまでの職務を失った (土族の総数に対して職が足りなくなり、他の職に就かざるをえなくなった。その結果、首里、那覇の土族から田舎に下りて農業に従事する者が出てきた。こうした中で「開地」や「仕明地」等を耕作する者も現われ、それが歴取へとつながった。	
19世紀後半						
1872年	明治5年			琉球全体の人口：約30万人	★18世紀初頭から約倍に増大	
1873年	明治6年			沖縄において開墾事業が奨励された	開墾によって困難した土族の救済、産産の確保、殖産開墾を図ることなどの目的で始まった	
1877年～	明治10年代			地租改正条例発布	幕藩制的土地所有の解体	
1879年	明治12年	3月		琉球処分（琉球藩を廃止し沖縄県を設置）	八所の處こりはこの頃と書かれている	
1892年	明治25年ごろから			仙山の開墾が、無禄土族の救済、殖産開墾を目的に推進された	この時期に開墾された仙山の面積：一万ヘクタールあまり	
1899～1903年	明治32～36年	32年4月1日～ 36年10月		「沖縄県土地整理法」施行により土地整理事業着手	主な内容：土地所有権の付与、地価査定により地租徴収を可能に ※ 仙山については官有地に編入	
1904年	明治37年			日露戦争勃発		
1906年	明治39年	7月		勅令第191号『沖縄県仙山特別処分規則』	この勅令に基づき、『其ノ造林保護ヲ為シタル区、間切、島又ハ村』などに 権限が与えられた	
1914年	大正3年	7月28日		第一次世界大戦開戦		
1918年	大正7年	11月11日		第一次世界大戦終戦		
1920年	大正9年			戦後恐慌		
1925年	大正14年			当時の大工廻には白河、シルバルー、 <b>八所</b> の名屋取部落があった	(沖縄県下各町村学歴取調)	
1930.1931年						
1938年	昭和13年ごろ			昭和三十五年	第一次世界大戦後の恐慌⇨雇傭の不足⇨昭和に入っても雇傭の継続 農村においては「家の身売り」や「賣田売り」をせざるを得ない状況	
1940.41年	昭和15.16年			国の食糧増産指令	大工廻のような田舎で貧乏な村にもクエー（歌）を振り込んできた。 クエーは、誰にでも買えるものではなく、畑の大きさなどいくつかの基準があった。 この頃になるとヤマトククルーの土地を個人で買い取って地主になった人たもいたが、 田んぼの地主というのはいなかった	
1941年	昭和16年			太平洋戦争（日米開戦）	12月8日以降、全面的に敵対体制に入ることになる	
(1941. 1942年頃)	米軍上陸の2.3年前			日本軍駐屯	シルバルーヤマには日本軍が駐屯 ※「中飛行場」は現在の嘉手納飛行場の場所に日本軍が建設した陸軍の飛行場 老若男女総動員で、飛行場づくりが行われた	
1944年	昭和19年	8月上旬から 12月上旬 10月10日 十・十空襲以降		第24師団 第89連隊が中頭地区に駐屯	警備、陣地構築、教育訓練を実施	
1945年						
1949年	昭和24年			宇久田国民学校 閉鎖	戦はだんだん激しくなり、大工廻の村では小高い山の斜面のいたるところに防空壕が掘られた	
1959年	昭和34年	9月		琉球政府、「糖業振興法」を公布	日本軍が使用していた 当時、学校は防雨庫の宿舎になっていた ・上級生は飛行場の誘導路作業に動員、下級生の授業は一部の空を教室と字の事務所で ⇨その後、軍の作戦軍により部隊長や副隊長が移動したので、新校長は校長住宅に 入居し、授業も教室で受けられるようになった	
1960年	昭和35年	3月22日 3月26日		宇久田国民学校卒業式 挙行	戦況悪化を心配し卒業式を早く行い、23日からは着休とした	
1960年頃から		3月末		宇久田国民学校、焼夷弾を受け校舎全焼	その後、廃校となった	
1961年	昭和36年	3月		米軍上陸（沖縄戦始まる）		
1962年	昭和37年	3月		＜慶良間列島上陸⇨3月26日＞ ＜沖縄本島上陸⇨4月1日＞		
1965年	昭和40年	3月23日		空襲があり、その後、大工廻集落の住民の多くは		
1970年	昭和45年	4月1日		米軍、比謝川河口の嘉手納周辺の海岸に上陸	比謝川を境に南北に狭め入った	
1971年	昭和46年	7月2日		米軍、沖縄戦の終結を宣言		
1972年	昭和47年	8月15日		終戦		
1949年	昭和24年			比謝川・ポンプ場建設	ポンプ場を建設し取水開始	
1959年	昭和34年	9月		琉球政府、「糖業振興法」を公布		
1960年	昭和35年			米軍によって与那原川源流付近に瑞慶山ダム（現倉敷ダム）が建設されるに至る		
1960年頃から				瑞慶山ダム堤建造の時に水利用を禁止されたために 流域の広大な水田地帯では稲作が出来なくなかった		
1961年	昭和36年			瑞慶山ダムが完成	砂糖の輸入が困難になった	
1962年	昭和37年			キューバ危機		
1965年	昭和40年			さとうきびブーム到来		
1970年	昭和45年	10月23日		「高性能トラクターの無償貸付規程」告示	対象は、さとうきびの古株更新地域に未利用土地資源（耕土30～60センチメートル）の開拓事業を行う市町村	
1971年	昭和46年	12月28日		「高性能農業機械購入補助金交付規程」告示	対象は、市町村、農業者又はその団体で、ホイトラクター、リバーシブルプラットブラウ、ロータリーベーター、サブソイラー、さとうきび管理作業機、さとうきび履付機、トラローを 購入する者。購入価格の60パーセント以内を補助。	
1972年	昭和47年	5月15日		日本本土復帰		

凡例



表記	内容
赤太字 下線付	… 八所集落の出来事・事柄
赤太字	… 八所集落の生活に関係する出来事・事柄
斜体	… 八所集落期に入ってからからの主な社会情勢
薄字斜体	… 八所集落期に入るまでの人の動きに関する情勢

八所集落期以前

八所集落期

戦後

経てきた歴史は同様といえる。

戦後、米軍基地内に在りながらも施設建設等の造成・開発区域外に位置してきた八所集落跡 B 地点及び上与那原遺跡一帯は、黙認耕作<sup>vii</sup>以外に手を加えられることなく今回の調査に至った。

なお、屋取と八所集落に関連する歴史や出来事と、それを取り巻く社会的な動向の概要については 13 ページの関連年表を参照いただきたい。

### 第 3 節 八所集落跡と周辺の遺跡の現況

八所集落跡 B 地点及び上与那原遺跡一帯は、市道 知花 38 号線を除いて米軍嘉手納弾薬庫地区の軍用地となっており、38 号線の両側は金網フェンスで囲われている。しかし 38 号線に沿った金網フェンスの基地内側は、ほとんどの場所がごく最近まで黙認耕作地として利用されていたため、居住こそ無かったものの、そこには日常的な人の出入りがあった。トラクター等で造成や整地が行われた箇所もあったが、元の地形や戦前までの人の居住の痕跡が少なからず残っていた。

発掘調査前の踏査では、耕作が放棄された状態で、サトウキビや竹、つる草などの雑草が場所によっては背丈より高く繁茂して行く手を塞いでいた。八所集落跡 B 地点の屋敷跡の範囲では、樹木のほかクワズイモや、その他雑草が生い茂っており、その中に石柱やフルルなどの遺構の一部が見え隠れしていた。

今回の調査地点近隣の遺跡としては、北北東約 400 m のところの大工廻八所集落跡 A 地点<sup>viii</sup>（近世～近代）、南南東およそ 1.3 km のところの知花遺跡（貝塚時代）、北東およそ 2 km のところの石城原遺跡（グスク時代）、北北東 1 km 弱のところの内喜納登窯、南南東およそ 1.7 km のところの知花焼窯跡（いずれも近世以降）が挙げられる。また南側およそ 1 km 付近には白川屋取集落跡があった（第 2 図、第 3 図）。

- i 1996（平成 8）年 4 月に終了した再開発以前の名称は「瑞慶山ダム」
- ii 1962（昭和 37）年に当時の琉球水道公社が作成した基本計画の一環として 1962 年～1964（昭和 39）年に水源開発・共用開始
- iii 『遺老説伝』及び『琉球国由来記』の記載による
- iv 琉球王府が監督して保護・育成されていた山林。建築や造船のため用材を王府に供給した。近隣の住民が木材を必要とした場合は許可を受けて伐採を行った〔田里 修、1983、『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社 p634〕
- v そのうちの一つの家筋については五世の代の 1770 年頃に「田舎下り」したであろうとされている。数回の移住を経て具志川で生活するようになったことが判っており、さらには家系図で、その分家の九世に「ヤタクルー」と付記されていることが確認できている
- vi 郷土を同じくする人々が結成した組織〔石原 昌家、1983、『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社 p896〕
- vii 沖縄の米軍基地内の軍が緊急に必要としない土地について、所有者その他の者に、一定の条件のもと、農耕などの一時使用を許可したもの〔銘苅 全郎、1983、『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社 p664、665〕
- viii 2022（令和 4）年から 2023（令和 5）年にかけて、沖縄県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した

## 第3章 大工廻八所集落跡B地点調査成果

### 第1節 調査の方法

今回の調査は、防衛局が実施する嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内の基地開発に伴う八所集落跡B地点と上与那原遺跡の記録保存調査である。八所集落跡B地点は字大工廻上与那原の緩やかな丘陵上に位置し、調査区は今回の計画に伴う「嘉手納（H27）知花地区文化財試掘調査」と現地踏査の結果を踏まえて設定することとなった。

八所集落跡B地点は上述の事前調査において、下草や樹木が繁茂しているなかで土壁や石柱・フール・道跡・畑跡等、近代の遺構が確認されていた。発掘調査前に植生調査として当時の生活に重要とされた樹種のうち、実生を除いた個体にナンバーを付し、現況測量を行った（第3章第6節）。同時に不発弾対策として調査区全域及びトレンチ掘削部の磁気探査を行った。磁気探査では不発弾が多数確認された。

発掘調査面積は特に生活跡の確認できる八所集落跡B地点の一部約6,430㎡とし、小堤を設けた。調査区は屋敷1～3、屋敷外（丘陵北部・畑跡、丘陵南東部・道跡）に区分けし、人力による表土掘削、遺構の検出を行った。グリッド設定は、想定以上に調査範囲に凹凸や構造物があり、杭や水糸が設定できなかつたため、安全面を考慮して最小限にした。そのため表土除去後は、Ⅲ層（旧表土）より下層で出土した遺物については点上げを行った。範囲内の建物跡・道跡・畑跡等の記録は三次元点群測量で行い、建物跡・遺物出土状況・土層断面図については写真測量を併用した。また、遺跡周辺の人為的な痕跡を記録するため、約9,337㎡の範囲で地形測量を行った。

遺構検出後、屋敷内外の各調査区において適宜トレンチを設定し、地山面まで下層確認調査を行った。屋敷1溝（SD01）確認トレンチと丘陵南東部のトレンチ1においては造成の影響が大きく、最終的に重機掘削にて地山を確認した。屋敷内外に設定したトレンチの地山上面では焼土坑と土坑を10基確認した。検出された焼土坑・土坑のうち全形の不明なものが2基あり、そのうちの1基である屋敷1トレンチ11内で確認された焼土坑（SK05）の範囲確認を行った。時間的制約が大きいため、担当者立ち合いのもと遺構上面まで重機で造成土を掘削し、その後人力で検出作業を行った。

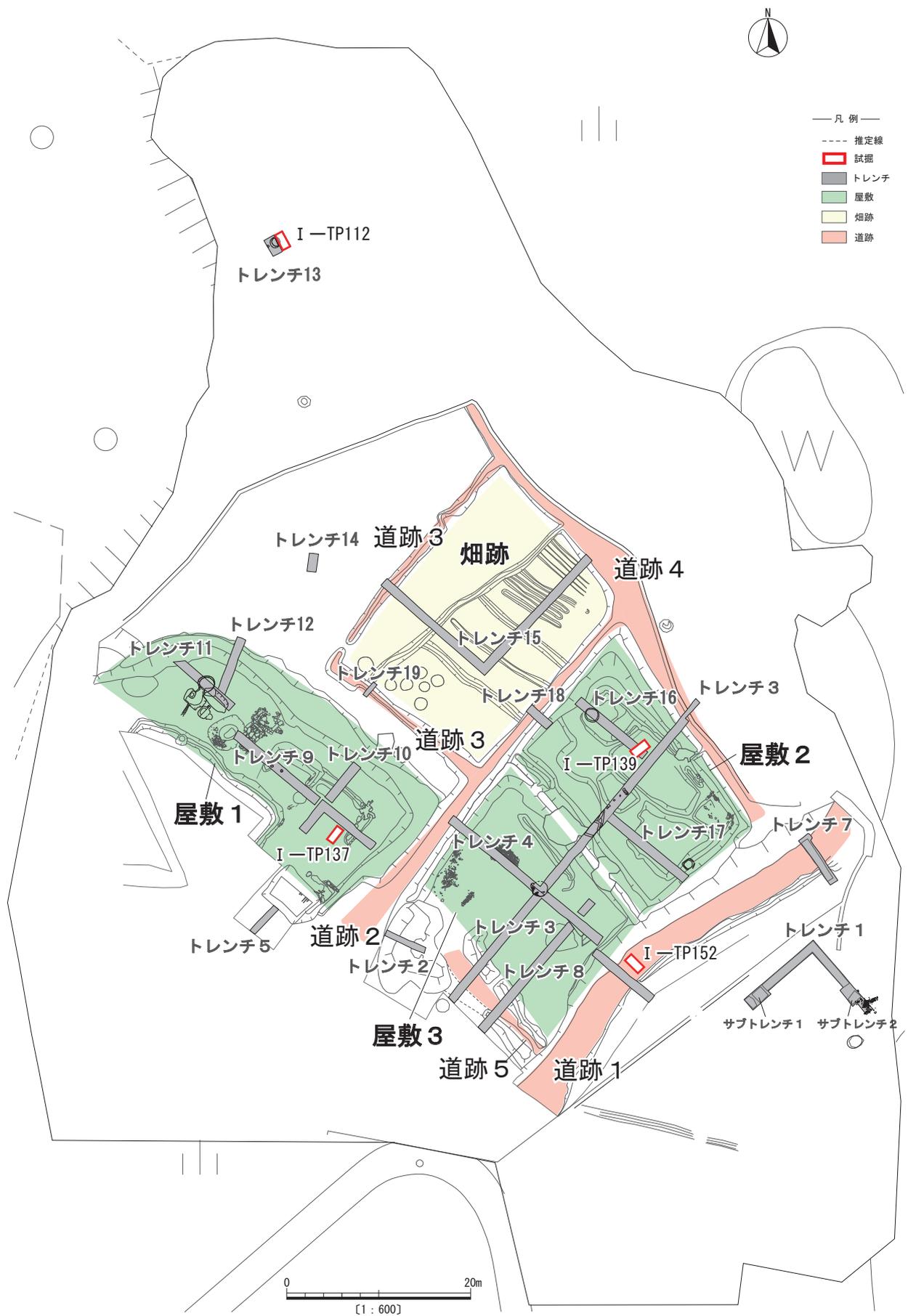
また事前の試掘調査でも、丘陵北部I-TP112において焼土坑が確認されていたため、試掘トレンチの対面にトレンチ13を設け、焼土坑（SK07）の確認を行った。

現地での写真撮影は35mm一眼レフカメラ（スライド）とデジタルフルサイズ一眼レフカメラ（1500万画素）を使用し、報告書掲載の写真はデジタル画像を使用した。また調査前・検出後・完掘後に高所作業車による全景撮影を行った。

発掘調査後、トレンチ内で確認された10基の焼土坑・土坑のうち屋敷1焼土坑（SK05）、屋敷2土坑（SK09）、屋敷3焼土坑（SK01）から採取した炭化物3点の同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した（第3章第5節）。

### 第2節 層序

今回の調査区は緩やかな丘陵上に位置する集落跡であり、標高は39～45mを測る。今回の本調査において時代的には八所集落期以前の遺構、八所集落期の遺構、八所集落期以降の遺構と大きく3期



第4図 調査区画

の遺構が見られた。層序としては大きく7つの層に区別した。また、同時期の堆積と考えられる層でも、土色や混入物が異なった様相をしていた。そのため、検出した土層毎に、Ⅲ a 層、Ⅲ b 層といったように層序番号を付与した。さらに、ほぼ同一の造成単位と判断できた場合は、Ⅲ b ①層、Ⅲ b ②層といった層序の付与も行った。

## I 層 表土

戦後から現代までの層。調査開始前には、調査区の大部分は草木が生い茂った状況であり、その腐葉土や現代の廃棄物が多く見られた。層厚は0.1～0.2 m程。調査区全体に広がる層である。丘陵南東部では、周辺の戦後利用のためか、道跡（SF01）から東側の水路に向け地山の土等を使い、最大深度約1.8 mの大掛かりな造成を行っている（第3章第7節参照）。出土遺物は近世から現代の陶磁器（本土産・沖縄産・中国産等）、瓦、ガラス製品等の他、銃弾、軍手、コカ・コーラ瓶、金属片、ゴム、プラスチック、ナイロン製網等現代のスクラップが混ざる。丘陵南東部以外の明確な戦前・戦後の利用の区別は困難であった。

## II 層 八所集落期以降

沖縄戦から戦後までの層。色調は褐色土（7.5YR4/4）を主体とし、屋敷3トレンチ4の中央から南東側に広がる。層中に炭化物・焼土粒・モルタル片・石灰岩片・千枚岩片が粗く混ざり、溶けたガラスが出土するなど被熱の影響が散見された。層厚は0.1～0.6 m程。明確な遺構は屋敷3の簡易な土塁（SW01）である。出土遺物は近代陶磁器（本土産・沖縄産等）、ガラス製品、瓦が得られた。

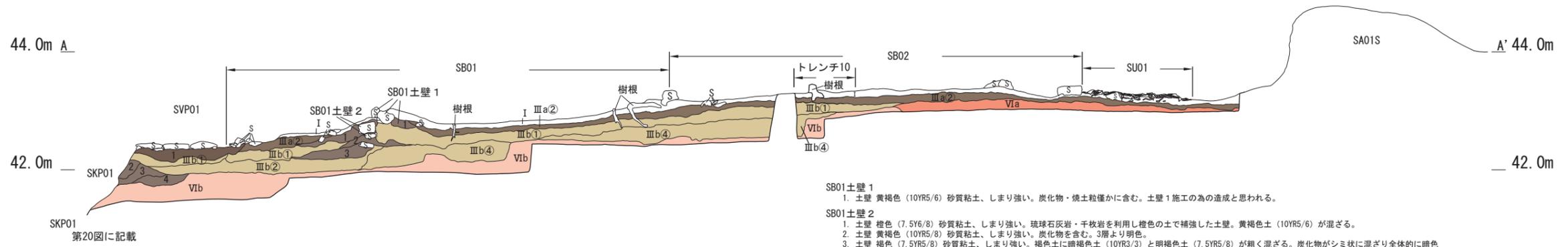
## III 層 八所集落期 旧表土

主に大正期から沖縄戦までの遺物が目立つ層。近代の屋取集落の生活面。色調は褐色土から黄褐色土（10YR）を主体とする。層厚は0.1～1.7 m程。今回の調査における多くの遺構の埋土で、近代遺物を包含し調査区全体に広がる。主に屋敷1・2・3で確認された。土層の観察より、Ⅲ a 層：生活面（用途別に①～④に分層）、Ⅲ b 層：造成土（造成土単位で①～⑦に分層）、Ⅲ c 層：黒色土堆積の3層に区別した。平坦な地表面（旧表土）を構築するため、既存の地面を削平し造成を行った様子がみられた。遺構として土手・建物跡・シーリ・フール等が確認された。遺構に伴い遺物もこの層から多く出土している。出土遺物は近代陶磁器（本土産・沖縄産）・ガラス製品・金属製品・石製品等、当時の生活用品が得られた。屋敷2や屋敷3北東側等、標高の高い場所ではⅢ a 層下にはⅢ b 層が見られず、すぐに地山（VI層）となるが、標高の低い屋敷1南西部ではⅢ b 層は約1.7 mに及ぶところもある。

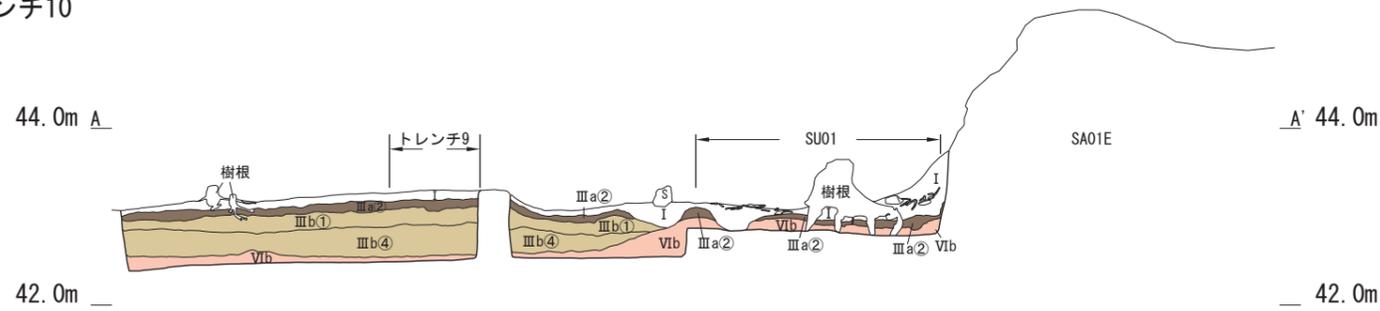
## IV 層 八所集落期以前

屋取集落期以前の層。色調が褐色土（10YR4/6）を主体とする層。層厚は0.1～0.3 m程で、埋土の観察より、Ⅳ a 層：造成土（炭をまんべんなく含む層）とⅣ b 層：耕作土（炭化物が集中し、地山上面で鋤痕を確認）に区別した。出土遺物は屋敷3トレンチ2内のⅣ a 層より本土産磁器・沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器・金属製品（釘）が得られた。焼土坑・土坑からは遺構に伴う明確な出土遺物は無く、遺構の性格もしくは上層の影響、時期差によるものと思われる。

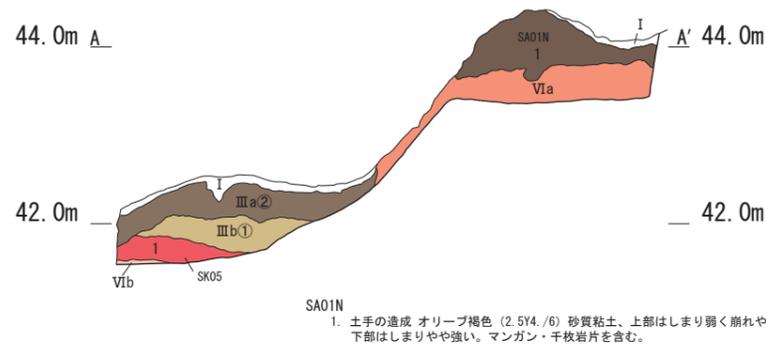
トレンチ9



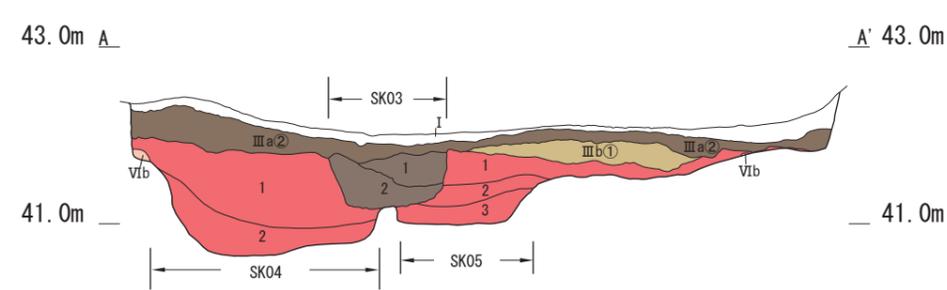
トレンチ10



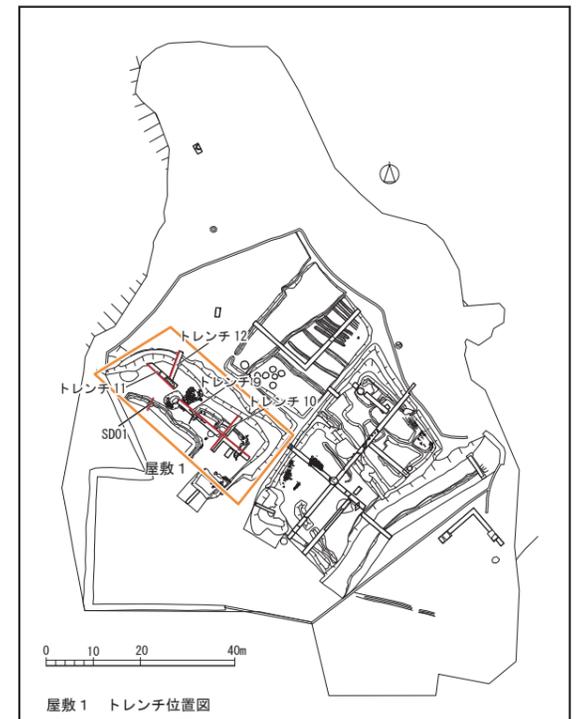
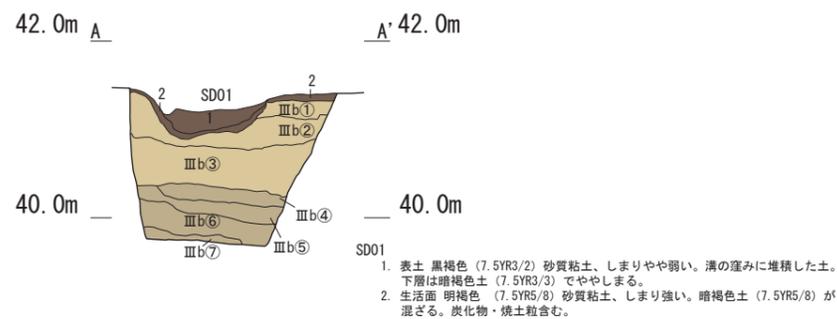
トレンチ12



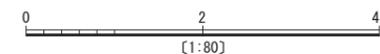
トレンチ11



SD01

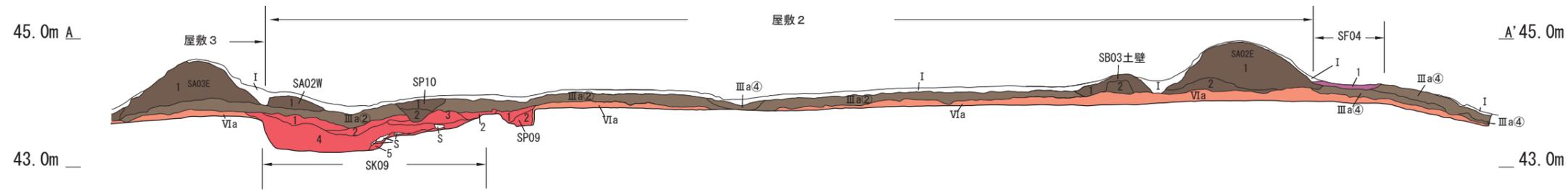


表土	I層	米軍基地・戦争関連遺跡 (砲弾跡・焼土)
八所集落期以降 (日本軍 or 米軍)	II層	褐色土
八所集落期 (近代屋敷集落)	IIIa層	生活面 (①屋敷内溝 ②造成土上面利用 ③地山上面利用 ④不明)
	IIIb層	造成 (①~⑦)
	IIIc層	黒色土堆積
八所集落期以前	IVa層	造成土
	IVb層	耕作土
自然堆積再堆積	V層	自然堆積
地山	VIa層	軟質 (所々にマンガンを含む)
	VIb層	硬質 (石英を多く含む)
岩盤	VII層	千枚岩
遺構	II層	道跡
	III層	畑畝
	IV層	畑畝間



第5図 屋敷1層序

トレンチ 3



SA02W

1. 土手の造成 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。SA03Eより少し暗色。炭化物・焼土粒・千枚岩片を含む。

SK09

1. 覆土 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。炭化物・焼土粒・千枚岩を含むがIIIa②層より少ない。
2. 覆土 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。1層より暗色。4層の褐色土粒が多く混ざる。炭化物・焼土粒を含む。
3. 覆土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまり弱い。砂質少し強い。2層より炭化物・焼土粒を多く含む暗色。
4. 覆土 褐色 (7.5YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。粘質強めの褐色土と黄色土 (2.5Y7/8) が互層で粗く混ざる。炭化物・焼土粒を含む。千枚岩検出。遺構に関するものか。
5. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや強い。黄褐色土 (2.5YR5/4) が粒状に混ざる。0.2~7cm大の千枚岩を粗く含む。

SP09

1. 覆土 褐色 (7.5YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。黄色粒 (2.5Y7/8) ・炭化物・焼土粒を僅かに含む。
2. 覆土 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土、しまり強い。1層の土混ざる。

SP10

1. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや強い。炭化物・焼土粒を僅かに含む。
2. 覆土 明黄褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまりやや強い。明黄褐色土に黄色土 (2.5Y7/8) が粗く混ざる。

SA02E

1. 土手の造成 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。炭化物・焼土粒を含む。僅かに千枚岩片混ざる。
2. 土手の造成 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土、しまり弱い。1層にブロック状のVia層が混ざる。

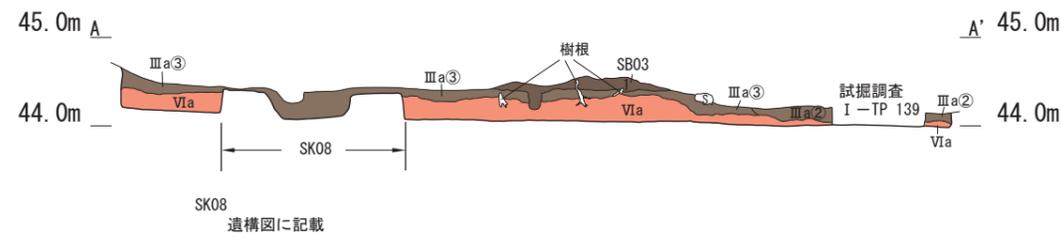
SF04

1. 道の堆積 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまり強い。

SB03土壁

1. 造成 黄褐色 (2.5R5/4) 砂質粘土、しまりやや強い。Via層? 明赤褐色土 (5YR5/8) が粒状に混ざる。2層の影響か。
2. 造成 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土、しまりやや強い。1層の黄褐色土にVia層? 明赤褐色土 (5YR5/8) が筋状に混ざる。SB04 石柱の造成に類似。

トレンチ 16

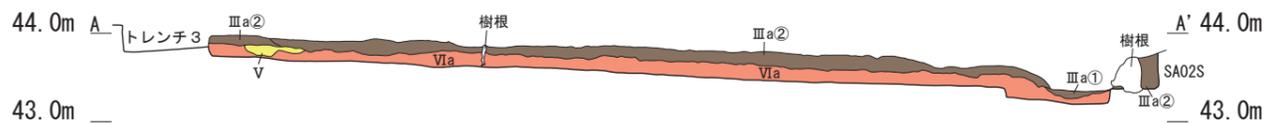


SK08  
遺構図に記載

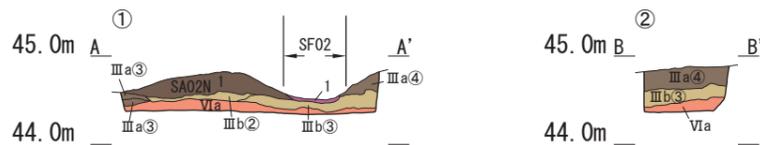
SK08

1. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや強い。炭化物・焼土粒を僅かに含む。僅かに千枚岩片混ざる。
2. 土手の造成 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土、しまり弱い。1層にブロック状のVia層が混ざる。

トレンチ 17



トレンチ 18

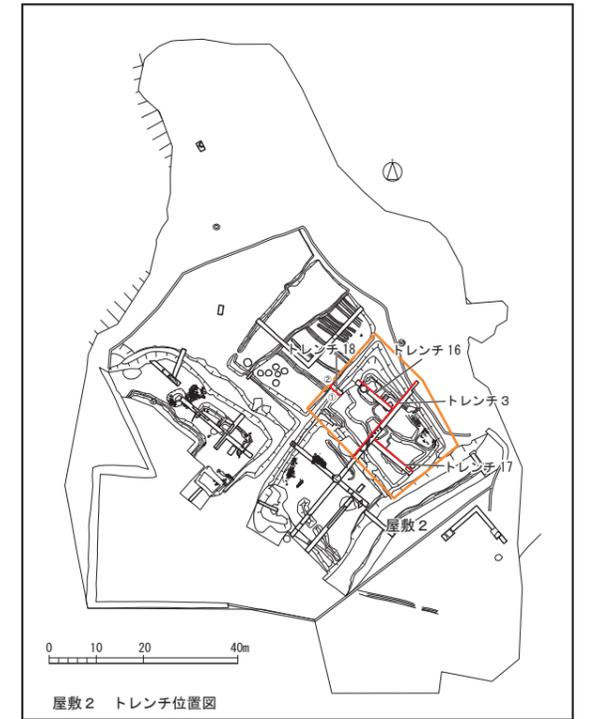


SA02N

1. 土手の造成 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。明褐色土 (7.5YR5/8) が混ざる。0.2~1cm大の炭化物を含む。

SF02

1. 道の堆積 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。



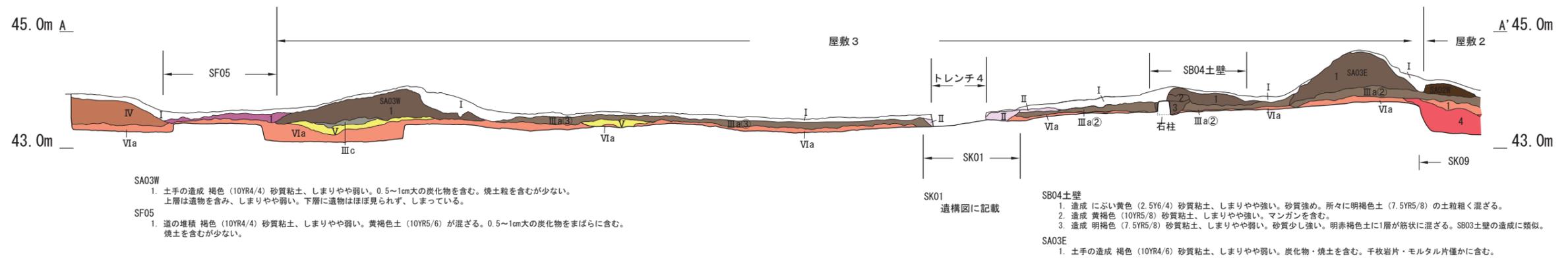
屋敷 2 トレンチ位置図

表土	I 層	米軍基地・戦争関連攪乱 (砲弾跡・焼土)
八所集落期以降 (日本軍 or 米軍)	II 層	褐色土
八所集落期 (近代農取集落)	IIIa 層	生活面 (①屋敷内溝 ②造成土上面利用 ③地上上面利用 ④不明)
	IIIb 層	造成 (①~⑦)
	IIIc 層	黒色土堆積
八所集落期以前	IVa 層	造成土
	IVb 層	耕作土
自然堆積再堆積	V 層	自然堆積
地山	VIa 層	軟質 (所々にマンガンを含む)
	VIb 層	硬質 (石英を多く含む)
岩盤	VII 層	千枚岩
遺構	II 層	道跡
	III 層	畑畝
	IV 層	畑畝間

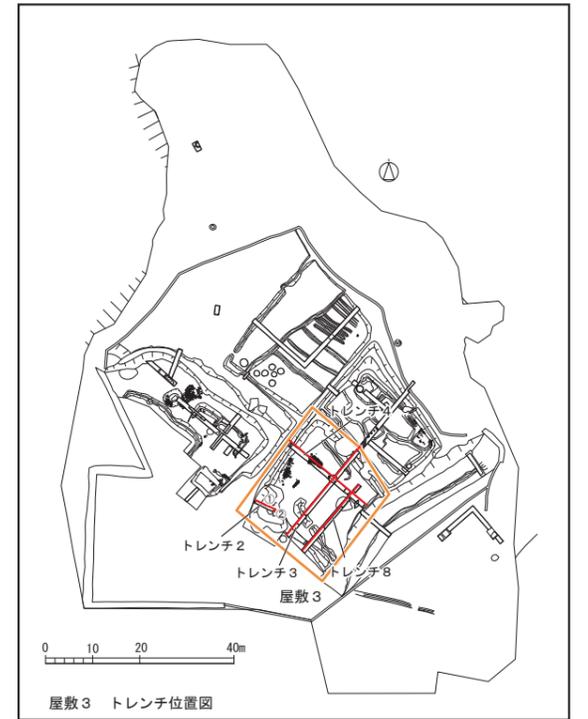
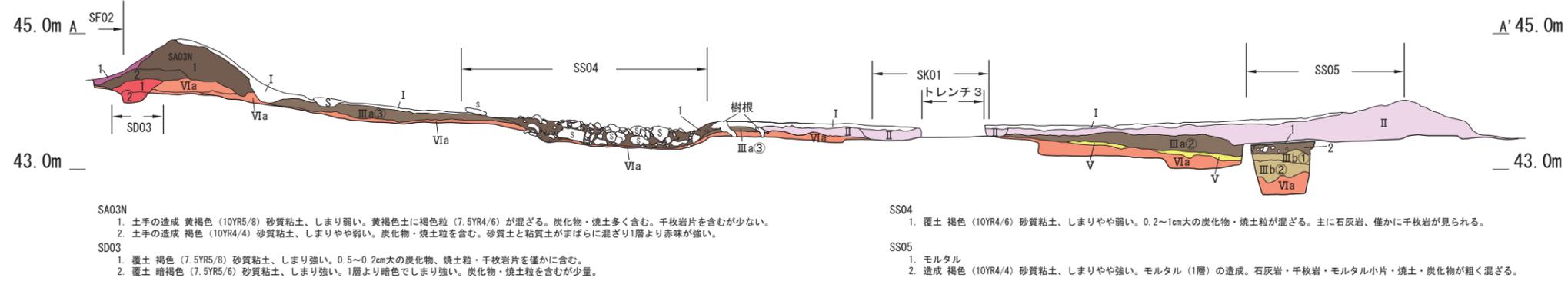


第 6 図 屋敷 2 層序

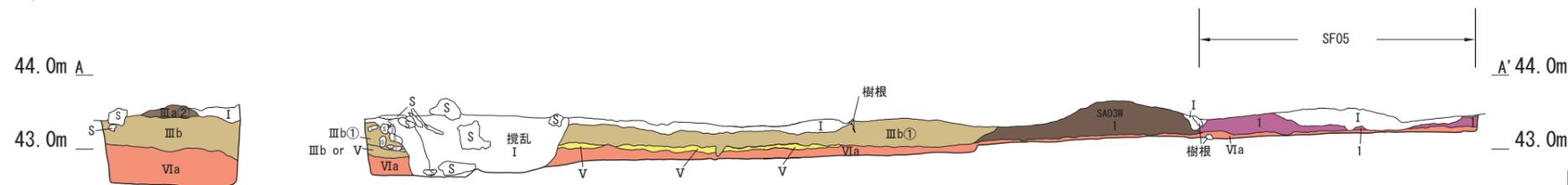
トレンチ 3



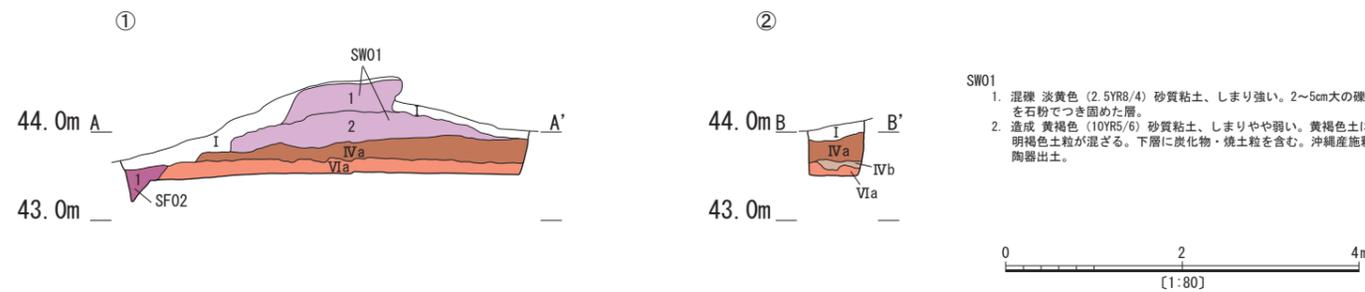
トレンチ 4



トレンチ 8



トレンチ 2

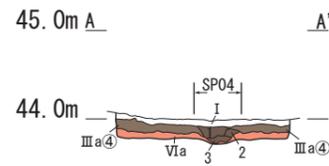


SW01 検出状況 (南東から)

表土	□	I層	米軍基地・戦争関連攪乱 (砲弾跡・焼土)
八所集落期以降 (日本軍 or 米軍)	□	II層	褐色土
八所集落期 (近代屋敷集落)	■	IIIa層	生活面 (①屋敷内溝 ②造成土上面利用 ③地山上面利用 ④不明)
	■	IIIb層	造成 (①~⑦)
	■	IIIc層	黒色土堆積
八所集落期以前	■	IVa層	造成土
	■	IVb層	耕作土
自然堆積再堆積	■	V層	自然堆積
地山	■	VIa層	軟質 (所々にマンガンを含む)
	■	VIb層	硬質 (石英を多く含む)
岩盤	■	VII層	千枚岩
遺構	■	II層	道跡
	■	III層	畑畝
	■	IV層	畑畝間

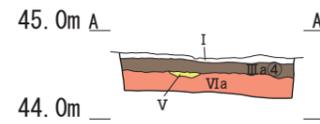
第7図 屋敷3層序

トレンチ13

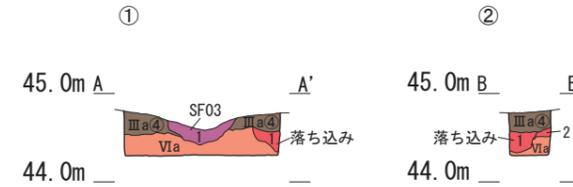


- SP04
1. 覆土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまり弱い。炭化物・焼土粒を含む。
  2. 覆土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまりやや強い。1層よりしまりが強い。
  3. 覆土 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質粘土、しまり強い。炭化物・焼土粒を含み暗色。

トレンチ14



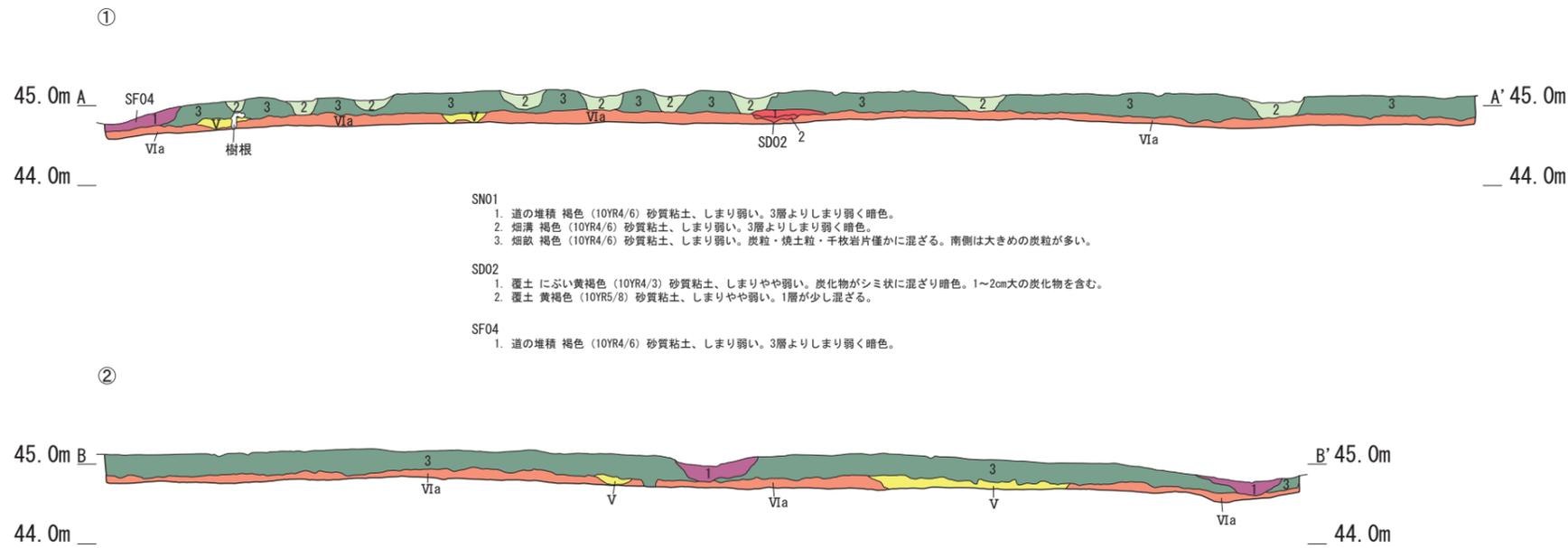
トレンチ19



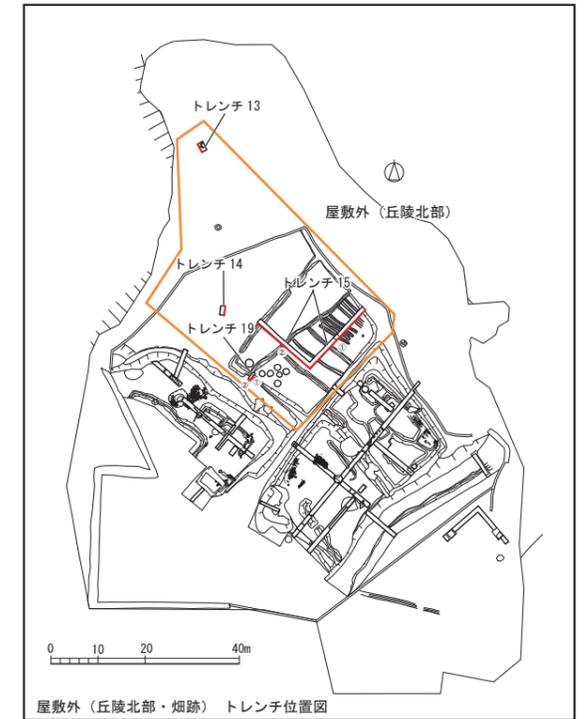
- SF03
1. 道の堆積 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質粘土、しまりやや強い。砂質強め。所々に明褐色粒 (7.5YR5/8) が粗く混ざる。

- 落ち込み
1. 覆土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまりやや弱い。褐色粒 (10YR4/4) が粗く混ざる。炭化物・マンガンを少し含む。
  2. 覆土 褐色 (10YR5/8) 砂質粘土、しまり強い。1層の黄褐色土 (10YR5/8) に明褐色土 (7.5YR5/8) が混ざる。

トレンチ15 (SN01)



- SN01
1. 道の堆積 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。3層よりしまり弱く暗色。
  2. 畑溝 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。3層よりしまり弱く暗色。
  3. 畑畝 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。炭粒・焼土粒・千枚岩片僅かに混ざる。南側は大きめの炭粒が多い。
- SD02
1. 覆土 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質粘土、しまりやや弱い。炭化物がシミ状に混ざり暗色。1~2cm大の炭化物を含む。
  2. 覆土 黄褐色 (10YR5/8) 砂質粘土、しまりやや弱い。1層が少し混ざる。
- SF04
1. 道の堆積 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。3層よりしまり弱く暗色。



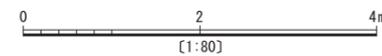
トレンチ 15 設定状況 (南から)



SN01 層序確認状況 (北から)



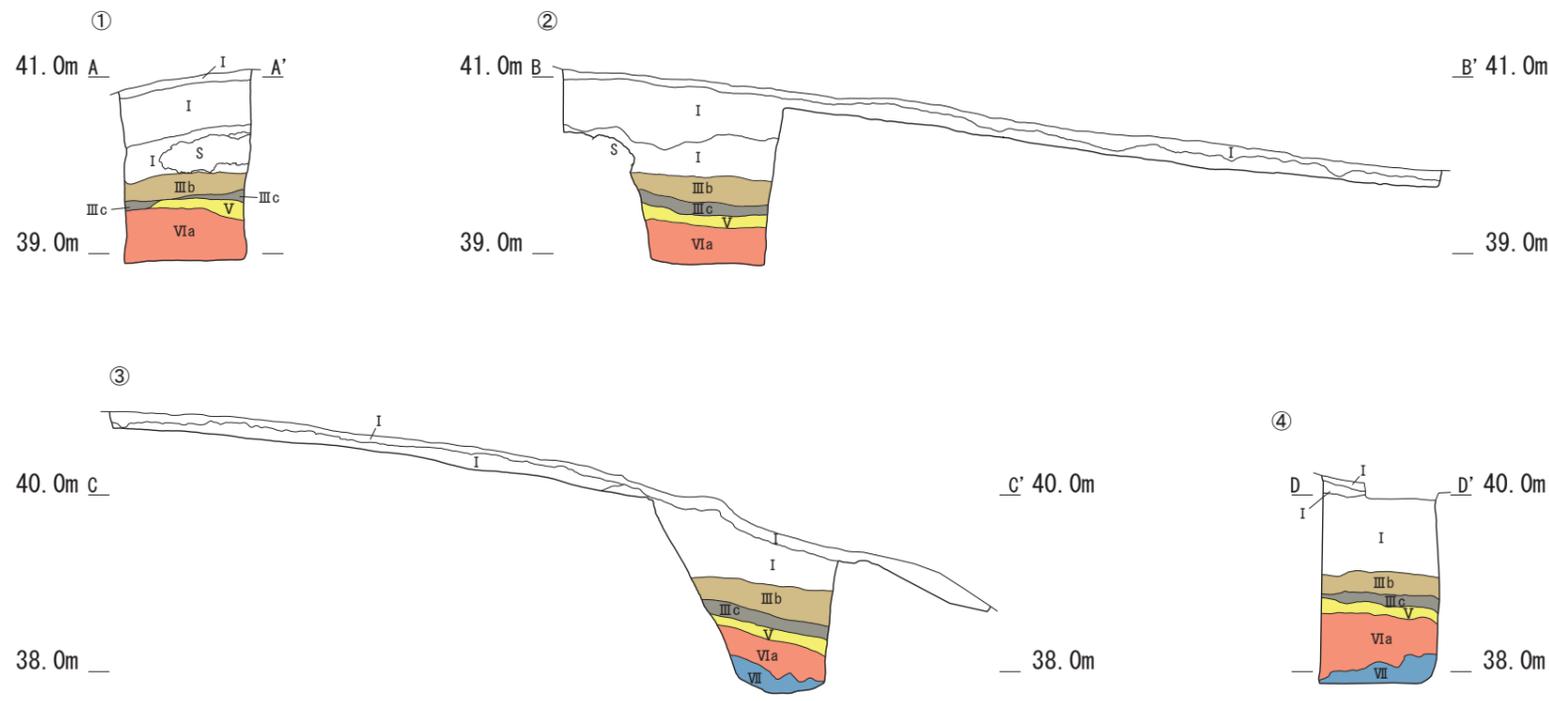
SN01 層序確認状況 (北西から)



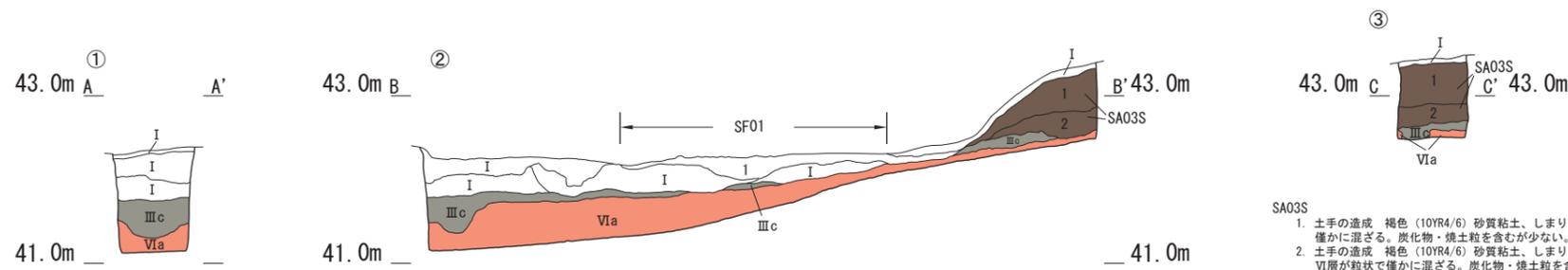
表土	□	I層	米軍基地・戦争関連擾乱 (砲弾跡・焼土)
八所集落期以降 (日本軍 or 米軍)	□	II層	褐色土
八所集落期 (近代屋敷集落)	■	IIIa層	生活面 (①屋敷内溝 ②造成土上面利用 ③地山上面利用 ④不明)
	■	IIIb層	造成 (①~)
	■	IIIc層	黒色土堆積
八所集落期以前	■	IVa層	造成土
	■	IVb層	耕作土
自然堆積再堆積	■	V層	自然堆積
地山	■	VIa層	軟質 (所々にマンガンを含む)
	■	VIb層	硬質 (石英を多く含む)
岩盤	■	VII層	千枚岩
遺構	■	II層	道跡
	■	III層	畑畝
	■	IV層	畑畝間

第8図 屋敷外 (丘陵北部・畑跡) 層序

トレンチ 1

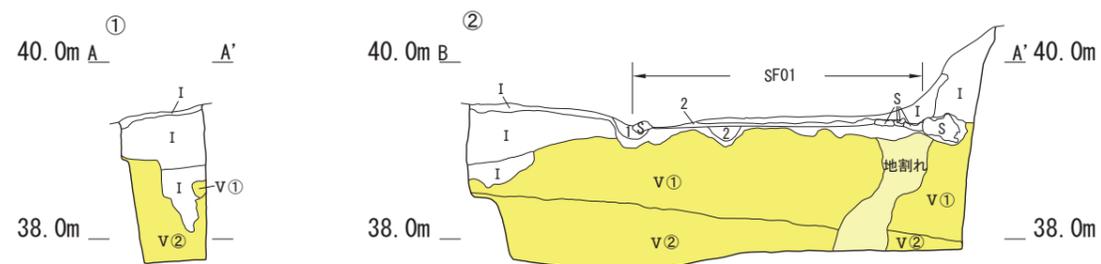


トレンチ 6

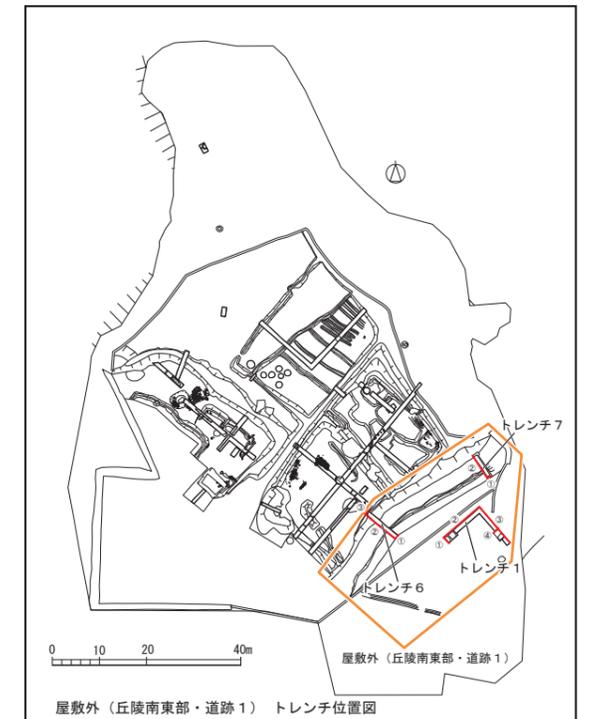


SA03S  
 1. 土手の造成 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。VI層が粒状で僅かに混ざる。炭化物・焼土粒を含むが少ない。  
 2. 土手の造成 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまりやや強い。I層より暗色。VI層が粒状で僅かに混ざる。炭化物・焼土粒を含むが少ない。

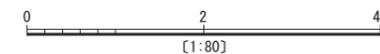
トレンチ 7



SF01  
 1. 溝 暗褐色 (10YR3/3) 砂質粘土、しまり弱い。溝に表土が流れ込む。  
 2. 道の造成 明黄褐色 (2.5YR6/6) 砂質粘土、しまり弱い。V層①上面に石敷きを施す。石粉で施工されている箇所あり。



表土	I層	米軍基地・戦争関連攪乱 (砲弾跡・焼土)
八所集落期以降 (日本軍 or 米軍)	II層	褐色土
八所集落期 (近代屋敷集落)	IIIa層	生活面 (①屋敷内溝 ②造成土上面利用 ③地山上面利用 ④不明)
	IIIb層	造成 (①~⑦)
	IIIc層	黒色土堆積
八所集落期以前	IVa層	造成土
	IVb層	耕作土
自然堆積 再堆積	V層	自然堆積
地山	VIa層	軟質 (所々にマンガンを含む)
	VIb層	硬質 (石英を多く含む)
岩盤	VII層	千枚岩
遺構	II層	道跡
	III層	畑畝
	IV層	畑畝間



第9図 屋敷外 (丘陵南東部・道跡1) 層序

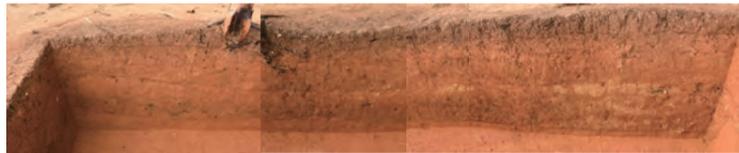
トレンチ9 北東壁面  
(南東側)



(北西側)



トレンチ10 北西壁面  
(南西側)



(北東側)



トレンチ11 南西壁面



SD01 南東壁面



トレンチ3北西壁面



屋敷3 ← | → 屋敷2



トレンチ4北東壁面

(北西側)



(南東側)



第11図 屋敷2・3壁面

## V層 自然堆積

地山の二次堆積層と思われる。色調は褐色から黄褐色土（10YR）を主体とする。層厚は0.1 m程。屋敷内外の地山（VI層）上面での堆積が確認された。道跡（SF01）のトレンチ7では最大で1.5 mの堆積であった。南西壁面では地割れと思われる状態を確認した。しまりの強い砂質粘土の堆積を砂粒層が切って上層に噴出している様に見える。

## VI層 地山

地山層。色調は明褐色土（7.5YR）から黄褐色土（10YR）を主体とする。調査区全体に見られる。土層の観察より、VI a層（軟質でマンガンが所々に混ざる層）とVI b層（硬質、石英が多く混ざる層）に区別した。国頭マージ層と思われる。

## VII層 岩盤

調査区内では、丘陵南東部トレンチ1内サブトレンチ2のみで確認。色調は緑灰色（10G5/1）を主体とする。地表から深度2.8～3.0 m前後の地山（VI層）下で風化した千枚岩の岩盤が確認された。東側の水路で露頭する千枚岩の岩盤を確認した。

# 第3節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、近代の屋取集落である八所集落期の遺構（Ⅲ層）が主体を占める。集落跡は道跡と土手により区画された屋敷の集合体である。また、八所集落期以前の遺構（Ⅳ層）と八所集落期以降の遺構（Ⅱ層）も確認されている。調査時には、例言で示したように遺構記号を設定し付与した。これらのうち主要な遺構について各期・地区ごとに述べる。

### 1. 八所集落期以前の遺構（Ⅳ層）

八所集落期以前の遺構は、地山上面で焼土坑・土坑・ピット・溝跡・鋤跡が確認された。溝跡はトレンチ15よりSD02、トレンチ4よりSD03、鋤跡はトレンチ2より確認されたが、検出範囲が狭く遺構の性格は不明である。以下特徴的な遺構について述べる。

#### ①焼土坑

窯跡と思われる焼土坑が5基確認された。（SK01・05・06・07・08）

SK01・07・08は円形を呈し、燃焼部壁面は被熱により硬化している。覆土底面には炭化物の層が残り、焼土塊が粗く混ざるものが多い。SK01の燃焼部規模は約1.9×1.7 m、残存する深さは約0.57 mである。SK07の燃焼部規模は約1.14×0.77 m、残存する深さは約0.29 mである。SK08の燃焼部規模は約1.52×1.62 m、残存する深さは約0.36 mである。

SK05（旧）は土坑SK03（新：上）・SK04（新：下）と切り合った状況で見つかった。覆土に焼土粒と炭粒が含まれており、燃焼部の壁面・底面は被熱により赤く硬化している。全長は約5 m、燃焼部は円形を呈し、規模は約1.8×1.7 m、残存する上面より底面までの深さは約0.25 m。焚口部分は幅約0.5 m、両端に千枚岩と石灰岩が配されている。前庭部（作業を行うための平坦な場所）は約2.3×1.6 mの長方形に掘り込まれており、底面は燃焼部より約0.1 m下がる。前庭部に隣接して幅約

0.25 m、深さ約 0.25 mの溝が南西側に続く。排水施設と想定した。

SK06 の上部は削平されており、底面での検出状況であった。底面の形状は方形を呈している。燃焼部規模は約 1.21 × 0.98 m、残存する深さは約 0.14 m。覆土底面に残る炭層のみの検出であった。

## ②土坑

土坑は 5 基検出された。(SK03・04・09・10・11)

SK03・04・10・11 は平面形が方形状を呈する。用途は不明である。SK10・11 は覆土に焼土・炭化物を含み SK05 に隣接していることから、SK05 に付随する遺構と想定した。

SK09 は屋敷 2 トレンチ 3 内の地山上面で検出された。覆土に焼土と炭を含む。方形状の平場に緩やかに傾斜する溝が接する。溝には石灰岩と千枚岩が配されており、用途不明の遺構であるが、焼土坑の焚口・前庭部分と想定した。

## 2. 八所集落期の遺構（Ⅲ層）

八所集落期の遺構は、道跡と土手により方形状に区画された屋敷 3 箇所と畑跡が確認されている。全体的に北西－南東方向の軸で遺構が確認できた。以下特徴的な遺構について述べる。

### 屋敷 1

屋敷 1 は丘陵の南西側に位置する。屋敷周辺には、地山に高さ約 0.6 m の土手 (SA01) を造成し「L」字状に廻らす。土手から当時の生活面までの高低差は約 1.5 ～ 2.1 m を測る。土手内の敷地は約 30 × 17 m、遺構の残存状況も良好で、他の屋敷と比べて最も大きい。造成は既存の傾斜面を地山まで削平後、層状に盛土をしている。南西側溝 (SD01) 下では地山まで約 1.7 m にも及ぶが、東側では約 0.1 m に満たず地山に達する。

#### 〈建物跡〉

土手内南東側にて建物跡が 2 箇所確認された。SB01 は南西向き「コ」の字状の土壁と、土壁内側に石柱が 4 本確認された。土壁は北西側と北東側の一部を石灰岩と千枚岩を積上げ土で成形、残りの北東側と南東側は土壁を廻らす。残存高は約 0.65 m を測るが、トレンチ 9 の層序より土壁は以前に一度構築していた様子が見られた。石柱は、上部に北西－南東のほぞ穴を設けており、地中に約 0.4 m 埋まる。その中の 1 本はコンクリートを使っており、表面にバショウの葉痕のようなものが見られた。SB01 の範囲は約 5.9 × 5.8 m、家畜小屋とみられる。

SB02 は約 7.7 × 5.8 m の範囲に低い土手を廻らせ、内側は方形状でやや盛り上がる。低い土手に沿って南東側に約 60 × 40 cm 大の礎石を 3 個、礎石に平行して約 0.2 × 2.5 m の石列が配されている。更に北東側にも約 30 × 30 cm の礎石が 2 個確認された。北西から南東側にかけて「L」字状に瓦集中部 (SU01) が確認されており、一定方向に力が掛けられて建物が壊されたと想定した。瓦集中部 (SU01) からは瓦当が出土しておらず、底部分を瓦葺にしたアマダイガーラ (雨垂瓦) と呼ばれる家屋構造だったと思われる。発掘調査中、現地でも丸瓦と平瓦に分類し計量を行った。総量は丸瓦が 1,726 kg (一枚あたり約 1,415 g)、平瓦が 514 kg (一枚あたり約 985 g) となり、枚数にして丸瓦約 1,220 枚、平瓦約 522 枚となる。当時の住人が住んでいた家屋とみられる。SB02 南側には石灰岩と千枚岩の石積が土手に対して垂直に設けられており、石積に隣接して石灰岩と千枚岩の礫敷の上にモルタルで床面を施した跡がみられ、屋敷に付随するものと考えられる。

#### 〈フール跡（豚小屋兼便所）〉

SB01 北西側にてフール跡が2基確認された。SVP01は約3.2×2.2 m、SVP02は約3.7×1.9 m、側面は主に石灰岩の切り石を用い、床面は石灰岩と千枚岩を敷き詰めている。厠部分は石を「U」字形に加工若しくは配石し、上部をモルタルと礫で成形している。隣接するが、厠部分は南東向きと南西向きの2方向である。フール跡（SVP01）南西側には土坑（SKP01）が隣接する。形状は約4.0×3.3 mの楕円形を呈し、断面は鍋底状で南西側がやや浅く石灰岩と千枚岩の配石状況が確認できた。シーリ（肥溜め若しくは生ごみ廃棄場所）と考えられる。

#### 〈溝状遺構〉

屋敷1の南側で南東から北西へ緩やかに傾斜する溝（SD01）が検出された。残存する平面形は南西向き「コ」の字状で、幅は約0.2～0.4 m、排水路と考えられる。

### 屋敷2

屋敷2は丘陵の南東側で、道跡1（SF01）沿いに屋敷3と並び位置する。屋敷周辺には、地山に高さ約0.8 mの土手（SA02）を造成し廻らす。屋敷3に近接する南西側の土手は不明瞭である。土手内の敷地は約21×12 mである。屋敷内には区割状に溝が残り、6箇所の平場を持つが、残存状況が良くないため、建物の性格や規模は不明である。東側には千枚岩の礫が溝内に集中する。旧表土（Ⅲ a層）を掘り下げると約0.1 mにも満たず地山に達する。

#### 〈建物跡〉

SB03は「L」字状に土壁が残る。最大長は約10 mを測る。残存高は約0.3 mである。

### 屋敷3

屋敷3は丘陵の南側に位置し、屋敷2と並ぶ。屋敷周辺には、地山に高さ約0.6～0.7 mの土手（SA03）を造成し廻らす。土手内の敷地は約19×14 mである。造成は屋敷2に近い北東側が薄く旧表土（Ⅲ a層）を掘り下げると約0.1 m以下で地山に達するが、南東側の造成土（Ⅲ b層）は約0.5 mを測り、厚くなる。層序の観察より屋敷2と同時期に盛土造成が行われたと思われる。

#### 〈建物跡〉

SB04では「L」字状に土壁が残る。最大長は約10 mを測る。残存高は約0.3 mである。トレンチ3内では石柱が土壁に近接して約0.3 m埋められている事が確認されたが、建物の性格や規模は不明瞭である。

#### 〈集石遺構〉

集石が3箇所みられた。用途は不明である。SS02は楕円形を呈しており、約10～20 cm大の石灰岩と千枚岩が約2.0×0.5 mの範囲で敷き詰められる。SS03は約50 cm大の石灰岩、5～10 cm大の石灰岩と千枚岩の礫が約4.5×1.2 mの範囲に不定形に広がる。SS04は長方形を呈しており、約20～30 cm大の石灰岩、約10～20 cm大の石灰岩と千枚岩の礫が約3.3×1.3 mの範囲で敷き詰められている。

また、トレンチ4内にて石灰岩と千枚岩の礫敷きの上にモルタルで床面を施した跡（SS05）が確認された。トレンチ4の中央から南東側はⅡ層の堆積や被熱痕の残る攪乱が確認されており、出土遺物も炭化物・焼土・溶けたガラス等被熱の影響が著しく、遺構の性格は不明である。

## 道跡

道跡は屋敷と畑を区分けするように4箇所を確認した。道跡2 (SF02) は、屋敷1・畑跡と屋敷2・3の間を南西から北東に延びる。土手外側の道幅は約0.6～1.8 mである。道跡3 (SF03) は畑跡を廻り、道幅は約0.4～1.5 mで所により不明瞭になる。道跡4 (SF04) は丘陵の外側を廻り、道幅約1.0～3.5 mである。道跡5 (SF05) は屋敷3土手 (SA03) 南西側で確認された。土手に沿って配石 (石灰岩) が確認されたが性格は不明である。道幅約0.6～1.4 mである。

なお、聞き取り調査では道跡1 (SF01) に関して礫敷きにする以前に馬車一台分の幅の道があったとあるが (第3章第7節参照)、発掘調査では当時の道跡に関する確認はできなかった。

## 畑跡

畑跡 (SN01) は屋敷2の北西側にて約28×19 mの範囲で北西側と南東側に区割りし台形状を呈している。南東側の区画には畝が11列確認されており、畝は北東側に約0.6～0.7 m幅が3列、約1.6 m幅が1列、約0.6～0.7 m幅が3列、南西側に約3 m幅が3列、約6 m幅が1列であった。また、北西側の区画には畝は確認されていない。

### 3. 八所集落期以降の遺構 (Ⅱ層・Ⅰ層)

八所集落期以降の遺構は土塁 (SW01)・道跡 (SF01)・集石 (SS01)・水場 (SG01・02) が検出された。

SW01はⅡ層に帰属する遺構と判断したが、SF01・SS01・SG01・SG02に関しては発掘調査や聞き取り調査の結果、Ⅰ層の遺構と判断した (第3章第7節参照)。

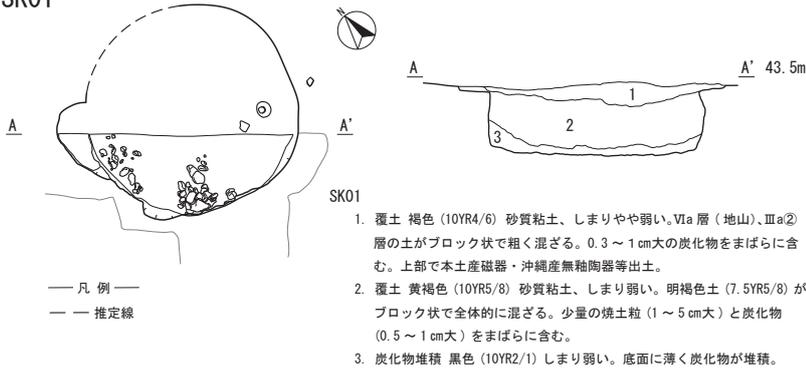
#### 土塁 (SW01)

屋敷3南西側で確認された。屋敷3土手 (SA03) を利用し、延長線上に土塁を築いたものと考えた。約7×4 mの範囲で南東向き「コ」の字状である。Ⅳ層上面に地山の土を使い造成している。南東から北西へ傾斜するように約2～5 cm大の礫を石粉で突き固めている。南東側は不整形ながら面をもち、床面には千枚岩を1列配する。残存高は約0.4 mである。丘陵の西側を通る馬車道に向けた沖縄戦時の簡易な土塁ではないかと考えられる。



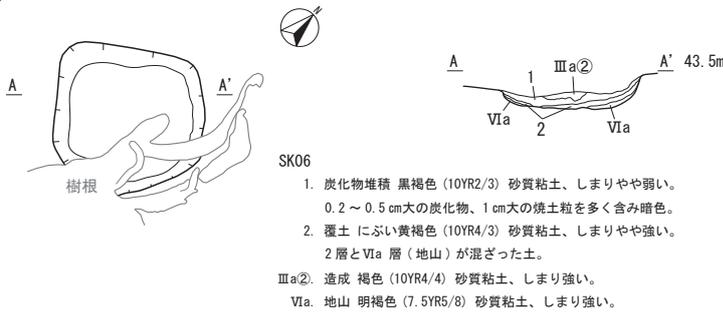
第 12 図 八所集落期以前の遺構配置図（焼土坑・土坑・ピット）

SK01



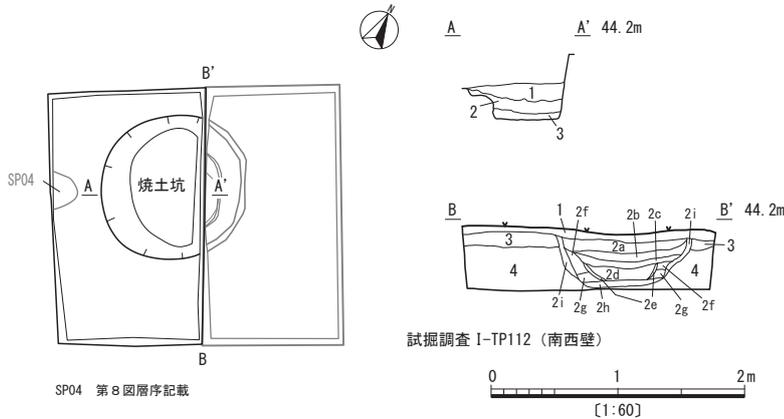
SK01 半裁状況 (南西から)

SK06



SK06 半裁状況 (東から)

SK07 (東側は試掘調査 I-TP112)



SK07 半裁状況 (南東から)

SK07

1. 覆土 明黄褐色 (2.5Y6/8) 砂質粘土、しまり弱い。0.2～0.5cm大の炭化物・焼土粒をまばらに含む。沖縄産無釉陶器。
2. 覆土 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質粘土、しまりやや弱い。シルト質。0.2～1cm大の炭化物・焼土粒を多く含む。炭化物がシミ状に広がり、1層より暗色。
3. 炭化物堆積 暗オリーブ褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまりやや弱い。2層よりはしまり強く、1・2層より暗色。炭化物・焼土粒を多く含む。

試掘調査 I-TP112 (南西壁)

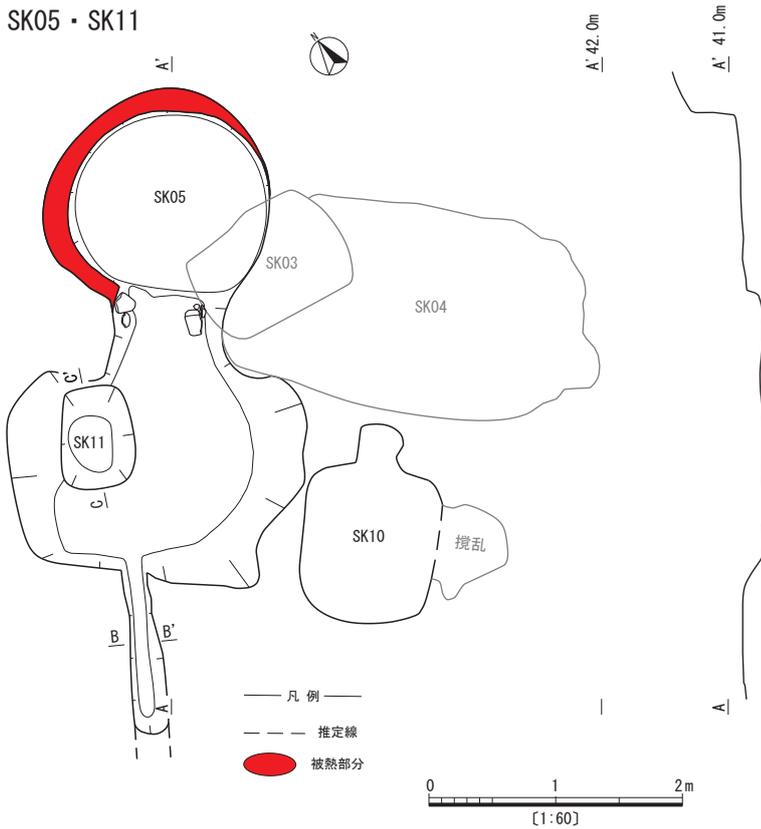
1. 表土 腐植土。焼土片確認。しまりなし。
- 2a. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。上部に根が多く入る。
- 2b. 黄灰色 (2.5Y5/6) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。黄色の地山ブロックが入る。
- 2c. 黄灰色 (2.5Y5/6) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。黄色の地山ブロックが入る。径1cm以下の炭化物が僅かに入る。
- 2d. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。黄色の地山ブロックと径2cm以下の炭化物が僅かに入る。
- 2e. 黒色 (2.5Y2/1) 焼土坑。焼土壁 (内側)。2i層に比べ黒色を呈し、厚みも半分程。
- 2f. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。微細な炭化物が僅かに入る。
- 2g. 黄灰色 (2.5Y4/1) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。径2cm程度の炭化物や焼土片多い。
- 2h. 黒色 (2.5Y2/1) 焼土坑。砂質粘土、ややしまる。粘性強い。径2cm未満の炭化物や焼土片多い。
- 2i. 赤色 (10R5/8) 焼土坑。焼土壁 (外側)。厚み最大5cm程。壁面のみに見られる。2e層に比べ赤くしっかりしている。
3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 漸移層。砂質粘土、ややしまりなし。根が多い。
4. 明赤褐色 (2.5YR5/8) 地山 砂質粘土。ややしまる。石英粒多く、細かい根が僅かに入る。



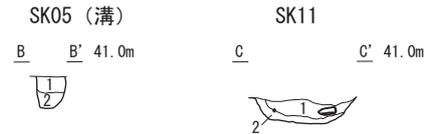
試掘 I-TP112 半裁状況 (北東から)

第13図 八所集落期以前の遺構 (焼土坑) 1

SK05・SK11



SK05 半裁状況 (北東から)



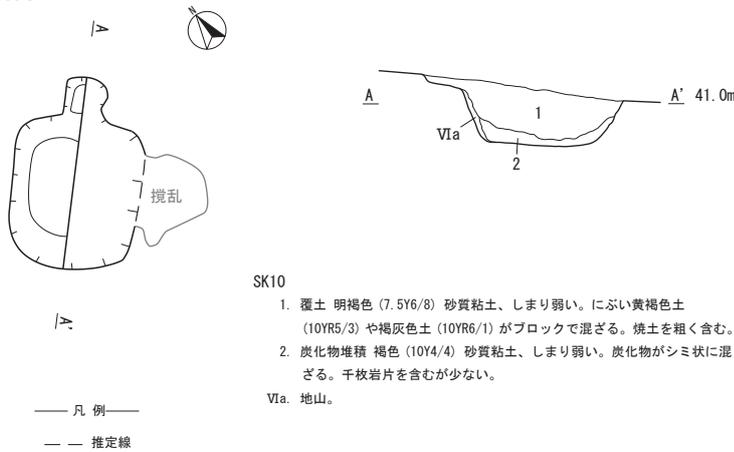
SK05 (溝)

1. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。明色で2層よりしまりあり。木炭・焼土を含む。
2. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや強い。1層より暗色。石英を多く含む。

SK11

1. 覆土 黄褐色 (10Y5/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。上面に灰?確認。炭化物がシミ状で混ざる。焼土粒を多く含む。千枚岩は1点のみ確認。
2. 炭化物堆積 暗オリーブ (2.5Y3/3) 砂質粘土、しまりやや弱い。1層より多く炭化物がシミ状で混ざり暗色。焼土粒を含む。

SK10



SK10

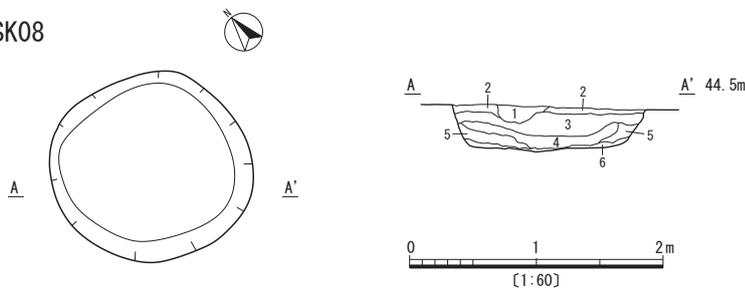
1. 覆土 明褐色 (7.5Y6/8) 砂質粘土、しまり弱い。にぶい黄褐色土 (10YR5/3) や褐色土 (10YR6/1) がブロックで混ざる。焼土を粗く含む。
2. 炭化物堆積 褐色 (10Y4/4) 砂質粘土、しまり弱い。炭化物がシミ状に混ざる。千枚岩片を含むが少ない。

VIa. 地山。



SK10 半裁状況 (北西から)

SK08



SK08

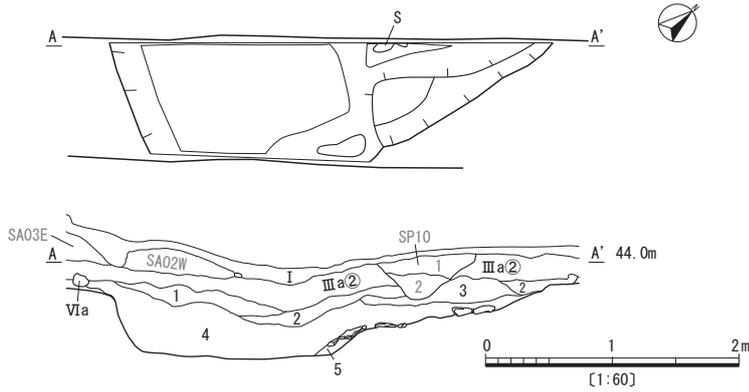
1. 造成土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまり強い。屋敷 2 SB03 に関する配石の掘込み。
2. 造成土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまりやや強い。屋敷 2 SB03 遺構構築面。1層よりややしまり弱く明色。炭化物少し、焼土粒多く含む。
3. 覆土 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。褐色土と黄褐色土 (10YR5/6) が混ざった層。下層では炭化物と焼土を含む。
4. 覆土 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土、しまり弱い。炭化物・焼土が平面で広がる。
5. 覆土 黄褐色 (10YR5/8) 砂質粘土、しまりやや弱い。4層より明色。炭化物・焼土塊含むが4層、6層より少ない。
6. 炭化物堆積 黒色 (10YR2/1) しまり弱い。底面に薄く炭化物が堆積。



SK08 半裁状況 (南西から)

第 14 図 八所集落期以前の遺構 (焼土坑) 2

SK09

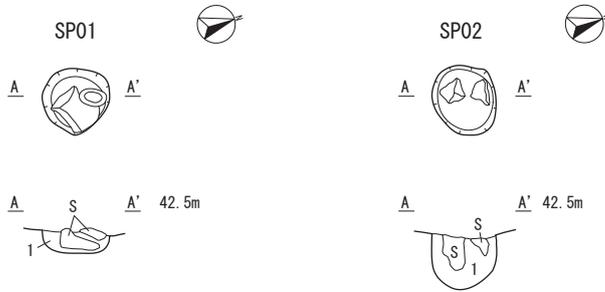


トレンチ 3 SK09 層序確認状況 (南東から)

SK09

1. 覆土 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり弱い。炭化物・焼土粒・千枚岩を含むがⅢa②層より少ない。
2. 覆土 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。1層より暗色。4層の褐色土粒が多く混ざる。炭化物・焼土粒を含む。
3. 覆土 褐色 (10YR4/4) 砂質粘土、しまり弱い。砂質少し強い。2層より炭化物・焼土粒を多く含む暗色。
4. 覆土 褐色 (7.5YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。粘質強めの褐色土と黄色土 (2.5Y7/8) が互層で粗く混ざる。炭化物・焼土粒を含む。千枚岩検出、遺構に関するものか。
5. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや強い。黄褐色土 (2.5YR5/4) が粒状に混ざる。0.2~7cm大の千枚岩を粗く含む。

SP01・02・05・06・07・08・09



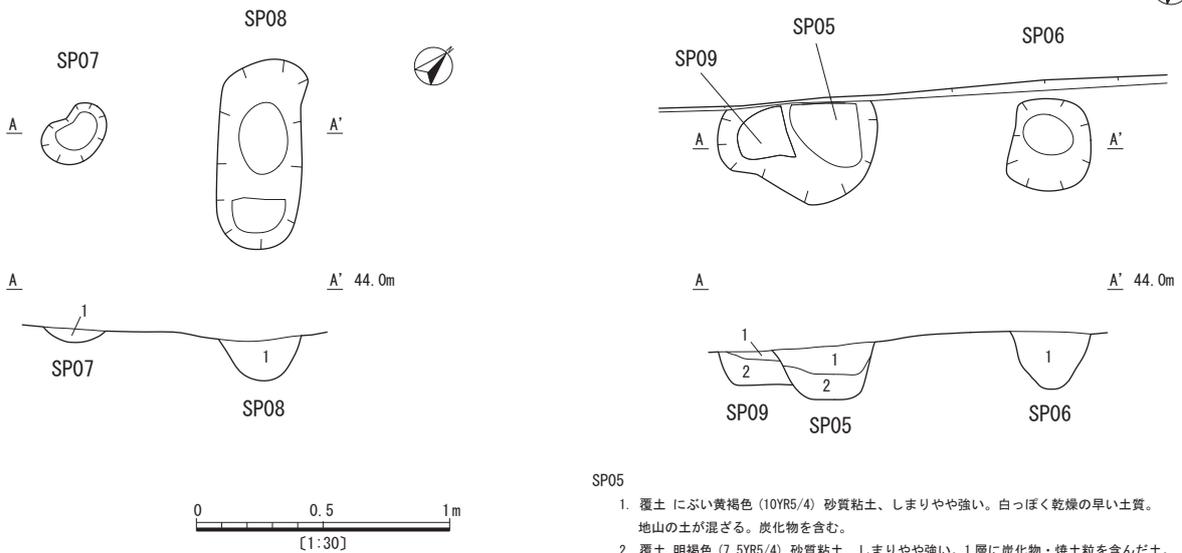
トレンチ 3 SP09・SP05 半裁状況 (南東から)

SP01

1. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまりやや強い。明褐色土と暗褐色土 (7.5YR3/4) が混ざる層。炭化物を僅かに含む。

SP02

1. 覆土 褐色 (7.5YR4/6) 砂質粘土、しまりやや強い。炭化物を僅かに含む。



SP07

1. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまり弱い。黄色粒 (2.5Y7/8) が混ざる。

SP08

1. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまり強い。黄色粒 (2.5Y7/8) が混ざる。

SP05

1. 覆土 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質粘土、しまりやや強い。白っぽく乾燥の早い土質。地山の土が混ざる。炭化物を含む。
2. 覆土 明褐色 (7.5YR5/4) 砂質粘土、しまりやや強い。1層に炭化物・焼土粒を含んだ土。

SP06

1. 覆土 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。SP05の2層に類似。地山の土がまんべんなく混ざり、少量の炭化物と千枚岩片を含む。

SP09

1. 覆土 褐色 (7.5YR4/6) 砂質粘土、しまり強い。黄色粒 (2.5Y7/8)・炭化物・焼土粒を僅かに含む。
2. 覆土 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土、しまり強い。1層の土混ざる。

第 15 図 八所集落期以前の遺構 (土坑・ピット)



SK01 上面検出前状況 (南から)



SK01 炭層検出状況 (西から)



トレンチ 11 内 SK03 ~ 05 上面検出状況 (東から)



トレンチ 11 内 SK05 完掘状況 (北東から)



SK05 上面検出状況 (北西から)



SK05 完掘状況 (南東から)



SK06 検出状況 (南東から)



SK06 完掘状況 (東から)

図版 3 八所集落期以前の遺構 (焼土坑・土坑)



トレンチ 13 内 SK07・SP04 検出前状況 (南東から)



トレンチ 13 内 SK07 完掘状況 (南西から)



SK08 上面検出状況 (西から)



SK08 焼土検出状況 (南西から)



SK08 完掘状況 (南西から)



トレンチ 9 内 SP01・02 上面検出状況 (南東から)



トレンチ 3 内 SK09、SP05～07・09 検出状況 (南から)



トレンチ 3 内 SK09 完掘状況 (南東から)

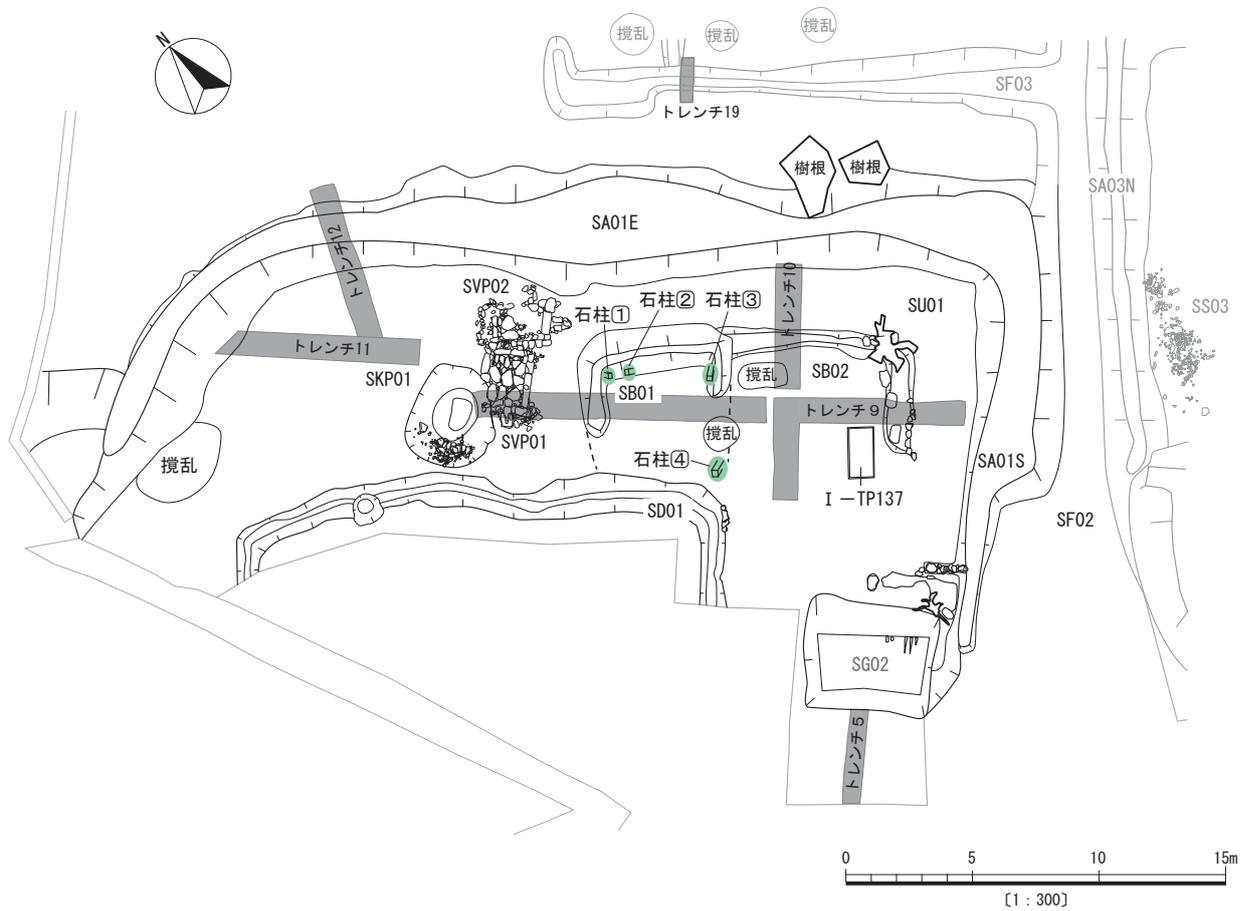
図版 4 八所集落期以前の遺構 (焼土坑・土坑・ピット)



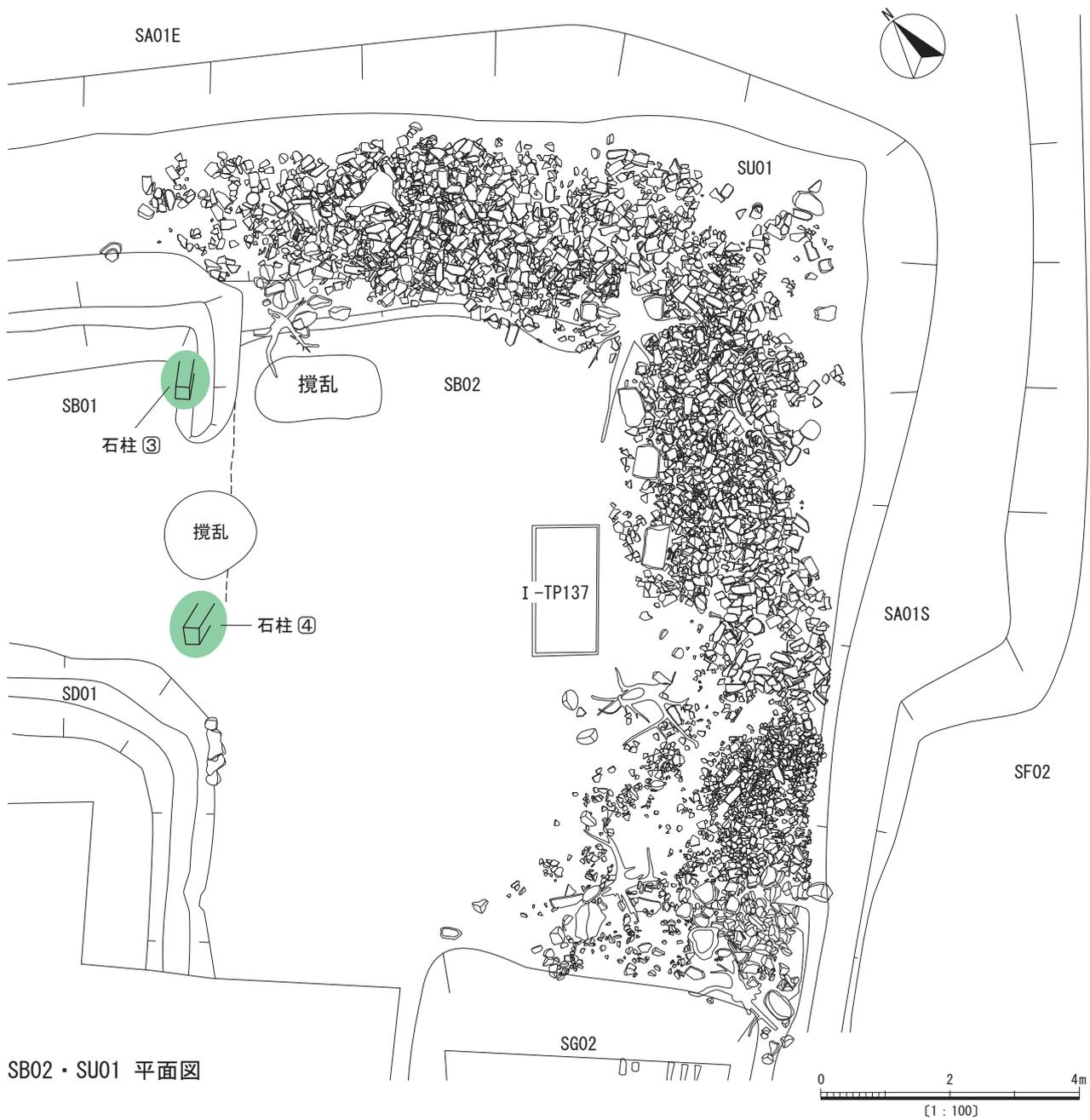
第16図 八所集落期の遺構配置図



図版5 屋敷1 遺構検出状況（南西から）



第17図 屋敷1 全体平面図



SB02・SU01 平面図



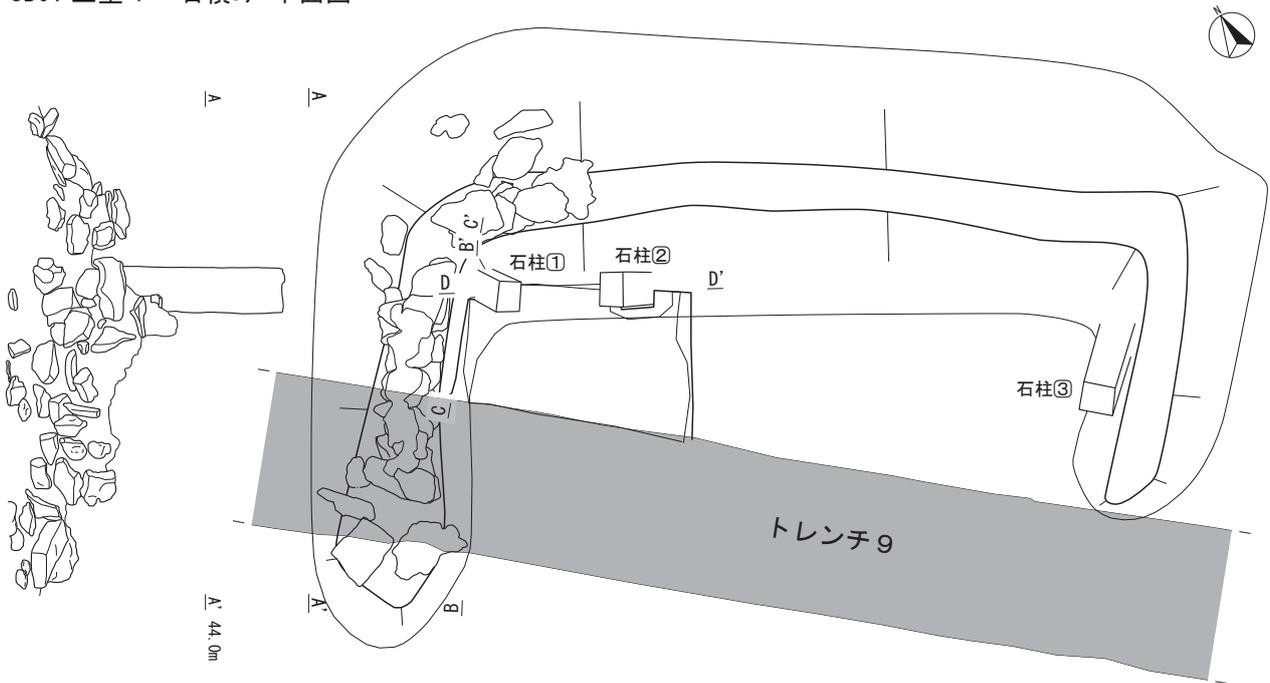
SB02・SU01 検出状況（南東から）



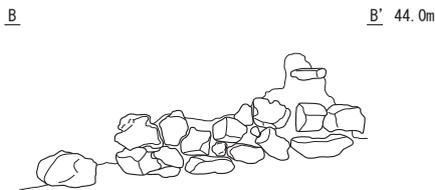
SU01 検出状況（西から）

第18図 屋敷1の遺構1

SB01 土壁 1・石積み 平面図



SB01 土壁 1・石積み 立面図



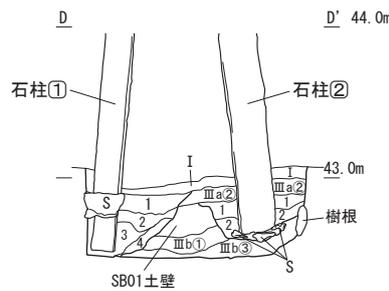
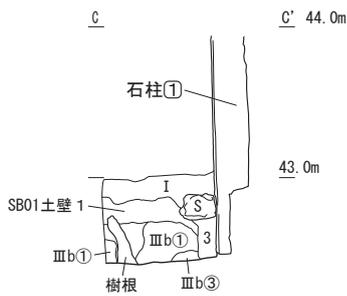
SB01 石柱 ②(琉球石灰岩)

1. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまり強い。
2. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまり弱い。
- 1層明褐色土がブロック状で混ざり、砂質が強い。

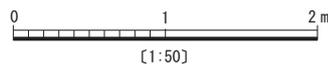


SB01 土壁 1 (北西から)

SB01 石柱埋没状況



SB01 土壁 1 (南東から)



SB01 石柱 ①(コンクリート)

1. 覆土 褐色 (7.5YR4/4) 砂質粘土、しまり強い。暗色。明褐色土 (7.5YR5/8) がブロック状で混ざることが少ない。
2. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまり弱い。明褐色土と1層の褐色土が粗く混ざる。焼土粒を含む。1層より明色。
3. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまりやや弱い。2層より明褐色土目立ち、砂質が強い。焼土粒を含む。
4. 覆土 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土、しまりやや弱い。3層よりしまり強く、2層よりしまり弱い。



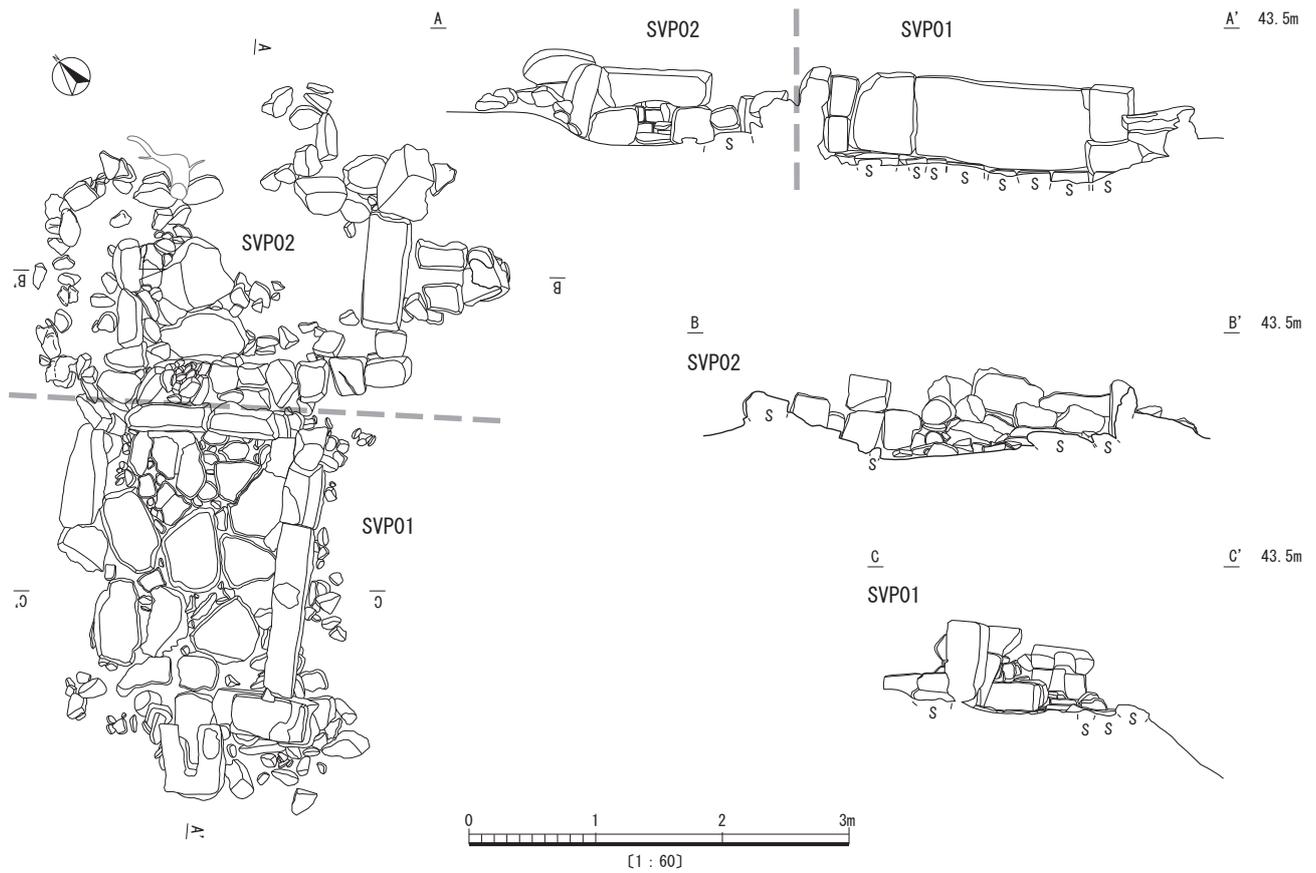
SB01 土壁 1・2・石柱 (南西から)



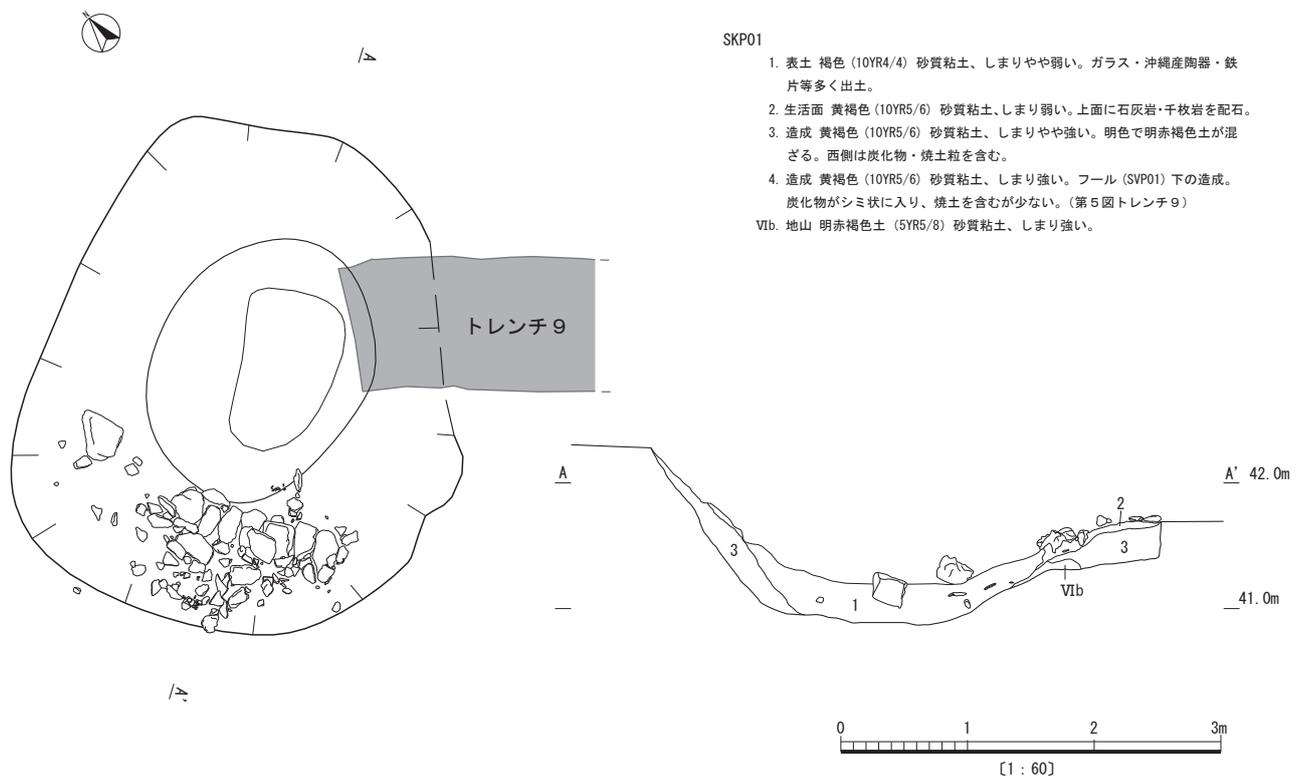
SB01 土壁 2 トレンチ9内検出 (南東から)

第19図 屋敷 1 の遺構 2

SVP01・SVP02 平面図・立面図



SKP01 平面図・断面図



第20図 屋敷1の遺構3



屋敷1 検出前（南西から）



SVP01・02 SKP01 検出状況（北から）



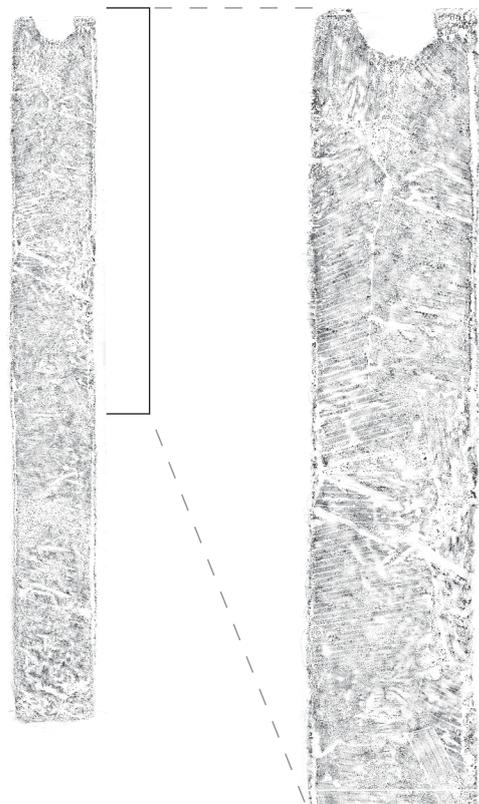
SKP01 完掘状況（北西から）



SA01 土手・石積・モルタル敷き（北から）



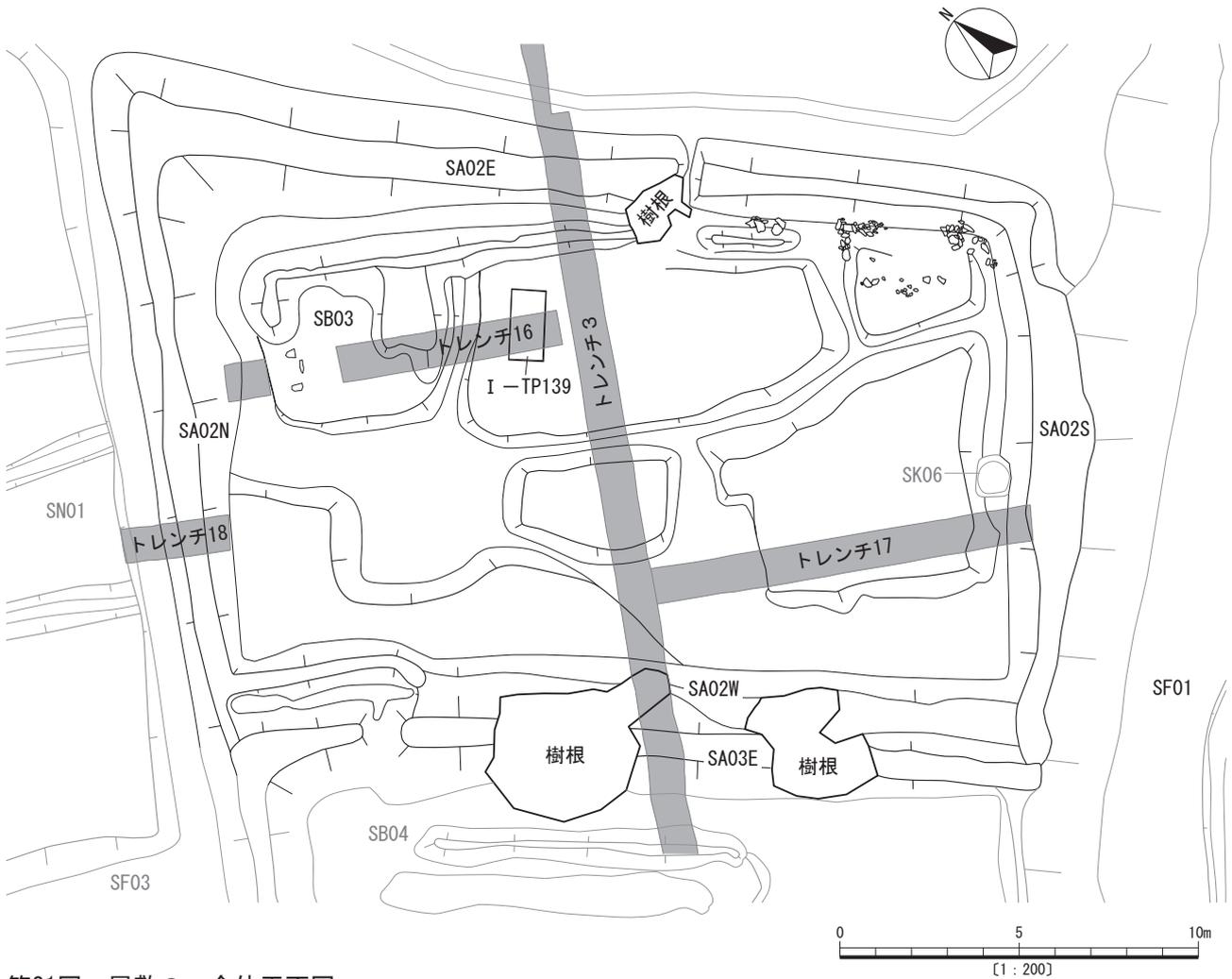
SB01 コンクリート製石柱①（北西から）



コンクリート製石柱① 拓本



図版7 屋敷2 遺構検出状況（南東から）



第21図 屋敷2 全体平面図



礫検出状況（北西から）



礫検出状況（北西から）



SB03 土壁検出状況（北西から）



トレンチ 16 掘り下げ状況（西から）



トレンチ 3 土手層序確認状況（南東から）



トレンチ 3 土手・SB03 層序確認状況（南東から）



遺物出土状況（南西から）

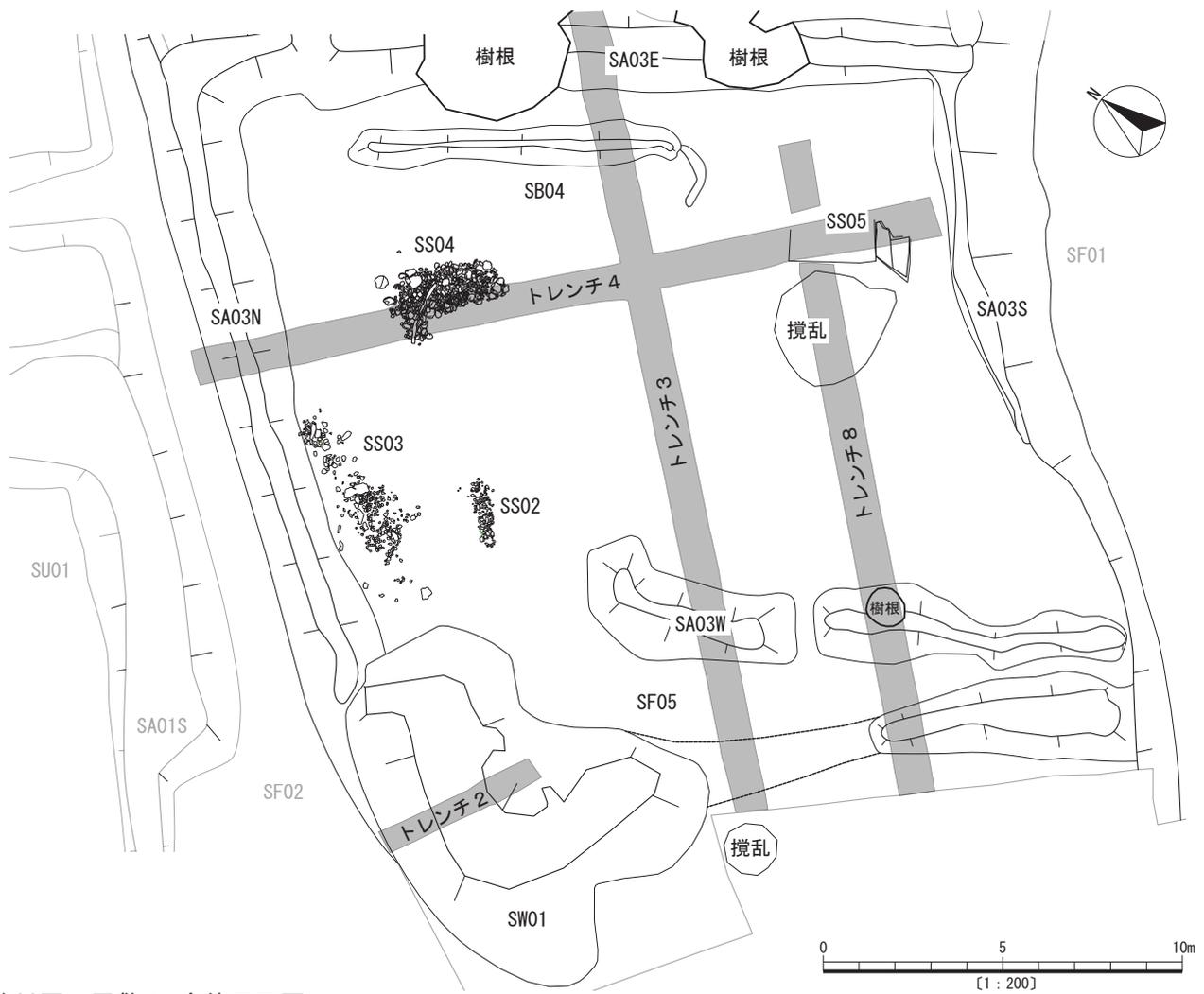


遺物出土状況（東から）

図版 8 屋敷 2 遺構・遺物検出状況

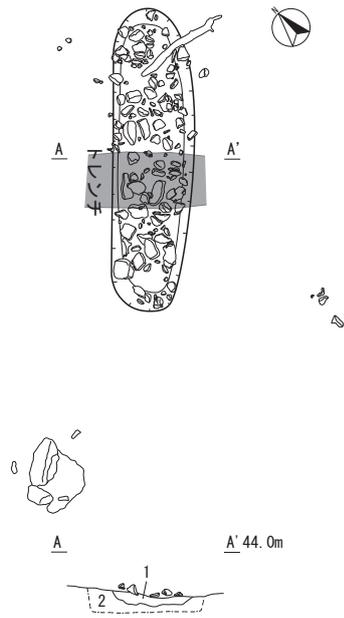


図版9 屋敷3 遺構検出状況（南から）



第22図 屋敷3 全体平面図

SS02 平面図・断面図

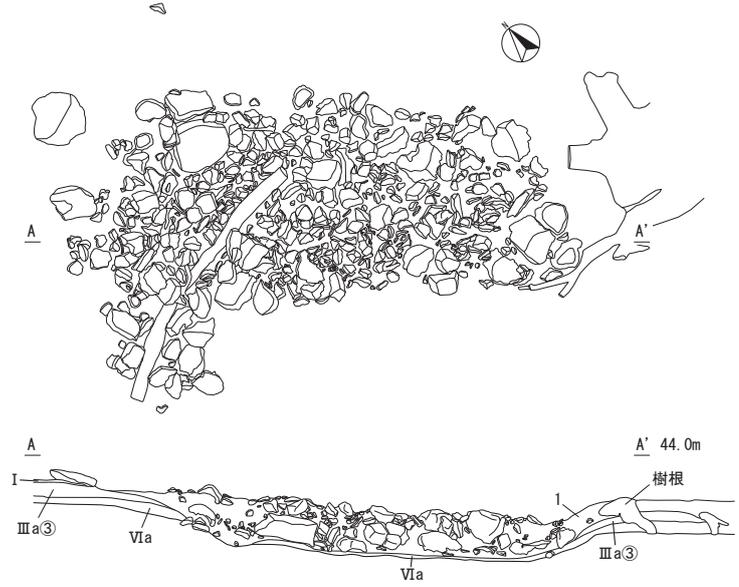


SS02

1. 掘込 褐色 (7.5YR4/4) 砂質粘土、しまりやや強い。炭化物を僅かに含む。
2. 地山 赤褐色 (5YR4/8) 砂質粘土、しまり強い。VIa層。

SS04 平面図・断面図

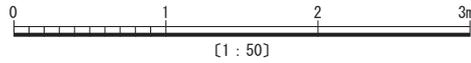
※断面上部の礫を外しているため断面図と整合しない



SS04

1. 覆土 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土、しまりやや弱い。0.2~1cm大の炭化物・焼土粒が混ざる。主に石灰岩、僅かに千枚岩が見られる。

SS03 平面図



SS02 集石 (南西から)



SS03 集石 (西から)



SS04 集石 (南東から)



屋敷3 検出前状況（南側から）



SS04 半裁状況（南西から）



SS02 半裁状況（南西から）



トレンチ4 土手層序確認状況（南西から）



SB04 土壁検出状況（南西から）



トレンチ3 SB04 層序確認状況（南東から）



SS05 検出状況（南東から）

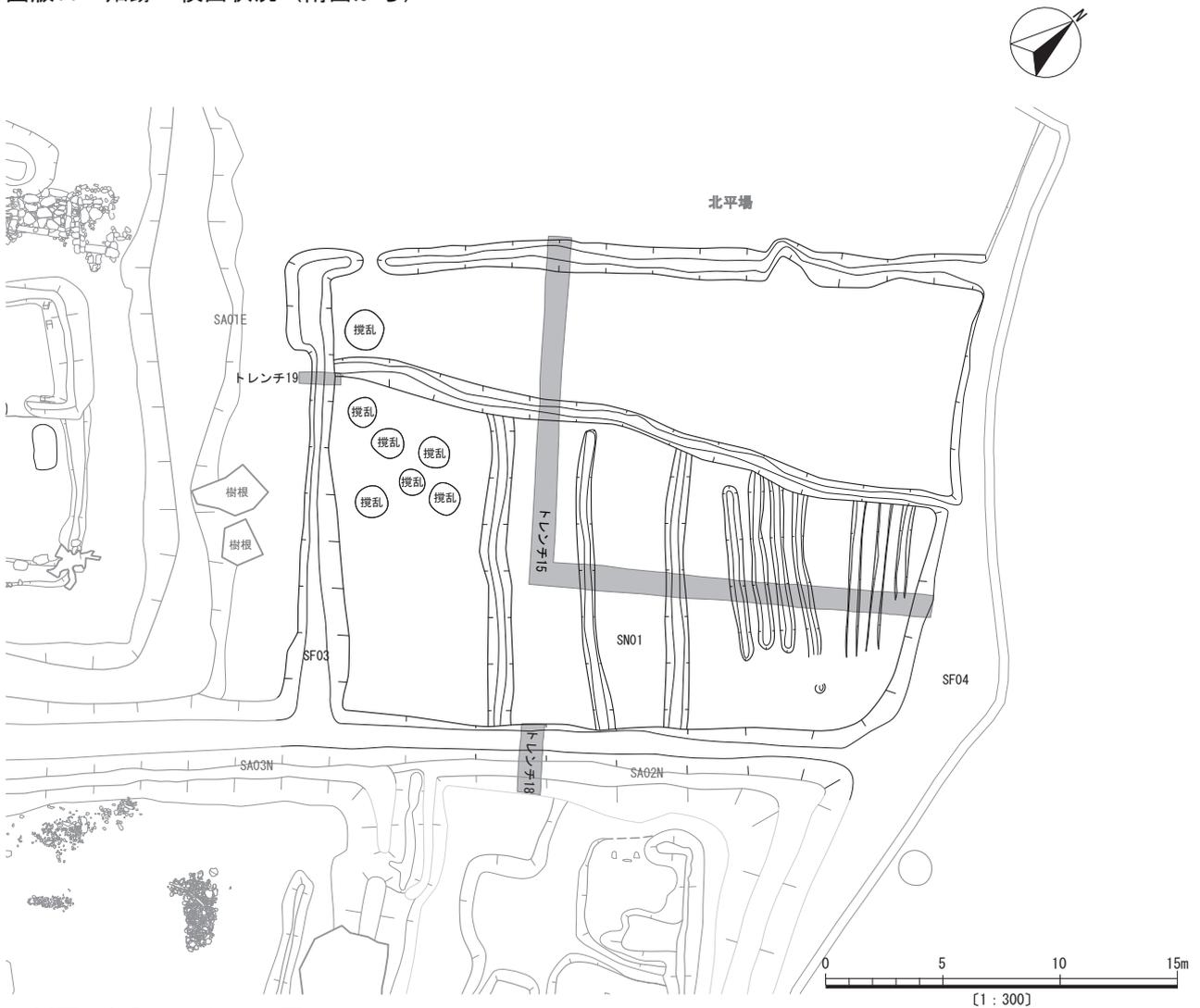


トレンチ8 SS05 層序確認状況（南西から）

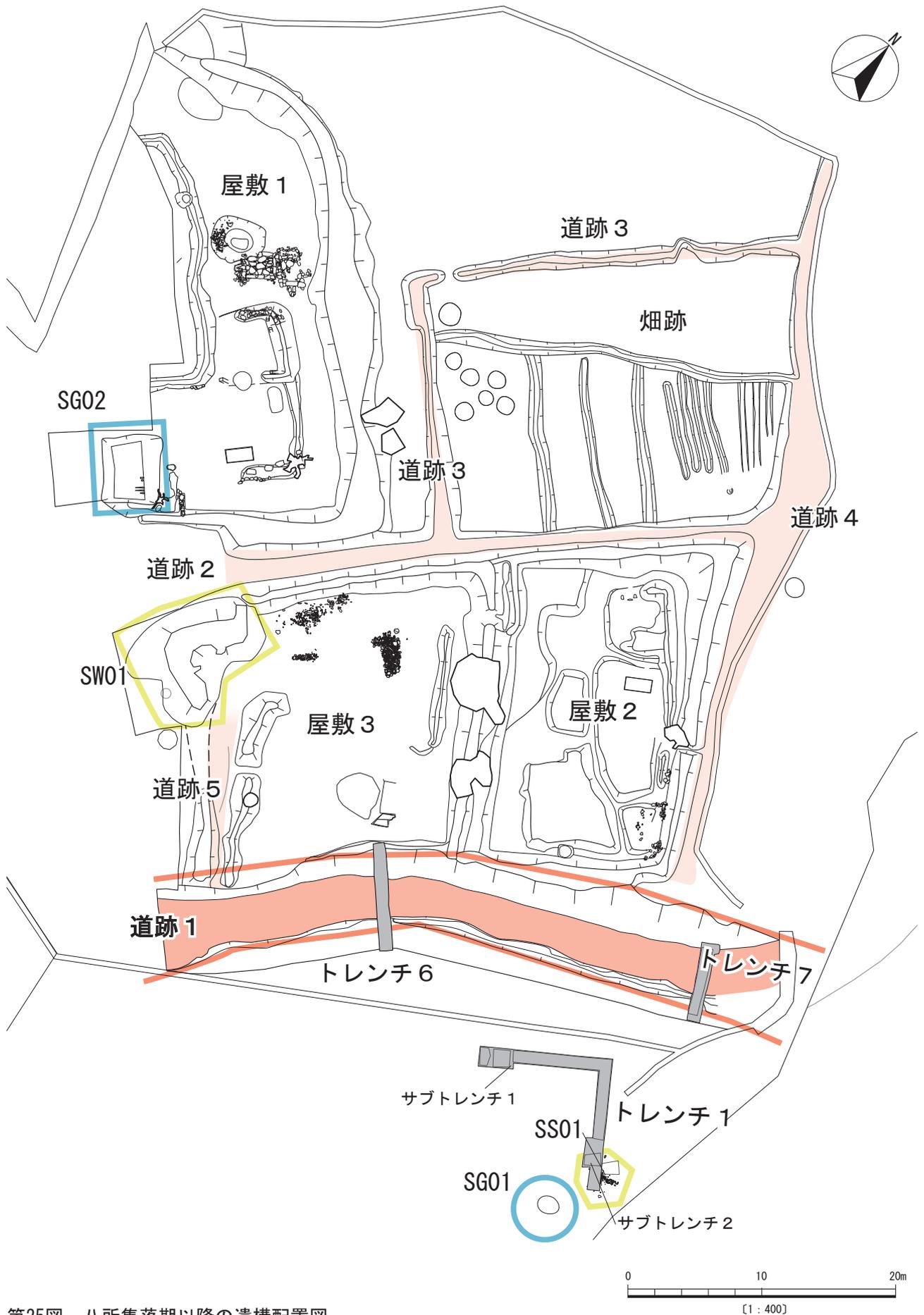
図版10 屋敷3 遺構・遺物検出状況



図版11 畑跡 検出状況（南西から）



第24図 畑跡 全体平面図



第25図 八所集落期以降の遺構配置図



SF01 検出状況（南西から）



SF01 礫検出状況（北西から）



トレンチ6 SF01 層序確認状況（東から）



トレンチ7 SF01 層序確認状況（東から）



トレンチ1サブトレ1 層序確認状況（南東から）



トレンチ1サブトレ2 層序確認状況（南西から）

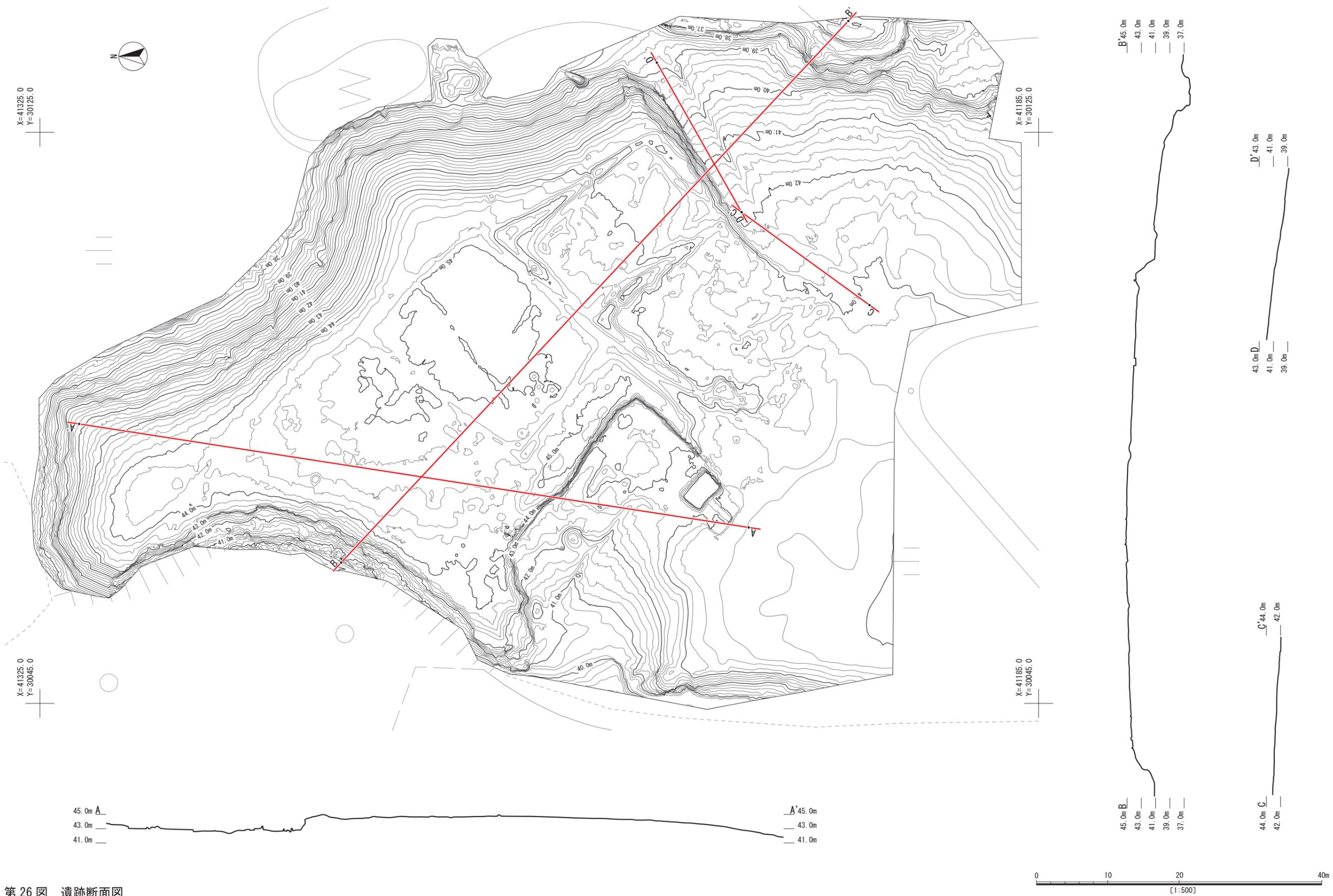


SS01 集石 検出状況（西から）



SG01 水場検出状況（北西から）

図版 12 八所集落期以降の遺構（道跡・集石・水場）



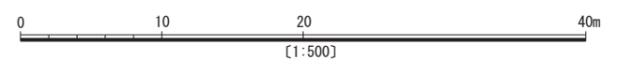
45.0m A  
43.0m  
41.0m

A' 45.0m  
43.0m  
41.0m

45.0m B  
43.0m  
41.0m  
39.0m  
37.0m

44.0m C  
42.0m  
C' 44.0m  
42.0m

43.0m D  
41.0m  
39.0m  
D' 43.0m  
41.0m  
39.0m



第 26 图 遗迹断面图

## 第4節 遺物

### 1. 出土遺物の概要

本節では今回の調査で出土した遺物について記載する。本遺跡で出土した遺物は総数 3,226 点であった。掲載の遺物については残存度合いと各遺構の特徴を反映させたものを抽出した。

また、遺物の集計方法については同一に見えるものであっても、接合不可のものは個別に集計した。そのため一覧表に記載された数量は必ずしも個体数を反映させたものではない。

本遺跡は第3節で述べた通り、道跡と土手によって区画された屋敷の集合体で、出土遺物はほとんど各屋敷跡で得られたものである。

第2表 調査区別人工遺物出土点数

調査区	遺物種類	中国産	本土産		沖縄産			ガラス製品	金属製品	銭貨	石製品	石材	プラスチック製品	瓦	円盤状製品	レンガ	貝製品	獣骨類	炭化物	総計
		陶磁器	磁器	陶器	施釉陶器	無釉陶器	陶質土器													
屋敷1	攪乱		7		8			1												16
	表採・不明		1		3	2		1	2											9
	表土	1	142	3	202	309	10	83	151		3	6	1	111		2	1	25		1,050
	SD01-1層		1		1	1														3
	Ⅲa②層		3	6	8	7	2	1	3	1			2	2						35
	Ⅲa層		4	1	4	5		3						62						79
	Ⅲb①層		2	2	5	4	1	1			1			1						17
	Ⅲb②層														1					1
	Ⅲb④層		1		4															5
	Ⅲ層		1	1	5	7			1					67						82
	土壁-1層				1															1
	土壁-2層					1														1
	土壁-3層		1			1								1						3
小計		1	163	13	241	337	13	90	157	1	4	6	3	244	1	2	1	25	0	1,302
屋敷2	表土		32	1	23	39		8	111	1			1	13				2		231
	Ⅲa層		6	1	11	1				1				10						30
	Ⅲ層				1				1					2						4
	土壁-1層		1																	1
	SK08・炭層																		6	6
小計		0	39	2	35	40	0	8	112	2	0	0	1	25	0	0	0	2	6	272
屋敷3	攪乱		12		7	1						4								24
	表採・不明		1			3														4
	表土・I層	2	166		170	337	3	56	150	5	15	11	5	38				2	6	966
	SW01-2層				1															1
	Ⅲa②層				2															2
	Ⅲa層		29	1	32	245		38	12	1	2		4						1	365
	Ⅲ層		2		1	20														23
	Ⅳa層		2		2	8			1											13
SK01-1層		1			7			4											12	
小計		2	213	1	215	621	3	94	167	6	17	15	9	38	0	0	0	2	7	1,410
屋敷外	攪乱		2												1					3
	表採・不明		4		3	8	1	2			1	1		2	1					23
	表土	2	47		44	29		11	12			1	3	20				2		171
	SF01-1層		12		8	4		2	1		1			1				1		30
	Ⅱ層		1		2	4		3						2						12
	Ⅲb層				2															2
	SK07-2層											1								1
小計		2	66	0	59	45	1	18	13	0	2	3	3	25	2	0	0	3	0	242
総計		5	481	16	550	1,043	17	210	449	9	23	24	16	332	3	2	1	32	13	3,226

本来、出土地点の大枠である屋敷毎に紹介を行うべきであるが、各屋敷跡で後世に受けた影響により出土傾向が必ずしも使用時の状況を反映しないと考えられたため、種別毎に記すこととした。

種類は中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器（施釉・無釉・陶質土器）、ガラス製品、金属製品、銭貨、石製品など、瓦、円盤状製品、レンガ、プラスチック製品、貝製品、獣骨類の計13種である。

出土量の多い遺物については分類基準を示し、詳細な観察事項や法量については観察表にて記載する。出土量が少ない遺物については文章中に観察事項、法量を記載する様式をとった。

以下に種別ごとの詳細を記載する。

### (1) 中国産陶磁器

中国産陶磁器の出土点数は屋敷1で1点、屋敷3で2点、屋敷外で2点、合計5点であった。(第3表参照) そのうちの3点を図化した。以下に個々の詳細を記述する。

第3表 中国産陶磁器出土点数

器種	調査区				総計
	屋敷1	屋敷2	屋敷3	屋敷外	
中国産陶磁器	碗			1	1
	小碗				1
	急須	1			1
	袋物			1	1
合計	1	0	2	2	5

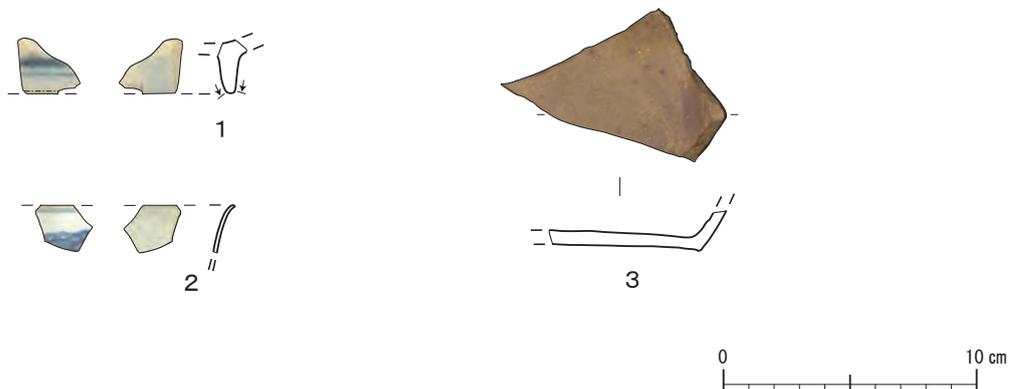
#### 中国産磁器 (第27図1・2)

1は、青花碗の高台である。小破片のため法量は計測できなかった。外面は呉須による圏線が、高台際に1条、高台中程に1条施される。内外面とも透明釉を施し、畳付けは釉剥ぎされる。高台先端は尖る。色調は内外面とも明緑灰色(10GY7/1)。素地は灰白色(7.5Y8/1)。屋敷3表土で出土。

2は、青花小碗の口縁部である。小破片のため法量は計測できなかった。口縁は外反し、先端は丸味を帯びる。内外面とも透明釉を施し、外面に呉須による絵付けが施される。口縁に圏線が2条、胴部に2本組で描かれた半円文(渦文?)と呉須で塗られた文様(波、花?)が見られるが、構成は不明である。色調は内外面とも明緑灰色(7.5GY8/1)。素地は灰白色(N8/)。屋敷外表土より出土。

#### 中国産陶器 (第27図3)

3は、急須の底部である。破片のため法量は計測できなかった。底面は中心に向かって反り、胴部との際は丸みを帯びる。内外面にナデ調整痕が明瞭に残る。底部断面に積み痕が確認できる。器厚は0.5~0.6cmを測り、薄く硬質である。外面は艶があり、手触りは滑らかである。外底面には、溶着物が見られる。胎土に白色細粒子、赤色粒子が混入し、内底面は混入物の露出が確認できる。色調は外面、暗赤褐色(2.5YR3/4)、内面は、灰褐色(5YR4/2)である。素地は内面と同色の灰褐色(5YR4/2)で、屋敷1表土より出土。



第27図 中国産陶磁器：碗(1)、小碗(2)、急須(3)

## (2) 本土産陶磁器

今回出土した本土産磁器は481点で、生活雑器類としての出土量は沖縄産陶器類に次ぐ量であった。小片で器種が不明なものも集計した。屋敷別では、屋敷1で163点、屋敷2で39点、屋敷3で213点、屋敷外で66点となり、屋敷3 > 1 > 2の順に出土量が少なくなる。屋敷3、1で出土量は異なるものの碗、小碗を筆頭に湯呑、杯などその他の器種でも相対的な数量にまとまる傾向が見られ、器種の構成と数量に類似性が見られる。磁器については分類基準を示し、個々の法量、出土地点などを第5表に記す。

本土産陶器は16点出土した。磁器と比べると少量であり、多くが屋敷1での出土であった。陶器については個々の観察事項を列記する。

### 本土産磁器（第28図4～第32図75）

本土産磁器の器種は碗、小碗、湯呑、杯、小杯、小碗又は小杯、皿、鉢、小鉢、皿又は鉢、蓋、急須、瓶、袋物、タイル、器種不明の16種で多岐にわたる。また本項冒頭にも述べた通り本土産磁器は一定の出土数が得られたため、出土の傾向を分析するために絵付け及び施釉の方法による分類を行った。以下に、分類基準を示し、個々の詳細は第5表に記す。

A類 手描き・色絵・盛絵

B類 型紙刷り

C類 銅板転写

D類 吹付

E類 ゴム判

F類 クロム青磁

G類 国民食器・緑釉

H類 白磁（型押し）磁器

### 本土産陶器（第33図76～80）

本土産陶器と推定される遺物は16点出土した。器種は碗、蓋、袋物、インク瓶、器種名不明の5種である。出土遺物の内、4点を図示し、観察事項を述べる。

76は瓶で一部欠損しているが、全形がうかがえる残存状態である。口縁部には注ぎ口を有す。頸部から肩部に向かって大きく張り出し直線的に底部に至る形状である。外面には鉄釉と推察される釉薬が施され赤褐色を呈す。内面には緑釉が施される。底部はやや上げ底となり釉薬溜まりが見られるが、切り離し時の削り出しで接地部分は露胎している。胴部下に『★ MARUZEN ★ TOKYO』『M』の刻印が見られることからインク瓶と考えられる。

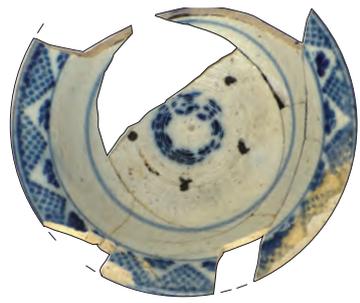
77は急須の蓋である。径は6.9 cm、厚さは3 mm程度で華奢な造りである。外面と内面に釉薬が施されるが、胴部と接する箇所は露胎する。全体に茶褐色を呈すが被熱の影響が考えられ、使用時の色彩は不明である。

78はつまみが外反し、体部は丸みを帯びた蓋である。内外面ともに灰釉が施され、細かな貫入が多数見られる。畳付と口縁部は露胎する。胴部には5本の圏線が線刻されているため、釉薬の濃淡が見られる。

79は蓋で、80とセットと考えられる。つまみを中心として幾何学的な文様が線刻され、胴部と接

第4表 本土産陶磁器分類別出土点数

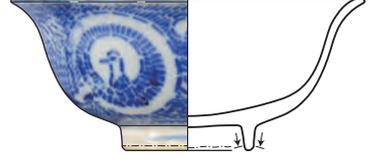
種類	器種	調査区・部位 分類	屋敷1							屋敷2					屋敷3					屋敷外					合計											
			口 底	口 縁	胴	底	摘	不	一	小	口 底	口 縁	胴	底	小	口 底	口 縁	胴	底	注	小	口 底	口 縁	胴		底	小									
磁器	碗	A類							0					1																					2	3
		B類	3	11	2	1			17		6	5		11	9	14	5	1			29		11	3	1			15							72	
		C類	1						1					0	9	1					10													0	11	
		D類							0		1			1	4	2	3	1			10	1	1					2						2	13	
		G類	4	8	3				15					0		3	3	1			7	1						1						1	23	
		H類							0		1			1		6	3				9													0	10	
		類不明	1						1					0							0													0	1	
	小碗	A類	1	6	2	3			12	3	4	1		8	1	4	5				10	2					1	3						3	33	
		C類	11	4	2				17	1	1			2	4	11	2	2			19	1					3	4						4	42	
		D類	3	1					4		1			1							0		1					1						1	6	
		E類	4	3	2	1			10		1	1		2	3	1	1				5	1	2					3						3	20	
		F類	2	8	2	1			13	4				4		5	7	2			14		1	1	1			2						2	33	
		G類	2	2					4		1			1	5	13			1		19	2	4					6						6	30	
		H類	2	2		1			5	1				1							0			1				1						1	7	
		類不明							0					0					4		4						1	1						1	5	
	湯呑	A類	2						2					0	1						1		1					1						1	4	
		D類	1						1					0							0							0						0	1	
		F類							0					0	1						1							0						0	1	
		類不明		2					2					0							0							0						0	2	
	杯	A類		1					1					0	1						1		1					1						1	3	
		B類				1			1					0							0							0						0	1	
		C類							0					0	4						4							0						0	4	
		D類	2			1			3					0							0	1						1						1	4	
		F類		3					3					0		1					1							0						0	4	
		H類	2	5					7		1			1							0							0						0	8	
		類不明							0					0		1	1	1			3							0						0	3	
	小杯	A類	1						1					0	2						2	1					1	2						2	5	
		D類	1						1					0	1						1	1						1						1	3	
		E類	1						1					0	1						1							0						0	2	
		H類							0					0							0	1	2					3						3	3	
		類不明							0					0				1			1							0						0	1	
	小碗又は小杯	類不明							0					0		8	12				20							0						0	20	
	皿	A類							0					0	2	2			2		6			1				1						1	7	
		B類	3						3					0	1						1			1				1						1	5	
		C類	3	3		1			7	2				2	10	1	1	2			14		1			1	2	2						2	25	
		D類	3	2		1			6					0	1	2			2		5							0						0	11	
		H類			1				1					0							0							0						0	1	
		類不明							0					0				1	1		2							0						0	2	
	皿又は鉢	B類							0					0		1					1							0						0	1	
	鉢	A類			1				1		1			1			1				1													0	3	
		B類							0			1	1	2			4				4		1					1						1	7	
		E類							0					0							0		1					1						1	1	
	小鉢	H類							0					0							0							2						2	2	
		類不明							0					0							0				2			2						2	2	
	急須	A類	1		1				2					0							0		1	1				2						2	4	
		類不明		1					1					0							1	1						0						0	2	
	瓶	類なし				1			1					0							0							0						0	1	
	蓋	A類	1	1			1		3					0	3						3							0						0	6	
	袋物	A類							0					0			1				1			3				3						3	4	
		H類				1			1					0							0							0						0	1	
		類不明				1			1					0			1				1				1			1						1	3	
	不明	A類			1				1					0							0							0						0	1	
H類			2					2					0							0							0						0	2		
類不明			1	5			4	10					0			1				1							0						0	11		
タイル	類不明						1	1				0							0							0						0	1			
本土産磁器合計			55	66	22	14	1	4	1	163	11	19	8	1	39	63	76	53	20	1	213	13	29	13	11	66	481									
陶器	碗				1				1					0							0							0						0	1	
	蓋		1	1					2					0	1						1							0						0	3	
	インク瓶		1						1					0							0							0						0	1	
	袋物			1	7	1			9					0							0							0						0	9	
	不明								0				2	2							0							0						0	2	
本土産陶器合計			2	2	8	1	0	0	0	13	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16				



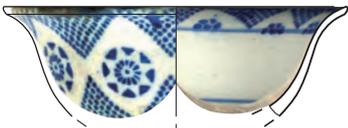
4



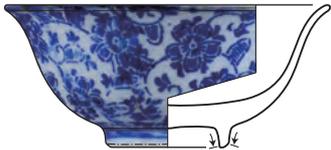
6



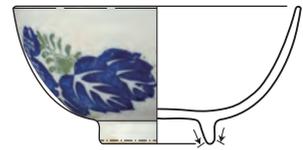
7



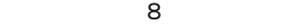
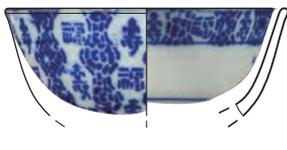
5



9



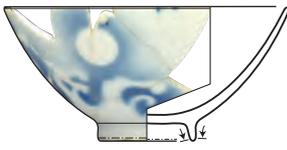
10



8



11



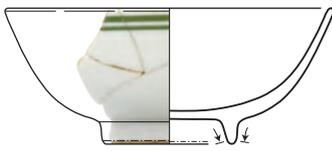
12



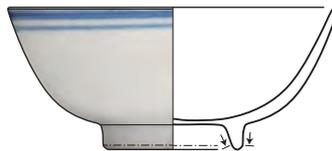
13



16



14



15



14



15



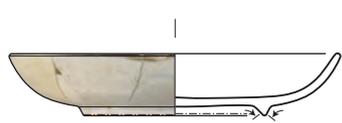
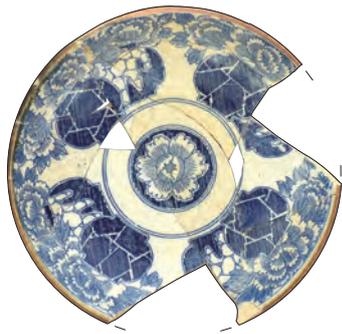
第28図 本土産磁器：碗（4～17）



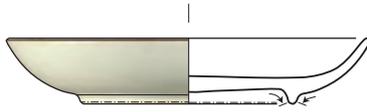
第 29 図 本土産磁器：小碗（18～40）



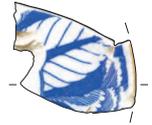
第30图 本土産磁器：小碗（41～46）、湯呑（47・48）、杯（49）、小杯（50～58）



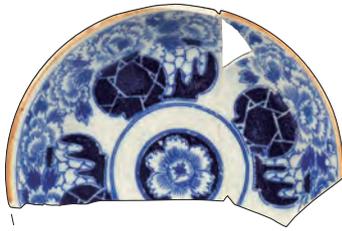
59



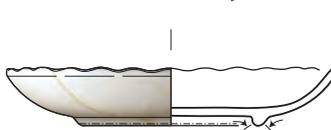
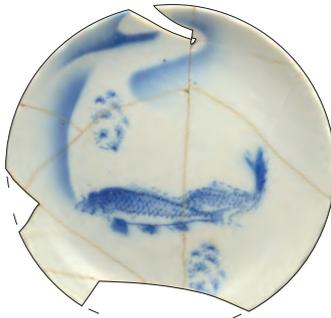
61



63



60



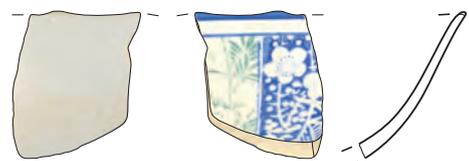
62



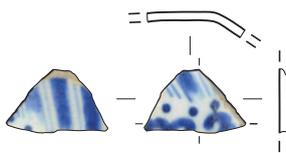
64



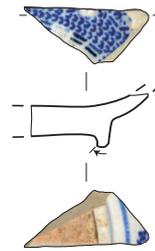
65



66



67



68



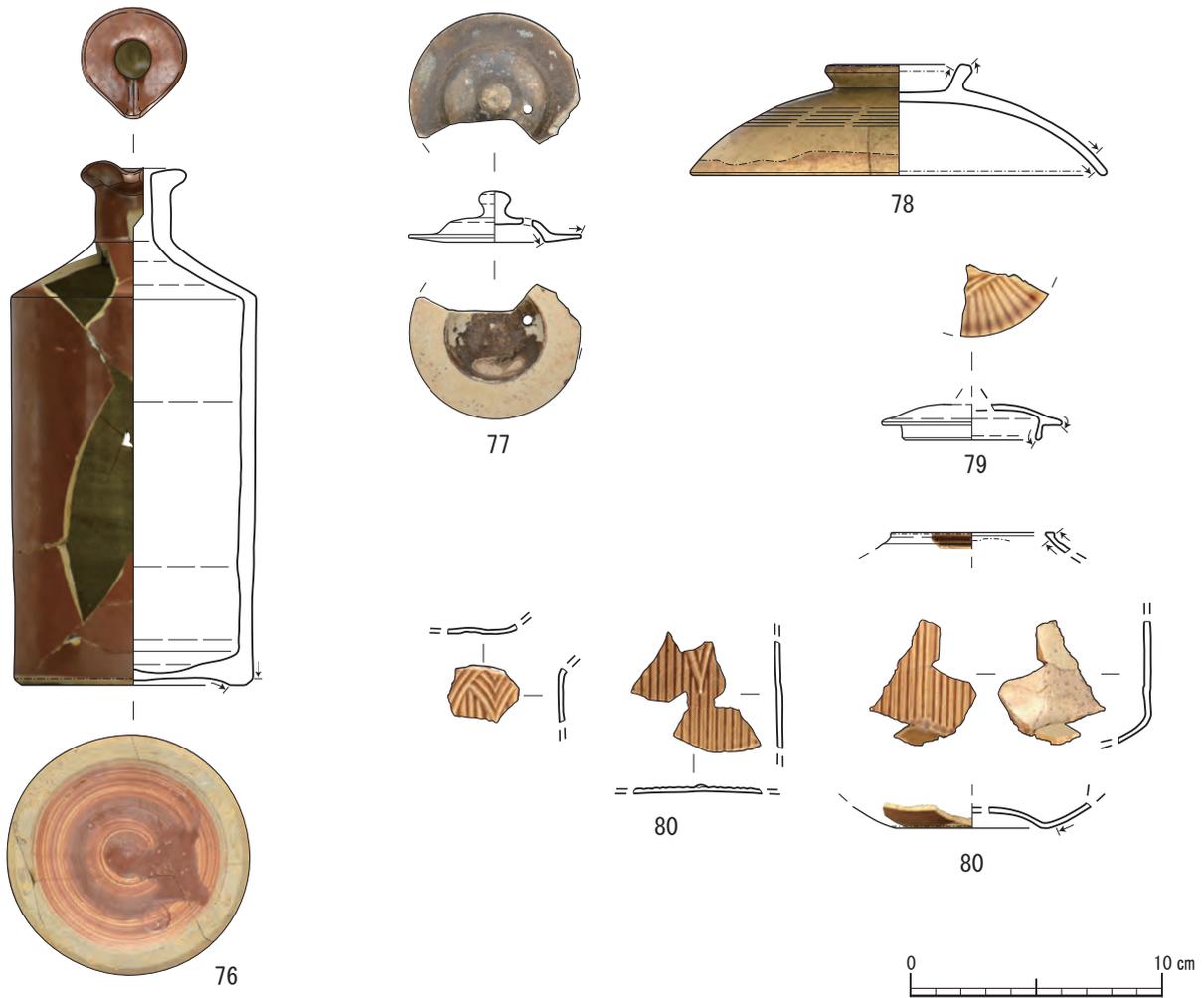
第31図 本土産磁器：皿（59～64）、鉢（65～68）



第 32 図 本土産磁器：蓋（69～72）、急須（73・74）、瓶（75）

する部分は透明釉、それ以外の内外面に飴色釉が施される。

80 は破片資料で全形が判然としない。2～3 mm 程度の器厚で非常に薄手である。口縁部は内傾し胴部は直線的な形状と考えられる。底部は上げ底となり、外底部は釉薬がほぼ掛からない。胴部は垂直方向に稜線を有すことから多角形状になると推察される。外面は飴色釉、内面は透明釉が施される。



第33図 本土産陶器：瓶（76）、蓋（77～79）、袋物（80）

第5表 本土産磁器観察一覧①

挿図番号	掲載番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類	文様	観察	出土地点
28	4	碗	口～ 底部	13.7 6.2 5.2	B類	外-点描地・菱形窓・菊花・圏線 内-圏線・点描三角・梅花帯 内底-松竹梅	口縁は外反する。内外面及び見込部分に型紙による文様が施される。見込み部分には五足のハマ痕が残る。畳付けにはコバルトが付着する。	屋敷3 表土
	5	碗	口縁部	13.6 — —	B類	外-点描地・菱形窓・菊花 内-点描三角・梅花帯 内底-圏線	口縁は外反する。内外面及び見込部分に型紙による文様が施される。	屋敷2 表土
	6	碗	口～ 底部	14.6 6.0 5.3	B類	外-点描地・鶴丸・松竹・圏線 内-口唇：点描に松竹帯 内底-圏線・松竹梅	口縁は外反する。内外面及び見込部分に型紙による文様が施される。内底部の2ヶ所に目痕残る。	屋敷1 点上No156、 126、127 表土
	7	碗	口～ 底部	14.0 6.1 5.2	B類	外-網代地・鶴丸・松竹・圏線 内-口唇：網代地・福寿帯 内底-圏線・松竹梅	口縁は外反する。内外面に型紙による文様が施される。見込み部分には五足のハマ痕が残る。	屋敷1 表土
	8	碗	口縁部	11.2 — —	B類	外-福寿 内-口唇：福寿帯	口縁は僅かに外反する。内外面に型紙による文様が施される。その他の同類品に比べやや小ぶりである。	屋敷1 表土
	9	碗	口～ 底部	12.9 5.7 4.8	B類	外-唐草地・五弁花・圏線 内-口唇：五弁花帯 内底-五弁花	口縁部から底部が残存。口縁は外反する。内外面ともにコバルト釉によって施文されるが釉薬がにじむ。	屋敷1 表土

第5表 本土産磁器観察一覧②

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類	文様	観察	出土地点
28	10	碗	口～ 底部	11.4 5.5 4.6	C類	外-植物文 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。底部から口縁部に向かって緩やかに湾曲する。	屋敷1 点上No27 表土
	11	碗	口～ 底部	11.2 5.3 4.0	C類	外-緑色、桜と菱形文 内-なし	口縁部から底部が残存し、口縁部は直口。外面に銅板転写による施文が見られるが、釉薬が一部擦れる。	屋敷外 屋敷3 点上No251 III a層
	12	碗	口～ 底部	11.3 5.4 4.0	D類	外-波、月 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。波と月を吹き絵技法で施文。	屋敷3
	13	碗	口縁部	11.2 — —	D類	外-波 内-なし	口縁部から胴部が残存。口縁部は直口と推定。波を吹き絵技法で施文。	屋敷2 表土
	14	碗	口～ 底部	13.0 5.5 5.3	G類	外-二重圏線 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。高台内側に「岐1121」の統制番号が刻印される。	屋敷外 表土
	15	碗	口～ 底部	13.1 5.7 5.6	A類	外-二重圏線 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。高台内側に「岐218〇」の統制番号が押印される。	屋敷外 屋敷3 表土
	16	碗	口～ 底部	11.4 5.5 4.1	G類	外-なし 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。内外面ともに緑釉が施釉されるが高台畳付は無釉。	屋敷1 点上No74 表土
	17	碗	口縁部	11.3 — —	G類	外-なし 内-なし	口縁部から胴部が残存。口縁部は受け口状で外反する。内外面ともに緑釉が施釉される。	屋敷3 表土
29	18	小碗	口～ 底部	9.1 4.0 3.2	A類	外-口縁・高台：二重圏線 内-口縁・見込：圏線	口縁部から底部が残存。腰部が丸みを帯びて張り出し、口縁部に向かって直口する。	屋敷1 表土
	19	小碗	口縁部	8.4 — —	A類	外-格子状文 内-なし	口縁部から胴部にかけて残存。口縁部に向かって器厚が薄くなる。	屋敷1 表土
	20	小碗	口～ 底部	8.3 4.8 3.2	A類	外-圏線、赤、青色花芯文 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。口縁部に向かって器厚が薄くなる。	屋敷2 表土
	21	小碗	口～ 底部	8.0 4.8 3.0	A類	外-圏線、赤色花芯文 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。口縁部に向かって器厚が薄くなる。文様は印刷が擦れて色彩がない箇所多い。	屋敷3 屋敷外 表土
	22	小碗	口～ 底部	8.4 4.9 3.1	A類	外-圏線、花芯文 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。口縁部に向かって器厚が薄くなる。文様は印刷が擦れて色がない。	屋敷外 攪乱
	23	小碗	口～ 底部	8.4 4.6 3.4	C類	外-花文 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。花部は桃色、葉部は緑色で前者を転写後に後者を写す。一部色延びで花部が汚れる。	屋敷1 点上No32、 38、109 表土
	24	小碗	口～ 底部	8.0 4.6 3.8	C類	外-花文 内-なし	完形。口唇部の断面形状は丸みを帯びる。口縁部は直口。花部は桃色、葉部は緑色で後者を転写後に前者を写す。縦書で『素山口代』の文字有。	屋敷1 点上No517 土壁3層
	25	小碗	口～ 底部	8.0 4.7 3.6	C類	外-竹、鶺鴒 内-なし	ほぼ完形。口縁部から胴部にかけて器厚が厚くなる。口縁部は直口。素地は粗めで、文様はコバルト、鉄による転写。	屋敷1 表土
	26	小碗	口～ 底部	8.2 4.8 4.1	C類	外-竹 内-なし	口縁部から底部が残存。口縁部から胴部に向かって器厚が厚くなる。欠損して全容が不明だが竹の文様が一部確認できるほか『鳳山』の文字と意匠不明の文様あり。	屋敷1 表土
	27	小碗	口～ 底部	8.3 4.6 3.1	E類	外-圏線、植物吉祥文 内-なし	ほぼ完形。口縁部から胴部にかけて器厚が厚くなる。口縁部は直口。素地は緻密で、圏線の間に濃淡のある笹葉文。	屋敷1 表土

第5表 本土産磁器観察一覧③

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類	文様	観察	出土地点
29	28	小碗	口～ 底部	8.3 4.8 3.0	E類	外- 圏線、花葉 内- なし	口縁部から胴部が残存。口縁部は直口。口縁部から胴部にかけて器厚が厚くなる。外面には圏線の間に抽象化された葉と花文。	屋敷3 表土
	29	小碗	底部	— — 3.1	E類	外- 圏線、花葉 内- なし	胴部から底部が残存。欠損して全容不明だが、外面には圏線の間に抽象化された葉文様。	屋敷1 表土
	30	小碗	口～ 底部	8.2 4.6 3.1	E類	外- 圏線、梅花 内- なし	胴部から底部が残存。口縁部から胴部にかけて器厚が厚くなる。高台と胴部下に圏線が廻り、口縁部から胴部に梅花と梅木文様。	屋敷外 SF01 1層
	31	小碗	口～ 底部	7.9 4.5 3.1	E類	外- 圏線、植物吉祥文 内- なし	完形品。口縁部から底部にかけてほぼ同じ器厚を維持し、口唇部のみ薄い。口縁部は直口。2条の圏線で文様帯を作りその間に植物吉祥文を絵付けする。	屋敷3 表土
	32	小碗	口～ 底部	8.2 4.7 3.0	E類	外- 圏線、植物吉祥文 内- なし	口縁部から底部が残存。口縁部は直口。口縁部から胴部に向かって器厚が厚くなる。流水文と菊花文が絵付けされる。	屋敷3 表土
	33	小碗	口縁部	8.2 — —	E類	外- 波紋、菱形状文 内- なし	口縁部から胴部にかけてが残存。口縁部は直口。口唇部は薄手となる。素地は緻密で光沢がある。波紋を鋸歯状に配して菱形文と組み合わせる。	屋敷1 表土
	34	小碗	口～ 底部	8.0 4.7 3.2	E類	外- 圏線、秋草文、文字 内- なし	口縁部から底部にかけて残存する。口縁部は直口。腰部は厚手となる。『福』字と菊花文が絵付けされる。	屋敷1 点上No143 表土
	35	小杯	口縁部	8.4 — —	E類	外- 染身体文 内- なし	口縁部から胴部にかけて残存する。口縁部は外反する。素地は緻密で抽象化された文字、いわゆる染身体文が絵付けされる。	屋敷1 点上No476 III b ④
	36	小碗	ほぼ 完形	8.3 4.8 3.1	F類	外- 圏線、瓢箪、連続円文 内- なし	完形品。口縁部は直口。口縁部と胴部下に圏線が廻り、その間に瓢箪と連続円形文が絵付けされる。高台内には透明釉は施される。	屋敷2 表土
	37	小碗	口～ 底部	8.0 4.6 3.6	D類	外- 圏線、青色絵付け 内- あり	口縁部から底部が残存する。口縁部は直口。口唇部は丸みを帯びサビ釉がかかる。	屋敷1 表土
	38	小碗	口～ 底部	8.0 4.7 3.6	D類	外- 圏線、青色絵付け 内- あり	口縁部から底部が残存する。口縁部は直口。胴上半部から口縁部にかけて青色釉で半円の絵付けが施される。口唇部にはサビ釉が見られる。	屋敷1 表土
	39	小碗	口～ 底部	8.6 4.0 3.4	F類	外- 飛び匏 内- なし	口縁部から底部が残存する。口縁部は直口。底部から腰部にかけて張り出しが強く薄い稜線がでる。外面に飛び匏あり。	屋敷1
40	小碗	口縁部	8.9 — —	F類	外- 飛び匏 内- なし	口縁部から胴部が残存する。口縁部は直口。底部から腰部にかけて張り出しが強く薄い稜線がでる。外面に飛び匏あり。	屋敷1 表土	
30	41	小碗	口～ 底部	8.4 4.5 3.1	G類	外- 圏線 内- なし	口縁部から底部にかけて残存する。口縁部は直口。ほぼ同じ器厚で口唇部は丸みを帯びる。外底部に統制番号「岐 464」印字。	屋敷3 表土
	42	小碗	口～ 底部	8.2 4.6 3.2	G類	外- 圏線 内- なし	口縁部から底部にかけて残存する。口縁部は直口。口縁部から底部までほぼ同じ器厚である、口唇部は丸みを帯びる。統制番号は見られない。	屋敷1 表土
	43	小碗	口～ 底部	8.0 4.4 3.1	G類	外- 圏線 内- なし	完形品。口縁部から底部までほぼ同じ器厚である、口唇部は丸みを帯びる。口縁部は直口。統制番号は見られない。高台、畳付付近に僅かに砂が付着する。	屋敷3 表土
	44	小碗	口縁部	8.1 — —	G類	外- 圏線 内- なし	口縁部から胴部が残存する。口縁部は直口。腰部がやや器厚薄くなる。口唇部は丸みを帯びる。	屋敷2 表土

第5表 本土産磁器観察一覧④

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類	文様	観察	出土地点
30	45	小碗	口～ 底部	8.2 4.6 3.7	H類	外-桜花 内-なし	完形品。口縁部から胴部にかけて器厚が厚くなる。口縁部は直口。外面胴部から底部に桜花が型によって描かれており高台が花芯を模している。	屋敷1 表土
	46	小碗	口～ 底部	8.1 4.6 3.7	H類	外-桜花 内-なし	完形品。口縁部から胴部にかけて器厚が厚くなる。口縁部は直口。外面胴部から底部に桜花が型によって描かれており高台が花芯を模している。掲載番号45と同規格品である。	屋敷2 表土
	47	湯呑	口～ 底部	6.5 7.3 4.8	F類	外-色絵草花文 内-なし	一部欠損しているが口縁部から底部が残存。八角筒形で外面が緑釉、内面は透明釉で施釉される。	屋敷3 点上No325 III a層
	48	湯呑	口～ 底部	6.5 6.5 3.2	D類	外-吹き絵による花文 内-なし	口縁部から底部が残存する。素地はきめ細かく内外面ともに器面に光沢がある。緑釉による吹き絵で花を浮文する。	屋敷1 表土
	49	杯	底部	— — —	B類	外-あり 内底-結び雁金	底部のみの破片で全形は不明である。高台も欠損している。内底部に型紙摺り絵で結び雁金が描かれる。	屋敷1 表土
	50	小杯	口～ 底部	6.9 2.8 2.6	A類	外-なし 内-あり 内底-桐	口縁部から底部が残存する。薄手で素地は緻密である。内底部に桐文が色絵付けで描かれていたと推察される。	屋敷1 表土
	51	小杯	口～ 底部	7.5 3.0 3.0	A類	外-なし 内-赤、青色絵付で日章旗、星条旗	口縁部から底部が残存する。内面に日米国旗の絵付けあり。	屋敷3 表土
	52	小杯	底部	— — 2.0～2.4	A類	外-なし 内底-色絵桜花	底部のみ残存する。高台は方形で内面は渦巻き状の線彫りが見られる。腰部は4面で面取りされる。内底部には色絵で桜花が絵付けされているが剥離し、色彩がない。	屋敷外 表土
	53	小杯	口～ 底部	5.6 3.0 2.2	A類	外-敷島の歌歌詞、桜花 内底-日章旗、草木	口縁部から底部にかけて残存する。口縁部は外反する。型整形で腰部から胴部に桜花が陽刻される。外面は胎釉、内面は透明釉が施釉。	屋敷3 表土
	54	小杯	口～ 底部	5.6 2.8 1.6～1.9	A類	外-桜、星の陽刻 内底-旭日旗、草花	口縁部から底部にかけて残存する。口縁は外反し、高台は「忠」の字を模す。外面は星と桜が陽刻され、胎釉で施釉される。内面は透明釉である。	屋敷外 表土
	55	小杯	口～ 底部	5.6 2.9 1.6～2.6	D類	外-吹き絵口唇部 内-なし	口縁部から底部にかけて残存する。口縁部は外反する。高台は桜高台となる。	屋敷1 表土
	56	小杯	口～ 底部	5.6 2.8 2.1～2.4	D類	外-緑色と青色の斑文 内-緑色と青色の斑文	口縁部から底部まで残存する。口縁部は内湾し、断面が口縁部から胴部にかけて受け口状になる。高台は桜花を模す。	屋敷3 屋敷2 表土
	57	小杯	口～ 底部	5.0 2.8 2.0	E類	外-松葉 内-なし	口縁部から底部が残存する。口縁部は弱く外反する。	屋敷1 表土
58	小杯	口～ 底部	5.0 2.9 2.0	E類	外-松葉 内-なし	完形品。口縁部は弱く外反する。掲載番号57と同規格品。	屋敷3 点上No326 III a層	
31	59	皿	口～ 底部	13.2 2.5 7.3	C類	外-なし 内-圏線、牡丹、壺	口縁部は直口する。口縁部から底部までほぼ同じ器厚である。内外面ともに廃棄された後に被熱したためか、素地部分にくすみが目立つ。	屋敷3 表土
	60	皿	口～ 底部	13.4 2.6 7.6	C類	外-なし 内-圏線、牡丹、壺	口縁部は直口する。口縁部から底部までほぼ同じ器厚である。掲載番号59と同規格品。	屋敷1 点上No494 III a層
	61	皿	口～ 底部	14.4 2.7 8.6	C類	外-なし 内-緑色釉南瓜、昆虫	口縁部は直口する。口縁部から底部に向かって器厚が厚くなる。	屋敷2 表土

第5表 本土産磁器観察一覧⑤

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類	文様	観察	出土地点
31	62	皿	口～ 底部	13.0 2.3 7.4	D類	外-高台に圏線 内-草木文、鯉 外底-統制番号あり「岐1156」	口縁部は直口し、輪花風に口唇部が波状となる。口縁部から底部までほぼ同じ器厚である。高台中央部に統制番号「岐1156」あり。吹き絵と銅版転写併用の絵付けである。	屋敷1 点上No1、 67、168 表土
	63	皿	口～ 底部	12.8 2.8 7.4	C類	外-なし 内-草花文	口縁部は直口する。透明釉厚くかかり光沢がある。	屋敷2 表土
	64	皿	口～ 底部	10.6 1.9 6.2	B類	外-なし 内-点描地、桜花	口縁部は直口する。口縁部から底部に向かって器厚が厚くなる。	屋敷1 点上No549 表土
	65	鉢	口縁部	— — —	B類	外-なし 内-あり	口縁部断面形は「L」字状となる。口縁部から口唇部にコバルト釉が施釉される。残存状況が悪く文様は判然としない。	屋敷3 屋敷外 表土
	66	鉢	口縁部	— — —	E類	外-なし 内-圏線、草木文、牡丹	口縁部はやや外反する。稜花。内面は圏線で区画された文様帯の中に青色・緑色釉で植物文が施される。ゴム判施文後、青色釉を重ねて絵付する。	屋敷外 1層
	67	鉢	胴部	— — —	A類	外-あり 内-あり	胴部のみ残存する。縦方向に稜線が入り、屈曲する。器厚は一定。内外面ともに呉須による絵付けが施される。	屋敷1 表土
	68	鉢	底部	— — —	B類	外-圏線、花文 内-あり	底部のみ残存する。蛇の目凹形高台。	屋敷2 表土
32	69	蓋	口～ 底部	12.8 4.1 摘径：5.6	A類	外-圏線、赤釉で草花 内-なし 摘み内-「福」字と二重枠	ほぼ完形品。碗蓋。摘み部の畳付けは削りがなされて、角が落ちる。僅かに砂が付着する。圏線の間に草花文が施される。	屋敷3 1層
	70	蓋	口～ 底部	13.4 3.5 摘径：5.5	A類	外-圏線、赤・緑色釉で草花 内-なし 摘み内-文字と二重枠	ほぼ完形品。碗蓋。摘み部の畳付けは釉剥ぎされ露胎する。圏線の間に草花文が施されるが色落ちして色彩はほとんどない。	屋敷3 畑跡(SN01) 表土
	71	蓋	口縁部	口径：3.7 鏑径：7.8 — —	A類	外-青色釉で草木文 内-なし	急須蓋。蓋裏の身受け部分は釉剥ぎされて露胎する。	屋敷1 表土
	72	蓋	摘み	— — 摘径：1.4	A類	外-青色釉で草木文 内-なし	急須蓋。摘み部分は摩擦によって透明釉が薄くなる。	屋敷1 表土
	73	急須	口～ 底部	8.3 9.5 7.0	A類	外-青色釉で圏線、鳳凰、山水文 内-なし	造りは薄手で軽い。上底になり底部は胴部に比べ器厚薄い。外面には山水、雲文が絵付けされる。	屋敷1 表土
	74	急須	口縁部	7.6 — —	A類	外-青色釉で圏線、山水文 内-なし	蓋受け部分が下がる。肩部が張り出す。	屋敷外 表土
	75	瓶	底部	— — 5.4	—	外底-エンボス：統制番号あり	統制番号「岐806」、(下石陶磁工業組合)下石町加藤専助	屋敷1 点上No19、 108 表土

### (3) 沖縄産陶器

沖縄産陶器の出土は、1,610点である。屋敷別では、屋敷1が591点、屋敷2が75点、屋敷3が839点、屋敷外は105点である。沖縄産陶器全体の出土量を屋敷別に見ると屋敷3 > 1 > 2となる。これは、他の遺物と同様の傾向であった。

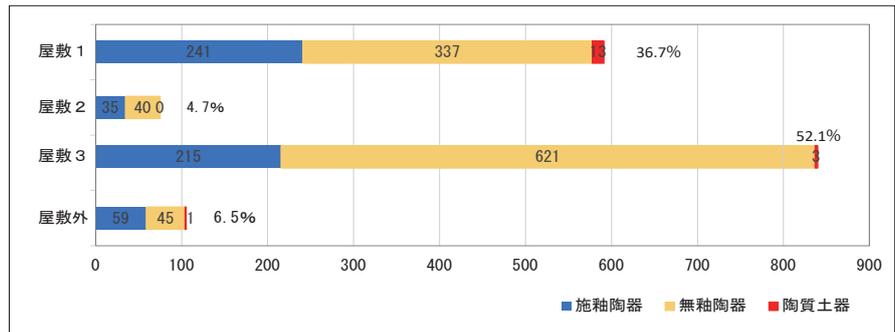
種類別で見ると、施釉陶器が550点、無釉陶器が1,043点、陶質土器が17点の出土である。(第6表参照)

沖縄産陶器の出土数は屋敷3で最も多く、その中でも無釉陶器は621点で、屋敷3から出土した沖縄産陶器の74%を占める。無釉陶器は器種的に大型のものが多く胴部片が半数以上を占めている。(第6・9表参照)

以下、沖縄産陶器を施釉陶器、無釉陶器、陶質土器と種類別に略記する。

第6表 沖縄産陶器の出土一覧

	屋敷1	屋敷2	屋敷3	屋敷外	合計
施釉陶器	241	35	215	59	550
無釉陶器	337	40	621	45	1,043
陶質土器	13	0	3	1	17
合計	591 (36.7%)	75 (4.7%)	839 (52.1%)	105 (6.5%)	1,610



#### 施釉陶器 (第34図81～第42図152)

先に述べたように施釉陶器は550点の出土があった。屋敷1では241点、屋敷2で35点、屋敷3で215点、屋敷外59点である。出土数が多い順で屋敷別に見ると、屋敷1 > 3 > 2となる。器種は碗、小碗、湯呑、皿、瓶、壺、鉢、鍋、香炉、急須、酒注など多種にわたっている。出土の多い順に、碗255点、壺51点、皿類33点、鉢類24点と続く。(第7表)

出土量の多い器種を中心に白化粧の有無、施釉方法と加飾の種類などで、分類を行った。

碗は、IV類(白化粧+透明釉)が突出して数量を得られている。破片の場合、文様から外れた箇所の可能性も大きいと考えられるが、文様の有無は現状で判断し分類した。

IV類は白化粧の上から透明釉を施す一群で、文様の細分を外した場合255点中222点(約87%)が白化粧とその上から透明釉を施している。

また次に出土の多い壺はII類又はIII類に分類され、外面の色調が飴釉若しくは鉄釉で、内面は灰釉や透明釉を施す。いわゆる掛け分けである。

碗・皿類以外は、基本分類と口縁部(玉縁、逆「L」字など)、胴部(丸型、筒型など)の形状などでも分類している。

湯呑が2点出土している。102は、胴部に面取りを施している。103は、胴部に掻き落として魚文と不明図柄を配置した古典焼と見られる(参考文献「琉球古典焼 壺屋焼」参照)。

出土数が少なく器種の分類で留めたものは、鍋(第38図117)、鍋の蓋(第38図116)、火鉢(第42図147)、火炉、尿瓶(第42図151)、人形の脚(第42図152)などである。

以下に、分類基準を示し個々の法量、出土地点などは第8表に略記する。

## 基本分類

- I類：白化粧無し、透明釉を施す。  
II類：白化粧無しで、飴釉・鉄釉を施す。  
III類：外面に飴釉・鉄釉。内面に透明釉を施す。  
    白化粧無し（イ）  
    白化粧有り（ロ）  
IV類：白化粧を施し、透明釉を掛ける。  
    無文（a）  
    有文（b）加飾（①線彫 ②二彩 ③青色釉 ④イッチン・花文）

## 施釉方法 + 文様で分類（碗・小碗・皿）

- I類：浸し掛け（灰釉碗・透明釉）  
    無文（a）  
    有文（b）  
II類：浸し掛け。内外面に濃飴・鉄釉  
    畳付けは白化粧後に釉剥ぎするものもある。  
III類：外面に鉄釉か濃い飴釉。内面に透明釉。  
    白化粧無し（イ）  
    白化粧有り（ロ） 畳付けは白化粧後に釉剥ぎするものあり。  
IV類：器全体に白化粧を施し、透明釉を掛け見込み蛇の目釉剥ぎ。  
    外底も畳付けを釉剥ぎ。  
    無文（a）  
    有文（b）加飾（①線彫 ②二彩のみ ③青色釉 ④イッチン・花文）

## 基本分類 + 口縁形状（大鉢）

- 内湾口縁
- 逆「L」字口縁

## 基本文類 + 口縁形状（壺）

- 口唇部の断面形が丸い。灰釉。
- 口唇が平らで釉剥ぎ、白化粧を残すもの。飴釉か鉄釉。  
    漆黒：黒釉 緑・黄色：飴釉 がさがさ：鉄釉

## 基本文類 + 胴部形状（酒器・急須）

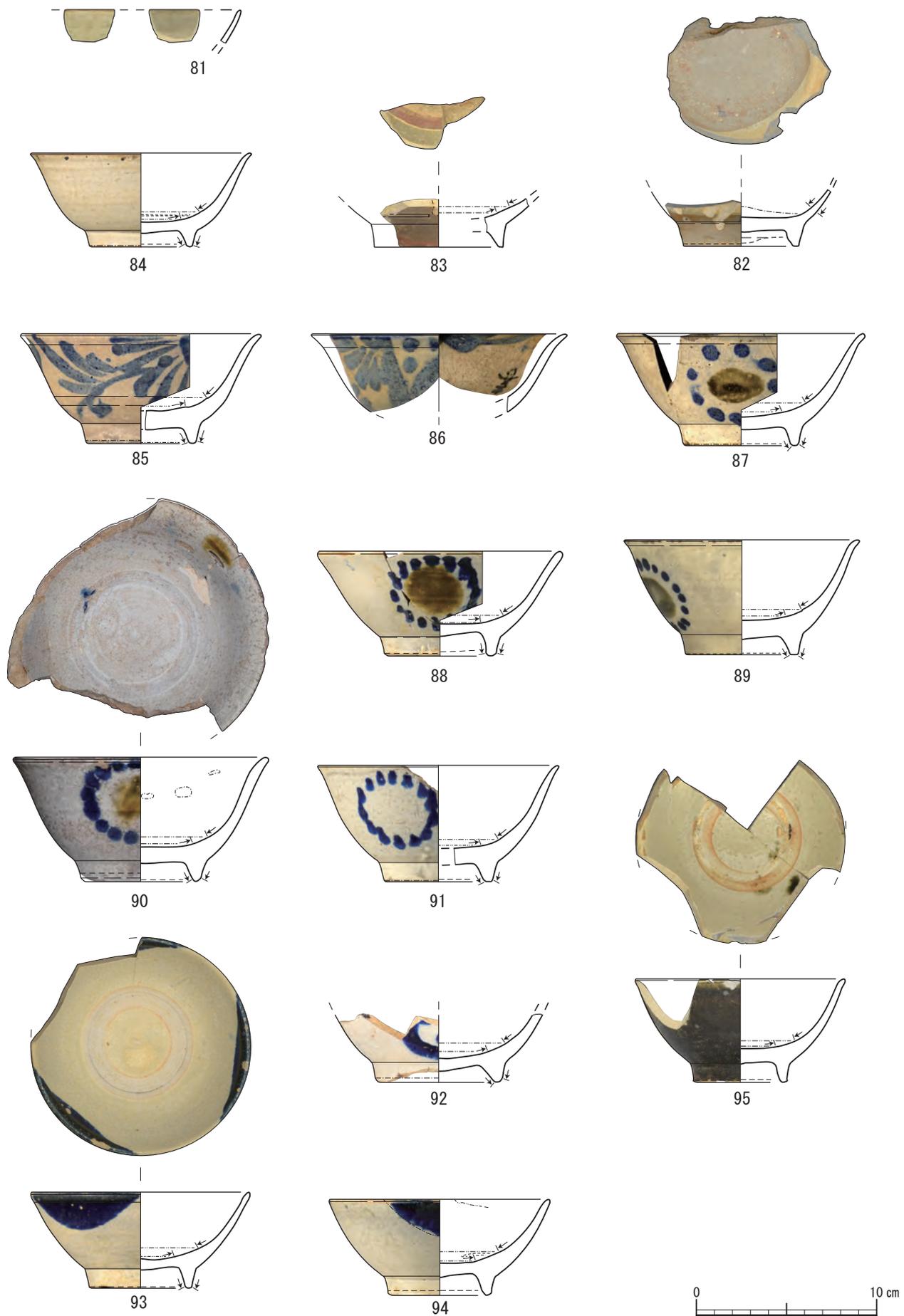
- 丸形
- 算玉形

## 基本文類 + 胴部形状（火入）

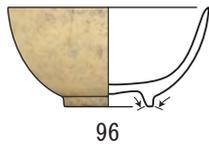
- 筒形
- 湾曲形

第7表 沖繩産施釉陶器出土点数

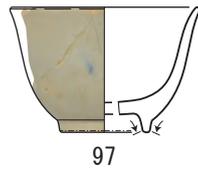
器種・分類	調査区・部位	屋敷1							屋敷2					屋敷3					屋敷外					合計	総計		
		口 底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	把 手	注 口	不 明	小 計	口 底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	注 口	小 計	口 底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	把 手	小 計	口 底 部	口 縁 部			胴 部	底 部
碗	I類-a				1			1						0						0						0	1
	I類		2	5	3			10						0	10	3	4			17	1	2			3	30	
	Ⅲ類-口							0						0	1	1				2						0	2
	Ⅳ類-a		5	5		2		12				1		1						0						0	13
	Ⅳ類-b-③		2	11	5	2		20	2		1			3	1	2	7	1		11	1			1	2	2	36
	Ⅳ類-b-④		14	10	6	5		35	6		1	1		8	4	6	2	1		13		6	1	1	8	64	
Ⅳ類			29	20	5		54		2	3	2		7	11	20	6			37	3	5	3	11	109	255		
小碗	I類-a		4				4						0						0	1			1	1	3	7	
	I類-b		2	1			3						0		1				1	1					1	5	
	Ⅲ類-口		2	2			4						0						0						0	4	
	Ⅳ類						0						0						0			1			1	1	
湯呑	I類-a						0						0						0	1					1	1	
	Ⅲ類-b-イ						0						0	1					1						0	1	
皿・大皿	Ⅱ類						0						0	1					1						0	1	
	Ⅲ類-b-口						0						0	2	5	2	1		10						0	10	
	Ⅳ類-b-③		4	5		1	10						0	1	4	4			9	1	2				3	22	
	Ⅱ類						0						0		1	2	1		4						0	4	
鉢・大鉢	Ⅲ類-口						0						3		1	2			3					1	1	7	
	Ⅲ類-口-内湾口縁						0						0	1					1						0	1	
	Ⅲ類-口-逆「L」字口縁	1	2				3		3				3						2		1	2		3	11		
	Ⅲ類				1		1						0						0						0	1	
鍋			1	4	1		6								7	2			9		2	1		3	18		
壺	Ⅱ類-口唇平		1				1						0						0						0	1	
	Ⅱ類		2		2	1		5					0	2	2				1	5		3	5	1	9	19	
	Ⅱ類?Ⅲ類?						0						0	1		24	6		31						0	31	
瓶		2	1	1	1		5						0	1					1					0	6		
香炉	Ⅳ類-a			2	9		11						0						0						0	11	
	Ⅳ類-b-③					1	1						0						0						0	1	
	Ⅳ類				1		1						0						0						0	1	
火鉢			1			1							0						0						0	1	
火炉			1	3			4						0		1				1						0	5	
火入	I類						0						0	1					1						0	1	
	Ⅲ類-口						0				1		1						0						0	1	
	Ⅳ類-a					1	1						0						0						0	1	
	Ⅳ類-a-筒形				3		3						0							0					0	3	
	Ⅳ類-b-②						0						0	1					1						0	1	
	Ⅳ類-b-③						0	1					1		2				2						0	3	
	Ⅳ類-b-筒形			2	1		3						0						0						0	3	
火取又は 火入	Ⅱ類						0						0			4	1		5						0	5	
蓋	Ⅳ類						0		1	1			2						0						0	2	
急須	Ⅱ類		4	3	1		8				1		1	5	2	5	1		13						0	22	
	I類-b						1	1					0						0						0	1	
	I類						3	3					0						0						0	3	
	Ⅱ類-b-①-算玉形	1					1	1					0						0						0	1	
	Ⅱ類						0						0		2		1	3		0					0	3	
	Ⅲ類	1	1				2						0						0						0	2	
	Ⅳ類-a						0						0			1			1						0	1	
	Ⅳ類-b						0						0			1			1						0	1	
酒注	Ⅳ類-b-①						0						0		2				2						0	2	
	Ⅳ類						0			1	1	1	3						0						0	3	
	Ⅱ類-b-①-算玉形				1		1	1					0						0						0	1	
	Ⅱ類						0						0		3	3	1		7						0	7	
急須 or 酒注	Ⅳ類-b-①-丸形				1		1	1					0						0						0	1	
	Ⅳ類-b-②-丸形						0						0	1					1						0	1	
	Ⅳ類						0						0		1				1						0	1	
	Ⅳ類-b						0						0			1			1			1			1	2	
尿瓶	Ⅳ類-b-①				5		5			2			2		1			1							0	8	
	Ⅳ類-b-③						0						0						0			1			1	1	
	Ⅳ類						0						0			6			6			1	2	3	9		
袋物	Ⅳ類		1	3	2	1		7					0						0						0	7	
	I類-a						0						0	3					3						0	3	
	I類-b				1		1						0						0						0	1	
	I類				1		1						0						0						0	1	
	Ⅱ類		1	2			3						0						0			1			1	4	
	Ⅲ類				1		1						0						0						0	1	
	Ⅳ類-b				1		1						0						0			2			2	3	
人形	類不明			1			1					0		1	4	1		6			1			1	8		
不明	Ⅳ類						1	1					0						0						0	1	
	類不明						0						0						1			1			1	2	
合計		41	84	77	33	1	4	1241	9	6	11	8	1	35	27	53	98	35	2215	5	19	26	9	59	550		



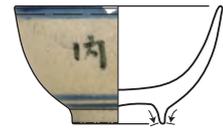
第34図 沖縄産施釉陶器：碗（81～95）



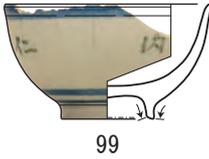
96



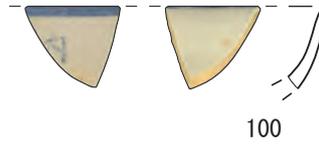
97



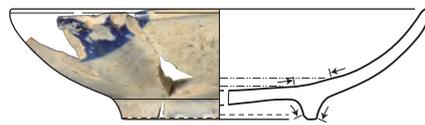
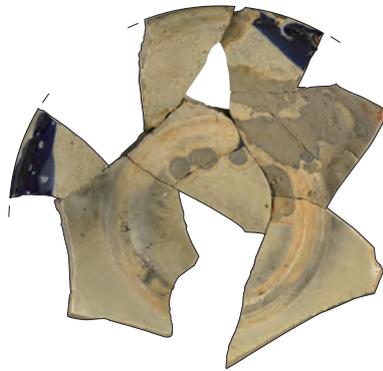
98



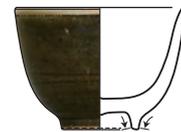
99



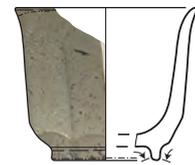
100



104



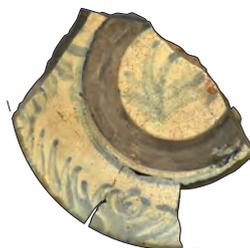
101



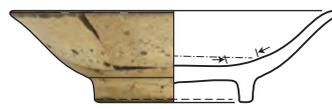
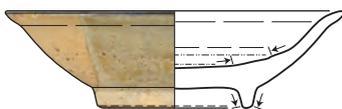
102



105



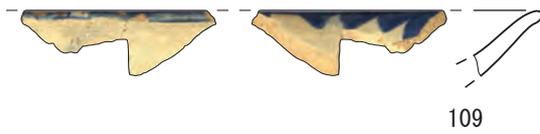
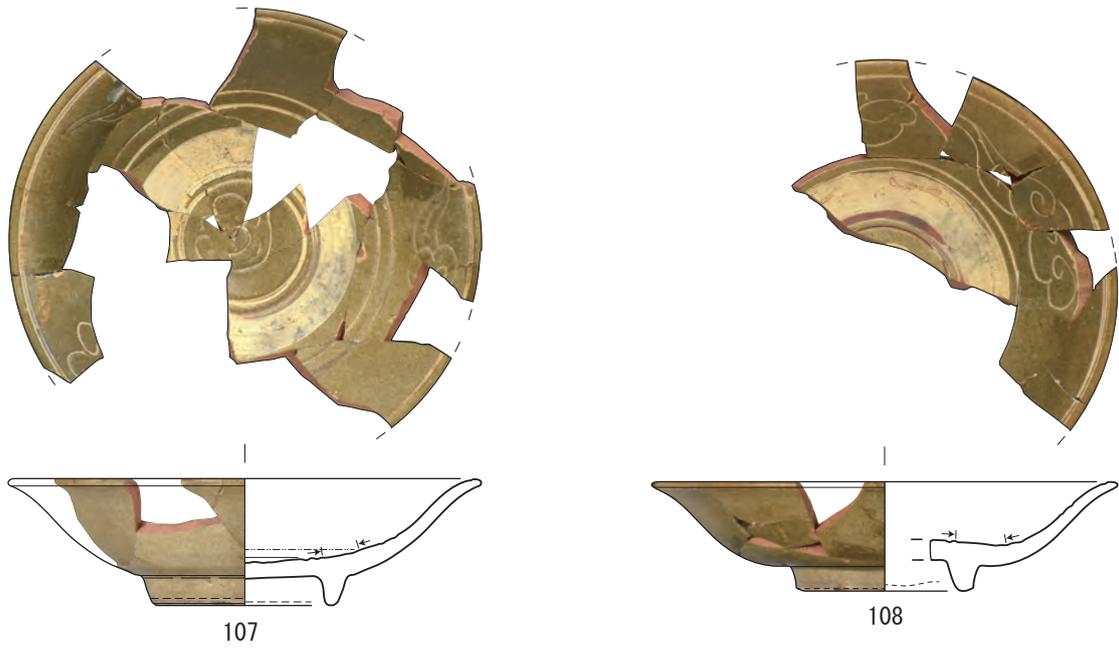
106



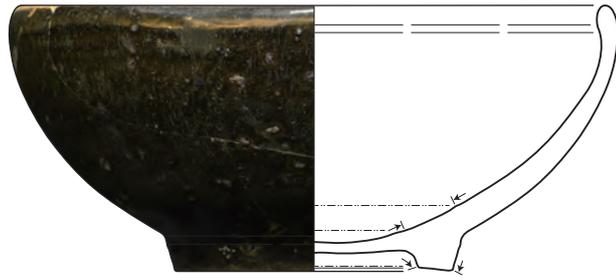
103



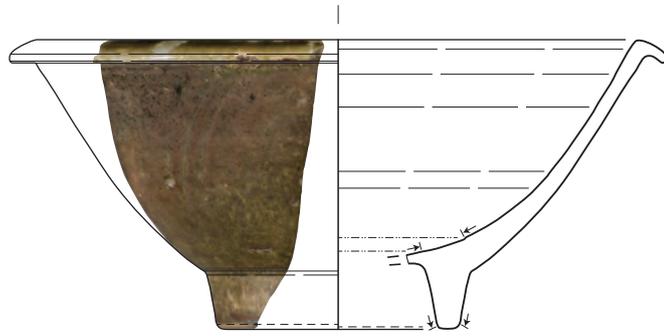
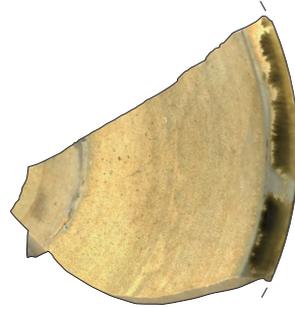
第 35 図 沖縄産施釉陶器：小碗（96～101）、湯呑（102・103）、皿（104～106）



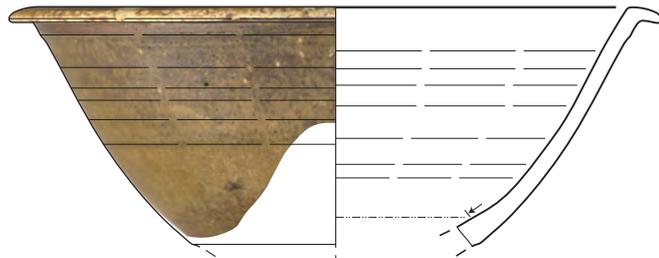
第 36 図 沖縄産施釉陶器：皿（107・108）、大皿（109・110）



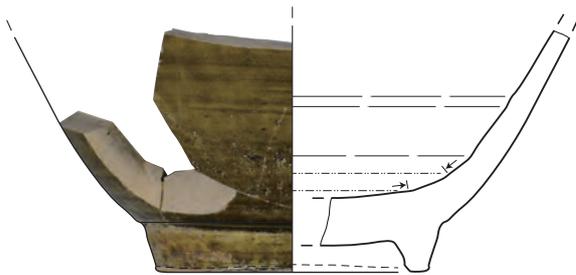
111



112



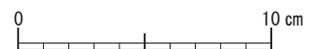
113



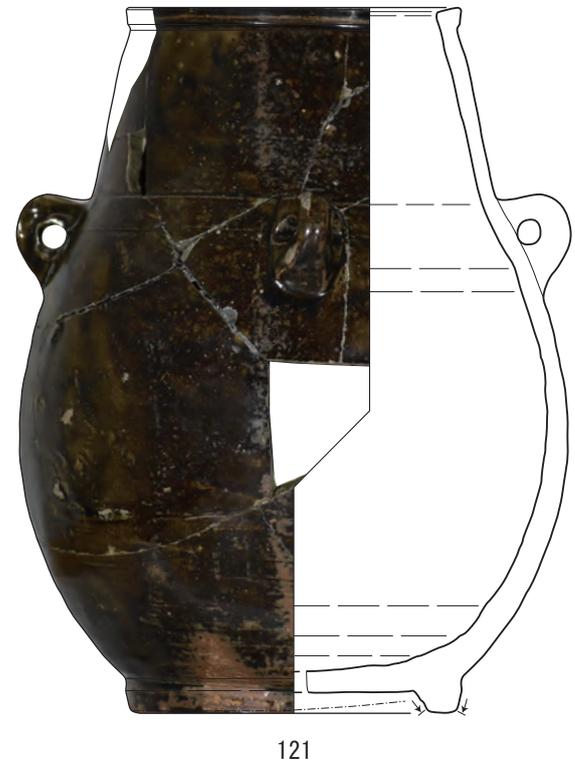
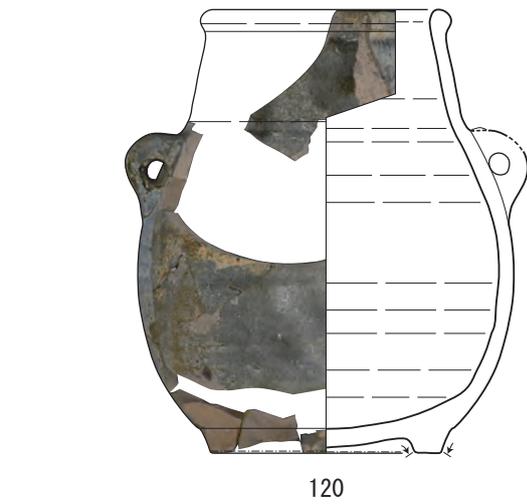
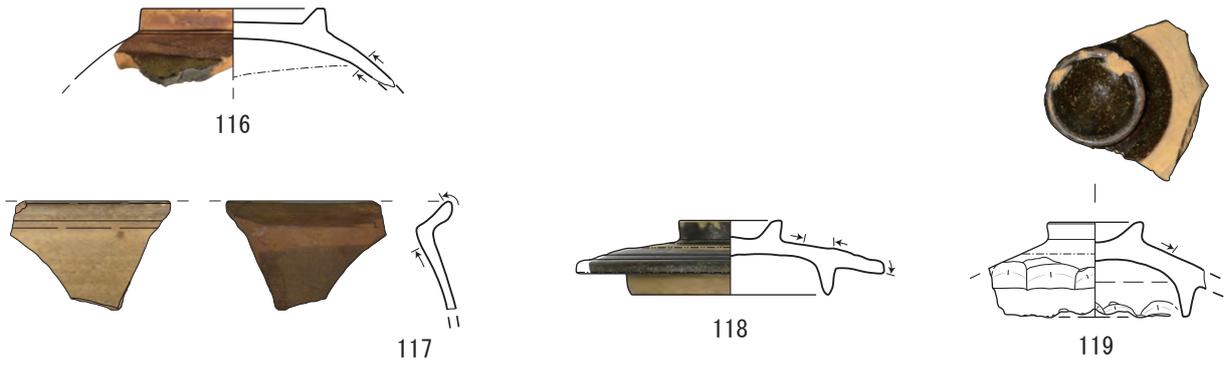
114



115



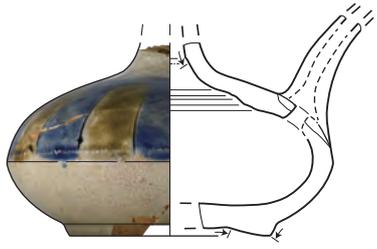
第 37 図 沖縄産施釉陶器：大鉢（111～115）



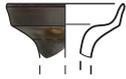
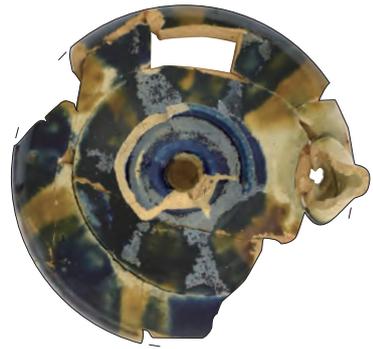
第 38 図 沖縄産施釉陶器：鍋（117）、蓋（116・118・119）、壺（120～122）



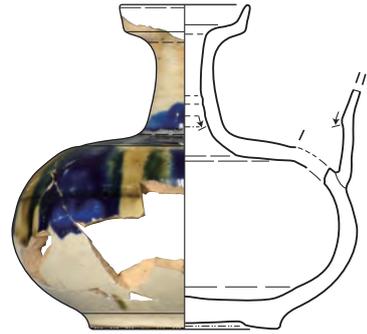
第 39 図 沖縄産施釉陶器：蓋（123・125）、壺（124・126）、瓶（127～130）



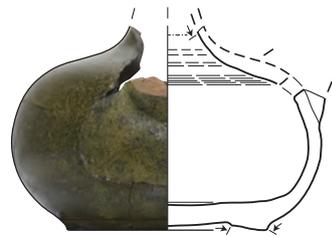
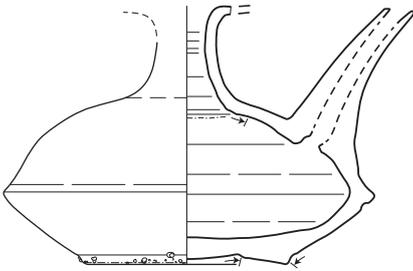
131



134



132



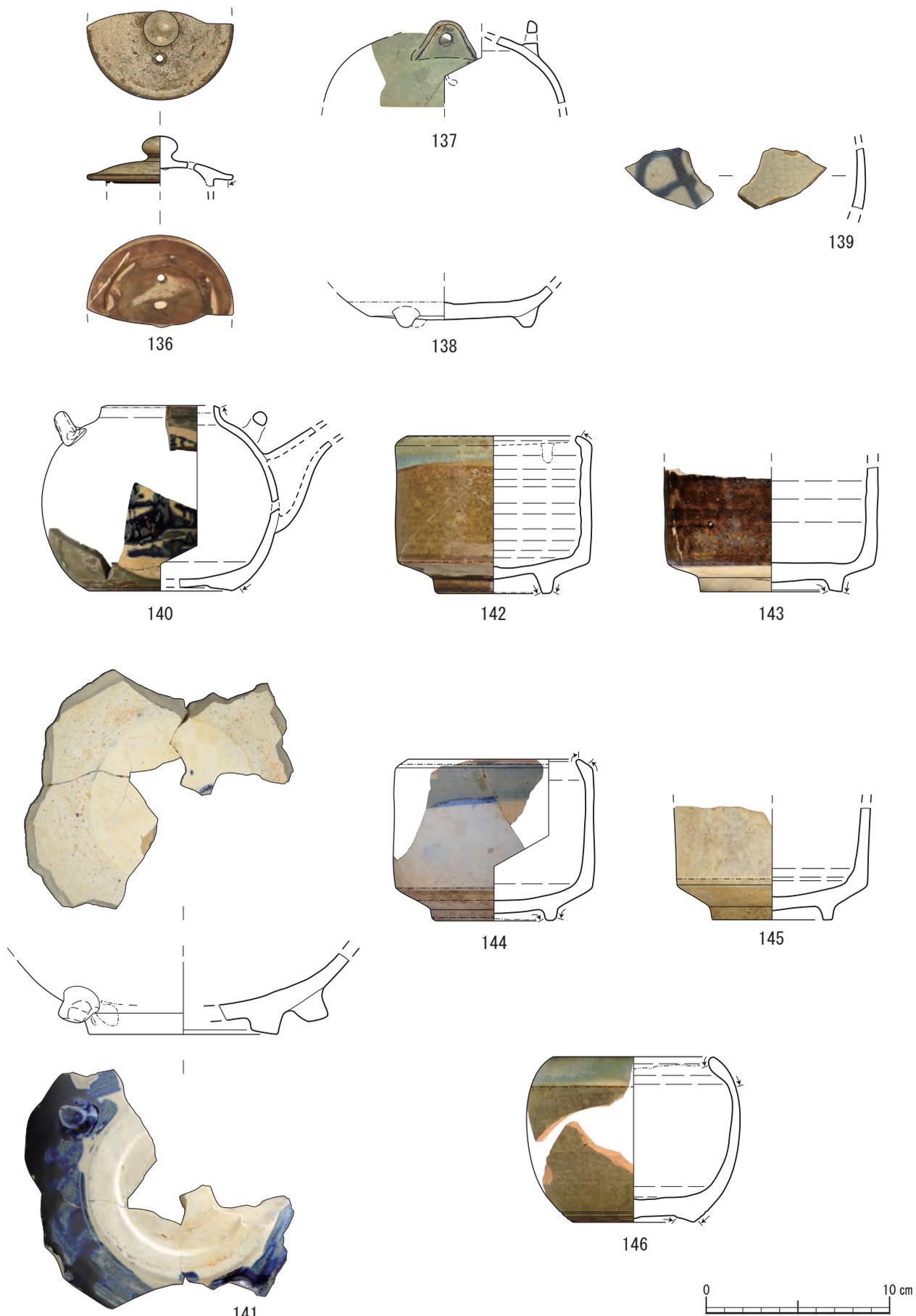
135



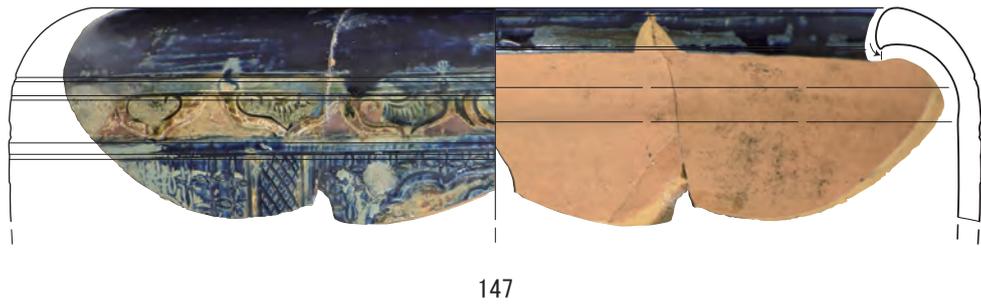
133



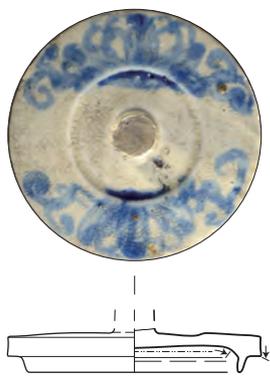
第 40 図 沖縄産施釉陶器：酒注（131～135）



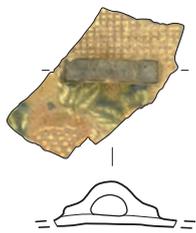
第41図 沖縄産施釉陶器：蓋（136）、急須（137～140）、香炉（141）、火入（142～146）



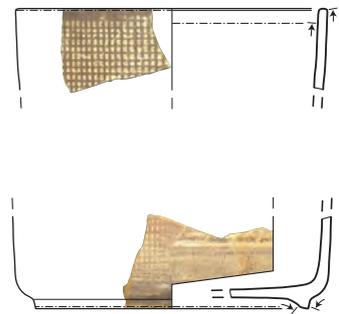
147



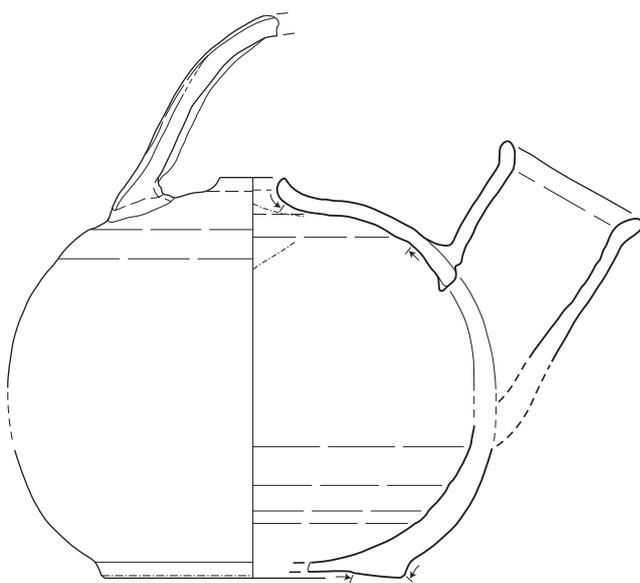
148



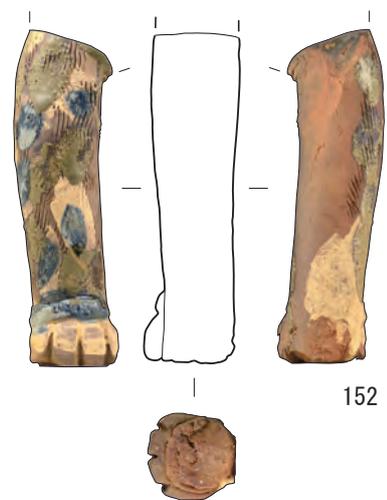
149



150



151



152



第 42 図 沖縄産施釉陶器：火鉢（147）、蓋（148・149）、袋物（150）、尿瓶（151）、人形（152）

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧①

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類/ 小分類	文様	観察事項	出土地点
34	81	碗	口縁部	— — —	I類	外-なし 内-なし	口縁部の破片資料。口縁は直口。残存部の内外面に灰釉を施釉。内外面に成形痕が明瞭に残る。貫入僅かに確認できる。素地-灰白色(7.5Y7/2)。	屋敷3 表土
	82	碗	底部	— — 6.4	I類 a	外- 内- —	底部資料。内外面に灰釉をフィーガキで施釉。腰部以下は露胎。内底面に重ね焼き痕の砂目と畳付けにも砂目が見られる。高台近くには焼き膨れで空洞が見られる。釉薬は白濁し、発色が鈍い。素地-灰白色(10Y7/1)。	屋敷1 表土
	83	碗	底部	— — 7.2	I類	外- 内- —	底部資料。内面は灰釉を施釉し、蛇の目釉剥ぎを施す。蛇の目内に重ね焼き痕が見られる。高台は露胎。素地-灰白色(10YR8/1)。	屋敷3 表土
	84	碗	口～ 底部	12.3 5.3 5.8	IV類 a	外-なし 内-なし	外反口縁。内外面ともに文様は無い。内底に蛇の目釉剥ぎ、畳付けは釉剥ぎを施す。蛇の目内に重ね焼きの痕が見られる。器外面に成形痕が明瞭。口縁付近に黒色釉?の飛び散りが散見される。素地-灰黄色(2.5Y7/2)。	屋敷1 表土
	85	碗	口～ 底部	13.4 6.2 6.2	IV類 b-③	外-草花文 内-なし	外反口縁、口唇舌状。外面に青色釉による草花文。内底に蛇の目釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。畳付けは釉剥ぎを施す。外面はヘラ成形痕が明瞭。内外面とも細かい貫入明瞭。素地-淡黄色(2.5Y8/4)。	屋敷1 表土
	86	碗	口縁部	14.2 — —	IV類 b-③	外-草花文 内口-草花文	外反口縁、口唇舌状。外面と内口縁部に青色釉による草花文。内外面ともに、白濁し文様の発色は不鮮明。内面に貫入あり。内面に逆さで「喜」の文字が見られる。破片のため他の文字の所在は不明。祝いなどでの注文品の可能性がある。素地-にぶい褐色(7.5YR5/3)。	屋敷1 表土
	87	碗	口～ 底部	13.8 6.3 6.5	IV類 b-④	外-花文 内-なし	外反口縁。口縁直下くびれで稜になる。内底は蛇の目釉剥ぎ、畳付けは露胎。外面に飴色釉と青色釉で花文(花卉:9ケ)を施し、3ケ配す。内外面に貫入、ピンホールも見られる。素地-灰黄褐色(10YR6/2)。	屋敷2 点上No531、532 III a層
	88	碗	口～ 底部	13.6 5.9 6.3	IV類 b-④	外-花文 内-なし	外反口縁。内底は蛇の目釉剥ぎ、畳付けは削りを施す。白土付着。外面に飴色釉と青色釉で花文(花卉:16ケ)を3ケ配す。花文は底部方向から口縁部方向へ釉が流れる。器を逆さにして施文したと考えられる。素地-黄灰色(2.5Y6/1)。	屋敷1 表土
	89	碗	口～ 底部	13.1 6.5 6.3	IV類 b-④	外-花文 内-なし	外反口縁。口縁直下くびれで稜になる。外面に緑色釉と青色釉で花文を施す。2ケ残存。外面の口唇端部に細かく釉の剥離が見られる。溶着痕か。内底は蛇の目釉剥ぎし、重ね焼き痕あり。畳付けは削り平坦面を造る。素地-暗灰黄色(2.5Y5/2)。	屋敷3 点上No252 III a層
	90	碗	口～ 底部	14.2 7.0 6.7	IV類 b-④	外-花文 内-なし	外反口縁。外面に飴色釉と青色釉で花文(花卉:16ケ)を3ケ配す。(2ケは花卉数不明)内底は蛇の目釉剥ぎし、重ね焼き痕あり。畳付けは削り稜を造る。外面口唇と内面胴部に楕円形状に剥離痕あり。溶着痕か?。内面に花文の移りが薄っすら見られる。素地-淡黄色(2.5Y8/3)。	屋敷1 表土
	91	碗	口～ 底部	13.4 6.6 6.1	IV類 b-④	外-花文 内-なし	外反口縁。外面に青色釉で花文(花卉:14ケ)を配す。花芯は無い。外面の口縁と高台付近に釉溜まりが見られる。花文は底方向から口縁部方向へ釉が流れる。器を逆さにして施文したと考えられる。内底は蛇の目釉剥ぎし、重ね焼き痕あり。畳付けは削り露胎。貫入が明瞭。素地-浅黄色(2.5Y7/4)。	屋敷1 表土
	92	碗	底部	— — 7.1	IV類 b-③	外-巴文? 内-なし	底部資料。外面に青色釉による巴文?を3ケ配す。内底は蛇の目釉剥ぎし、重ね焼き痕あり。畳付けは釉剥ぎされ露胎。貫入が明瞭。高台内と破面に黒色の付着が見られる。素地-黄色(2.5Y8/6)。	屋敷1 点上No490 III a層
	93	碗	口～ 底部	12.2 5.4 5.7	IV類 b-③	外-斑文 内-斑文	直口口縁。内外、同じ位置で口縁部に斑文を3ケ配す。文様は内外面同時に施文された可能性がある。外面側の文様が大きい。内底に蛇の目釉剥ぎあり。畳付け釉剥ぎを施す。外面胴部に成形痕が明瞭。素地-灰色(5Y6/1)。	屋敷1 点上No469 1層

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧②

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類/ 小分類	文様	観察事項	出土地点
34	94	碗	口～ 底部	12.3 5.4 5.8	IV類 b-③	外-斑文 内-斑文	直口口縁。内外、同じ位置で口縁部に斑文を3ヶ配す。文様は内外面同時に施文された可能性がある。外面側の文様が大きい。内底に蛇の目釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。畳付け釉剥ぎ、白土が残る。素地-灰色(5Y5/1)。	屋敷2 点上No519、521 III a層
	95	碗	口～ 底部	11.7 5.8 5.3	III類 口	外-なし 内-なし	直口口縁。外面は鉛色釉。内面は白化粧に透明釉を施す。内底に蛇の目釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。畳付けは釉剥ぎ、白土残る。内面に鉛色釉の移り？が見られる。素地-灰白色(10YR7/1)。	屋敷3 表土
35	96	小碗	口～ 底部	8.0 4.0 3.6	I類 a	外-なし 内-なし	直口口縁。内外面と高台内に透明釉を施す。畳付けのみ露胎。内外面とも文様はない。器全体に貫入が見られる。内外面とも艶はあるが、内面手触りザラつく。内・外面-灰白色(2.5Y8/2)、素地-黄色(2.5Y8/8)。	屋敷1 表土
	97	小碗	口～ 底部	7.5 5.0 3.6	I類 a	外-なし 内-なし	外反口縁。内外面と高台内に透明釉を施す。畳付けは露胎。内外面に文様は見られないが、外面に青色の付着が見られる。成形痕明瞭。内・外面-浅黄色(5Y7/3)、素地-浅黄色(5Y7/3)。	屋敷外 表土
	98	小碗	口～ 底部	8.1 4.7 3.7	I類 b	外-あり 内-なし	直口口縁。内外面、高台内に透明釉を施す。畳付けは釉剥ぎし露胎。全面に貫入明瞭。外面は青色釉により口縁部に幅広の圏線1条、高台際に2条の圏線が廻る。外面に黒色で「内・仁・名」の銘が配置される。文字の順序は不明。掲載番号99と同一銘。注文品の可能性あり。内・外面-灰白色(5Y8/2)、素地-淡黄色(2.5Y8/4)。	屋敷1 表土
	99	小碗	口～ 底部	8.2 4.6 3.7	I類 b	外-あり 内-なし	直口口縁。内外面、高台内に透明釉を施す。畳付けは釉剥ぎし露胎。外面は青色釉により口縁部に幅広の圏線1条、高台際に2条の圏線が廻る。外面に黒色で「内・仁・名」の銘が配置される。文字の順序は不明。掲載番号98と同一銘。注文品の可能性あり。内・外面-灰白色(5Y7/1)、素地-淡黄色(2.5Y8/4)。	屋敷1 点上No8 表土
	100	小碗	口縁部	— — —	I類 b	外-あり 内-なし	直口口縁。内外面に透明釉を施す。外面口唇に幅広の圏線を1条廻らす。外面に青色で「内」の銘が確認できる。掲載番号98、99と同一銘で、注文品の可能性がある。内・外面-灰白色(7.5Y7/1)、素地-淡黄色(2.5Y8/4)。	屋敷3 表土
	101	小碗	ほぼ 完形	6.8 4.9 3.1	III類 口	外-なし 内-なし	直口口縁。内面に白化粧と透明釉を施し、外面は鉛色釉を施す。掛け分けの資料。内外面ともに文様はない。外面に成形痕が明瞭。畳付け露胎。高台内、釉薬が一部行き届かない。外面-暗緑-ブ褐色(2.5Y3/3)、素地-灰緑-ブ色(5Y6/2)。	屋敷1 表土
	102	湯呑	口～ 底部	7.2 6.1 4.3	I類 a	外-なし 内-なし	やや外反口縁、口唇は舌状。外面は透明釉を施し、内面は白化粧と透明釉を施す。白化粧は外面の口唇にも及ぶ。畳付けは露胎。外面に腰部と胴部で2段の面取りを施す。胴部の面取りは上部の孤の鎬がやや崩れている。他は明瞭。外面に細かい亀裂とピンホールが多数見られる。外面-灰緑-ブ色(7.5Y6/2)、内面-灰白色(5Y8/2)、素地-橙色(7.5YR7/6)。	屋敷外 点上No468 表土
	103	湯呑	口～ 底部	7.0 6.6 4.0	III類 b-イ	外-あり 内-なし	直口口縁。外面は鉄釉を施し、胴部分を文様が残るように周りを掻き落としている。魚のウロコやヒレが丁寧に表現され、他は図柄不明。腰部と口縁部は圏線状に鉄釉を残す。畳付けは露胎。内面は透明釉を施す。外面(鉄釉)-暗緑-ブ褐色(2.5Y3/3)、内面-浅黄色(5Y7/3)、素地-灰緑-ブ色(5Y6/2)。	屋敷3 表土
	104	皿	口～ 底部	16.6 4.4 7.7	IV類 b-③	外-斑文 内-斑文	内湾口縁。内・外面と同じ位置で口縁部に斑文を施す。内底面に蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ内に重ね焼き痕。内面に大きく剥離状の破損と円形に剥がれ痕が3ヶ所あり。畳付け釉剥ぎし露胎。内外面とも艶、細かい亀裂、貫入、ピンホールあり。素地-灰緑-ブ色(5Y6/2)。	屋敷1 点上No16、165 表土
	105	皿	口～ 底部	13.4 3.9 6.3	IV類 b-③	外-なし 内-草花文	外反口縁、口唇は舌状。内面に草花文を口縁部に圏線を1条廻らす。内底は蛇の目釉剥ぎ、円部分は圏線を1条と草花文を施す。釉剥ぎ内に重ね焼き痕。外面に釉の弾け痕が多数。内外面とも貫入、亀裂、ピンホールあり。艶は無い。素地と露胎の色調が違う、火を受けたかは不明。素地-黒褐色(2.5Y3/2)。	屋敷1 表土
106	皿	口～ 底部	13.0 3.7 6.3	IV類 b-③	外-なし 内-草花文	外反口縁、口唇は舌状。内面に草花文、胴部に圏線を1条廻らす。内底は蛇の目釉剥ぎ、円部分に草花文を施す。釉剥ぎ内に重ね焼き痕。外面に釉の弾け痕が多数。内外面とも貫入、亀裂、ピンホールあり。艶は無い。胎土に赤色粒が混入。素地の色調は均一ではない。火を受けたかは不明。素地-にぶい黄褐色(10YR5/4)。	屋敷3 表土	

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧③

挿図番号	掲載番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類/ 小分類	文様	観察事項	出土地点
36	107	皿	口～ 底部	18.7 5.1 7.4	Ⅲ類 b-口	外-なし 内-線彫り	外反口縁、口唇舌状。内面のみ白化粧を施し、内外面に緑色釉を施す。畳付けは釉剥ぎ、白土が残る。内面口縁に圏線1条、雲文を3ヶ、腰部に圏線2条、内底部に圏線2条と花?文を線彫りにより施す。下地の白化粧が露出し明暗のある文様となる。内底には蛇の目釉剥ぎをするが白化粧は残す。他器物の溶着痕、不鮮明な墨書?痕あり。掲載番号108と類似。内・外面-暗緑-ア?色(5Y4/4)、素地-にぶい赤色(2.5YR4/4)。	屋敷3 点上No203、224、 227、231 Ⅲa層
	108	皿	口～ 底部	18.4 4.4 7.0	Ⅲ類 b-口	外-なし 内-線彫り	外反口縁、口唇舌状。内面のみ白化粧を施し、内外面に緑色釉を施す。畳付けは釉剥ぎ、白土が残る。内面口縁に圏線1条、雲文、腰部に圏線2条、内底部に圏線2条?を線彫りにより施す。下地の白化粧が露出し明暗のある文様となる。内底には蛇の目釉剥ぎをするが白化粧は残す。他器物の溶着痕、不鮮明な墨書?痕あり。掲載番号107と類似。内・外面-暗緑-ア?色(5Y4/4)、素地-にぶい赤色(2.5YR4/4)。	屋敷3 点上No180、260、 264、412 Ⅲa層
	109	大皿	口縁部	— — —	Ⅳ類 b-③	外-なし 内-草花文	外反口縁。口縁内に草花文を施す。構成は不明。残存内外面とも細かい貫入、艶あり。素地-浅黄橙色(10YR8/4)。	屋敷3 表土
	110	大皿	口～ 底部	25.1 7.0 10.8	Ⅱ類	外-なし 内-なし	外反口縁。内外面は黒色釉で施す。内底面は蛇の目釉剥ぎ。他器物の溶着痕あり。口唇先端は露胎の露出が見られる。外面は成形痕が明瞭。高台は釉溜まりか?白く濁りが見られる。畳付けは白土が残る。内・外面-黒色(10YR1.7/1)、素地-にぶい黄橙色(10YR7/4)。	屋敷3 点上No192、202、 339、505 Ⅲa層
37	111	大鉢	口～ 底部	23.2 10.6 11.0	Ⅲ類 口 内湾	外-なし 内-なし	内湾口縁。内面は白化粧を施す。内外で色の違う掛け分け。内底は蛇の目釉剥ぎ、重ね焼きの痕あり。外面胴部に釉の弾け痕、溶着痕が全体に見られる。畳付けは内側に反り、露胎。外面-暗緑-ア?褐色(2.5Y3/3)、内面-浅黄色(5Y7/3)、素地-灰白色(5Y7/2)。	屋敷3 表土
	112	大鉢	口～ 底部	26.0 11.5 9.7	Ⅲ類 口 逆「L」字	外-なし 内-なし	逆「L」字状口縁。内面は白化粧を施す。内外で色の違う掛け分け。方言で「ワンブー」と称さる。内底面に蛇の目釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。畳付け露胎。外面に3本の櫛掻きあり、文様かは不明。外面-灰褐色(7.5YR4/2)、内面-淡黄色(2.5Y8/4)、素地-灰黄色(2.5Y6/2)。	屋敷1 表土
	113	大鉢	口縁部	25.8 — —	Ⅲ類 口 逆「L」字	外-なし 内-なし	逆「L」字状口縁。内面は白化粧を施す。内外で色の違う掛け分け。方言で「ワンブー」と称さる。内底面に蛇の目釉剥ぎあり。内外面とも成形痕明瞭。胴部に剥離、削り痕あり、切り込み?二次製品制作途中か。外面-黄褐色(2.5Y5/6)、内面-灰白色(7.5Y8/1)、素地-灰色(10Y6/1)。	屋敷2 表土
	114	大鉢	底部	— — 10.8	Ⅲ類 口	外-なし 内-なし	底部資料。内面は白化粧を施す。内外で色の違う掛け分け。内底面に蛇の目釉剥ぎあり。内外面とも成形痕明瞭。内面の下部は黒色になる。火を受けた可能性あり。白濁部分あり。畳付けは釉剥ぎ、白土が残る。外面-暗緑-ア?色(5Y4/3)、内面-灰白色(5Y7/1)(7.5Y8/1)、素地-灰色(7.5Y6/1)。	屋敷2 点上No535 Ⅲa層
	115	大鉢	底部	— — —	Ⅲ類 口	外-— 内-—	底部資料。内面は白化粧を施す。内外で色の違う掛け分け。高台の無い碁笥底状。畳付けは露胎。溶着物あり。外面-赤黒色(10R2/1)、内面-明黄褐色(2.5Y7/6)、素地-にぶい黄橙色(10YR7/2)。	屋敷3 攪乱
38	116	蓋	摘み	— — 7.3	—	—	鍋の蓋資料。皿を伏せた形状。高台状を呈する。摘み部から約2cm以下に内外面とも施釉。摘み部は露胎。へら削り痕明瞭。破面の一部が焼けた様な黒色を呈す。釉色-極暗赤褐色(5YR2/3)、露胎-にぶい橙色(5YR6/4)、素地-黄褐色(7.5YR7/8)。	屋敷2 表土
	117	鍋	口縁部	— — —	—	—	鍋の口縁資料。口縁は「く」の字状に折れる形状。外面は黄褐色釉を施す。艶は無く、色調は斑。内面は褐色釉を蓋受け部と口縁くびれ以下に施す。艶は無い。外面-黄褐色(2.5Y5/4)、内面-暗赤褐色(5YR3/4)、露胎-明赤褐色(5YR5/6)、素地-橙色(5YR7/6)。	屋敷外 表土
	118	蓋	口～ 底部	口径:7.8 鏝径: 12.2 器高:3.0 摘径:4.2	—	—	壺(アンダガーミ)の蓋資料。鏝は水平、摘み高台状。摘み内平ら。上面、黒色釉を施す。内面は露胎。上面蛇の目状に削り白化粧を施す。白色部分、釉葉の飛び散りあり。縁に沈線2条。鏝周辺を打割。二次製品途中か不明。外面釉-赤黒色(2.5YR1.7/1)、素地-灰色(5Y6/1)。	屋敷3 表土

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧④

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類/ 小分類	文様	観察事項	出土地点
38	119	蓋	摘み	口径:7.5 鏝径:— 器高:3.8 摘径:3.8	—	—	壺(アンダガーマ)の蓋資料。摘み高台状。摘み内中心に向かい窪む。上面、鉛色釉を施す。上面蛇の目状に削る。蛇の目内と内面は露胎。鏝部と合わせ部周縁を打割。二次製品途中か不明。外面釉-暗赤灰色(2.5YR3/1)、素地-黄橙色(10YR8/6)。	屋敷1 点上No488 Ⅲa層
	120	壺	口～ 底部	10.0 17.7 9.1	Ⅱ類	外-なし 内-なし	口縁は玉縁状。胴に縦耳を4ヶ配(2ヶ残存)する。方言で「アンダガーマ」と称される壺。畳付けを除き施釉。外面に弾いた痕あり。釉に艶は無く、白濁している。未発色か。内面は成形痕が明瞭。 外・内面釉-灰色(10Y6/1)、素地-浅黄色(2.5Y7/3)。	屋敷3 点上No226、408 Ⅲa層
	121	壺	口～ 底部	13.3 28.1 12.9	Ⅱ類	外-なし 内-なし	口縁は方形で内傾する。胴に縦耳を4ヶ配す。方言で「アンダガーマ」と称される壺。内外面とも成形痕は明瞭。下部は一部釉が途切れる部分がある。畳付けと外底面の一部を除き施釉。 外・内面釉-暗褐色(7.5YR3/3)、素地-灰白色(10YR7/1)。	屋敷1 点上No454 Ⅲa②層
	122	壺	口～ 底部	14.2 28.6 14.4	Ⅱ類 口唇-平	外-なし 内-なし	口縁は三角形で内傾する。口唇は平ら。胴に縦耳を4ヶ配す。方言で「アンダガーマ」と称される壺。上面の口唇と畳付け、内底面を除き施釉。内面上部、内底面に別器の溶着痕あり。高台に挟りが1ヶ見られる。内外面とも成形痕明瞭で艶あり。外底面は艶なし。外・内面釉-赤黒色(2.5YR2/1)、素地-黄橙色(10YR8/6)。	屋敷1 点上No9 表土
39	123	蓋	口～ 底部	口径:8.2 鏝径: 11.5 器高:4.2 摘径:2.5	—	—	蓋資料。摘みから縁に弧状に膨らみある形状。摘みは高台状。摘み内に付着物が見られる。上面、鉛色釉を施す。内面は露胎。内外面とも成形痕が明瞭。器縁に打割あり。掲載番号124とセットの可能性あり。外面釉-オリーブ褐色(2.5Y4/3)、素地-黄灰色(2.5Y6/1)。	屋敷3 点上No388 Ⅲa層
	124	壺	口～ 底部	10.1 18.5 11.8	Ⅱ類	外-なし 内-なし	直口口縁。胴中央に最大径を持ち丸味のある形状。口唇は断面形方形で、外面側に傾斜。口唇、蓋との合わせ部は露胎。畳付けは削り痕明瞭、露胎。他は鉛色釉を施す。掲載番号123とセットの可能性あり。外・内面釉-オリーブ褐色(2.5Y4/3)、素地-黄灰色(2.5Y6/1)。	屋敷3 点上No243、341、 360 Ⅲa層
	125	蓋	口～ 底部	口径:8.1 鏝径: 11.1 器高:2.5	—	—	壺の蓋資料。摘みは無い、頂部は丸味を持つ形状。上面は褐色釉を施し、頂部に2条、縁近くに1条の凹線を廻らす。内面は露胎。掲載番号126とセットと見られる。外面釉-明黄褐色(2.5Y6/8)、素地-灰黄色(2.5Y7/2)。	屋敷3 点上No244、332 Ⅲa層
	126	壺	口～ 底部	10.2 13.4 8.1	Ⅱ類? Ⅲ類?	外-なし 内-なし	同一個体と見られ、図上復元した。口縁は直口。口唇は断面形方形で、外面側に傾斜。肩部が最大径で大きく張り出し、下部に向かい窄む形状。外面に白化粧を施す。肩に2条凹線線を廻らす。口唇部、高台以下は白化粧のみ。畳付けは削りにより露胎。器厚は薄手。掲載番号125とセットと見られる。外面釉-明黄褐色(2.5Y6/8)、内面釉-オリーブ褐色(2.5Y4/3)、素地-浅黄色(2.5Y7/4)。	屋敷3 点上No276 Ⅲa層
	127	瓶	胴～ 底部	— — 6.4	—	外-あり 内-なし	口縁を欠損。外面の頸部と胴部で釉境あり。発色せず白濁しているが、上は緑色釉、下は不明。胴部に沈線と飛び鉋で施文される。上から沈線2条、1条、飛び鉋、2条、飛び鉋、2条、飛び鉋、1条、飛び鉋、2条と配される。沈線と飛び鉋には白土が充填され象嵌文様となる。内面、畳付け、外底面は露胎。素地-にぶい赤褐色(2.5YR5/4)。	屋敷1 表土
	128	瓶	口～ 底部	6.7 12.9 7.0	—	外-なし 内-なし	口縁は外反で、口唇は上に向かいに開く形状。頸部と胴部で釉境が見られる。口縁から頸部は白化粧後、緑灰色釉(10GY7/1)を施す。胴部は白化粧はなく、直に黒色釉(5Y3/1)を施す。内面は頸部途中まで白化粧、以下は露胎。頸部ほぼ中央に円形で2段の耳が1対で貼り付けられる。「ハ」の字状の高台。畳付けは露胎。素地-橙色(5YR6/6)。	屋敷1 点上No15 表土
	129	瓶	口～ 底部	5.0 12.2 4.6	—	外-なし 内-なし	外反口縁。口縁内から外面は施釉。肩部で色調が異なり上部は発色せず白濁する。装飾か制作時の重ね焼きの為か不明。内面と畳付けは露胎。肩部辺に縦約1cm、横約1.5cmの孔が穿たれている。用途などは不明。外面上-淡黄色(5Y8/4)、外面胴部-オリーブ灰色(10Y4/2)、素地-灰色(5Y6/1)。	屋敷1 点上No459 Ⅲb①層

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧⑤

挿図番号	掲載番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類/ 小分類	文様	観察事項	出土地点
39	130	瓶	口～ 底部	5.6 19.5 10.6	—	外-なし 内-なし	外反口縁。ラップ状に大きく開き口唇舌状。胴部最大径を下部に持つ安定感のある形状。外面頸部に6条の沈線。外面に弾いた痕、混入小礫の露出が見える。畳付けのみ露胎。外・内面釉-オリーブ黒色(7.5Y3/2)、素地-灰白色(2.5Y7/1)。	屋敷3 点上No309、321、 337、353 III a ②層
40	131	酒注	胴～ 底部	— — 8.0	IV類 b-① 丸形	外-線彫 内-なし	口縁部、注口の先端を欠損。外面のみ白化粧を施す。肩部4条沈線。胴部は縦位に線彫りし、線を境界に青色釉と飴色釉を交互に施す。腰部以下は施文なし。外面全体に貫入が見られる。外底面は施釉。畳付けは白化粧のみ。内面は露胎。注口は白化粧なし。身と注口で異なる胎土。注口の素地-灰白色(5Y8/1)、身の素地-黄橙色(10YR8/8)。	屋敷1 点上No171、485 III a 層
	132	酒注	口～ 底部	5.2 12.9 7.6	IV類 b-② 丸形	外-二彩 内-なし	口縁は受け口状で、口唇は上に向かい直口する。器のほぼ中央に最大径を持つ丸味のある形状。外面は白化粧後、青色釉と飴色釉を交互に流し掛けを施す。外底面は施釉。畳付けは白化粧のみ。内面は露胎。身と注口で異なる胎土である。注口の素地-灰白色(5Y8/1)、身の素地-浅黄橙色(10YR8/4)。	屋敷3 点上No217、258、 314、315 III a 層
	133	酒注	胴～ 底部	— — 8.0	II類 丸形	外-なし 内-なし	口縁部、注口を欠損。胴部は中央に最大径を持つ丸味のある形状。畳付け、内面は露胎。外面の釉に艶はない、胎土に白色粒の混入物あり。外面火を受けたのか一部、手触りザラつく。外面釉-暗オリーブ色(5Y4/4)、素地-灰色(5Y5/1)。	屋敷3 点上No317、389、 404 III a 層
	134	酒注	口縁部	4.7 — —	II類 —	外-なし 内-なし	口縁部だけの資料。口縁は受け口状。口唇先端僅かに外反し、稜を作る。内・外面釉-オリーブ黒色(5Y2/2)、素地-灰白色(5Y8/1)。	屋敷3 点上No223 III a 層
	135	酒注	胴～ 底部	— — 8.2	II類 b-① 算玉形	外-線彫 内-なし	外反口縁。胴部中央が最大径となる、算玉様の形状。外面全体は褐色釉を施す。畳付け、内面は露胎。胴上面に施釉後、線彫りによる竜と雲を器形に沿って施文。外底面に他器物の重ね焼き痕、竈道具の痕か? 4ヶ所細線状に釉の剥がれた痕あり。外面-極暗褐色(7.5YR2/3)、素地-灰白色(10YR7/1)。	屋敷1 表土
41	136	蓋	口～ 底部	口径:5.9 鏝径:8.0 器高:2.8 摘径:2.0	—	—	急須の蓋。上面中央に丸形の摘み。約0.5cmの孔を外面から穿つ。外面鏝縁まで施釉。内面は露胎となる。外面に細かい貫入。合わせ部に剥離が施される。外面釉-灰黄色(2.5Y7/2)、内面-暗赤褐色(5YR3/3)、素地-暗赤褐色(5YR3/3)。	屋敷3 表土
	137	急須	胴部 (耳付)	— — —	IV類 a	外-なし 内-なし	破片資料。略台形状の把手を貼付ける。把手に孔を外面から穿つ。外面は白化粧後、緑色釉を施釉。内面は白化粧と透明釉を施釉。内外面とも艶は無い。外面釉-オリーブ灰色(10Y5/2)、素地-暗灰黄色(2.5Y4/2)。	屋敷3 表土
	138	急須	底部	— — 8.2	IV類	外-なし 内-なし	底部資料。円錐形の脚を底面に3ヶ(2ヶ残存)貼付ける。内外面とも白化粧し施釉。外面の腰部以下は白化粧のみ。外面に青色釉が見られる。内面にロクロ成形痕明瞭。外面に黒色物の付着あり。外面釉-オリーブ灰色(10Y5/2)、素地-暗灰黄色(2.5Y4/2)。	屋敷2 点上No510 III a 層
	139	急須 or 酒注	胴部	— — —	IV類 b-③	外-あり 内-なし	胴部片資料。内外面とも白化粧後、透明釉を施釉。外面は青色釉で文様が描かれる。構成は不明。内外面とも貫入、艶あり。素地-浅黄色(2.5Y7/4)。	屋敷外 表土
	140	急須	口～ 底部	6.5 10.2 7.8	III類	外-あり 内-なし	全形の判る資料。外面、緑色釉を施釉。口唇と畳付け際以下は露胎。胴部に白化粧で丸文を施し青色釉で文様を描く。構成は不明。文様は対で配置。肩に紐状の把手と注口を貼付ける。胴部の茶こし穴、約5mmの孔を5ヶ穿つ。内面は白化粧を施す。注口の素地、白色粒の混入あり。外面釉-オリーブ灰色(10Y5/2)、素地-灰色(10Y5/1)。	屋敷1 点上No92、86 表土
	141	香炉	底部	— — 10.3	IV類 b-③	外-あり 内-なし	底部資料。高台の外側に脚を3ヶ(1ヶ残存)張付ける。高台は低く脚は接地しない。外面は白化粧の後、透明釉を施釉。内面と外面の畳付け、高台内は白化粧のみ。外面胴部、脚部に青色の釉で流し掛け施文。高台底に重ね焼き痕あり。内底面に円形の重ね焼き痕?あり、その周囲は釉などの飛散りあり。素地-灰白色(5Y7/1)。	屋敷1 表土
	142	火入	口～ 底部	9.4 8.7 6.5	IV類 b-② 筒形	外-二彩 内-なし	口縁は先端が内側に折れる。胴部は腰で折れ、口縁まで直行する。内外面は白化粧を施す。外面は、口縁部から約1.5cm下方に釉境があり上部は浅黄色(7.5Y7/3)、下は黄褐色(2.5Y5/6)を施釉。腰部と高台を釉剥ぎ。高台内は施釉。内面は白化粧のみ。素地-灰黄色(2.5Y7/2)。	屋敷3 点上No238、318、 329、381、410 III a 層

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧⑥

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 器高 底径 (cm)	分類/ 小分類	文様	観察事項	出土地点
41	143	火入	底部	— — 7.8	Ⅲ類 口 筒形	外-なし 内-なし	腰部で折れる形状。内外面に白化粧を施す。外面の腰部から胴部には鉛色釉を施す。内面と外面の腰部以下は白化粧のみ。畳付けは露胎。内面、成形痕明瞭。外面釉-褐色(10YR4/4)、素地-灰黄褐色(10YR6/2)。	屋敷2 点上No529 Ⅲa層
	144	火入	口～ 底部	10.8 8.9 6.8	Ⅳ類 b-③ 筒形	外-あり 内-なし	口縁は先端が内側に折れる。胴部は腰で折れ、口縁まで直行する。内外面は白化粧を施す。外面は、口縁部から約2.5cmまでオリーブ灰色(2.5GY6/1)、その下は透明釉を施釉。胴部に青色釉で3本、ラインを描く、構成不明。釉薬は発色せず艶無い。腰部と高台を釉剥ぎ。高台内は施釉。内面は白化粧のみ、別器の溶着痕あり。素地-橙色(7.5YR6/6)。	屋敷2 点上No539 Ⅲa層
	145	火入	底部	— — 6.6	Ⅳ類 a 筒形	外-なし 内-なし	腰部で折れる形状。内外面に白化粧を施す。外面の腰部から胴部には透明釉を施す。内面と外面の腰部以下、畳付けは露胎。畳付けに刻みが見られる。素地-橙色(7.5YR7/6)。	屋敷1 点上No547 表土
	146	火入	口縁部 底部	8.7 9.1 6.7	Ⅳ類 b 湾曲形	外-二彩 内-なし	同一個体と見られる口縁部と底部を図上復元図にした。口縁部は胴部から丸味を持ち内湾する。内外面に白化粧を施す。外面は、口縁部から約1.5cm下に釉境があり上部は明緑灰色(7.5GY7/1)、下は黄褐色(2.5Y5/4)の2色を配す。内面は白化粧のみ。高台は基筒底で畳付けは露胎、高台内は施釉。素地-黄橙色(7.5YR7/8)。	屋敷1 表土
42	147	火鉢	口縁部	31.6 — —	—	外-あり 内-なし	内湾口縁。外面を線彫りと文様間の搔落し、青色釉と鉛色釉により装飾。外面上から、沈線を2条、蓮弁文、沈線2条を施す。その下は4枚の花弁文を縦位に配置する連続文、花弁文間に2本づつの縦沈線に挟まれて斜め格子を配置。花弁文の下に雲形状沈線で縁取りした窓、中の文様構成は不明。内面は露胎。素地-黄色(2.5Y8/6)。	屋敷1 表土
	148	蓋	口～ 底部	口径:8.5 鏝径: 10.0 — —	—	外-あり 内-なし	蓋資料。上面に摘みが剥がれた痕あり。上面摘み際から1.7cm幅で窪み縁まで平ら。鏝幅は約0.5cmと短い。内外面とも白化粧を施し、透明釉を施釉。上面には青色釉による草花文を1対施す。鏝内から内面縁は露胎。内底面、雑に透明釉を施釉。素地-褐灰色(10YR4/1)。	屋敷1 表土
	149	蓋	胴部	— — —	—	外-型押し 内-なし	蓋と見られる。内外面とも総釉。外面に幅約0.9cmの帯状把手の貼付け。把手の周りに、型による格子、葉、実の陽文様あり。把手は黒色、葉文は緑色である。他は同色。外・内面-にぶい黄橙色(10YR6/3)、素地-灰白色(10YR8/2)。内面、貫入が顕著。文様、色、素地などより掲載番号150とセットの可能性ある。沖縄産陶器の項で掲載するが、産地は検討が必要。	屋敷3 表土
	150	袋物	口縁部 底部	12.4 — 10.8	I類 a	外-型押し 内-なし	同一個体と見られる。直口口縁。高台際から丸味を持ち、ほぼ直に口縁に至る形状、筒形である。内外面とも施釉。口唇と口縁内の合わせ部は露胎。畳付けは釉剥ぎの削り痕が明瞭。外面は型による格子と下部に沈線1条、その上方に斜凸線が見られるが構成は不明。外・内面-にぶい黄橙色(10YR6/3)、素地-灰白色(10YR8/2)。文様、色、素地などより掲載番号149とセットの可能性ある。沖縄産陶器の項で掲載するが、産地は検討が必要。	屋敷3 表土
	151	尿瓶	口縁部	口径:2.6 採尿部 口径:6.5 16.0 12.0	—	—	同一個体と見られる。肩部に幅3.3cmの帯状の把手と胴部に採尿部を貼付ける。採尿部口縁は玉縁状で上方に若干開く。胴部に約4cmの穴を切込みで成形、縁は先端丸味のある調整。内外面に施釉。蛇の目高台で、畳付けは削りにより露胎。内底面に白色の付着物(アンモニアか?)が見られる。外・内面釉-灰オリーブ色(7.5Y4/2)、素地-浅黄色(2.5Y7/3)。	屋敷1 表土
	152	人形	脚部	— — —	—	—	脚部資料。シーサーの左側後脚と見られる。棒状に土台を造り、足先は土台に半円状に粘土を貼付け後、工具で抉りを入れ爪を形造る。足首にも粘土を貼り付ける。前面に5本又は6本組みの櫛状工具で毛並みを模している。その上に緑色、青色、白土で斑状に文様を配す。脚内側、足裏は文様は無い。胎土に砂状粒の混入。最大幅3.5cm、厚み3.7cm、残存高13.6cm。素地-橙色(5YR6/6)、素地芯部-褐灰色(10YR5/1)。	屋敷1 表土

## 無釉陶器（第 43 図 153 ～第 47 図 176）

無釉陶器は 1,043 点の出土があった。屋敷 1 で 337 点、屋敷 2 で 40 点、屋敷 3 で 621 点、屋敷外 45 点である。屋敷跡で出土量の多い順は屋敷 3 > 1 > 2 となる。

屋敷 3 出土の無釉陶器は、沖縄産陶器全体出土量の半数近くを占め、無釉陶器全体では半数以上の出土である。

特定できた器種は壺、甕、播鉢、鉢、瓶、火炉、蓋、窯道具であった。

無釉陶器の出土数 1,043 点中、994 点が壺、甕とその胴部片資料であり、器種のほとんどを占める（第 9 表参照）。壺、甕を口縁部の形状で分類した。以下に分類した基準を示す。

### 形状分類（口縁部）

壺 I 類：口縁部は直状を呈し、肩から胴部にかけて張り出す。

サイズは大・小あり。

口縁部の断面形が四角で逆「L」字状。

II 類：口縁部は外反し、肩部から胴部にかけて張り出す。

サイズは大・小あり。

A：口唇部の断面形蒲鉾状。

B：口唇部の断面形が三角や舌状。

III 類：無頸の口縁部で肩部から胴部にかけて張り出しが大きい。

口縁部はやや玉縁状。

甕 I 類：口縁部を折り曲げた折縁口縁。

II 類：口縁部を肥厚させる。

無釉陶器は、24 点を第 43 図～第 47 図に示した。下記に図化した遺物の特徴を略記し、個々の観察は第 10 表に記す。

153 は播鉢で口縁直下に稜線 1 条を廻らし、折縁口縁の幅が狭い器形である。

155 の鉢は縄目状の凸帯が貼り付けられ、口縁部と胴部に漆喰の付着がある。内面にはサビ（釘？）の付着も見られ、固定し使用した可能性があると思われる。

156、157 の瓶は肩部に沈線を廻らし、胴下部に最大径があり、安定感のある器形である。方言で「チューワカサー」もしくは「ヒラチビ」と呼称される資料である。

158～168 は壺の資料である。158、159 は口縁が大きく開く器形で、160～165 は無頸で肩部に耳を貼り付け、口縁部は玉縁状となる器形である。166 は有頸で肩部に耳を貼り付け、口縁直下でくびれをつくり、肩を張り出す器形である。口縁断面形は蒲鉾状となる。167、168 は口縁断面形が逆「L」字状となる。

163 は胴部中央辺りに、人為的に孔が穿たれている。使用目的などは不明である。

169 は、甕の口縁部で、肩部に波状沈線が施される。171、172 の甕は、貼り付け丸文と波状沈線が施されている。

壺屋で「判」と呼ばれる窯印のある資料（159、162、163、165～167、172）が 7 点得られている。

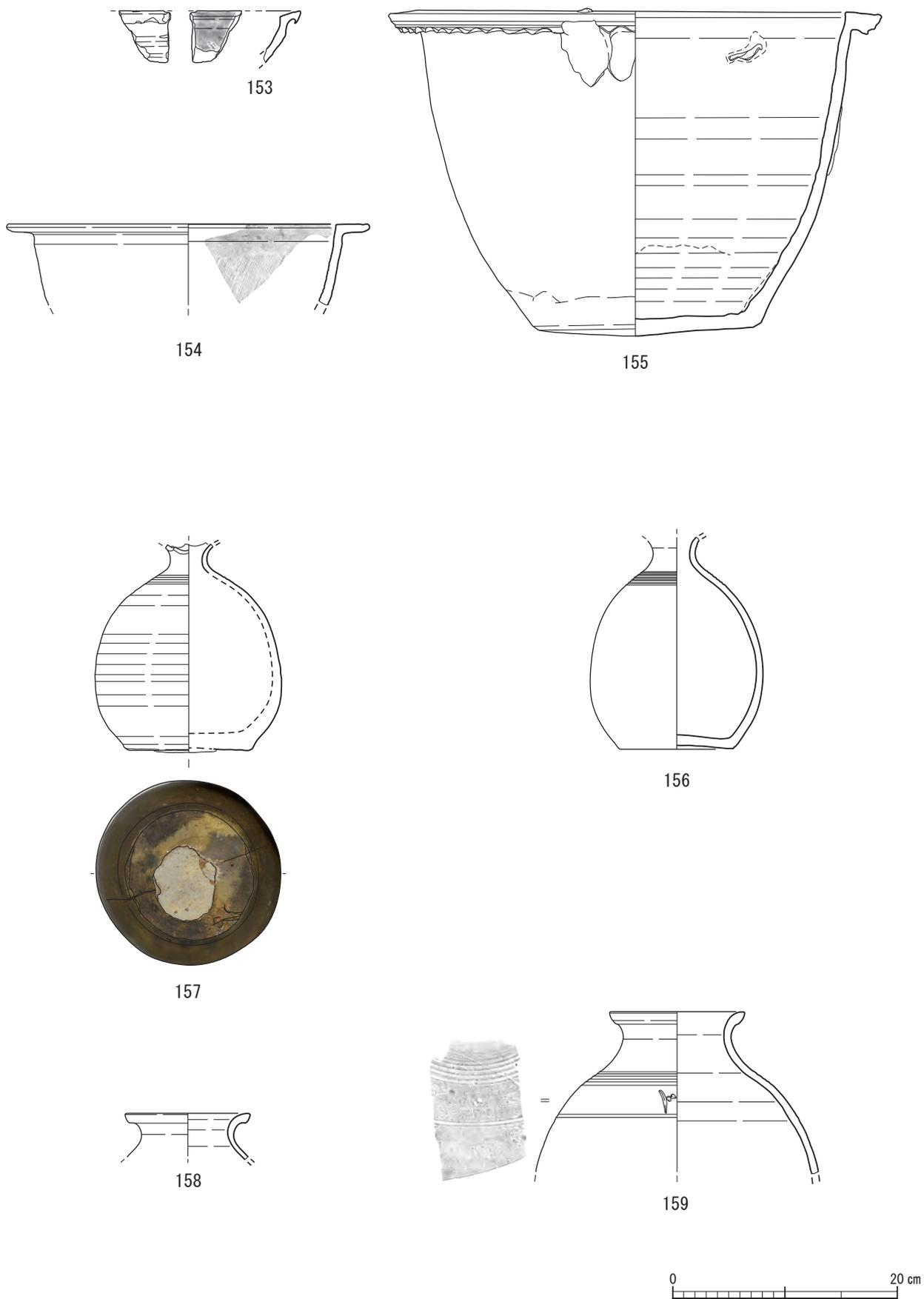
162、163 は同一の窯印と見られる。166 は破損しているものの、167 と窯印が同一の可能性がうかがえた（第 11 表参照）。

第9表 沖縄産無釉陶器出土点数

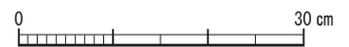
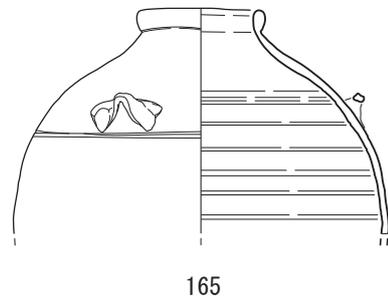
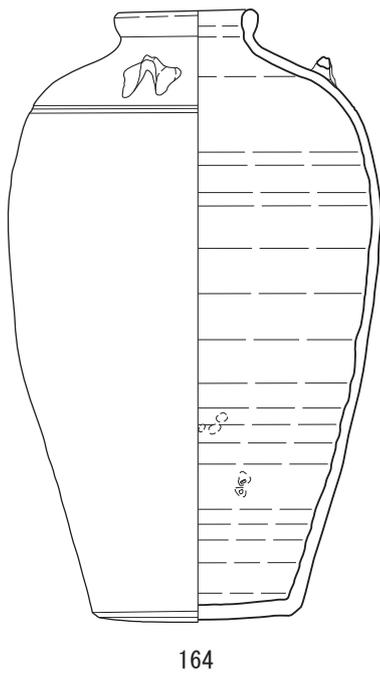
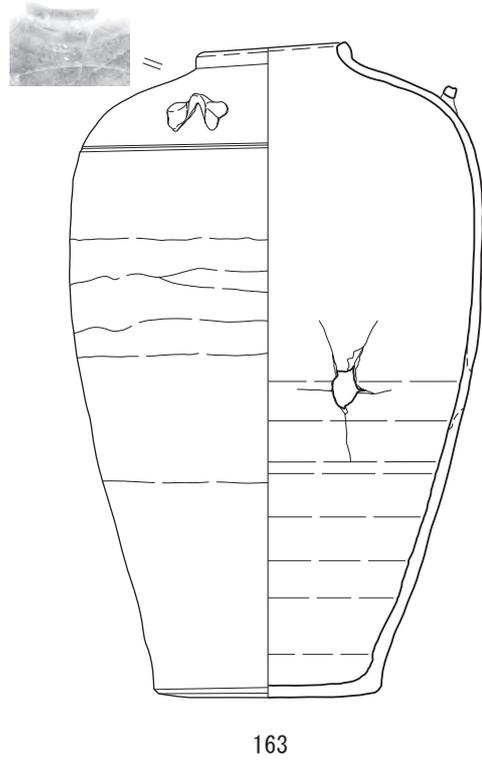
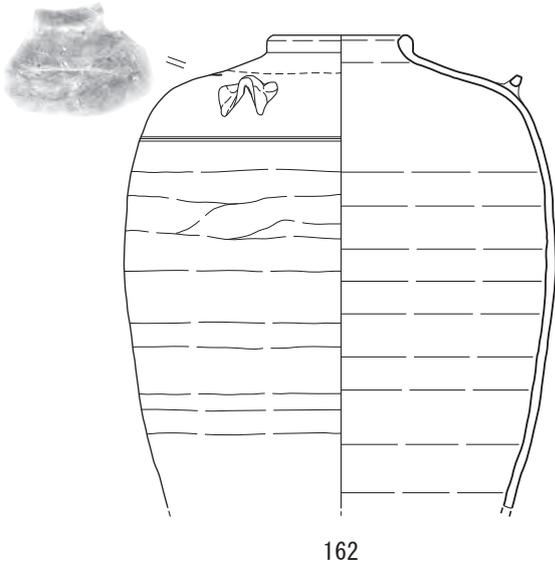
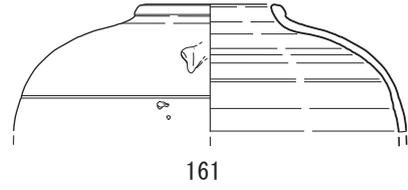
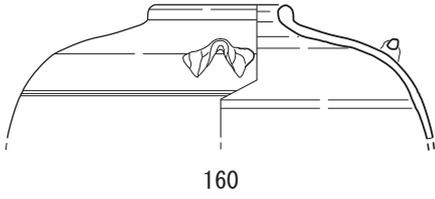
器種	調査区・部位	屋敷1					屋敷2				屋敷3				屋敷外				総計
		口 底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	小 計													
瓶				9	6	15				0							0	15	
鉢		1	1			2				0		6					6	8	
播鉢			2			2				0							0	2	
壺	I類	1				1				0	2			2			0	3	
	II類-A		1			1				0				0			0	1	
	II類-B		5	9		14				0	10			10	1		1	25	
	III類	4	4	13	1	22	2	3		5	8			8		1	1	36	
	類不明			26	2	28		1		1		94	1	95		8	8	132	
甕	I類		3			3				0				1			1	4	
	II類		7	1		8				0	3			3			0	11	
	類不明			9		9				0		5		5			0	14	
壺又は瓶					0				0				1	1		1	1	2	
壺又は甕			207	19	226		31	3	34		453	24	477		27	4	31	768	
火炉					1	1				0							0	1	
蓋			1			1				0							0	1	
窯道具(ハマ)	1					1				0							0	1	
器種不明				3		3				0		14		14		1	1	18	
合計		7	24	277	29	337	2	35	3	40	23	572	26	621	2	38	5	45	1,043

第10表 沖縄産無釉陶器観察一覧①

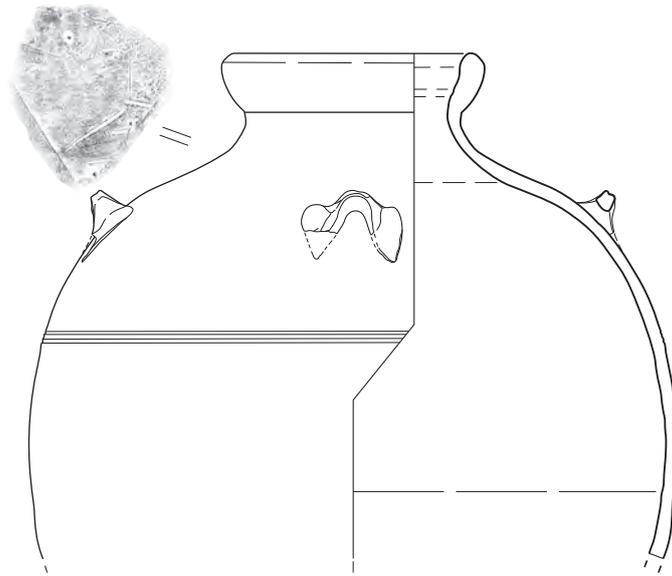
挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	分類/ 小分類	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	窯印の有無	出土地点
43	153	播鉢	口縁部	—	—	折縁口縁。口縁上面は内側に傾斜。外面、口縁直下に稜を1条廻らすが、浅い。内面には櫛目が見られる。櫛目は4本確認できるが組数は不明。胎土に白色粒子、黒色粒子、褐色粒の混入。外面-明赤褐色(5YR5/6)、内面-橙色(5YR6/6)、素地-明赤褐色(5YR5/6)と褐灰色(10YR6/1)のサンドイッチ状。		屋敷1 表土
	154	播鉢	口縁部	—	32.3 — —	折縁口縁。口縁上面は平坦、上面端部に沈線1条。外面、口縁直下に稜を1条廻らす。内面には約1mm幅の櫛目が隙間なく見られる。外面-橙色(2.5YR6/8)、内面-橙色(2.5YR6/8)、素地-橙色(2.5YR6/8)。口縁上部-にぶい褐色(7.5YR6/3)。		屋敷1 点上No130 表土
	155	鉢	口～ 底部	—	43.8 29.0 20.3	折縁口縁。口縁端部に貼り付けによる波状文と沈線1条。器下部にヘラ削り痕が明瞭。外底面もヘラ削り痕と焼き台?痕が見られる。外面口縁部付近、胴部に漆喰が付着。内面に金属物付着とその周囲にサビが見られる。下部に薄く白色物(アンモニア?)が付着。外面-暗赤褐色(2.5YR3/3)と赤色(10R5/8)で色ムラあり。内面-暗赤灰色(2.5YR3/1)、素地-明赤褐色(2.5YR5/8)。		屋敷1 表土
	156	瓶	頸～ 底部	—	— — 10.1	口縁欠損しているが、外反とみられる。胴下部に最大径を持つ、重心が下方のどっしりとした形状。外面肩部に凹線が6条廻る。外底面ヘラ削り調整痕。外面-赤褐色(2.5YR4/6)～暗赤褐色(2.5YR3/4)、素地-赤褐色(2.5YR4/6)。		屋敷1 点上No160 表土



第 43 図 沖縄産無釉陶器：擂鉢 (153・154)、鉢 (155)、瓶 (156・157)、壺 (158・159)



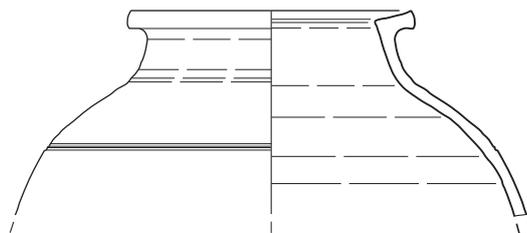
第 44 図 沖縄産無釉陶器：壺（160～165）



166



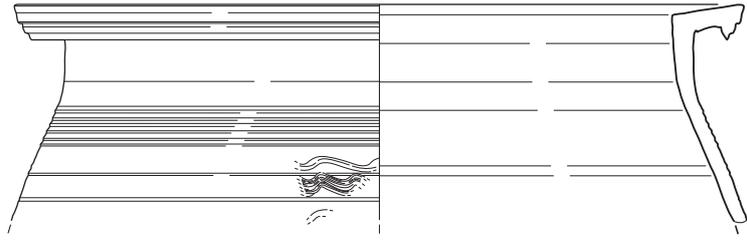
167



168



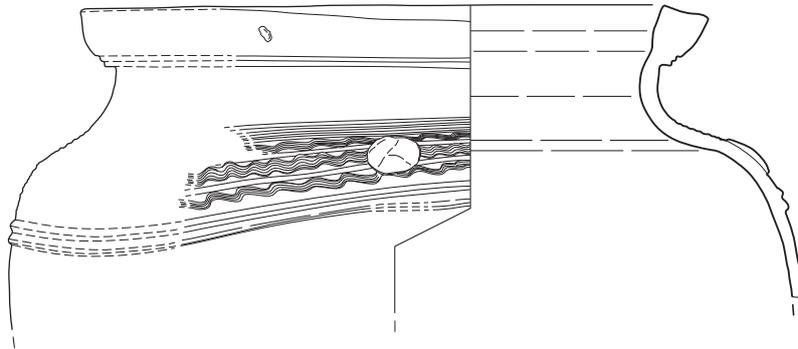
第 45 図 沖縄産無釉陶器：壺（166～168）



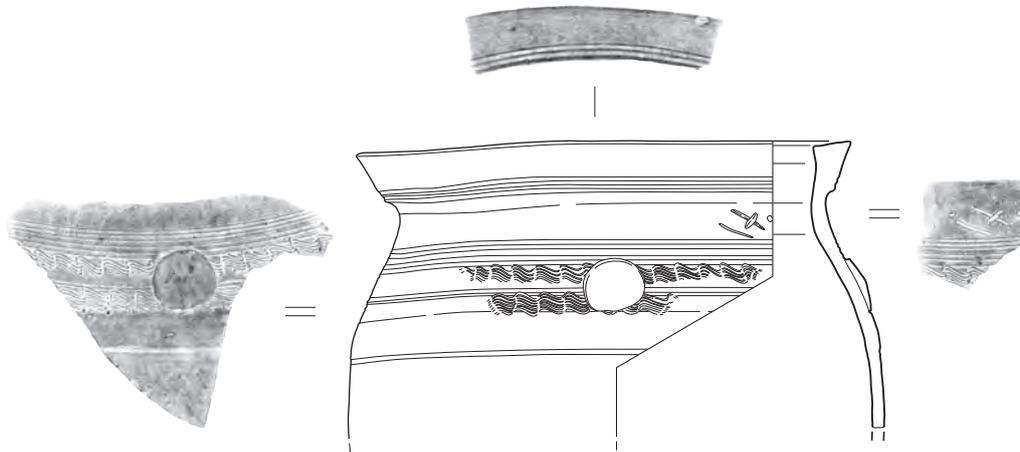
169



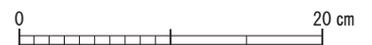
170



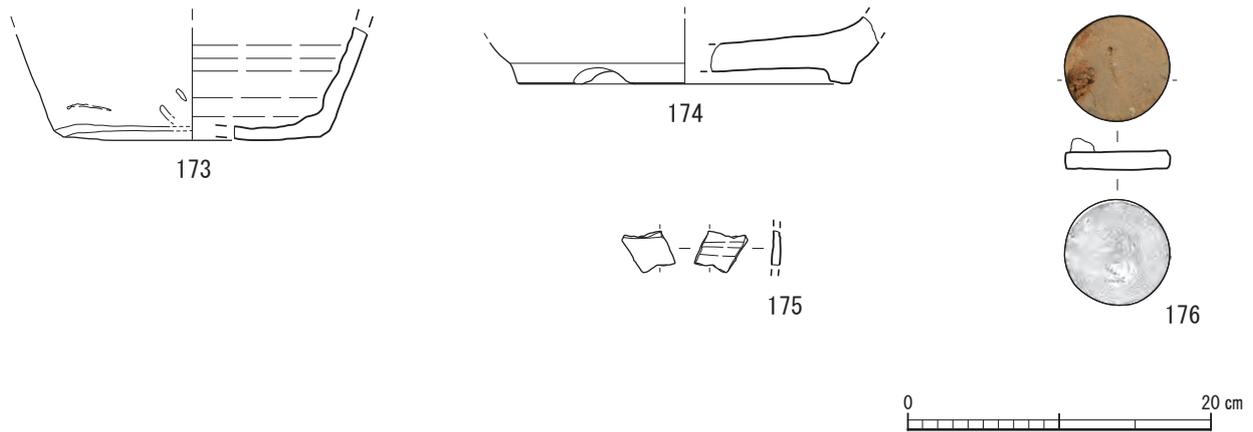
171



172



第46図 沖縄産無釉陶器：甕（169～172）



第 47 図 沖縄産無釉陶器：器種不明（173・175）、火炉（174）、窯道具（176）

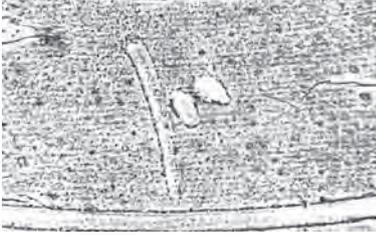
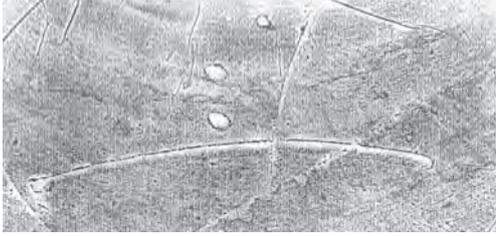
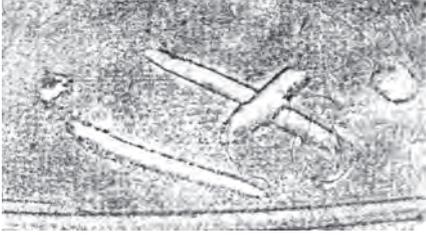
第 10 表 沖縄産無釉陶器観察一覧②

挿図番号	掲載番号	器種	部位	分類 / 小分類	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	窯印の有無	出土地点
43	157	瓶	頸～ 底部	—	— — 11.4	口縁は打欠により欠損しているが、外反とみられる。胴下部に最大径を持つ、重心が下方のどっしりとした形状。外面肩部に凹線が3～4条廻る。成形痕は明瞭。外底面に漆喰？が付着。底面に糸切痕(左回転)。外面焼成良好、艶あり。外面 - 暗灰黄色 (2.5Y4/2)、素地 - 灰赤色 (2.5YR4/2)。		屋敷 1 点上 No420 土壁 - 2 層
	158	壺	口縁部	Ⅱ類 B	11.2 — —	外反口縁。頸部から口縁はラップ状に大きく開く。内外面とも成形痕明瞭。外面 - にぶい赤褐色 (5YR4/3)、内面 - 黒褐色 (7.5YR3/1)、素地 - にぶい赤褐色 (5YR4/3)。		屋敷外 表土
	159	壺	口縁部	Ⅱ類 B	12.0 — —	外反口縁。口唇は舌状。肩部に凹線が4条～5条、その下に1条が廻る。内外面ともに成形痕は明瞭。外面 - 暗赤褐色 (5YR3/3)、内面 - 赤褐色 (10R4/3)、素地 - 暗赤褐色 (10R3/3)。	窯印：あり	屋敷 1 点上 No76、79、 89、90 表土
44	160	壺	口縁部	Ⅲ類	15.0 — —	口縁玉縁状。肩部に耳が貼り付く、無頸の壺。耳の断面は、耳の先端を押した形状で丸味のある台形。肩部に凹線が2条廻る。内外面成形痕が明瞭。外面 - 暗赤灰色 (10R3/1)、内面 - 赤黒色 (10R2/1)、素地 - にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)。		屋敷 2 点上 No507 表土
	161	壺	口縁部	Ⅲ類	16.0 — —	口縁玉縁状。肩部に耳は貼り付け部分のみで破損している。無頸の壺。胴部に凹線が1条廻るが、浅い。外面自然釉？か黄色味を帯びる。内面はロクロ成形痕が明瞭。外面 - にぶい黄色 (2.5Y6/4)、内面 - 明赤褐色 (2.5YR5/6)、素地 - にぶい赤色 (2.5YR4/4)。		屋敷 3 IV a 層
	162	壺	口縁部	Ⅲ類	15.3 — —	口縁玉縁状。肩部に耳が3ヶ貼り付く、無頸の壺。耳の断面は方形。肩部下に凹線が2条廻る。外面へラナデ成形痕、内面はロクロ成形痕が明瞭。肩部から頸部にかけてマンガンのハケ目が残る。口縁部分は被せ焼き痕が見られる。外面 - 灰赤 (10R4/2)、内面 - 赤色 (10R4/6)、素地 - 赤褐色 (10R4/4)。	窯印：あり 掲載番号 163 と窯印 同一	屋敷 1 点上 No472、558 Ⅲ b ①層
	163	壺	口～ 底部	Ⅲ類	16.0 69.0 23.9	口縁玉縁状。肩部に耳が3ヶ貼り付く、無頸の壺。耳の断面は方形。肩部に凹線が2条廻る。外面へラナデ成形痕、内面はロクロ成形痕が明瞭。胴部中央に約縦3.9cm、横2.5cmの孔を外面から穿つ。使用目的は不明。外面 - 暗赤褐色 (2.5YR3/4)、内面 - 暗赤灰色 (2.5YR3/1)、素地 - 暗赤褐色 (2.5YR3/2)。	窯印：あり 掲載番号 162 と窯印 同一	屋敷 1 点上 No30、40、 116、122、154、 489、493、495、 500、556 Ⅲ a 層
	164	壺	口～ 底部	Ⅲ類	14.0 65.0 22.0	口縁玉縁状。肩部に耳が3ヶ貼り付く、無頸の壺。耳の断面は台形。肩部に凹線が2条廻る。外面へラナデ成形痕、内面はロクロ成形痕が明瞭。底部はへら削りで成形。外面 - 橙色 (2.5YR6/8)、内面 - 橙色 (2.5YR6/8)、素地 - 橙色 (2.5YR6/6)。		屋敷 1 表土

第 10 表 沖縄産無釉陶器観察一覧③

挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	分類/ 小分類	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	窯印の有無	出土地点
44	165	壺	口縁部	Ⅲ類	13.2 — —	口縁玉縁状。肩部に耳が3ヶ貼り付く、無頸の壺。耳の断面は方形。肩部に凹線が2条廻る。耳下に凹線が交差し1条になる部分あり。頸部に窯印の端が見られるが、破損のため形状は不明。内面、成形のロクロ痕が明瞭。口縁部から頸部にかけてマンガン釉のハケ目が残る。口縁部分には被せ焼き痕が見られる。外面- 橙色 (2.5YR6/8)、内面- 明赤褐色 (2.5YR5/6)、素地- にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)。	窯印：あり 形状不明	屋敷2 点上 No507、540 表土
45	166	壺	口縁部	Ⅱ類 A	16.1 — —	口縁部幅は約4cmを測る有頸の壺。口縁内面に凹痕が見られる。断面に粘土の積み痕が観察できる。肩部に耳の貼り付けが2ヶ残存する。耳の断面は方形。胴部に凹線を2条廻らす。内面成形痕は明瞭。外面- 暗褐色 (7.5YR3/3)、内面- 赤褐色 (2.5YR4/8)、素地- にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)。	窯印：あり 掲載番号 167と窯印 同一の可能性あり	屋敷1 表土
	167	壺	口～ 底部	Ⅰ類	16.2 43.1 19.5	全形の判る資料。口縁形は逆「L」字状。肩部に最大径を持ち上、下部に窄まる形状。肩部凹線2条。内外面は成形痕が明瞭。外面の胴下部、底面にヘラ削り痕。胴部にサビの付着が見られる。外面- にぶい赤褐色 (5YR5/3)、内面- 赤灰色 (2.5YR4/1)、素地- 赤褐色 (10R4/4)。	窯印：あり 掲載番号 166と窯印 同一の可能性あり。	屋敷1 点上 No17、50、 52～54、56、62、 63、66、69、72、 73、97、145、 146、166、167 表土
	168	壺	口縁部	Ⅰ類	19.0 — —	口縁形は逆「L」字状。上面は内側に傾斜する。頸部と胴の境凸状になる。肩部凹線2条が廻る。内外面は成形痕明瞭。外面- 暗赤褐色 (5YR3/2)、内面- にぶい赤褐色 (5YR4/4)、素地- 暗赤褐色 (5YR3/6)。		屋敷3 点上 No199、336、 416、418、422 Ⅲa層
46	169	甗	口縁部	Ⅰ類	48.0 — —	折縁口縁。口縁上面は内側に傾斜。口縁下部に凹線を2条廻らし、段状になる。外面に上から凹線5条、波状凹線1条、波状沈線(幅約1cm)、波状凹1条を施文する。内面端に細かい刻み痕が見られる。外面- 暗赤褐色 (5YR3/3)、内面- 褐灰色 (7.5YR4/1)、素地- にぶい赤色 (2.5YR4/3)。		屋敷1 表土
	170	甗	口縁部	Ⅰ類	49.2 — —	折縁口縁。口縁端部に凹線を2条廻らし、段状になる。外面上から凹線5条、3条、1条と施文する。口縁上面の平坦部の色調は斑。口縁、内面の一部に自然釉が見られる。外面- 明赤褐色 (2.5YR5/6)、内面・口縁上面- 暗赤灰色 (2.5YR3/1)、素地- 赤褐色 (2.5YR4/8)。		屋敷外 Ⅱ層
	171	甗	口縁部	Ⅱ類	41.4 — —	口縁は方形に肥厚。器全体が歪む。口縁下部に凹線を2条廻らし、段状になる。外面に上から凹線7条、4本組の波状沈線、凹線1状、4本組波状沈線、凹線1条、4本組波状沈線、凸線2条を施文する。波状文上に丸文(約3cm)を貼り付ける。外面口縁部に金属の付着。内外面とも成形痕は明瞭。外面- 灰褐色 (5YR4/2)、内面- 赤褐色 (2.5YR4/6)、素地- 暗赤褐色 (2.5YR3/4)。口縁の素地芯部は褐灰色 (10YR4/1) で丸い。		屋敷3 点上 No240～ 242、378、380 Ⅲa層
	172	甗	口縁部	Ⅱ類	32.6 — —	口縁は方形に肥厚。口縁上部平坦面は色調は斑で、付着物あり。口縁下部に凹線2条を廻らす。外面上から凹線5条、5本組波状沈線、凹線2状、7本組波状沈線、凹線1状を施文する。波状文上に丸文(約3.5cm)を貼り付ける。焼成良好。外面- 暗赤褐色 (5YR3/6)、内面- 明赤褐色 (2.5YR5/6)、素地- にぶい赤色 (2.5YR4/4)。	窯印：あり	屋敷1 表採
47	173	壺 or 甗	底部	類不明	— — 18.2	底部資料。外面下部に成形時の工具痕が見られる。底部、底面はヘラ削りにより成形され稜明瞭。内面はロクロ成形痕が明瞭。外面- 黒褐色 (5YR2/1)、内面- にぶい赤褐色 (5YR5/3)、素地- 暗赤褐色 (5YR3/4)。		屋敷3 点上 No301、369 Ⅲa層
	174	火炉	底部	—	— — 22.0	底部資料。高台は高さ約1cmで、挟りが見られる。底面は約2cmの厚みで水平に延びる。外面化粧土?が塗布される。胎土に橙色粒、赤色粒が混入。外面- 明赤褐色 (2.5YR5/6)、内面- 橙色 (2.5YR6/6)、素地- 橙色 (2.5YR6/6)。		屋敷1 表土
	175	不明	胴部	類不明	— — —	胴部資料。器厚0.6cmを測る。残存部上方に沈線が1条確認できる。外面- 黄灰色 (2.5Y4/1)、内面- 黄灰色 (2.5Y4/1)、素地- 黄灰色 (2.5Y4/1)、芯部- 褐色 (7.5YR4/4) のサンドイッチ状。		屋敷3 表土
	176	窯道具 (ハマ)	完形	—	— — —	窯道具。径7cm器厚約1.3cmの円盤形。上面に金属の付着、工具?痕、白色の剥がれ痕などが見られる。両面とも糸切痕が見られる。上面は左回転、下面は右回転。全面- にぶい黄褐色 (10YR5/3)。		屋敷1 点上 No57 表土

第 11 表 沖縄産無釉陶器の窯印一覧

遺物番号	器種	拓 影	出土地点
第 43 図 159	壺		屋敷 1 点上 No76、79、89、 90 表土
第 44 図 162	壺		屋敷 1 点上 No472、558 Ⅲb①層
第 44 図 163	壺		屋敷 1 点上 No30、40、116、 122、154、489、493、 495、500、 556 Ⅲa 層
第 44 図 165	壺	頸部に窯印あり。窯印が器物の破面近くにあり 判読不明の為所見への記述のみ。	屋敷 2 点上 No507、540 表土
第 45 図 166	壺		屋敷 1 表土
第 45 図 167	壺		屋敷 1 点上 No17、50、52 ~ 54、56、62、63、66、 72、73、97、145、 146、166、167 表土
第 46 図 172	甕		屋敷 1 表土

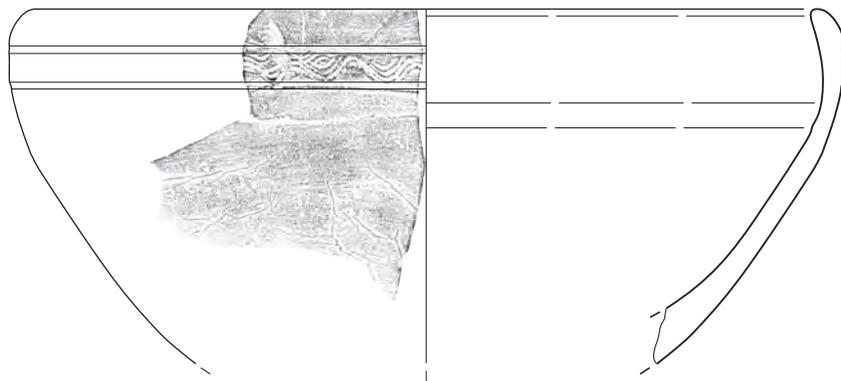
陶質土器（第 48 図 177 ～ 179）

陶質土器は全体で 17 点が出土した。沖縄産陶器の中では希少な出土数である。屋敷 1 で 13 点、屋敷 3 で 3 点、屋敷外で 1 点であった。

特定できた器種は鍋、水鉢、土瓶、蓋である（第 12 表参照）。資料の数としては少ないが、陶質土器の主な器種は揃っている。また、陶質土器の出土状況は、屋敷 1 だけで 13 点とほぼ限定的であるが、そのほとんどが表土からの出土である（第 2 表参照）。

第 12 表 陶質土器出土点数

調査区	屋敷 1							屋敷 2					屋敷 3					屋敷外					合計		
	部位 器種	口縁部	胴部	底部	把手	注口	不明	小計	口縁部	胴部	底部	不明	小計	口縁部	胴部	底部	不明	小計	口縁部	胴部	底部	不明		小計	
鍋		2	2	2				6					0	1				1						0	7
水鉢		1						1					0					0						0	1
土瓶					1	1		2					0					0						0	2
蓋								0					0					0		1				1	1
不明			2				2	4					0	1			1	2						0	6
小計		3	4	2	1	1	2	13	0	0	0	0	0	2	0	0	1	3	0	1	0	0	0	1	17



第 48 図 陶質土器：土瓶（177・178）、水鉢（179）

陶質土器は、器種が特定できた 11 点の内 3 点を図化した。以下に略記する。

177 は、土瓶の注口部分である。注口はナデにより取り付けられている。胎土に白色細粒子、赤色粒子、雲母が混入。器全体は摩耗しザラつく手触りである。色調は内外面とも橙色（5YR6/8）。孔径 1.6cm。屋敷 1 表土から出土。

178 は、土瓶の把手部分である。台形状で孔を外面から上方向に穿たれている。外面上部に煤痕が見られる。胎土に白色細粒子、雲母が混入。摩耗しているが、形状の角は明瞭に残る。ザラつく手触

りである。色調は内外面とも橙色（5YR6/8）。孔径 0.8cm、器厚 0.7cm。屋敷 1 表土から出土。

179 は、水鉢の口縁から胴部にかけての資料である。口唇が内湾し先端は舌状になる。口縁部下に上から凹線 1 条、波状沈線、凹線 1 条が施されている。波状沈線は 3 又は 4 本組の櫛状工具で施文したと見られる。残存部で波状文が重なる部分が確認できる。外面はロクロ形成後ナデ調整が丁寧に施される。内面はロクロ成形痕が明瞭に残る。混入物が剥がれた痕が数箇所見られる。外面上部は滑らかな手触りである。外面下部から内面の器面は荒れ、ザラつく手触りである。胎土に最大で 1.0～1.5mm の赤褐色粒子、白色細粒子、雲母が混入。色調は外面：橙色（5YR6/8）、内面：橙色（5YR6/6）、素地：橙色（5YR6/6）、芯部：灰白色（2.5Y7/1）のサンドイッチ状となる。推定口径 31.0cm。屋敷 1 表土から出土。

#### （４）ガラス製品（第 49 図 180～第 54 図 233）

ガラス製品の出土点数は屋敷 1 で 90 点、屋敷 2 で 8 点、屋敷 3 で 94 点、屋敷外で 18 点、合計 210 点であった。屋敷別出土の数量は多い順で屋敷 3 > 1 > 2 となる。器種で見ると屋敷 1 と 2 では瓶以外の器種の出土はほとんど無かった。

器種の主体は瓶で、その他にランプ笠（第 54 図 228）、眼鏡のレンズ、体温計（第 54 図 229）、溶着した製品（第 54 図 231～233）などが確認された。

以下に、色調と瓶類の分類項目を示す。

色調：透明系、白色系、青色系、コバルト色系、黒色系、茶色系、緑色系、ピンク色系  
に分類し、色調観察は肉眼で行った。

#### 瓶の用途別分類項目

飲料・調味料瓶（清涼飲料水・調味料等）・・・58 点（33%）  
化粧品（化粧水・化粧クリーム等）・・・65 点（37%）  
薬品瓶・薬瓶・・・・・・・・・・・・・・39 点（22%）  
文具・・・・・・・・・・・・・・7 点（4%）  
用途不明・・・・・・・・・・・・・・9 点（5%）

ガラス瓶は 178 点出土しており、ガラス製品全体の約 85%を占める。

瓶類には、エンボス加工されている瓶が多くあり、底面にもエンボスが見られた。また、ナーリングと呼ばれる凹凸の加工も見られた。ナーリングは、製品の強度を増し、運搬時の破損を防ぐほか、ザラつく加工もナーリングの一種で、瓶同士の擦りによる傷を防ぐ効果があると言われている。

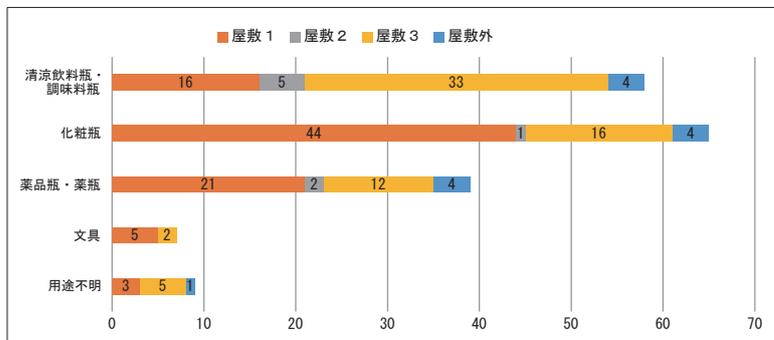
ガラス製品の用途別で多く出土しているのは、化粧品類の瓶が多く次に飲料・調味料瓶、薬品瓶・薬瓶、文具であった。ほか用途不明が 9 点出土している。

瓶類の色調別出土傾向は、透明系が多く次に白色系、青色系、茶色系、緑色系、コバルト色系、黒色系、ピンク色系の順であった。色調の茶色や緑色は、他の色に比べ紫外線を遮断する効果が高いことから、酒類などの品質保護にもなっている。そのため色調で分けることで、大まかな用途に分けることが可能と考える。また、屋敷跡別の出土量は屋敷 3 と 1 で 184 点となり、全体の 88%を占める。この出土状況は他の遺物と同様である。

第13・14表に屋敷別の瓶の出土状況をまとめた。個々の法量、エンボスの位置などの詳細は第15表に記した。

第13表 ガラス瓶の用途別出土状況

用途	調査区				合計
	屋敷1	屋敷2	屋敷3	屋敷外	
清涼飲料瓶・調味料瓶	16	5	33	4	58
化粧瓶	44	1	16	4	65
薬品瓶・薬瓶	21	2	12	4	39
文具	5	0	2	0	7
用途不明	3	0	5	1	9
合計	89	8	94	18	178



第14表 ガラス製品出土点数

器種	色調	用途\部位	調査区							合計																					
			屋敷1	屋敷2	屋敷3	屋敷外																									
			口底	口縁部	胴部	底部	蓋	不明	小計	口底	口縁部	胴部	底部	蓋	不明	小計	口底	口縁部	胴部	底部	蓋	不明	小計								
瓶	透明系	飲料・調味料瓶	1							1							0	2	3	2	2				9	0	10				
		化粧品	30	1		1				32							0	5	1		1					7	2	1	1	4	43
		薬品瓶・薬瓶	3							3							0	3								3		2	1	3	9
		文具		1						1							0									0				0	1
		用途不明				1				1						5		0								5				0	6
	白色系	化粧品	8		1	2				11			1				1	2	2	1	1					6				0	18
		飲料・調味料瓶			4	1				5		1		1			2			10	3					13	1	2		3	23
		薬品瓶・薬瓶	1							1							0	1			1					2				0	3
		文具	2			1				3							0									0				0	3
	青色系	用途不明								0							0									0			1	1	1
		薬品瓶・薬瓶	1			2	3			6	1						1	2								2	1			1	10
		文具	1							1							0									0				0	1
	コバルト色系	化粧品								0							0	1								1				0	1
		用途不明	1							1							0									0				0	1
	黒色系	飲料・調味料瓶	3				2			5	1						1		2	3	3					8				1	15
		化粧品	1							1							0									0				0	1
		薬品瓶・薬瓶	10							10	1						1	2	1							3				0	14
		用途不明						1		1							0									0				0	1
	茶色系	飲料・調味料瓶	1	2		2				5	1		1	2	1		2	1			2					3				0	10
		化粧品								0							0				2					2				0	2
		薬品瓶・薬瓶								0							0				2					2				0	2
		文具								0							0		1	1						2				0	2
		薬品瓶・薬瓶	1							1							0									0				0	1
	ランプ	白色系	日用品							0							0									11	11		5	5	16
	眼鏡のレンズ	透明系	日用品							0							0									1	1			0	1
体温計	透明系	日用品							0							0									1	1			0	1	
溶着製品	透明系	用途不明							0							0									2	2			0	2	
	白色系	用途不明							0							0		1							2	3			0	3	
	青色系	用途不明							0							0									6	6			0	6	
器種不明	透明系	用途不明							0							0			1	1					2				0	2	
	白色系	用途不明							0							0									0				0	1	
総計			64	4	8	12	1	1	90	3	2	1	2	8	19	10	18	19	5	13	10	94	2	2	6	1	6	1	18	210	



180



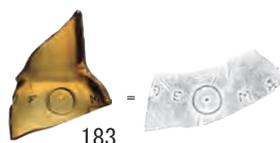
181



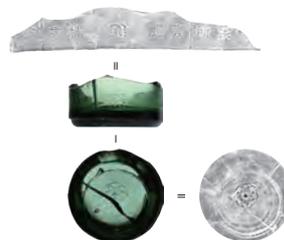
184



182



183



185

DAI NIPPON BREWERY CO. LTD.

CO. Ltd. TRADE MARK



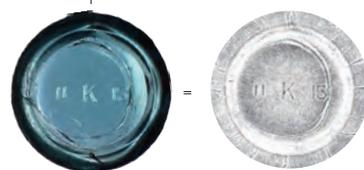
186

NODASHOYU CO. Ltd. TRADE MARK

SARUMI HENRIAU, SIO



188



187



第 49 図 ガラス製品：飲料・調味料瓶（180～188）



第 50 図 ガラス製品：化粧品（189～200）



第 51 図 ガラス製品：化粧品（201～205）、薬品瓶・薬瓶（206～211）



212



213



215



214



216



219



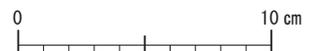
218



217



220



第 52 図 ガラス製品：薬品瓶・薬瓶 (212 ~ 220)



221



222



224



223



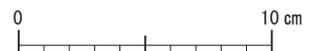
225



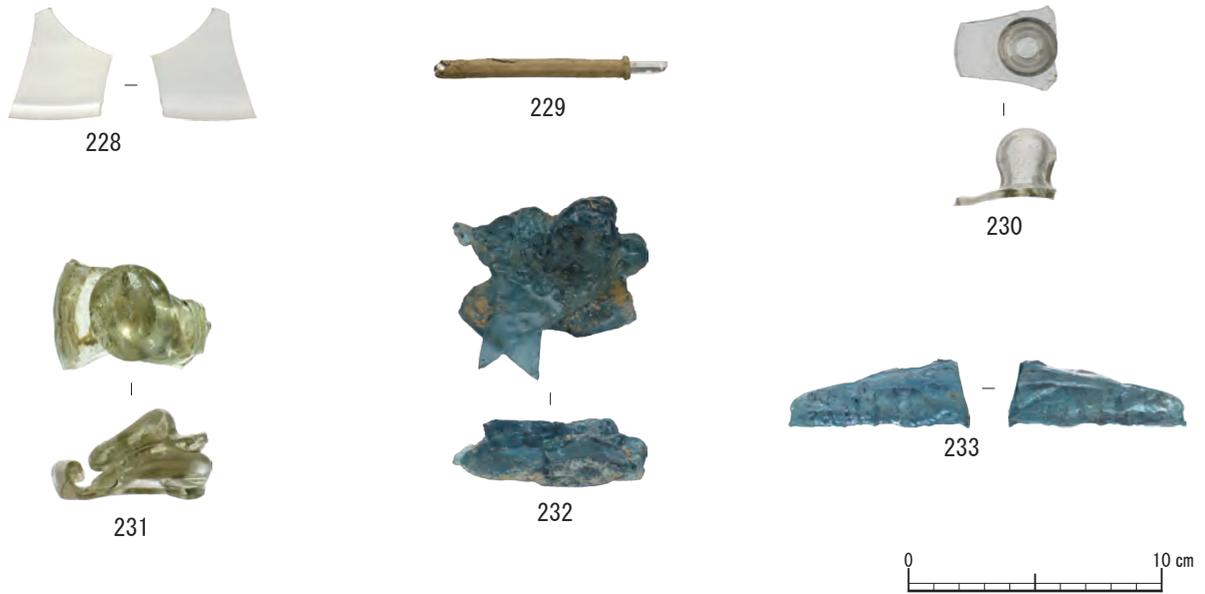
227



226



第 53 図 ガラス製品：薬品瓶・薬瓶（221～224）、文具（225～227）



第 54 図 ガラス製品：日用品（228・229）、蓋（230）、不明（231～233）

第 15 表 ガラス製品計測一覧①

挿図 番号	掲載 番号	分類・ 用途	器種	部位	ふた種類	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 長軸/ 短軸 (cm)	器厚 (cm)	重さ (g)	エンボス の有無 /位置	エンボス / 備考	出土地点
49	180	飲料・ 調味料瓶	瓶	完形	王冠	透明系	2.7	17.1	6.7	—	210.8	有/ ①④⑤	① NOT TO BE REFILLED NO DEPOSIT NO RETURN ④ GB50 ⑤ (メーカーマーク?) ①は正面と裏面側に配置。 ダグラス社 胴部と底面にザラつく加工あり。	屋敷 3 点上 No322 III a 層
	181	飲料・ 調味料瓶	瓶	完形	王冠	茶色系	2.6	17.5	6.7	—	213.4	有/ ①④⑤	① NOT TO BE REFILLED NO DEPOSIT NO RETURN ④ GB50 ⑤ (製瓶メーカー記号?) 胴部と底面にザラつく加工あり。	屋敷 1 点上 No87 表土
	182	飲料・ 調味料瓶	瓶	頸～ 底部	王冠	茶色系	—	—	7.6	—	603.0	有/ ①④⑤	① R O O O O A O O 商標 ④ DAINIPPON BREWERY Co LTD ⑤ (メーカーマーク?)	屋敷 1 点上 No11 表土
	183	飲料・ 調味料瓶	瓶	口縁部	王冠	茶色系	—	—	—	0.4	45.5	有/ ①	① DE MA 大日本麦酒ビール瓶	屋敷 3 点上 No359 III a 層
	184	飲料・ 調味料瓶	瓶	頸～ 底部	王冠	緑色系	—	—	6.6	—	391.0	有/ ⑤	⑤三ツ矢 文字と三枚の矢羽根マーク 明治末から昭和初期頃の底面にのみ陽刻 (ガラス瓶の考古学) より。 気泡が見られる。	屋敷 1 点上 No137 表土
	185	飲料・ 調味料瓶	瓶	底部	王冠	緑色系	—	—	6.2	—	103.9	有/ ④⑤	④造製所泉 O O O 會式下部 (商標) ⑤花のマーク 布引鉦泉サイダー瓶	屋敷 3 点上 No316 III a 層
	186	飲料・ 調味料瓶	瓶	胴部	王冠 or 機械栓	青色系	—	—	—	0.6	154.9	有/ ④	④ TRADE 商標 M O O Co.Ltd. 野田醤油 (キッコーマン) の瓶。 「萬」の文字はデザインされ六角形の図形 に配される。「M」以降は破損の為、文字不明。	屋敷 3 表土
	187	飲料・ 調味料瓶	瓶	底部	王冠 or 機械栓	青色系	—	—	10.4	—	489.0	有/ ④⑤	④ TRADE 商標 MARK NODASHOYU Co.Ltd. ⑤ 11 K 13 (製瓶メーカー記号?) 気泡 (少) が見られる。	屋敷 1 表土
188	飲料・ 調味料瓶	瓶	底部	—	青色系	—	—	6.2	—	102.9	有/ ④⑤	④ SAKURABREWERY CO.LTD ⑤桜花 28 櫻酒造株式会社 気泡 (少) が見られる。	屋敷 3 表土	

エンボスの位置 (無は、残存部に見られないものも含む)  
①: 肩 ②: 側面 ③: 胴部 (上) ④: 胴部 (下) ⑤: 底面 ⑥: 正面 ⑦: 裏面

第 15 表 ガラス製品計測一覧②

挿図 番号	掲載 番号	分類・ 用途	器種	部位	ふた種類	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 長軸/ 短軸 (cm)	器厚 (cm)	重さ (g)	エンボス の有無 /位置	エンボス / 備 考	出土地点
50	189	化粧品	蓋	完形	共栓	透明系	0.9	2.8	—	—	3.4	無	香水瓶の蓋で掲載番号190とセットとなる。蓋の摘み部分は先端丸味のある山形。山は3つ、透明感がある。蓋の栓部分は磨りガラス?で白色である。身に収まる部分の為か艶は無く、ザラつき感がある。最大幅:1.3cm	屋敷外 表土
	190	化粧品	瓶	完形	—	透明系	1.4	3.5	1.9	—	9.4	無	香水瓶で掲載番号189とセットとなる。風化により艶は無い。白濁が見られる。気泡も見られる。	屋敷外 表土
	191	化粧品	瓶	完形	コルク栓	透明系	2.3	5.7	3.9	—	57.3	有 / ④ ⑤	①サハラ香油 ⑤4 丸と4重なる(製瓶メーカー記号?) 香水瓶?気泡が見られる。	屋敷1 表土
	192	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	0.7	5.8	2.9/ 1.4	—	24.3	無	風化による虹化?あり。	屋敷1 点上No437 III a ②層
	193	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	5.0	5.0	5.4	—	87.3	無	底面、放射状にエッジ加工あり。 化粧クリーム瓶	屋敷1 点上No24 表土
	194	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	白色系	3.8	3.6	4.4	—	57.4	無	化粧クリーム瓶	屋敷1 点上No129 表土
	195	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	白色系	3.5	3.7	4.3	—	58.1	有 / ⑤	⑤(マーク) 三角の中に桜花 化粧クリーム瓶	屋敷1 点上No101 表土
	196	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	白色系	3.4	5.4	3.8	—	75.1	有 / ⑤	⑤ラブミー 化粧クリーム瓶	屋敷1 表土
	197	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	白色系	3.2	4.8	2.4	—	54.4	無	化粧クリーム瓶	屋敷3 表土
	198	化粧品	瓶	口~ 底部	スク リユー栓	黒色系	4.2	4.4	4.1	—	77.3	有 / ⑤	⑤A 化粧クリーム瓶	屋敷3 表土
199	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	茶色系	1.5	10.6	4.6/ 2.6	—	85.2	有 / ⑤	⑤PATD. D-92173 20Z	屋敷1 表土	
200	化粧品	瓶	底部	—	緑色系	—	—	4.2/ 2.9	—	71.2	有 / ② ⑤	②ヘチマコロン ⑤登録商標180300 気泡(少)が見られる。	屋敷3 表土	
51	201	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	1.5	9.6	4.7/ 2.8	—	76.7	有 / ⑤	⑤DESPAT 8525 製瓶メーカー記号?	屋敷1 表土
	202	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	1.5	9.6	4.7/ 2.8	—	84.0	有 / ⑤	⑤4533 H A KC・81 Hの中にAの文字 (製瓶メーカー記号?) 風化による虹化が見られる。	屋敷1 表土
	203	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	1.5	9.5	4.8/ 2.9	—	87.4	有 / ⑤	⑤4533 H A KC 8-2 (製瓶メーカー記号?) 風化で虹化が見られ、エンボスなど不明瞭。	屋敷3 表土
	204	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	2.5	17.0	7.2/ 3.5	—	242.9	有 / ⑤	⑤1248(マーク)4	屋敷3 表土
	205	化粧品	瓶	完形	スク リユー栓	透明系	1.3	11.5	6.1/ 2.6	—	134.4	有 / ⑤	⑤-UU. デザインか、文字?天地不明。	屋敷3 表土
	206	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	口~ 底部	コルク栓	透明系	—	7.4	3.7/ 2.2	—	41.0	有 / ②	②前川滲透液 気泡が見られる。	屋敷3 表土
	207	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	透明系	2.1	13.8	6.1/ 4.3	—	98.0	無	正面に目盛と容量の数「10、20」あり。気泡が見られる。	屋敷1 点上No2 表土
	208	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	透明系	2.0	6.0	3.6	—	31.6	有 / ⑤	⑤S星マーク内に「S」文字を配置。 細かい気泡が見られる。	屋敷3 点上No333 III a 層
	209	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	透明系	2.3	7.0	3.5	—	40.3	有 / ⑤	⑤KOBA十字に枠取りした中に「KOBA」文字を横方向で左右に配置。 細かい気泡が見られる。	屋敷3 表土
	210	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	ピンク 色系	10.4	—	4.9/ 3.1	—	108.1	無	側面に目盛あり。気泡が見られる。	屋敷1 表土
	211	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	—	—	透明系	—	残: 3.9	—	—	1.9	無	上端欠損、先端は丸味がある。最大幅:0.8~1.0cm 風化による虹化?あり。	屋敷外 表土
52	212	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	青色系	1.6	6.7	3.2/ 1.9	—	33.2	有 / ⑥⑦	⑥商標 神薬 ⑦○日本 ○薬公司 側面に目盛あり。気泡が見られる。外面ザラつき感あり。	屋敷3 表土

第 15 表 ガラス製品計測一覧③

挿図 番号	掲載 番号	分類・ 用途	器種	部位	ふた種類	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 長軸/ 短軸 (cm)	器厚 (cm)	重さ (g)	エンボス の有無 /位置	エンボス / 備考	出土地点
52	213	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	口～ 底部	コルク栓	コバル ト色系	—	6.3	3.0/ 1.9	0.2	24.0	有/ ⑥⑦	⑥神薬 ⑦順陽堂 気泡(少)が見られる。	屋敷2 表土
	214	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	コバル ト色系	2.0	10.6	5.0/ 3.2	—	104.6	無	側面に目盛りあり。細かい気泡が全体に見ら れる。	屋敷1 表土
	215	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	茶色系	1.5	7.0	3.2/ 1.9	—	26.0	有/ ⑥⑦⑤	⑥ヤマト神薬 ⑦株式会社廣貴堂 ⑤M(メーカーマーク?) 気泡が見られる。	屋敷2 表土
	216	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	茶色系	1.9	9.0	4.4	—	65.0	有/ ⑥⑦	⑥神薬 ⑦株式会社 廣貴堂 大きめの気泡が見られる。	屋敷1 表土
	217	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	茶色系	2.4	10.8	4.5	—	81.5	有/ ⑤	⑤菱形の中にS・52(メーカーマーク?)	屋敷1 表土
	218	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	口～ 底部	コルク栓	茶色系	4.4	19.7	—	—	300.0	無	—	屋敷1 点上No498 III a層
	219	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	スク リユー栓	茶色系	1.7	4.9	2.6	—	23.2	有/ ⑤	⑤(製瓶メーカー記号?) 底面にザラつく加工あり。	屋敷1 表土
220	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形 (蓋つ き)	スク リユー栓	茶色系	キャップ 2.1 —	キャップ 1.5 11.3	キャップ 2.4 5.0	—	—	121.7	有/ ⑤	⑤7-B 金属のキャップが付いており、キャップの上面に 「山南」のデザイン文字あり。マークと見 られる。 正面にエンボスで目盛りと容量あり。 「正」マークは1956(S31)年以降。	屋敷3 表土
53	221	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	口～ 底部	不明	茶色系	2.6	20.2	6.6/ 4.4	—	300.0	有/ ②⑤	②HAMOGLO / MISKIRON / TORGE ⑤250 気泡が全体的に見られる。	屋敷1 表土
	222	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	完形	コルク栓	青色系	3.0	18.3	7.9	—	382.0	有/ ⑤	⑤EA 1	屋敷1 点上No424 III a層
	223	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	底部	—	青色系	—	—	—	0.3	10.2	有/ ⑤	⑤S+縦線(メーカーマーク?) Sは菱形の中に配されている。	屋敷3 表土
	224	薬品瓶・ 薬瓶	瓶	底部	—	緑色系	1.1	—	—	—	7.3	無	10面体、先端は窄み、丸味あり。 気泡が見られる。	屋敷3 表土
	225	文具	瓶	完形	コルク栓	青色系	2.5	5.5	4.9	—	54.3	有/ ⑤	⑤エムテーMD インク瓶 細かい気泡が全体に見られる。	屋敷1 表土
	226	文具	瓶	胴部	—	緑色系	—	—	—	0.4	8.0	無	インク瓶 気泡が見られる。	屋敷3 点上No366 III a層
	227	文具	瓶	完形	スク リユー栓	コバル ト色系	3.4	3.6	4.2	—	48.2	有/ ⑤	⑤NOXZCMA 7 インク瓶	屋敷1 点上No113 表土
54	228	日用品	ラン プ笠	縁	—	白色系	—	—	—	0.2	7.7	無	—	屋敷3 点上No398 III a層
	229	日用品	体温 計	—	—	透明系	—	残: 9.3	—	—	5.5	無	目盛りあり。袋状のケース付き。 ケースには面取りが見られる。材質は不明。 布より強度があり、形状を保っている。 最大幅:0.4cm	屋敷3 表土
	230	不明	蓋	摘み	ガラス蓋	透明系	摘み: 2.5	3.1	—	0.3	23.2	無	細かい気泡が全体に見られる。	屋敷3 表土
	231	不明	蓋	摘み	—	透明系	—	—	—	—	77.9	無	被熱により、変形、溶着が見られる。 手触りザラつく。 ガラス蓋と身?の口縁部が2つ重なってい る。気泡が見られる。	屋敷3 点上No367 III a層
	232	不明	溶着 製品	不明	—	青色系	—	—	—	—	117.5	不明	被熱し溶けて変形、重なっている。 表面は艶なく、丸味を帯びている。 手触りザラつく。	屋敷3 点上No300 III a層
	233	不明	溶着 製品	不明	—	青色系	—	—	—	—	20.9	不明	被熱し表面に艶などはない。 厚みがある。被熱の影響かは不明。 手触りザラつく。	屋敷3 点上No386 III a層

(5) 金属製品 (第 55 図 234 ~ 第 58 図 269)

金属製品の出土点数は屋敷 1 で 157 点、屋敷 2 で 112 点、屋敷 3 で 167 点、屋敷外で 13 点、合計 449 点であった。

屋敷別に出土量の多い順は屋敷 3 > 1 > 2 であった。器種が多種、多岐に及ぶため、素材別と用途別の 2 方向で整理した。素材としては、鉄、青銅、アルミニウム、鉛などが得られた。用途では農具、馬具、漁労具、工具・金物、日用品・その他にグループ分けをした。

以下に出土した金属製品の素材別と用途別の内訳を列記する。

(素材種類)

素材：鉄、青銅、アルミニウム、鉛

(用途別)

農具：へら、鎌、鍬

馬具：蹄鉄

漁労具：漁網

工具・金物：鉋、ヤスリ、鑿 (のみ)、石ノミ、クサビ、滑車、釘類、金具類、鋳、鍔 (かすがい) など

日用品・その他：ヤカン、弁当箱、ナイフ、ハサミ、鉋 (なた)、ベルト、バックル、釦 (ボタン)、ハコ、おもり、簪など

金属製品の出土合計点数 449 点のうち、鉄製品が 316 点 (70%) あり、屋敷 1 と 3 でそれぞれ 145 点出土し、合わせて 290 点の出土である。青銅製品は 29 点 (7%)。アルミニウム製品は 5 点 (1%)。鉛製品は 95 点 (22%) である。出土は、表土と表採からの出土が 426 点 (95%) であった。

鉛製品は 95 点中 94 点が漁網 (カミツブシ) であった。屋敷 2 の SB03 表土よりまとまって出土している。

素材別、用途別の出土状況を第 16・17 表に示した。また、以下に特徴的な遺物について

第 16 表 金属製品 (素材別) 出土点数

素材	種類\調査区	屋敷 1	屋敷 2	屋敷 3	屋敷外	合計	
鉄製品	へら	4				4	
	鎌	4	2	2	1	9	
	鍬	1				1	
	蹄鉄	8	1	2	1	12	
	鉋 (かんな)	2				2	
	ヤスリ			1		1	
	鑿 (のみ)	1	1			2	
	石ノミ	1				1	
	クサビ	2				2	
	滑車	1				1	
	釘	角形	3				3
		丸形	22	3	70	4	99
		不明	1			2	3
	鍔 (かすがい)			1	1		2
	鋳		1				1
	小判カン				1		1
	ボルト		1				1
	歯車				1		1
	ナイフ		1				1
	ハサミ				1		1
	バリカンの刃		1				1
	鉋 (なた)					1	1
	刃物類				4		4
	おもり		3	1			4
	ハコ		1				1
	ハコの蓋		1				1
	王冠				1		1
	杭かべグ		1				1
	釦 (ボタン)				9		9
	蝶番		1				1
	固定金具		4		1		5
支持金具		1				1	
コーナー金具		3				3	
不明		76	6	51	2	135	
小計		145	15	145	11	316	
青銅製品	鍔			1		1	
	固定金具			2		3	
	Cカン			1		2	
	ナット		1			1	
	釦 (ボタン)			3		3	
	把手		1			1	
	バックル			6		6	
	フック			1		1	
	ベルト		1			1	
	リング・リングハンドル		1		1	2	
	薬莖				1	1	
	不明		3	1	3		7
	小計		8	2	18	1	29
アルミニウム製品	ヤカン			1		1	
	弁当箱蓋		1	1		2	
	缶				1	1	
	バックル		1			1	
小計		2	0	2	1	5	
鉛製品	漁網 (カミツブシ)		94			94	
	不明		1			1	
	小計		0	95	0	0	95
不明	簪		1		1	2	
	固定金具		1			1	
	不明			1		1	
	小計		2	0	2	0	4
総計		157	112	167	13	449	

て略記する。

鉄製品の角釘が3点、屋敷1で出土している。その他に蹄鉄が屋敷1で8点、屋敷2は1点、屋敷3は2点、屋敷外1点、あわせて12点出土している。その内4点を図化した。(238、239、240、241)。何れも錆膨れ、亀裂があり、捻じれているもの(239)も見られた。

鉛製品では漁網(カミツブシ)、94点中1点を図化した。242は長方形を縦に二つ折りした形状で、両端は密着し、押さえた痕も見られる。折り口は約0.2cmの隙間がある。長さ4.9cm、幅0.9cm、重さ13.5g。他の93点も全て完形で、ほぼ同じ大きさ、形状である。

素材不明の簪が2点出土している。265は頭部がスプーン状、竿部は六角形で先端は尖る。女性用の本簪である。長さ11.7cm、頭幅1.1cm、重さ12.5g。屋敷1表土より出土。266も頭部はスプーン状で竿部は六角形、先端は尖る。3箇所折れ、表面は剥がれが見られる。女性用の本簪である。長さ(折れ修正)12.2cm、頭幅1.5cm、重さ5g。屋敷3のⅢa層より出土。

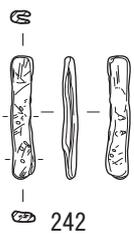
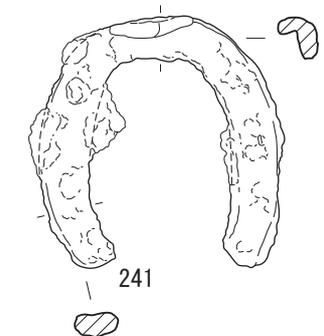
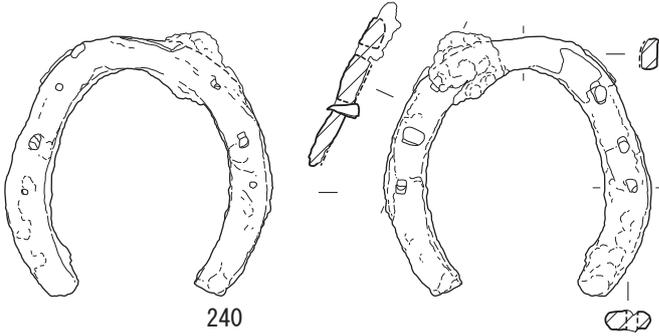
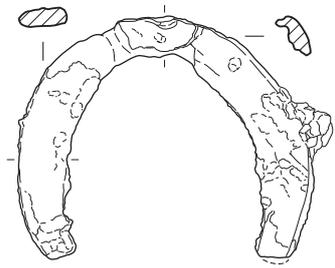
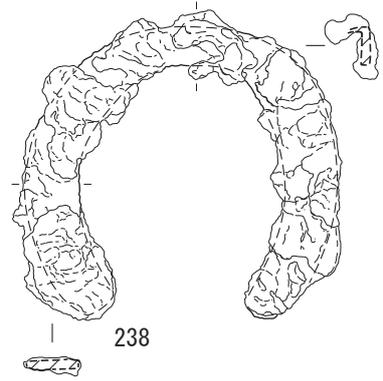
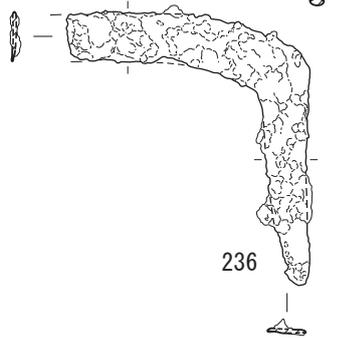
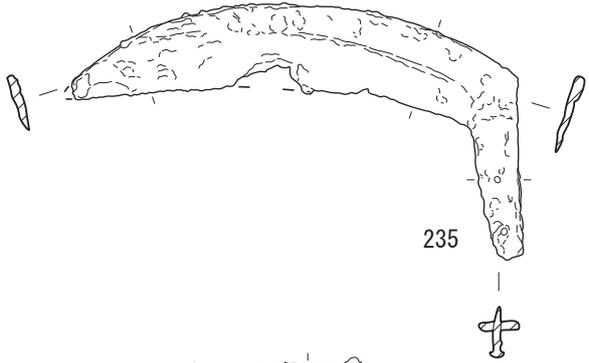
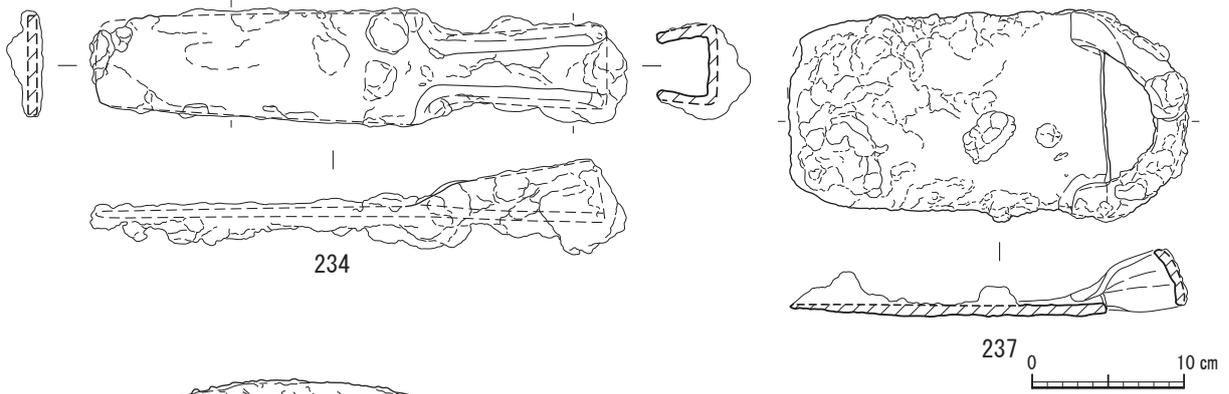
金属製品は、36点を図化し、法量、出土地点等は、第18表に示した。

第17表 金属製品(用途別)出土点数

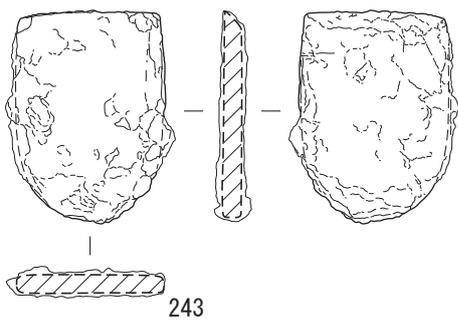
用途	種類\調査区	屋敷1	屋敷2	屋敷3	屋敷外	合計
農具	ヘラ	4				4
	鎌	4	2	2	1	9
	鍬	1				1
	小計	9	2	2	1	14
馬具	蹄鉄	8	1	2	1	12
漁労具	漁網 (カミツブシ)	0	94	0	0	94
工具・金物	鉋(かんな)	2				2
	ヤスリ			1		1
	鑿(のみ)	1	1			2
	石ノミ	1				1
	クサビ	2				2
	滑車	1				1
	釘	23	3	70	6	102
	角釘	3				3
	鋸(かすがい)		1	1		2
	鋌	1				1
	Cカン	1		1		2
	小判カン			1		1
	ナット		1			1
	ボルト	1				1
	歯車			1		1
	把手	1				1
	蝶番	1				1
	フック			1		1
	杭かべぐ	1				1
	固定金具	6		3		9
	支持金具	1				1
	コーナー金具	3				3
	小計	49	6	79	6	140
	日用品・その他	ヤカン			1	
弁当箱(蓋)		1		1		2
ナイフ		1				1
ハサミ				1		1
バリカンの刃		1				1
鉋(なた)					1	1
刃物類				4		4
鍵				1		1
ベルト		1				1
バックル		1		6		7
釦(ボタン)				12		12
簪		1		1		2
ハコ		1				1
ハコの蓋		1				1
おもり		3	1			4
リング・リングハンドル		1		1		2
王冠				1		1
缶				1	1	
葉莢				1	1	
小計	12	1	29	3	45	
不明	不明	79	8	55	2	144
総計		157	112	167	13	449

第18表 金属製品計測一覧①

挿図番号	掲載番号	材質種類	用途	器種	部位	器厚(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	観察	出土地点
55	234	鉄製品	農具	ヘラ	刃部	0.40	21.20	4.70	285.20	錆膨れが著しい。	屋敷1表土
	235	鉄製品	農具	鎌	刃部	0.50	17.60	10.30	82.00	錆化がすすんでいる。刃部の一部欠ける。	屋敷2表土
	236	鉄製品	農具	鎌	欠損	0.25	10.90	9.60	40.60	刃先欠損。錆膨れ。	屋敷1表土
	237	鉄製品	農具	鍬	刃部	0.70	26.40	14.10	1242.50	錆膨れが著しい。	屋敷1表土
	238	鉄製品	馬具	蹄鉄	完形	2.10	12.30	12.95	213.10	錆膨れ。	屋敷1点上No120表土
	239	鉄製品	馬具	蹄鉄	完形	0.80	9.70	12.30	141.60	U字の逆形。楕円状。錆膨れ、亀裂が著しい。	屋敷3表土



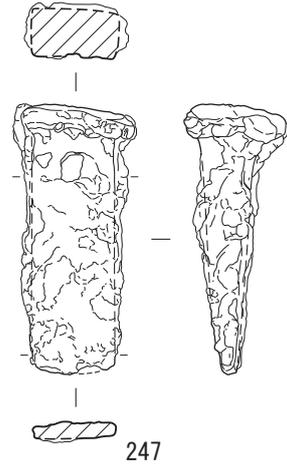
第 55 図 金属製品：農具（234～237）、馬具（238～241）、漁労具（242）



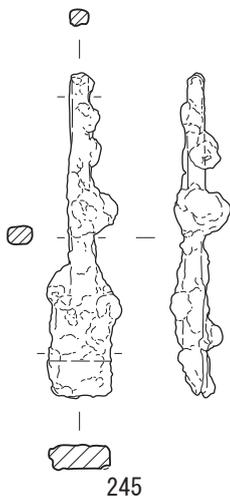
243



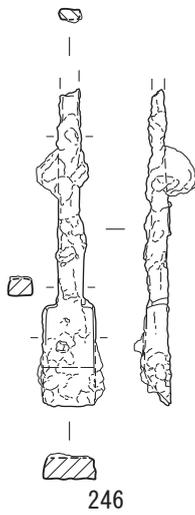
244



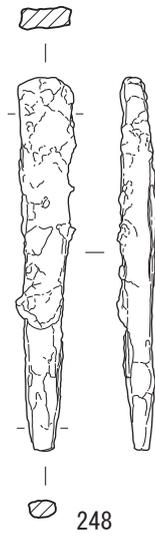
247



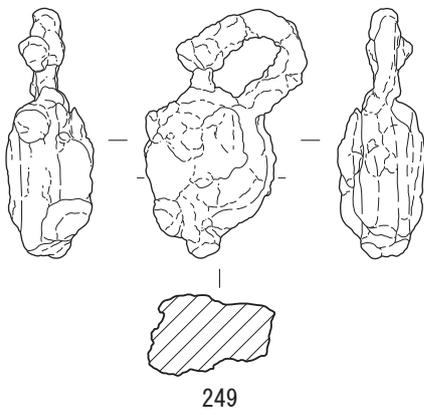
245



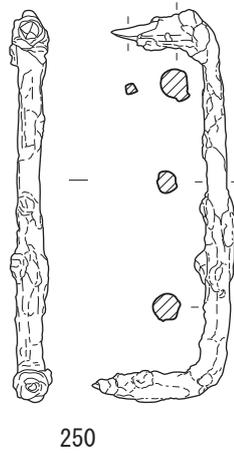
246



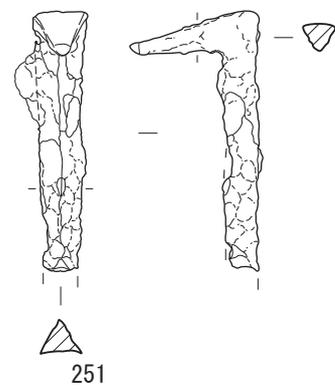
248



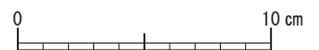
249



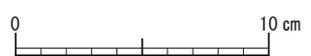
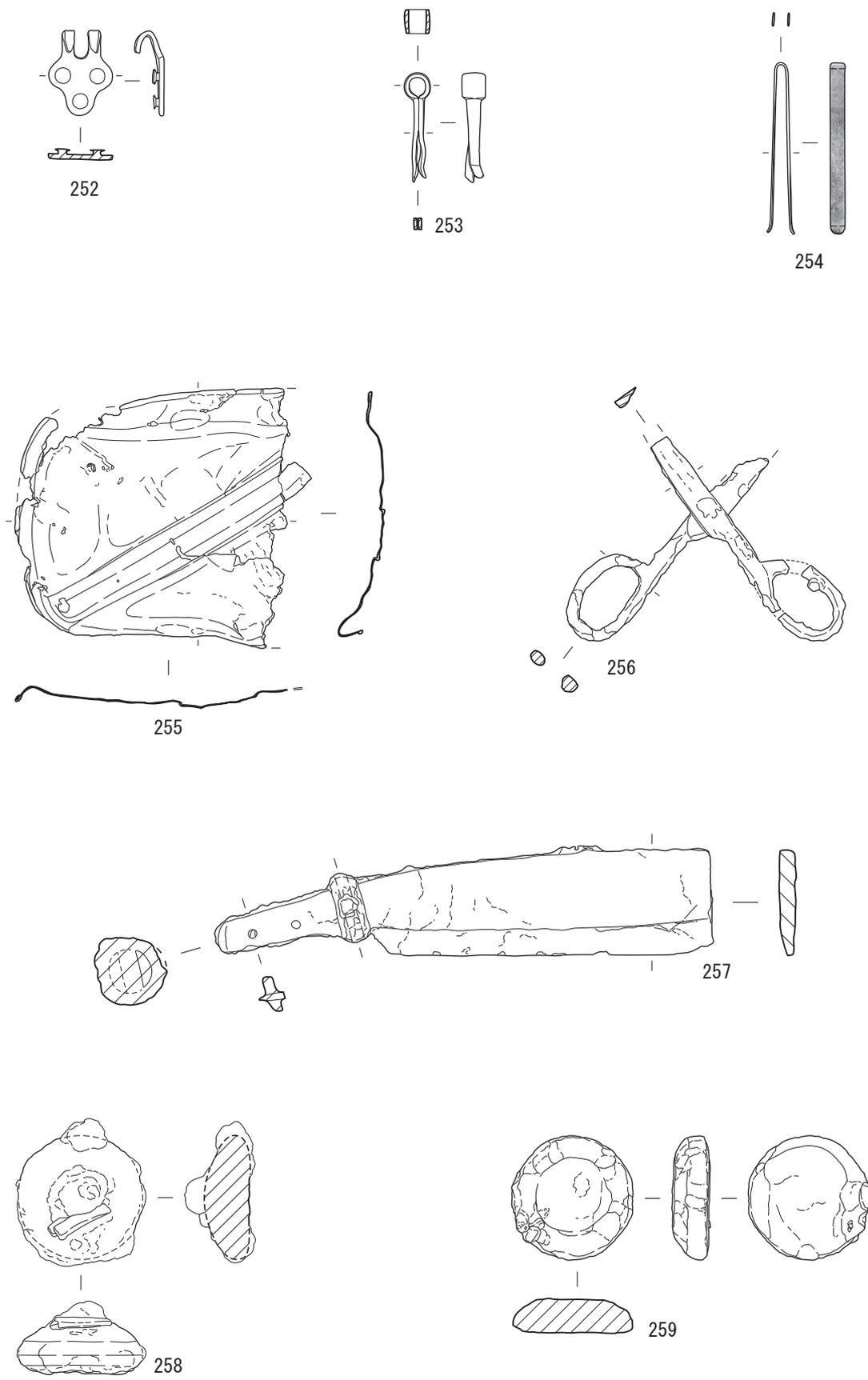
250



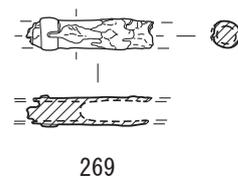
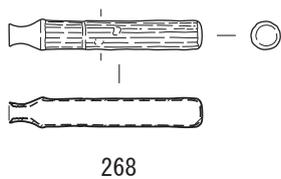
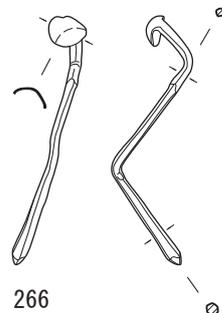
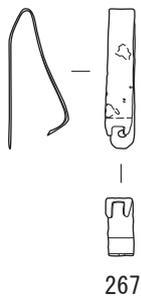
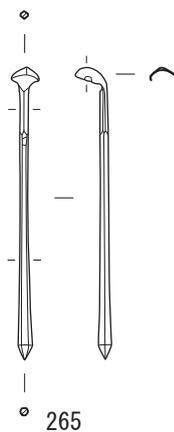
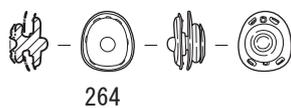
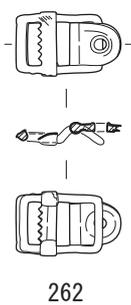
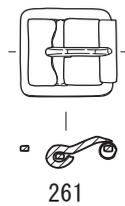
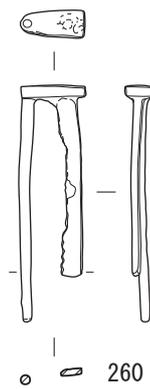
251



第 56 図 金属製品：工具・金物（243～251）



第 57 図 金属製品：工具・金物（252～254）、日用品・その他（255～259）



第 58 図 金属製品：日用品・その他（260～266）、用途不明（267～269）

第18表 金属製品計測一覧②

挿図 番号	掲載 番号	材質種類	用途	器種	部位	器厚 (cm)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	観 察	出土地点
55	240	鉄製品	馬具	蹄鉄	完形	0.85	10.35	10.55	125.60	一部、錆膨れ。錆が剥がれ、基部露出部あり。	屋敷1 表土
	241	鉄製品	馬具	蹄鉄	完形	1.50 0.90	10.00	10.10	152.50	U字の逆形。上部は平ら。 錆膨れ、亀裂が著しい。	屋敷2 点上 No542 表土
	242	鉛製品	漁労具	漁網 (カミツブシ)	完形	0.55	4.90	0.90	13.50	表面に工具痕残る。	屋敷2 点上 No545 表土
56	243	鉄製品	工具・ 金物	鉋 (カンナ)	刃部	1.50	8.50	6.70	201.40	錆膨れが著しい。	屋敷1 表土
	244	鉄製品	工具・ 金物	ヤスリ	—	0.60	8.90	2.40	25.00	錆化著しい。	屋敷3 表土
	245	鉄製品	工具・ 金物	鑿 (ノミ)	完形?	2.40	12.95	2.95	75.50	錆化著しい。	屋敷2 点上 No544 表土
	246	鉄製品	工具・ 金物	鑿 (ノミ)	欠損	0.90	12.65	2.60	71.70	錆膨れ、剥がれ、亀裂あり。	屋敷1 表土
	247	鉄製品	工具・ 金物	石ノミ	ほぼ 完形	4.20	10.80	4.85	378.00	錆膨れ、剥がれ、亀裂あり。	屋敷1 表土
	248	鉄製品	工具・ 金物	クサビ	完形	0.90	14.90	2.20	131.50	錆化がすすんでいる。 錆膨れ、剥がれ、亀裂あり。	屋敷1 表土
	249	鉄製品	工具・ 金物	滑車	完形	3.45	9.90	6.50	146.50	錆膨れが著しい。	屋敷1 表土
	250	鉄製品	工具・ 金物	錠 (かすがい)	完形	1.50	15.70	5.80	87.50	錆化著しい。	屋敷3 表土
	251	鉄製品	工具・ 金物	錠 (かすがい)	不明	1.65	10.30	5.30	88.50	錆化著しい。	屋敷2 点上 No544 表土
57	252	青銅製品	工具・ 金物	フック	—	1.50	4.25	3.20	21.00	掛け金具。3ヶの固定用ネジ付。	屋敷3 表土
	253	青銅製品	工具・ 金物	固定金具	完形	0.20	5.50	1.30	13.20	頭部円形から足?が2つに割れる形状。 Uピン状?先端歪む。	屋敷1 III a ②層
	254	不明	工具・ 金物	固定金具	完形	0.10	8.50	0.75	10.70	ピンセット状。両先端は丸味があり、外側に 反る。メッキ?メッキが剥がれている。 BESTのエンボス加工あり。	屋敷1 点上 No5 表土
	255	アルミ ニウム	日用品・ その他	弁当箱	蓋	0.10	14.60	12.85	34.10	劣化が著しい。箸入れ?方形の窪みあり。	屋敷1 表土
	256	鉄製品	日用品・ その他	ハサミ	—	刃部:0.5 取手:0.8	10.20	13.80	67.50	錆化が進み、破片多数。 刃先欠損。	屋敷3 点上 No196 III a 層
	257	鉄製品	日用品・ その他	鉋 (ナタ)	刃部	0.90	24.70	5.50	367.50	刃部ほぼ完形。錆化、亀裂あり。	屋敷外 1層
	258	鉄製品	日用品・ その他	おもり	完形?	3.50	7.30	6.40	339.50	饅頭形。錆膨れがあり側に漁網(カミツブシ) が付着。	屋敷2 点上 No544 表土
	259	鉄製品	日用品・ その他	おもり	完形	1.80	6.25	6.05	285.50	饅頭形。	屋敷1 表土
	58	260	青銅製品	日用品・ その他	鍵	—	1.15	9.45	2.55	28.00	二股に分かれた形状。一方に刻み目が見られ る。
261		青銅製品	日用品・ その他	バックル	完形	0.90	3.85	3.50	14.50	ベルトを通す方形穴が2つ。完形。	屋敷3 表土
262		青銅製品	日用品・ その他	バックル	—	0.30	4.20	2.60	12.00	ベルトを通す方形穴が2つ。穴を分ける区切 り部分に滑り止め?山形に刻みあり。完形。	屋敷3 表土
263		アルミ ニウム	日用品・ その他	バックル	欠損	0.10	4.80	2.00	2.80	金メッキ?	屋敷1 表土
264		青銅製品	日用品・ その他	釦 (ボタン)	完形	1.50	2.35	2.10	9.50	中央に軸があり、素材を挟む?使用方。	屋敷3 表土
265		不明	日用品・ その他	簪	完形	1.45	11.65	頭幅: 1.10	12.50	スプーン型、女性用の本簪。	屋敷1 点上 No7 表土
266		不明	日用品・ その他	簪	完形	頭部:0.1 竿部:0.5	9.9 (12.2)	頭幅: 1.50	5.00	頭:匙形、胴:六角形 女性用本簪、3ヶ所折れる。	屋敷3 点上 No285 III a 層
267		青銅製品	用途不明	不明	完形	0.10	5.60	1.00	10.20	二つに折れた形状。孔が1つ。先端は丸。	屋敷1 表土
268		青銅製品	用途不明	不明	—	—	7.65	1.15	22.00	空洞、内側にねじ山あり。	屋敷3 表土
269		不明	用途不明	不明	—	—	5.05	1.30	12.00	筒状。両端破損。中に残存物あり。	屋敷3 表土

(6) 銭貨 (第 59 図 270 ~ 275)

銭貨は寛永通宝が 3 点、一銭 3 点、十銭 1 点、十円 1 点、1 セント 1 点の合計 9 点が得られている。全て完形であった。その内、寛永通宝は屋敷 1、屋敷 2、屋敷 3 で各 1 点ずつの出土である。屋敷外から銭貨の出土はなかった。

「一銭」は 3 点が出土した。屋敷 2 で 1 点 (青銅製)、屋敷 3 で 2 点 (青銅、アルミニウム製) である。「十銭」は屋敷 3 で 1 点 (アルミニウム製) 出土している。「一銭」と「十銭」どちらもアルミニウム製は屋敷 3 で出土している。

第 19 表 銭貨出土点数

銭種/材質	屋敷 1	屋敷 2	屋敷 3	屋敷外	総計
寛永通宝	1	1	1		3
一銭/青銅		1	1		2
一銭/アルミニウム			1		1
十銭/アルミニウム			1		1
十円/青銅			1		1
1 セント/青銅			1		1
合計	1	2	6	0	9

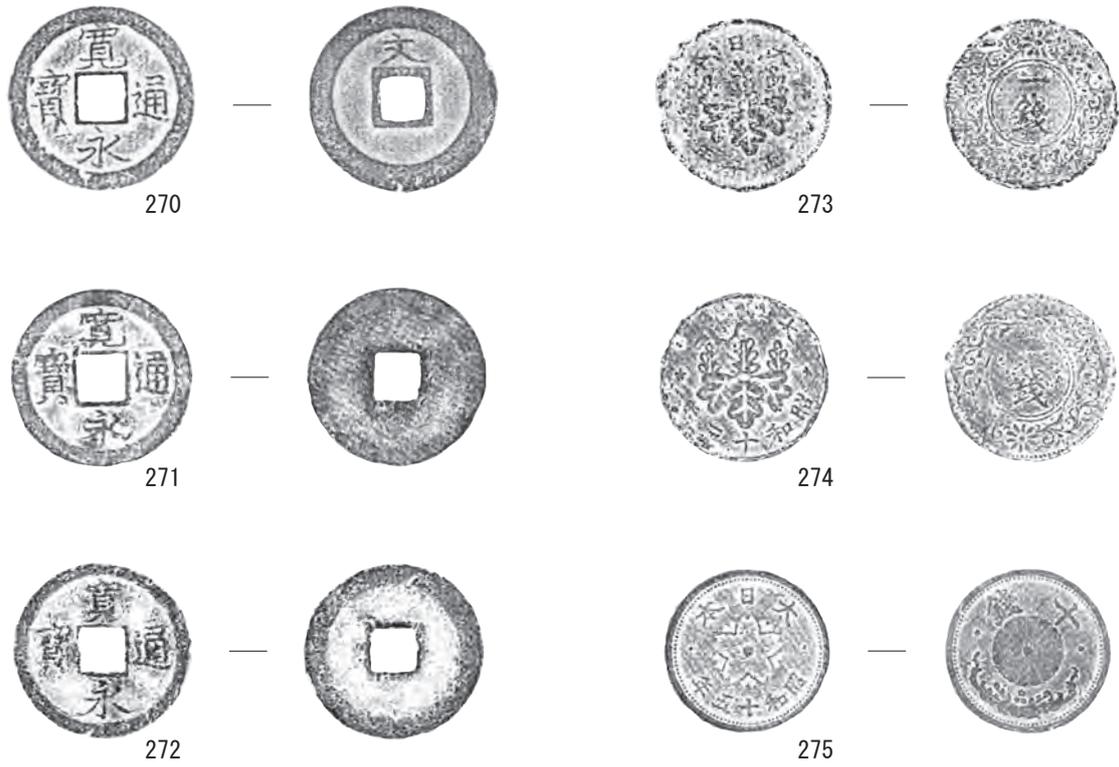
「桐一銭」は、大正 5 年から昭和 13 年ごろまで製造され、アルミニウム貨は戦中から戦後にかけて、材料不足から製造されていたようである。

寛永通宝は初鑄年 1636 年とされ、江戸時代を通じて鑄造されていた。いわゆる「古寛永」は 1668 年頃まで鑄造され、その後 1669 年以降に鑄造されたものを「新寛永」と称している。寛永通宝は明治中頃まで使用されていたようである。今回得られた寛永通宝 (270 ~ 272) は全て、「新寛永」と見られる。

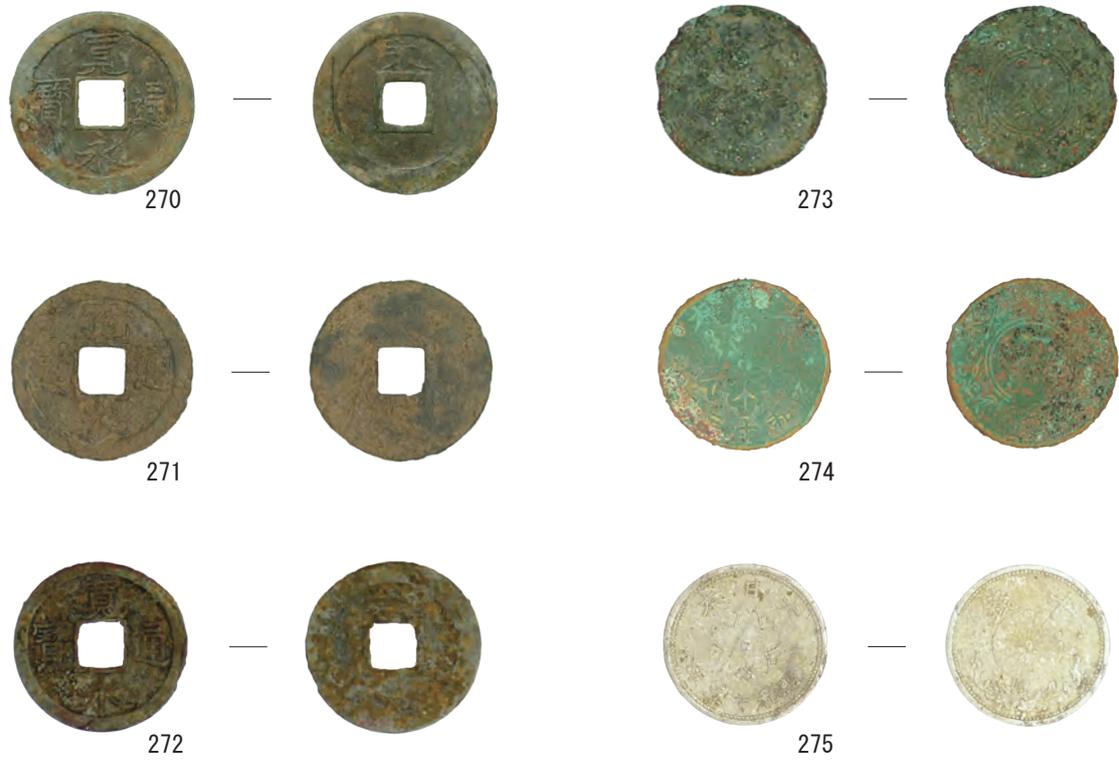
270 は背に「文」の文字があり、1688 (寛文 8) 年に鑄造された「文銭」と称されているものと見られる。6 点を第 59 図 (図版 13) に示した。個々の法量、出土地点などは第 20 表に略記する。

第 20 表 銭貨計測一覧

挿図番号	番号	銭種	背文	完/破	器厚 (cm)	外径 (cm)	孔長 (cm)	重量 (g)	備考	出土地点
59	270	寛永通宝	文	完形	0.12	2.49	0.58	3.00	楷書 青錆は見られるが、表裏面とも縁、文字、明瞭に確認できる。	屋敷 1 点上 No503 III a ②層
	271	寛永通宝	無文	完形	0.11	2.40	0.61	2.15	楷書 裏面、摩耗し縁の段差がほとんど無い。	屋敷 3 点上 No274 III a 層
	272	寛永通宝	無文	完形	0.10	2.31	0.61	2.10	楷書 縁の一部に折れが見られる。裏面縁、摩耗し浅い。	屋敷 2 点上 No508 III a 層
	273	桐一銭	—	完形	0.14	2.30	—	3.25	表面：大日本、桐、桜、大正〇年 裏面：菊、唐草、一銭 材質：青銅 錆が進み、縁に欠け確認できる。	屋敷 2 表土
	274	桐一銭	—	完形	0.10	2.25	—	2.83	表面：大日本、桐、桜、昭和十三年 裏面：菊、唐草、一銭 材質：青銅 錆などで、両面荒れる。縁、文字、模様の一部欠ける。	屋敷 3 表土
	275	十銭	—	完形	0.17	2.19	—	1.50	表面：大日本、桜花、点、昭和十五年 裏面：十銭、菊花、点、桐 材質：アルミニウム 錆など無し。文字、模様明瞭。側面の刻みも明瞭に確認できる。	屋敷 3 表土



第 59 図 錢貨 (270 ~ 275)



図版 13 錢貨 (270 ~ 275)

(7) 石製品など (第 60 図 276 ~ 第 62 図 284)

石製の遺物を本項でまとめて報告する。今回の調査で石製品・石材は47点出土した。種類は硯、石臼、砥石が製品として確認でき、概ね八所集落で生活が営まれていた時代に利用されたものと推定される。上記以外にはチャートの剥片が1点出土している。以下に種類ごとに詳細を記載する。

276 ~ 278 は硯である。

276 は白色を呈す砂岩製で全形が残存しているが、摩耗が激しく周縁部分がない。法量は長さ 13 cm、幅 6.0 cm、厚さ 1.8 cm である。

277 は全体が赤褐色を呈し、緻密な石材でいわゆる赤間石と推察され、陸部分が残存している欠損品である。全体はよく研磨されており肌触りがよく重量感がある。裏面には「吉」の文字が線刻される。法量は残存値で長さ 7.7 cm、幅 7.3 cm、厚さ 1.9 cm である。

278 は灰色を呈す。砂岩製で池部分や縁は摩耗して欠損している。裏面には「名 ヨシ」の文字が線刻されるが擦痕が多く確認しづらい。法量は残存値で長さ 11.4 cm、幅 5.9 cm、厚さ 2.0 cm である。

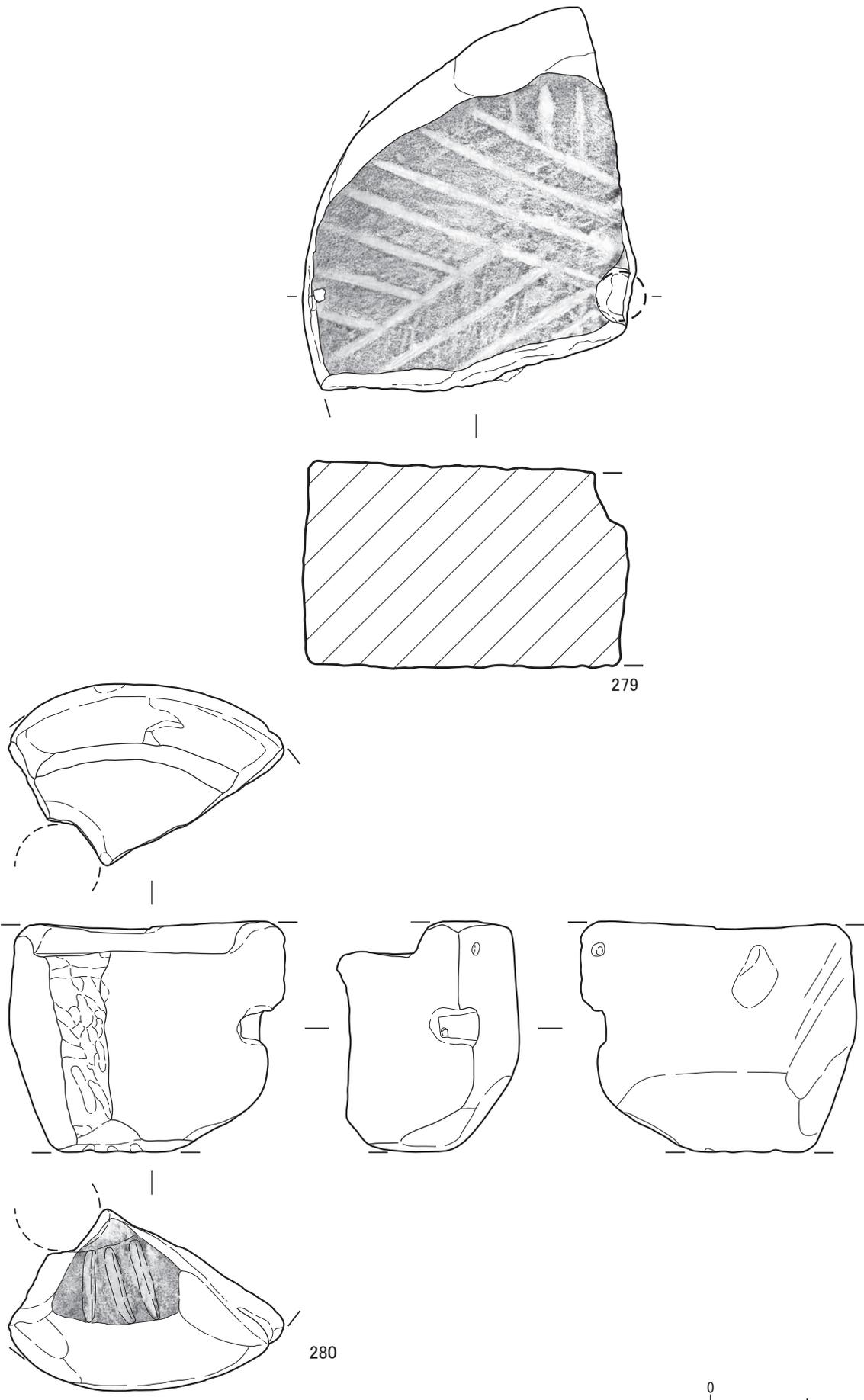
279・280 は石臼である。

279 は軟質の砂岩製 (ニービ) で全体の 4 分の 1 が残存している。平面形状から下臼と推察される。目立ては比較的粗く溝は深いが表面は風化によって摩耗している。中心部に約 2.5 cm の軸受けが穿孔される。法量は残存値で長径 20.1 cm、厚さ 10.9 cm である。

280 は軟質の砂岩製 (ニービ) の上臼である。全体の 8 分の 1 程度の残存と推察される。上面には高さ 1.5 cm の縁があり、推定径 4.4 cm の物入が穿孔される。穿孔部分は工具痕が明瞭に残る。側面には挽木を装着するホゾ穴が穿孔される。279 と同じく全体的に風化して摩耗している。法量は残存値で長径 14.5 cm、厚さ 12.1 cm である。



第 60 図 石製品 : 硯 (276 ~ 278)



第 61 図 石製品：臼 (279・280)

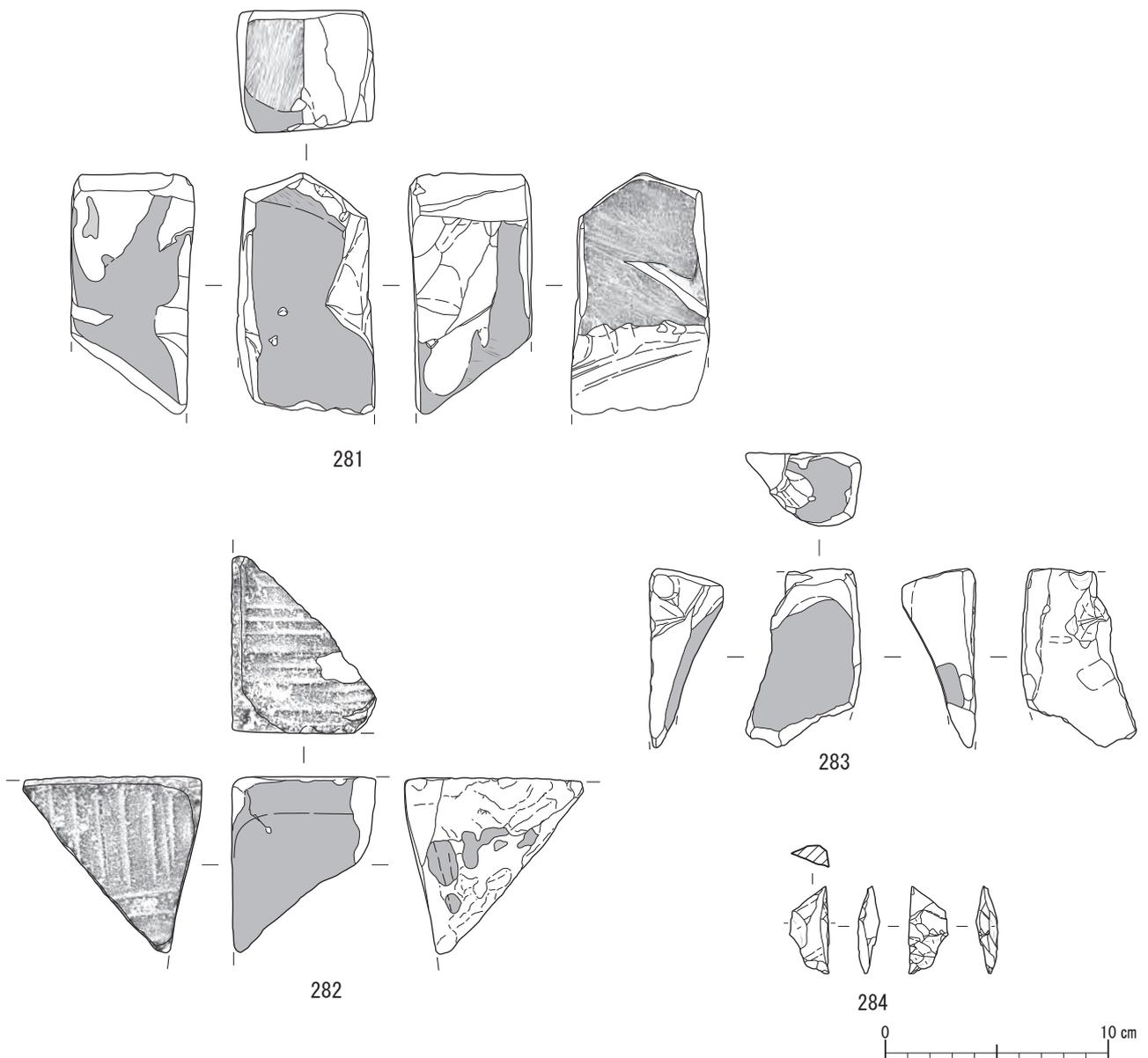
281～283は砥石である。

281は横断面が略正方形の置き砥石で、完形時は角柱状を呈していたと推察される。中央部は研ぎ減りし、やや内湾する作業面を有するが、左右側面も磨面の状況から使用面と捉えられる。法量は残存値で長さ10.9 cm、幅6.2 cm、厚さ5.6 cmである。

282は破片だが上面と左側面の状況から角柱状の置き砥石と考えられる。使用面は研ぎ減りして内湾する。使用面以外の部分は母岩から切り出した際の工具痕が明瞭に残る。法量は残存値で長さ8.0 cm、幅6.5 cm、厚さ8.0 cmである。

283は281・282に比べ小型の砥石である。作業面は上記2点と同じく研ぎ減りし、大きく内湾する。上面から下面に至る穿孔が見られ、やや摩耗していることから紐通しして携帯していた可能性が高い。左側面は欠損しているが、元は角柱状の置き砥石であったものを研ぎ減りにより胴部が薄くなったために携帯用に転用したと考えられる。法量は残存値で長さ8.1 cm、幅5.2 cm、厚さ3.3 cmである。

284はチャート製の剥片である。縦長の形状で、左側面に鋭部が存在するが明確な剥離痕は見られない。明確な意匠をもって製作された剥片であるか判然としないが、注意すべき石材として掲載する。



第 62 図 石製品など：砥石（281～283）、剥片（284）

(8) プラスチック製品 (第 63 図 285 ~ 288)

プラスチック製品の出土数は、屋敷 1 で 3 点、屋敷 2 で 1 点、屋敷 3 で 9 点、屋敷外で 3 点の合計 16 点で、全て円形の釦 (ボタン) であった。

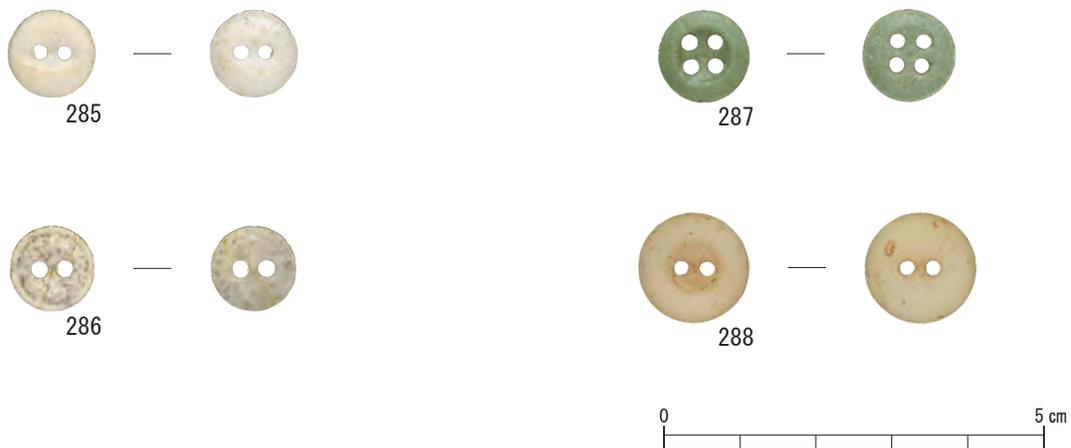
色調は白色 (10 点)、黄白色 (1 点)、乳白色 (1 点)、緑色 (4 点) が得られている。釦 (ボタン) の穴数で分けると 2 穴 10 点、4 穴 6 点である。釦の糸通し穴に猫の目状に切り込みを入れた猫目穴と呼称される遺物が 3 点 (第 63 図 285、通し No70115、70159) 見られた。286 の色調は乳白色で、2 穴。亀裂と表裏面には斑状に黒色の着色が見られる。

計測値は次のとおりである。外径は 1.1 ~ 1.5cm で 1.2cm の 10 点が最多であった。重さは 0.5 ~ 1.5 g で 0.6 g が 6 点で最多で、0.5 g は 5 点を数えた。外径 1.2cm で重さ 0.6 g を測るものは 5 点であった。釦 (ボタン) の大きさ、色などは使用していた物に由来するため個体差はほとんど無く、全て規格内の工業製品である。

第 63 図に 4 点を図化し、第 21 表に計測値、出土地点をまとめた。

第 21 表 プラスチック製品 釦 (ボタン) 計測一覧

掲載番号	通し番号	完/破	外径 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	穴数	色調	備考	出土地区/層序	
	70102	完形	1.1	0.3	0.5	2 穴	白色		屋敷 2	表土
	70119	完形	1.1	0.3	0.5	2 穴	白色		屋敷 3	表土
	70115	完形	1.1	0.3	0.6	2 穴	白色	猫目穴	屋敷 3	I 層 点上 No299
第 63 図 286	70003	完形	1.2	0.3	0.5	2 穴	乳白色		屋敷 1	III a ②層 点上 No439
	70118	完形	1.2	0.3	0.5	4 穴	白色		屋敷 3	表土
	70123	完形	1.2	0.3	0.5	2 穴	緑色		屋敷 3	III a 層 点上 No225
第 63 図 285	70002	完形	1.2	0.3	0.6	2 穴	白色	猫目穴	屋敷 1	III a ②層 点上 No444
	70120	完形	1.2	0.3	0.6	4 穴	白色		屋敷 3	表土
	70161	完形	1.2	0.3	0.7	4 穴	白色		屋敷外	表土
	70159	完形	1.2	0.3	0.6	2 穴	白色	猫目穴	屋敷外	表土
第 63 図 287	70116	完形	1.2	0.3	0.6	4 穴	緑色		屋敷 3	III a 層 点上 No400
	70160	完形	1.2	0.3	0.7	4 穴	白色		屋敷外	表土
	70121	完形	1.2	0.3	0.6	4 穴	白色		屋敷 3	III a 層 点上 No211
	70004	完形	1.3	0.3	0.7	2 穴	緑色		屋敷 1	表土
	70122	完形	1.3	0.3	0.7	2 穴	緑色		屋敷 3	III a 層 点上 No219
第 63 図 288	70117	完形	1.5	0.4	1.5	2 穴	黄白色		屋敷 3	表土



第 63 図 プラスチック製品 : 釦 (ボタン) (285 ~ 288)

(9) 瓦 (第 64 図 289 ~ 291)

瓦は全て明朝系であった。器種は丸瓦、平瓦のみで軒瓦の出土はなかった。色調は赤褐色から橙色までである。

瓦類は「第 3 章 3 節遺構の八所集落期の遺構 (Ⅲ層)」で述べている様に、屋敷 1 の SU01 から出土した瓦は、重量のみを現地で計量し、おおよその出土量と重さの平均値を把握した。

ここでは、屋敷 1 の SU01 及びその他の位置から得られた資料も含めて観察事項を述べる。

第 22、23 表は全出土点数を反映させたものではないが、おおよその傾向をつかむために掲載した。瓦類の大半は屋敷 1、またその半数近くが表土からの出土である。

第 22 表 瓦出土点数 (参考)

調査区		屋敷 1			屋敷 2			屋敷 3			屋敷外			合計
種類	部位	上端~ 下端	端部	胴部	上端~ 下端	端部	胴部	上端~ 下端	端部	胴部	上端~ 下端	端部	胴部	
	明朝系	丸瓦	27	8	8					3	3		2	
平瓦		15	63	105		8	17	1	17	10		9	5	250
不明				18						4		1	8	31
合計		42	71	131	0	8	17	1	20	17	0	12	13	332
		244			25			38			25			

完形もしくは上端から下端まで残存した資料については計測を行った。その計測値より、丸瓦、平瓦それぞれの平均値を算出できた。これは前記した現地での計量から算出した計測値を補完できるのであった。

計測値は第 24 表に示し、下記に図示した遺物の観察を略記する。

289 は、凸面上角に漆喰痕が見られる。ヘラナデ調整痕が明瞭。凹面、布目痕が明瞭で、布の重なり、もしくは縫い目が見られる。焼成良好。胎土密。橙色 (2.5YR6/8)。

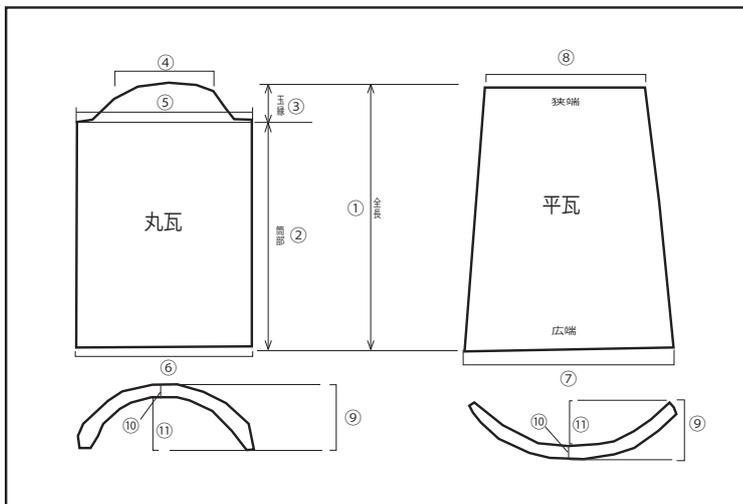
290 は、凸面ヘラナデ調整痕が明瞭。凹面もナデ調整され、布目痕は不明瞭だが、布の重なりもしくは縫い目が見られる。焼成良好。胎土密。色調：橙色 (2.5YR7/8)。

291 は、凸面に文字らしきものが見られるが、破片のため詳細は不明である。凸面はヘラナデ調整

第 23 表 瓦出土割合 (参考)

調査区	層序	出土 点数	出土割合	
屋敷 1	表土	111	45.0%	全体の 74.0%
	Ⅲ a ②層	2		
	Ⅲ a 層	62	54.0%	
	Ⅲ b ①層	1		
	Ⅲ層	67		
	土壁-3層	1	1.0%	
小計		244		
屋敷 2	表土	13	52.0%	全体の 7.5%
	Ⅲ a 層	10	48.0%	
	Ⅲ層	2		
小計		25		
屋敷 3	表土	38		全体の 11.0%
屋敷外	表採・不明	2	88.0%	全体の 7.5%
	表土	20		
	SF01-1層	1	4.0%	
	I層	2	8.0%	
小計		25		
総計		332	100%	

凡例 \_ 瓦の計測箇所

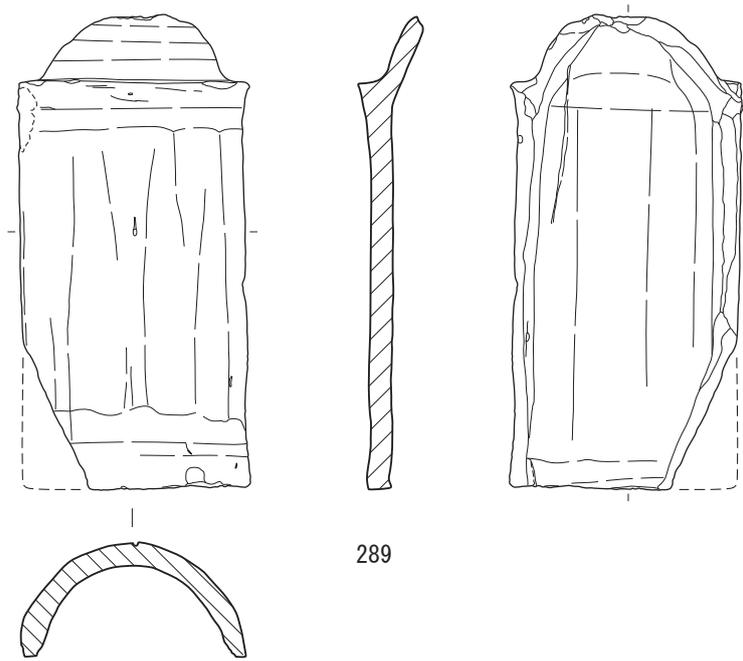


され、滑らかである。凹面も丁寧なナデ調整が施される。布目は、布の重なりもしくは縫い目が見られる。焼成良好。胎土密。色調：明赤褐色（2.5YR5/6）。

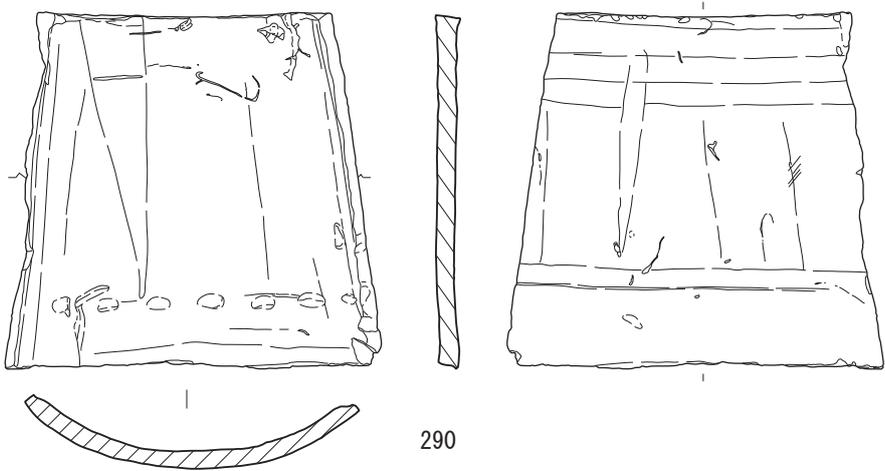
第24表 瓦計測一覧

掲載番号	通し番号	器種	部位	① 全長	丸瓦：玉縁 (cm)			丸瓦：筒部 / 平瓦 (cm)						重さ (g)	備 考
					③ 長さ	④ 幅	面取 幅	②長さ	⑤上幅 / ⑦広端幅	⑥下幅 / ⑧狭端幅	⑨ 高さ	⑩ 厚み	⑪ 深さ		
第64図 289	70049	丸瓦	玉縁～下端	31.6	4.0	7.6	2.5	27.6	15.3	—	7.8	1.5	6.2	1,436.0	外面に漆喰
	70018	丸瓦	玉縁～下端	32.2	3.9	8.6	2.2	28.3	14.1	15.4	7.8	1.6	6.2	1,395.0	
	70019	丸瓦	玉縁～下端	32.2	3.1	8.0	1.8	28.1	13.9	—	8.3	1.6	6.7	1,355.0	
	70020	丸瓦	玉縁～下端	32.0	5.0	8.0	2.0	27.0	14.0	15.6	8.0	1.6	6.4	1,529.0	外筒部に小礫が露出
	70021	丸瓦	玉縁～下端	32.2	5.0	8.9	1.7	27.2	14.0	15.6	8.2	1.6	6.6	1,611.0	
	70022	丸瓦	玉縁～下端	31.9	3.3	7.9	3.0	28.6	14.2	15.1	8.1	1.4	6.7	1,463.0	混入物の弾き痕
	70023	丸瓦	玉縁～下端	31.1	3.3	9.4	2.2	27.8	14.1	15.6	8.0	1.5	6.5	1,470.0	内面に茶色付着物
	70024	丸瓦	玉縁～下端	31.5	3.9	—	1.6	27.6	14.0	15.1	7.6	1.8	5.8	1,465.0	混入物の弾き痕
	70025	丸瓦	玉縁～下端	31.6	3.7	8.1	1.8	27.9	14.1	15.0	8.3	1.4	6.9	1,488.0	内筒部に文様？
	70033	丸瓦	玉縁～下端	32.2	3.5	8.4	2.5	28.7	13.4	—	7.5	1.5	6.0	1,358.0	内外面に漆喰
	70034	丸瓦	玉縁～下端	31.3	3.5	8.4	2.5	27.8	14.2	15.6	8.3	1.5	6.7	1,480.0	
	70035	丸瓦	玉縁～下端	32.2	3.4	9.0	2.7	28.8	14.5	—	8.5	1.4	7.0	1,427.0	内部に鉄付着
	70036	丸瓦	玉縁～下端	32.0	3.1	9.1	2.8	28.9	14.4	—	7.2	1.6	5.6	1,113.0	
	70037	丸瓦	玉縁～下端	31.2	3.2	7.5	2.5	28.0	14.2	15.0	7.3	1.6	5.7	1,361.0	
	70038	丸瓦	玉縁～下端	31.3	4.3	8.6	2.5	27.0	14.2	15.2	9.0	1.4	7.5	1,495.0	
	70039	丸瓦	玉縁～下端	31.6	3.5	8.1	2.5	28.1	13.4	—	8.2	1.5	6.6	1,279.0	
	70040	丸瓦	玉縁～下端	32.0	4.1	8.9	2.5	27.9	14.6	15.3	8.0	1.4	6.4	1,467.0	
70041	丸瓦	玉縁～下端	30.5	4.2	8.2	2.0	26.3	—	—	8.0	1.4	6.6	1,128.0	内側に漆喰付着	
70050	丸瓦	玉縁～下端	31.9	3.9	9.0	3.0	28.0	14.3	15.2	8.6	1.6	7.0	1,484.0	内側に漆喰付着	
70051	丸瓦	玉縁～下端	31.0	3.6	8.7	2.5	27.4	14.5	14.7	8.7	1.7	7.0	1,487.0		
70052	丸瓦	玉縁～下端	31.6	3.8	6.5	2.5	27.8	14.0	—	8.6	1.5	7.1	1,235.0	外筒部キズ、内面茶	
70053	丸瓦	玉縁～下端	31.8	3.9	8.0	2.5	27.9	14.1	15.0	7.7	1.6	6.2	1,508.0	弾き、キズ	
70054	丸瓦	玉縁～下端	31.9	3.8	8.4	3.0	28.1	14.2	15.2	8.0	1.7	6.6	1,427.0		
70055	丸瓦	玉縁～下端	32.2	3.1	8.7	3.0	29.1	13.6	—	8.2	1.5	6.8	1,438.0		
70056	丸瓦	玉縁～下端	31.5	3.4	5.0	2.5	28.1	14.1	14.7	7.6	1.4	6.3	1,365.0		
70057	丸瓦	玉縁～下端	31.4	3.6	9.2	2.5	27.8	14.7	14.8	8.0	1.6	6.5	1,521.0		
第64図 290	70026	平瓦	完形	23.7	—	—	—	—	24.7	19.4	5.9	1.4	4.0	1,083.0	右下角、抉り？
	70076	平瓦	ほぼ完形	23.2	—	—	—	—	23.8	—	6.0	1.2	5.0	882.0	右上角が欠損？剥離？ 加工痕？
	70027	平瓦	上端～下端	24.1	—	—	—	—	—	18.1	5.8	1.3	4.5	1,024.0	
	70028	平瓦	上端～下端	24.5	—	—	—	—	24.8	—	5.6	1.1	4.1	952.0	漆喰付着
	70029	平瓦	上端～下端	23.3	—	—	—	—	24.5	—	6.3	1.1	4.6	1,019.0	漆喰付着、キズ痕あり
	70030	平瓦	上端～下端	23.3	—	—	—	—	24.0	18.2	6.5	1.2	5.0	965.0	
	70031	平瓦	上端～下端	24.0	—	—	—	—	23.2	18.2	6.4	1.4	5.0	1,035.0	弾き痕あり
	70032	平瓦	上端～下端	24.0	—	—	—	—	—	18.0	6.4	1.4	5.0	1,017.0	
	70042	平瓦	上端～下端	23.7	—	—	—	—	24.4	—	6.2	1.3	4.8	885.0	
	70043	平瓦	上端～下端	23.9	—	—	—	—	—	18.2	5.9	1.4	4.4	940.0	黒色シミあり
	70044	平瓦	上端～下端	24.1	—	—	—	—	23.8	18.0	6.3	1.3	5.2	1,001.0	
70045	平瓦	上端～下端	24.7	—	—	—	—	—	18.7	5.8	1.3	4.6	875.0	外面に窪み	
70046	平瓦	上端～下端	24.3	—	—	—	—	—	18.1	6.3	1.6	5.0	1,009.0		
70047	平瓦	上端～下端	23.8	—	—	—	—	23.7	18.2	6.0	1.5	4.9	1,059.0	弾き痕あり	
70048	平瓦	上端～下端	24.4	—	—	—	—	24.4	19.0	5.8	1.3	4.0	1,027.0	弾き痕あり	
第64図 291	70068	平瓦	胴部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	179.0	墨書？あり
	丸瓦の平均値				31.7	3.7	8.2	2.4	27.9	14.2	15.2	8.1	1.5	6.5	1,414.8
平瓦の平均値				23.9	—	—	—	—	24.1	18.3	6.1	1.3	4.7	984.9	

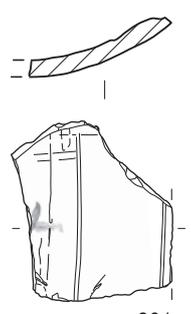
※表中資料は総て屋敷1表土より出土。



289



290



291



第 64 図 瓦：丸瓦 (289)、平瓦 (290)、平瓦片墨書 (291)

(10) 円盤状製品 (第 65 図 292 ~ 294)

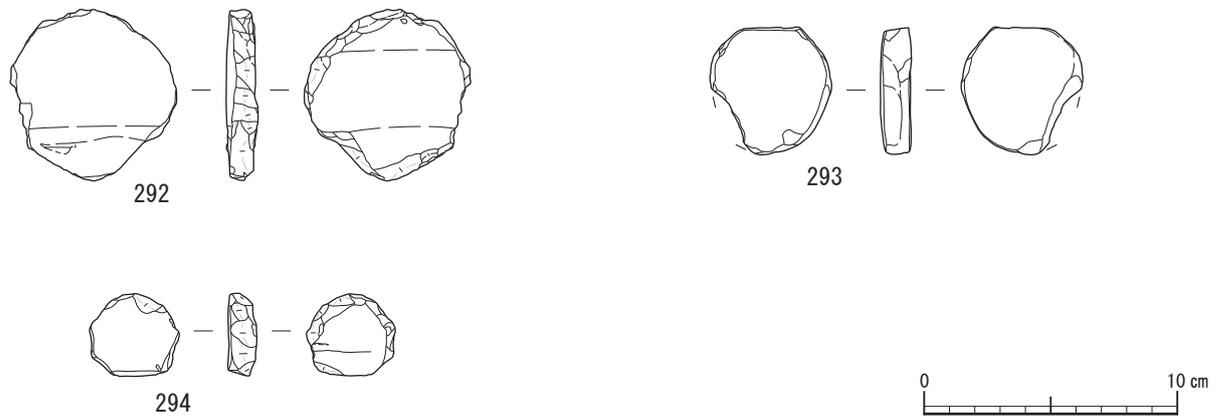
円盤状製品は今回の調査で計 3 点出土し、出土地点の内訳は屋敷 1 で 1 点、屋敷外で 2 点である (第 2 表)。

使用されている素材は全て沖縄産無釉陶器であるが、大きさや調整方法、使用部位はそれぞれ異なる。

292 は沖縄産無釉陶器の甕もしくは壺の胴部を利用したものである。最大径は 6.9 cm で、厚さは 1 cm である。元製品から破片になった後、内側から敲打して整形しているが、細かい調整は部分的である。

293 は沖縄産無釉陶器の口縁部を利用したものである。最大径は 5.1 cm で厚さは 1.2 cm である。図の上部は口縁部の上端が残存し平坦面を有すが、その他の部分は丁寧に研磨して整形される。

294 は最も小型である。利用部位等は不明である。最大径は 3.6 cm で、厚さは 1 cm である。主に元製品時の内側から敲打して整形しているが、部分的な調整である。

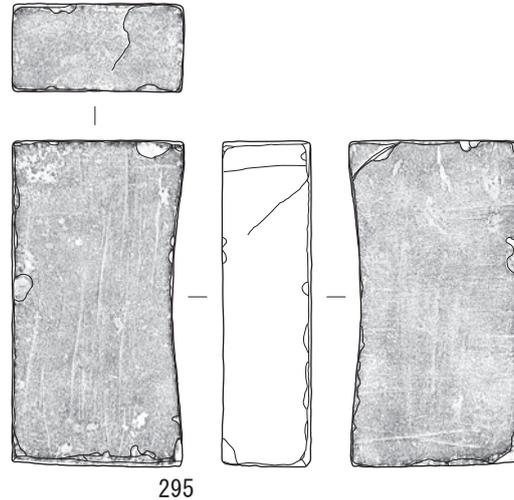


第 65 図 円盤状製品 (292 ~ 294)

(11) レンガ (第 66 図 295)

レンガは2点出土した。2点とも屋敷1表土からの出土で、その内、完形の1点を図示した。

295はレンガを転用し砥石として使用したと見られる。直方体で、6面全てに線條痕が見られ、使用痕と思われる刻線は特に表面に顕著である。右側面の両端は平らで中程に向かい緩やかな曲線をつくる。滑らかな手触りである。長辺21.7cm、短辺11.4cm、厚さ6.0cmである。



第 66 図 レンガ (295)

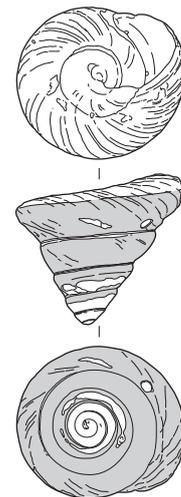
(12) 貝製品 (第 67 図 296)

貝製品は屋敷1表土より1点出土した。

296は巻貝のサラサバテイである。螺塔部は殻頂から2cm下までを研磨し真珠層に達している。殻口の平たい部分は研磨の前段階で艶は無く、石灰質?の自然状態と見られる。

螺塔下部に剥離を施し、約1cmの孔が穿たれている。その横に幅0.4cm、長さ2.5cmの細長い孔が見られる。人工かは不明。研磨、剥離孔は人工と見られるため貝製品としたが、詳細は不明。

高さ11.2cm、最大幅11.1cm、重さ256.5gである。



第 67 図 貝製品 (296)

(13) 獣骨類 (図版 36・37)

採取された獣骨は、同定分類が可能な部位が残存する資料より、全てブタ・ウシ・ヤギといった家畜哺乳類とみられる。屋敷内の特定の箇所・層序に集中することなく点在して出土すること、一部資料に明瞭な解体痕 (297・298) が確認されることから、食糧残滓の一部が屋敷内に散在していたと考えられる。

分類群一覧

イノシシ / ブタ *Sus scrofa*  
*S. s. var. domestica*  
 ヤギ *Capra hircus*  
 ウシ *Bos taurus*

第 25 表 獣骨出土一覧

掲載番号	通し番号	種類	部位	備考	出土地点
図版 36 297	70008	ブタ	右第四中手骨	解体痕あり	屋敷 1 点上 No161 表土
	70014	ブタ	下顎骨_歯牙 5 付 (右 M1 M2、 左 P4 - M2 乳歯あり) 落歯 - 11		屋敷 1 点上 No96 SB01 (建物 1) 表土
	70013	ブタ?	下顎骨?		屋敷 1 SB01 (建物 1) 表土
	70017	ブタ?	脊椎		屋敷 1 SU01 (瓦集中 1) 表土
	70177	ブタ?	四肢骨		屋敷 1 SKP01 (シーリ 1) 表土
	70010	ヤギ	臼歯 - 6		屋敷 1 点上 No80 SB01 (建物 1) 表土
	70011	ヤギ	臼歯 - 1		屋敷 1 SB01 (建物 1) 表土
	70012	ヤギ	臼歯 - 9		屋敷 1 点上 No95 SB01 (建物 1) 表土
図版 37 298	70009	ウシ	腰椎	解体痕あり	屋敷 1 表土
	70016	ウシ	下臼歯		屋敷 1 SU01 (瓦集中 1) 表土
	70007	ウマ or ウシ	四肢骨		屋敷 1 SKP01 (シーリ 1) 表土
	70015	不明	不明		屋敷 1 SD01 (溝 1) 表土
	70103	ウシ	臼歯 - 2		屋敷 2 トレンチ 3 表土
	70125	ブタ	左第三中足骨		屋敷 3 表土
	70124	ウシ	歯牙 (下 P3 左 P = 小白歯)		屋敷 3 表土
	70167	ブタ	右第三中足骨		屋敷外 SN01 (畑跡 1) 表土
	70155	ブタ?	不明		屋敷外 SF01 (道跡) 表土
	70156	ウシ?	角芯?		屋敷外 SF01 (道跡) 1 層

## 2. 各調査区の出土遺物

### (1) 屋敷1～3

今回の調査では集落と考えられる範囲を居住域、生産活動域などに分けて調査区とした。全体の調査エリアは、第3章にも記載したとおり6,430㎡で、屋敷毎に細別すると屋敷1が約510㎡、屋敷2が約252㎡、屋敷3が約266㎡となる。面積的には、屋敷1が最も広くなり屋敷3、屋敷2と続くわけだが、出土した遺物量は必ずしも比例していない。遺物数は屋敷3で1,410点と最も多く屋敷1が1,302点、屋敷2が272点で、出土量に大きな差異が見られた。また器種組成を見ても特徴が確認できた。

屋敷2は生活雑器となる遺物の出土量が少ない傾向が見られ、反対に第55図242で示した漁労に関連する金属製品が多く、日常の生活感が3つの屋敷の中で最も希薄なエリアと言える。

屋敷1と屋敷3は沖縄産陶器類、本土産陶磁器類に代表される生活雑器の出土が大半を占める。沖縄産陶器類の中でも甕、壺類が多く出土しているのが屋敷3である。本土産磁器の碗、皿などの食膳具についても同様の傾向で、遺物出土数と遺物組成両面から最も生活感を感じる。

沖縄産陶器類では陶質土器の一群が屋敷1から集中して出土している点が特筆される。数量は17点と少数ながらも、鍋、水鉢、土瓶、蓋など主だった器種がそろっているため、八所集落跡で生活が営まれていた時期でも古い段階に帰属するものと考えられる。

本土産磁器類は通常戦前、戦中の集落で多く見られる、いわゆるスンカンマカイ以外の、瀬戸・美濃系の碗類が多くみられる点が特徴的で、汁物と飯物での使い分けや集落利用者の変化によるもの両方が想定される。また、杯類は「敷島の歌」歌詞、桜花、日章旗などが描かれたものが多く、戦中の旧日本軍の存在をうかがわせる。

屋敷1では建物跡を取り囲むように大量の瓦の出土も確認した。瓦は出土状況から一括廃棄したものとは考えにくく、SB02の屋根に葺かれていたものと考えられる。

### (2) 屋敷外

屋敷外は、道跡や畑跡などが該当範囲である。遺物出土数は242点と少量で、生活雑器類は沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産磁器の順に多くなる。

道跡1では上記遺物の他に、現代のごみも多く混じっていたことから、比較的新しい時代に造成もしくは使用されていたことが考えられる。

屋敷外には計9箇所のトレンチを設定して掘削を行ったが、表土以下の層位から出土した遺物は45点で圧倒的に表土出土の遺物数より少ない(第2表参照)。

### (3) 八所集落期以前

八所集落で生活が営まれる以前の遺物と断言できるものは少ない。第3節で記載した土坑、焼土坑から出土したものを層位的な観察結果から八所集落で生活が営まれる以前と判断し、出土遺物と層位的観点から総合的に判断した。屋敷3の敷地内下層から検出されたSK01覆土上面からは計14点の遺物が出土しており沖縄産施釉陶器、無釉陶器と本土産磁器、金属製品が見られる。本土産磁器は第32図69に掲載した瀬戸・美濃系の碗蓋が出土している。屋敷2のSK08、SK09覆土上面からは金属片や瓦が出土しており屋敷3含めて極端に古層になりうる遺物は出土していない。

一方、屋敷1の敷地内で検出されたSK04覆土上面からは近世～近代に該当する遺物が出土してい

る。沖縄産施釉陶器、無釉陶器、陶質土器が4点出土しており、その内、第34図82、第48図177を掲載している。前者は湧田窯所産の灰釉碗底部、後者は陶質土器の急須注口と考えられ、いずれも八所集落跡B地点で出土している遺物の中で古い時期の所産のものとなる。



図版 14 屋敷 1 中国産陶器、本土産陶磁器



図版 15 屋敷 1 沖縄産施釉陶器



図版 16 屋敷 1 沖縄産施釉陶器



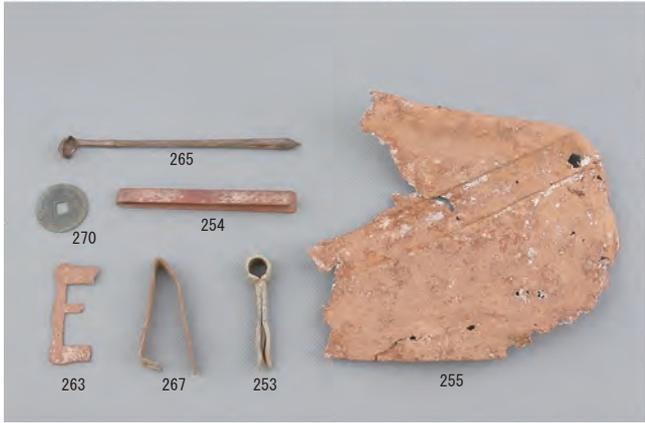
図版 17 屋敷 1 沖縄産無釉陶器、陶質土器



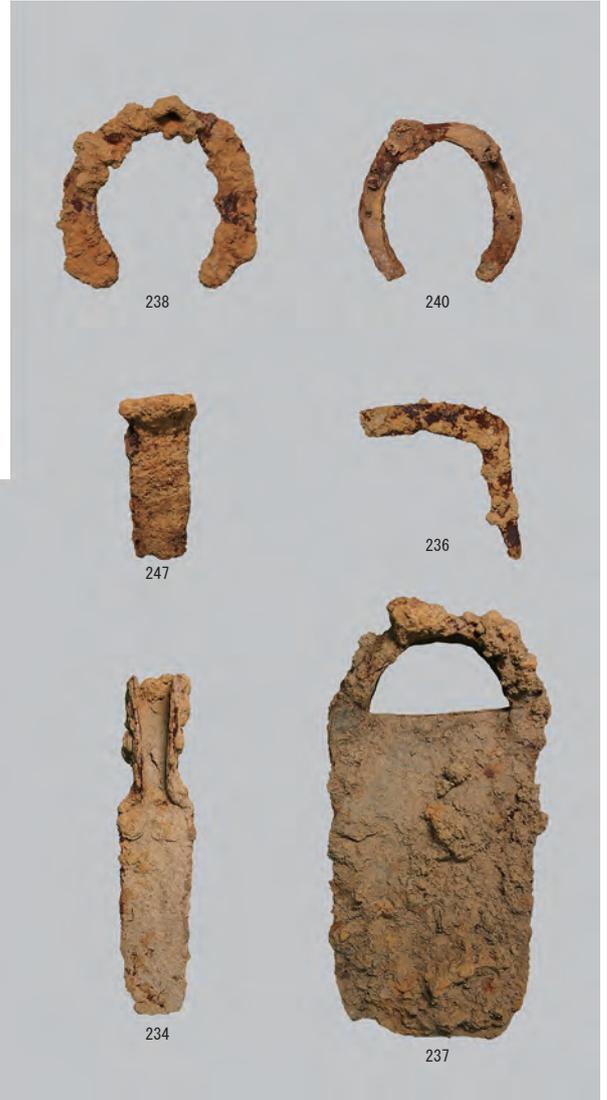
図版 18 屋敷 1 沖縄産無釉陶器



図版 19 屋敷 1 ガラス製品



図版 20 屋敷 1 金属製品、銭貨



図版 21 屋敷 1 金属製品



図版 22 屋敷 1 石製品、瓦、円盤状製品、レンガ、貝製品



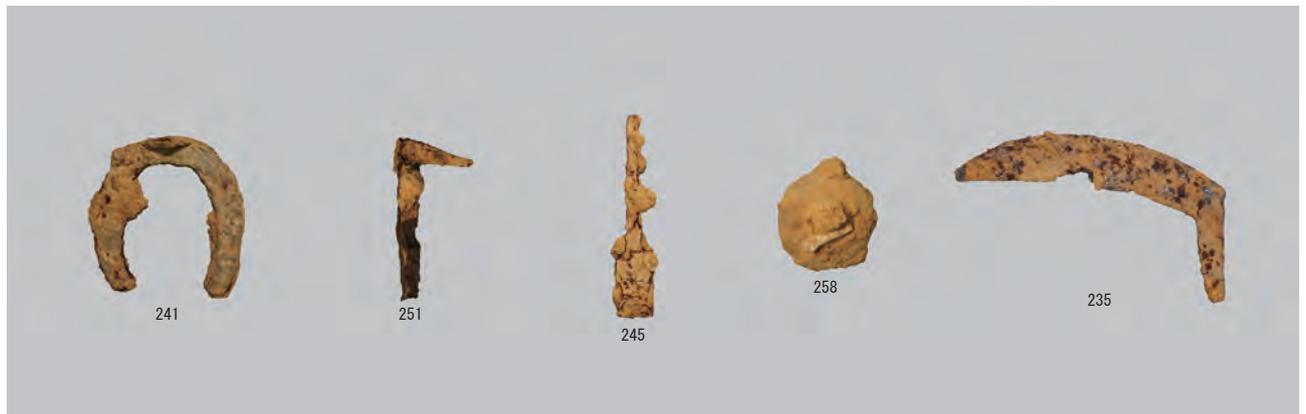
図版 23 屋敷 2 本土産陶磁器、沖縄産陶器、ガラス製品



図版 24 屋敷 2 金属製品：漁労具



図版 25 屋敷 2 金属製品、銭貨



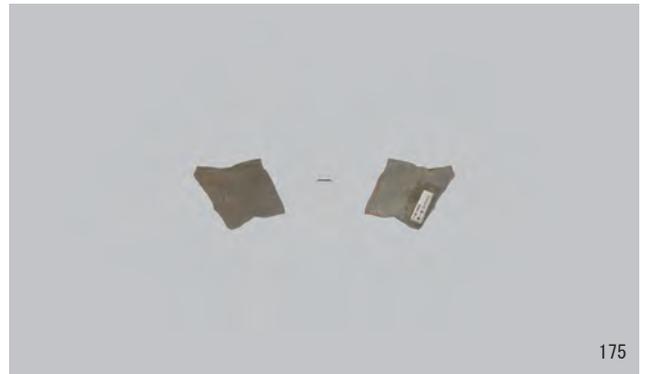
図版 26 屋敷 2 金属製品



図版 27 屋敷 3 中国産磁器、本土産陶磁器



図版 28 屋敷 3 沖縄産施釉陶器



図版 29 屋敷 3 沖縄産無釉陶器



図版 30 屋敷 3 ガラス製品



図版 31 屋敷 3 金属製品、銭貨



図版 32 屋敷 3 金属製品



図版 33 屋敷 3 石製品、プラスチック製品



図版 34 屋敷外 中国産磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、ガラス製品、石製品・石材、円盤状製品



図版 35 屋敷外 金属製品



図版 36 獣骨 解体痕あり



図版 37 獣骨 解体痕あり

## 第5節 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 大工廻八所集落跡B地点出土遺物の自然科学分析

管理者 上田 圭一

担当者 田中 義文

分析者 栗原 繁和

谷藤 明智

#### はじめに

大工廻八所集落跡B地点から出土した炭化材遺物の年代観に関する情報を得るため、放射性炭素年代測定を実施する。

#### list 1. 試料一覧

No.	調査区	遺構	日付
1	屋敷3	SK01 最下層	20200207
2	屋敷2	SK09 炭層	20200207
3	屋敷1	SK05 溝(排水溝)	20200213

#### 1. 試料

試料の一覧を list 1 に示す。これらの炭化材3点に対して放射性炭素年代測定を実施する。

#### 2. 分析方法

分析試料は AMS 法で実施する。炭化材以外の不純物をピンセットでできるだけ取り除く。試料は、塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理: AAA)。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1 mol/L である。一方、試料が脆弱で 1 mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age 3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX- II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$  は試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer *et al.*, 2020) である。

#### 3. 結果

結果を list 2、PL 1 に示す。

測定の結果、同位体補正值は No. 1 (屋敷3 SK01 最下層) が  $110 \pm 20\text{BP}$ 、No. 2 (屋敷2 SK09 炭層) が  $70 \pm 20\text{BP}$ 、No. 3 (屋敷1 SK05 溝(排水溝)) が  $155 \pm 20\text{BP}$  を示す。

暦年較正は、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、その後訂正された半減期 ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正することによって、暦年代に近づける手法であり、今回用いた較正用データセットは、IntCal20 (Reimer *et al.*, 2020) である。

以上の手法により求められた暦年較正年代の値 ( $2\sigma$ ) は、No. 1 (屋敷3 SK01 最下層) が CalAD1688 ~ 1925、No. 2 (屋敷2 SK09 炭層) が CalAD1695 ~ 1917、No. 3 (屋敷1 SK05 溝(排水溝)) が CalAD1667 以降を示す。なお、炭化材は、樹種同定の結果、マツ属と微粒炭化材であった。

## 引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of  $^{14}\text{C}$  Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

## list 2. 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代									
						年代値			確率%	Code No.					
						cal AD	-	cal AD			cal BP				
1	屋敷3 SK01 最下層	炭化材 (マツ属)	AAA	110 ± 20 (111 ± 20)	-31.72 ± 0.16	$\sigma$	cal AD 1695	-	cal AD 1724	255 - 226 calBP	20.0	pal-14930 YU-19186			
							cal AD 1813	-	cal AD 1839	138 - 112 calBP	17.7				
							cal AD 1846	-	cal AD 1852	105 - 99 calBP	3.7				
							cal AD 1869	-	cal AD 1871	82 - 79 calBP	1.5				
							cal AD 1877	-	cal AD 1916	73 - 35 calBP	25.3				
							$2\sigma$	cal AD 1688	-	cal AD 1730	263 - 221 calBP		24.7		
			cal AD 1807	-	cal AD 1925	144 - 26 calBP	70.8								
2	屋敷2 SK09 炭層	炭化材 (マツ属)	AAA	70 ± 20 (68 ± 20)	-26.88 ± 0.17	$\sigma$	cal AD 1705	-	cal AD 1720	245 - 230 calBP	20.5	pal-14931 YU-19187			
							cal AD 1817	-	cal AD 1833	133 - 117 calBP	21.9				
							cal AD 1891	-	cal AD 1908	60 - 43 calBP	25.9				
							cal AD 1695	-	cal AD 1725	255 - 225 calBP	29.4				
							cal AD 1811	-	cal AD 1855	140 - 95 calBP	30.2				
							$2\sigma$	cal AD 1869	-	cal AD 1871	82 - 79 calBP		0.4		
			cal AD 1876	-	cal AD 1917	74 - 34 calBP	35.5								
3	屋敷1 SK05 溝 (排水溝)	炭化材 微細炭化材	AaA	155 ± 20 (155 ± 20)	-10.44 ± 0.20	$\sigma$	cal AD 1673	-	cal AD 1694	278 - 256 calBP	13.3	pal-14932 YU-19188			
							cal AD 1726	-	cal AD 1777	225 - 173 calBP	29.0				
							cal AD 1798	-	cal AD 1811	152 - 139 calBP	8.3				
							cal AD 1917	-	cal AD 1944	33 - 7 calBP	17.6				
							$2\sigma$	cal AD 1667	-	cal AD 1700	283 - 251 calBP		15.8		
										cal AD 1721	-		cal AD 1783	229 - 168 calBP	32.3
										cal AD 1796	-		cal AD 1815	155 - 136 calBP	9.9
										cal AD 1834	-		cal AD 1888	117 - 63 calBP	16.1
										cal AD 1908	-		cal AD ...	42 - ... calBP	21.3

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA はアルカリ濃度を薄めて処理したことを示す。

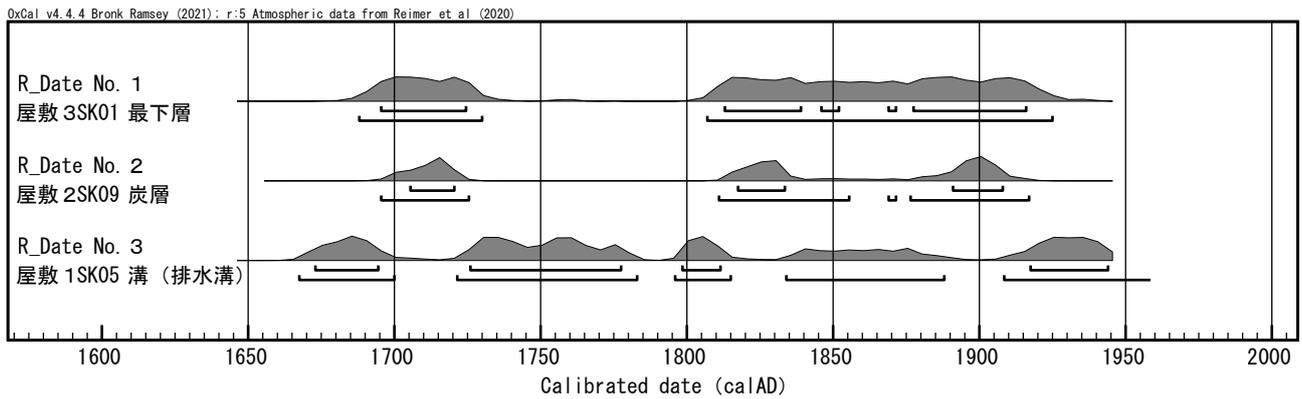
5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用

6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用、

7) 較正データセットは Intcal20を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

9) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$  が 68.2%、 $2\sigma$  が 95.4% である



PL 1. 暦年較正結果

## 第6節 植生調査

大工廻八所集落跡 B 地点は沖縄市大工廻に位置する、屋敷や畑跡などを含む近代集落の遺跡である(第 68 図)。沖縄市は嘉手納基地を始め複数の米軍基地を抱えており、本遺跡を含む八所集落跡は現在嘉手納弾薬庫地区(知花地区)として接収されている地区に所在する(沖縄市教育委員会 2010)。当地は沖縄戦の戦局の悪化に伴い放棄され(大工廻郷友会 2009)、つづく戦後に米軍基地として接収された。放棄された時点から現在まで他の地域と比較し人為的改変の手を免れており、現在では周囲の草地に比して木本類の目立つ林環境が確認されている。このため本地域のかつての植生や、放棄した当時の集落の生活に関する情報が得られる事が期待される。

本遺跡を含む八所集落は大工廻誌(大工廻郷友会 2009)にあるように、屋取(ヤードウイ)集落であることが分かっている。屋取集落とは元来首里王府に仕えていた多くの士族が禄をなくし、その生活基盤を失い、各地へ移住し立ち上げた集落のことである(沖縄市教育委員会 2008a)。現在でも沖縄島各地にはそういった移住した士族により成立した屋取集落が多数知られている。

かつて琉球列島での多くの人びとは、衣食住のほとんどすべてを集落の中に存在する動植物を中心とした資源で賄う、自給自足の生活様式を脈々と営んでいた(盛口 2018, 2019)。こうした動植物を利用する知識や知恵をそれぞれの地域の中での生活基盤を支えてきた重要な文化的遺産、「生物文化遺産」と位置付け、現状の把握、調査、保全を行う重要性を説いている(当山 2019)。しかしながら戦後生活様式の変化や特に中南部などでは急速な都市化により、こ



第 68 図 大工廻八所集落跡 B 地点  
植生調査範囲

うした生活体験を持つ方が減少しつつあり、それに伴いかつての生活の中で重要とされていた、衣食住を支える動植物に関する知識が急速に失われつつあるのが現状である。

今回、当遺跡の発掘調査の前に植物相に関し現地調査を行う機会を得た。そこで当該地域において 2019 年 5 月から 7 月の期間中、現地踏査を行い、出現する維管束植物の記録を行った。同時に幾つかの生活に利用されていた樹種の植物利用形態について考察を行った。

## 調査方法

植生把握、植物相の調査のための現地踏査は2019年5月から7月までに計3回実施した(付表1)。踏査は調査地域をくまなく歩き、植生の概要を調査した。植物相に関しては出現した植物を目視記録するとともに現地では同定の難しい個体や生育の証拠用などに適宜標本を採集した。また、標本の同定や分布記録の補完を目的として各調査で得られた出現種を可能な限り生育地状況と共にデジタルカメラで撮影した。科の分類体系は、シダ植物についてはJ. Reveal (1999)、種子植物についてはLAPG III (2009)に従った。種の取り扱いと学名については、BG Plants (米倉・梶田 2003)に基本的に従った。最近の取り扱いなど検討を経て一部これと異なる見解を採用したものもある。

植物利用形態についての現地踏査は2019年6月から7月にかけて2回実施した(付表1)。樹種は盛口(2018)、当山(2019)を基本に、調査地内で確認された戦前から戦後の沖縄周辺でよく利用されていた樹種を選択した。踏査は2名一組を基本とし、調査地域をくまなく歩き、食料、緑肥や繊維源など、当時の生活に重要とされた樹種のうち、実生を除いた個体についてナンバーテープを打ち付け個体識別し、樹種、番号、調査地内での位置を地図内に記録した。

## 結果と考察

### 1 植生の概要

調査地の周辺は戦後米軍に接収されたものの、地域住民によって部分的に黙認耕作地として粗放的に利用されていた場所で、現在では木本類としてはオオバギやアカメガシワ、クスノハガシワ、ギンネムが疎林を形成し、チガヤやハイキビ、モンツキガヤ、ムラサキヒゲシバ、タチスズメノヒエ、ススキなどのイネ科草本類の草地にアワユキセンダングサ、セイバンナスビなどが点在する代替植生が広がっている。調査地の周辺一帯は基本的に湿地環境になりやすい地形と考えられ、小規模大規模合わせて多数の湿地環境が確認できる。本調査地である集落跡は丘陵地形となっており、外周部を高さ2～5mほどの斜面に囲まれ、その上部の平地部分が集落として立地している。以下に、集落外周部斜面、集落外周部、屋敷跡周辺、畑跡周辺にわけ、代表的な出現種を記述する。

#### 1) 集落外周部斜面

集落の外周部は丘陵の斜面地となっており、北西側にはアダンが優占していた。斜面下に西側小堀につながるしみ出し水による水路が確認され、ヒリュウシダやオオアブラガヤ、アオノクマタケランなどが多く確認された。

斜面北東側はイジュ、ナカハラクロキ、ヤブニッケイなどの樹径10～20cm程度の小径木の樹木が混生していた。

斜面部南東-南側にはサトウキビが優占している一角があり、戦後黙認耕作されていた時の名残と考えられる。南-南東側にかけてはナカハラクロキ、イジュ、タブノキ、ヤブニッケイの小径木が混生し、斜面下には平坦なススキの代替草地が広がっている。

このほか外周部には胸高直径40cm以上のリュウキュウマツも複数確認でき、当時周辺が裸地かそれに近い状態であったことをうかがわせている。

#### 2) 集落外周部

斜面上部の平地、集落の外周部にはソウシジュが取り囲むように並んで生育していた。その間にナ

カハラクロキ、タブノキ、ヤブニッケイ、オオバギなどの胸高直径 10cm 以下の小径木が認められた。地面に近い場所にはエダウチチヂミザサ、アオノクマタケラン、オオアmaksサシダなどがまばらに生育していた。

### 3) 屋敷跡周辺

調査地南側に位置する屋敷跡（屋敷 1、2、3）はその周囲を廻る土手により囲まれていた。この土手に沿ってホウライチクの株直径 1～2 m 程度の株が多数、ソウシジュの胸高直径 40cm 程度の個体が複数生育していた。敷地の内部には胸高直径 20cm を超える様な樹種は見られず、ナカハラクロキ、ヤブニッケイ、タブノキなどの胸高直径 10cm 以下の小径木がまばらに生育していた。

屋敷 1 の東部分には家畜小屋の跡と考えられる場所があり、比較的大きなガジュマル（胸高直径 40cm 以上）が複数株確認され、ほかにはナカハラクロキ、タブノキ、ヤブニッケイなどが低木として散在していた。

屋敷 1 の南側には池が確認されるが、水面下に水草等は確認できなかった。池の周囲にはタイサンチク、ホウライチクが複数株確認された。後の発掘調査で南側の大きな池は戦後重機にて造成（少なくとも拡張）されたことが判明した。

### 4) 畑跡周辺

敷地北側に広がる畑跡にはソウシジュが列状に並んで生育し、その間にナカハラクロキ、イジュ、ヤブニッケイ、タブノキの胸高直径 10cm 以下の細い小径木がまばらに確認できた。

以上、集落ではソウシジュやホウライチクなど、放棄前に植栽されたと思われる樹種が目立つ一方、ナカハラクロキ、ヤブニッケイ、タブノキや、イジュといった鳥散布や風散布といった種子散布様式を持つ小径木が調査地域一帯に認められた。またオオバギやアカメガシワ、クスノハガシワのような本島中南部でよく観察される遷移の初期に出現するパイオニア的な陽樹傾向の強い樹種は集落外周部に留まっていた。このことから調査地の植生の現状はこの集落が放棄された後、まずはパイオニア的な樹種を中心とする陽樹環境が成立し、その後徐々に遷移が進み、周辺環境から風や鳥によって散布されたナカハラクロキやイジュのような陽影樹傾向のある植物に取って代わられた段階であると考えられる。

## 2 確認された植物相

現地植物相踏査の結果、調査地から 73 科 147 属 184 種の計 184 種（21 亜種変種含む）の維管束植物が確認された。確認された植物種は植物目録として文末（付表 2）に示す。

確認された植物種のうち、イネ科草本類の多くや、ギンネムやハイクサネムといった外来種は、戦後から現在にかけ黙認耕作や、造成による湿地の埋め立てなど調査地の周辺において土地利用が継続的に生じており、裸地からの代替植生が維持されていることを反映している証拠といえる。

集落跡内部ではナカハラクロキ、イジュ、ノボタン、アオノクマタケランやヒリュウシダ、ヒカゲヘゴといった本島北部の酸性土壌の非石灰岩地によく認められる植物種が多く確認できる一方で、部分的にガジュマル、アコウ、アカテツ、ナガミボチョウジ、フウトウカズラ、オニヤブソテツといった石灰岩地を得意とする植物種も確認された。沖縄島中部は南部の石灰岩地と北部の非石灰岩地の境

界付近に位置するため、それぞれの土壌条件を得意とする植物が近接してモザイク状に確認される事がある（沖縄市立郷土博物館 2016；佐藤・藤 2020）。本調査地の大部分は非石灰岩地と考えられたが、地下や地上部に石灰岩のある場所が部分的に存在しており、こうした場所を中心に石灰岩地を得意とする植物種が生育していると思われる。

本調査では人為的な改変の少ない自然度の高い場所に限定されるような植物種は確認できなかった。これは本調査地が集落として継続的に人為的な改変という遷移のリセットが行われていた環境であることに整合的であった（佐藤ら 2013）。

### 3 集落の植物利用形態

調査地内では、かつての住民により積極的に植えられたと考えられる植物種が多く確認された。当時生活に利活用されていたと思われる樹種と、その集落内での位置関係をそれぞれ第 69 図に示す。また、生物文化遺産的な観点から注目すべき植物種を以下に示す。

ソテツ *Cycas revolute* ソテツ科

方言名：スチチ、ソティチ、シテッチ、など

北側畑地と丘陵北西側斜面地に生育しているのが確認された。ソテツは日光要求量が多いため上空を樹木が覆ってしまう林環境に遷移が進むと急速に生育が悪くなり、じきに枯死してしまう。島内の他の地域ではこうした日陰環境にて弱ったソテツの頭頂部ではヤエヤマオオタニワタリのような着生シダが生育することがよく観察されており、本調査地の畑地の中で観察された地面近くに確認できた複数株のヤエヤマオオタニワタリの多くが、こうした元々日照が不足して生育状況の悪化したソテツに由来していると考え、当地は以前はもう少しソテツ生育数の多い場所であったことがうかがえる。

海岸沿いの斜面や岩場の様な日当たりの良い乾燥した場所に生育する常緑の低木であり、当地のものは植栽されていたものと思われる。雌雄異株で雌株からは澱粉質に富んだ実（スチチヌナイ、ナイ、ナリ）がとれるほか、幹部分（ジン、ギャーラ）の中心部にも多くの澱粉を有している。実を含む植物体全体にサイカシンという毒成分があるため、そのまま食することはできず毒抜き処理が必要であるが、琉球列島では広く食用として利用されていた。食用以外にも葉を畑や田んぼにすき込んで緑肥として利用するなど重宝されていた。ほかにも葉は畑での苗の風よけ、数枚重ねてほうき、虫かご（こども遊び）、そのほか変わったところでは中心部の細かい繊維塊（ワタ）を集めて糸でまいて手毬の材料としたりしていた。当地でも畑の周辺に植栽され、緑肥や救荒植物として利用されてきたと推察される。

リュウキュウマツ *Pinus luchuensis* マツ科

方言名：マチ、マーチ、など

調査地では丘陵周辺部の斜面付近で胸高直径 50cm を超える数株が確認された。トカラ列島以南に生える常緑の高木で、海岸や尾根沿いの貧栄養な土壌によく生育する。脂分が多く、葉や果実（松ぼっくり）は焚き物（タムン、タキムン）と呼ばれ煮炊き用燃料としても重要だった。材は水に強く腐りにくいので建材から道具の材料などとして重宝された。当地は国頭マージを主体とした貧栄養土壌であり、元来本種が育成していたと考えられ、利用のために伐採せずに残していたと推察される。

イヌマキ *Podocarpus macrophyllus* f. *spontaneus* マキ科

方言名：チャーギ、シャーギ、チャーギー、など

関東以南に生育する常緑の高木である。材にしてもシロアリが付きにくい性質から建材、とくに家屋の柱（アマハジ、ヒサシなど）としてシィギ（イタジイ）と共に需要が多かった。このほか枝は仏壇の供え物としても利用された。

調査地では数は少ないものの、丘陵周辺斜面地などで胸高直径 10cm 以下の数個体が確認された。

クスノキ *Cinnamomum camphora* クスノキ科

方言名：チャーギ、ファットギー、など

関東以南に生育する常緑の高木である。油分が多く良く燃えるため、焚き物（タムン、タキムン）などとしても重宝された。また、沖縄島北部では植物体を粉碎し蒸し上げ蒸留することで樟脳を得ていた例も知られる。

調査地では北側畑地の縁沿いに数株確認され、選択的に伐採を避けていたものと思われる。焚き物としての利用がなされていた可能性が高い。

アダン *Pandanus odoratissimus* タコノキ科

方言名：アダヌ、アダニ、など

トカラ列島以南の海浜に生育する常緑の小高木で、パイナップルの様なすどいトゲを有した細長い葉をしげらせ海岸線に林を形成している姿を見ることができる。当地のような内陸部での育成は、人為的な移植に由来すると考えられる。沖縄の各地ではトゲを落とした葉を茹で、乾燥させたものを使って草履や玩具などを製作した。その他幹から発根する気根（アダナス、アダヌス）を縦に細かく割いたものを乾燥させておき、縄の材料とした。ほかにも海岸沿いの防風林としての利用も知られている。

調査地では丘陵北側斜面から畑地にかけて生育しており、前述のような利用をされていたと推察される。

クロツグ *Arenga ryukyuensis* ヤシ科

方言名：マーニ、マニ、ツグ、など

奄美以南の低地から山地にかけて生育するヤシ科の常緑の低木である。葉は羽状複葉（30～50 対程度）で大きく、長さ 3 m、各羽片長も 1 m を超えることもある。琉球列島の各地では羽片や葉軸の繊維を利用して様々な道具の材料とした。その他幹の葉柄の基部にある黒い繊維をほぐし、縄をなう材料としてシュロ（ヤシ科）と共に重宝された。

屋敷周囲の土手部分で数個体が生育していた。生活のすぐ近くに本種を残し、上記のような材料として利用していたと考えられる。

ビロウ *Livistona chinensis* var. *subglabosa* ヤシ科

方言名：クバ、クファ、など

四国南部、大東諸島、九州から先島諸島にかけて生育するヤシ科の常緑高木。海岸近くの岩場など乾いた場所に自生する。葉は円形をしており、先端で裂片となっている。現在では街路樹などにも利

用されている。この葉を利用して様々な生活道具(クバ笠、クバ扇など)の材料素材として重宝された。

集落西側の1地点に数株混生しているのが確認された。民具の材料として植栽したものであろう。

ホウライチク *Bambusa multiplex* イネ科

方言名：ダキ、シマダキ、など

稈長6～9mになる熱帯アジア原産のタケ類で、株立ちする。節間長は40～50cmほどあり、断面は円形。南西諸島には古くから持ち込まれ各地に生育している。株立ちし、むやみに生育範囲が広がっていかないので屋敷の防風林代わりや河川の土留め、境界線の目印などとして植えられることも多い。パーキやジョーキといった雑貨やメジロカゴなど、様々な竹細工の材料として重宝された。

屋敷周囲の土手部分に沿って複数株が密に列状に植えられているのが確認された。材料としての自家消費や防風林としては数が多く、それ以上の利用をしていたことをうかがわせる。

タイサンチク *Bambusa vulgaris* イネ科

方言名：マータク、マダケ、など

稈長8～12mになる熱帯アジア原産のタケ類、株立ちする。直径8～10cmほどの太さになる沖縄で見られるタケ類としては大型の種。その大きさを利用した竿としての利用や、床材などとして利用された。

集落内では屋敷(2、3)周囲の土手部に複数株確認された。ホウライチク同様、屋敷の数に対して植栽数が多い印象を受ける。

リュウキュウバショウ (イトバショウ) *Musa balbisiana* var. *liukuensis* バショウ科

方言名：ウーバサー、ヤマバシャー、バサ、など

集落の西側、屋敷1の外側一区画で複数株が確認された。株高2～3mになる大型の多年生草本である。本種の幹から芭蕉布(バサージン、バシャギ)の材料となる繊維をとるために重宝された。また幹は熱冷ましとして利用したり浮き輪の代わりに海で使用した。葉は包装紙の代わりとして野菜や魚を包んだり、蒸し物やざるの底に敷いたり、様々な用途に利用されていた。

テリハボク *Calophyllum inophyllum* テリハボク科

方言名：ヤラブ、ヤラボ、など

海岸などに見られる常緑高木で、調査地では丘陵外周部付近で確認されており、植栽であると考えられる。この種子は脂質を多く含むので燃料として燃やしたり、イザリの際の松明がわりに利用されていた。種皮は非常に硬く、中身を取り出して加工し、ホタル提灯など子供の玩具として利用された例も知られる。

フクギ *Garcinia ubeliptica* フクギ科

方言名：フクジ、フクジギー、フクギ、カジキ、など

フィリピンや台湾の蘭嶼、緑島原産の常緑高木で、琉球列島では奄美以南に生育している。直立し葉を密生させるので防風、防火、防潮などの目的で屋敷の周辺に植えられたりすることが多かった。幹や枝からはシルクを染める染料がとれる。建材としても利用された。

集落周辺部の南西側に胸高直径 20cm 程度の株が並木状に生育していたほか、実生が屋敷や畑地内にまばらに生育していた、防風目的で植えられていたものであろう。

キャッサバ *Manihot esculenta* トウダイグサ科

方言名：イモ、キーウム、キインム、など

熱帯原産の多年草で、葉は切れ込みが大きく、広げた手の平の様な形をしている。荒れ地でもよく育ち根茎部に多量の澱粉を貯留することから熱帯域を中心に世界各地で栽培されている。沖縄でも救荒植物として台湾から持ち込まれ、戦前から戦後にかけてよく栽培されていた。タピオカはこの澱粉から作られる。

集落の西側、屋敷 1 の外側一区画でイトバショウなどと並んで複数株が確認された。救荒植物としての利用をされていたと思われる。

ソウシジュ *Acacia confusa* マメ科

方言名：ソーシギ、ソースギ、など

台湾、フィリピン原産の常緑高木で、琉球列島には明治期以降に導入された。現在でも街路樹や公園の植栽にされているほか各地で野生化した個体を確認できる。防風林として屋敷や畑の周囲に植樹されていることも多い。枝や葉を採取し、田んぼや畑にすき込むことで緑肥として用いられていた。

集落では屋敷周囲の土手部分や畑跡で胸高直径が 40cm を超える多数個体が列状に生育していた。屋敷や畑の周囲を囲むように列状に植えられており、境界としての意味合いと、緑肥としての利用が推察される。

パパイヤ *Carixa papaya* パパイヤ科

方言名：マンジュマイ、マンジマイ、バンショウイー、など

アメリカ大陸の熱帯地域の小高木。琉球列島の各地では近代以降から食用とされ、青い果実は野菜、完熟果実は果物として利用される。昔は果実だけでなく幹の髄部分も可食部として利用されていた。葉は切れ込みが大きくヤツデのような形状をしている。集落の南側に複数株生育していた。

オオハマボウ *Hibiscus tiliaceus* アオイ科

方言名：ユーナ、ユナ、ユーナギー、ユーナンギー、など

海岸やマングローブなどの後背湿地に生える常緑の小高木で、ユーナ（与那）は砂地＝海岸を指し、海岸に生える木（ユーナンギー）の意味を持つ。葉は卵円形、基部が深く湾入している。皮からはとても丈夫な繊維がとれ、縄やヒモの原料として利用される。材は柔らかく建材には不向きであるが、柔らかく軽いため太鼓のバチのようなものに用いられた。この葉を採取し数時間おいてしおらせたものは破れにくくなり、尻をふく紙の代わりとして琉球列島で広く利用されており、屋敷のフール（便所）脇に植えられることが多かった。

調査地では 2 株、屋敷 1 の西側のフール近くと屋敷 2 の土手東側でそれぞれ 1 株ずつ確認された。

ゲッキツ *Muraya paniculata* ミカン科ゲッキツ属

方言名：ギキジャー、など

奄美以南に生育する小葉1～4対の奇数羽状複葉の常緑の低木で、石灰岩地などに普通に見られる。非常に固い材になるので子供のパチンコの材料としたり、囲炉裏の自在鉤、農機具として使われたりした。「はんこの木」などともよばれる。琉球列島では垣根や庭木として植えられている。調査地では数株が散発的に生育していた。

#### 4 植物から推測される当時の生活

調査で得られた植物種の植生分布状況（第69図）をもとに当時の集落での植物の利用形態を考察した。様々な生活用品を購入して営む現代と異なり、食料はもとより生活道具や生活消耗品などその多くを自前で賄うため、集落では有用と思われる植物を巧みに植栽し生活を豊かにしようと工夫していった様子がうかがえる。

集落内の植物の分布でまず目立つのが東南アジア原産のソウシジュの株数の多さである。琉球列島ではソウシジュは防風林としての利用のほか、枝や葉を畑にすき込んで緑肥として広く利用されており、この場所でも屋敷や畑の防風林、及び集落北部に位置する畑地の緑肥の多くを賄っていたと考えられる。また、畑の周辺にはソテツも確認でき、ソテツはデンプン源として積極的に植栽されていた他、その葉が緑肥として琉球列島の多くの島嶼、地域で利用されている植物である。ソテツもソウシジュ同様に緑肥として利用されていたと思われる。今回見られたソウシジュの多さから、こうした自前での肥料源を確保することが、農業生産において非常に重要であったとうかがえる。今回の調査では、畑跡で実際に何を作付けしていたかは確認できなかったが、畑の規模から考えて自家消費用の作物を中心とした利用だったと思われる。この考察は大工廻誌（大工廻郷友会2009）に掲載されている「作物を売って金に換えて生活するというのは、土地や働き手に余裕のある人しかできない。・・・貧しい農家が多かったが・・・（48・49頁）」、「畑そのものも痩せて換金作物が少なかった・・・（49頁）」といった古老からの聞き取りとも合致する。

次に印象的なのは、屋敷周囲に植えられているたくさんのハウライチクと数株のタイサンチクといった熱帯アジア原産のタケ類の存在である。沖縄諸島では在来のタケ類はリュウキュウチクのみなので、これらの熱帯アジア原産のタケ類も人為的に持ち込まれたものであることは確実である。これらは琉球列島では広くバーキやジョーキといった生活道具の材料として利用されている（沖縄市教育委員会2008b）。他にも集落内から多数確認されている海浜植物のアダンやヤシの仲間のクロツグは民具利用、特に繊維が縄の材料として重宝された植物である。これら繊維として利用されていた植物の生育数、密度は屋敷の数に比べその株数が多い印象を受けた。これまでそのような聞き取り等の情報は確認できていないが、自家消費というよりはこれら素材を利用してバーキや縄などの道具を製作することで、生計の足しにしていたことが推察される。

集落の南西側に位置する屋敷1にある、石材が多数確認されている付近は家畜小屋と考えられ、その一角にワーフルと思われる石囲いが認められる。家畜小屋跡と思われる場所のすぐわきに複数認められた胸高直径50cm程度のガジュマルは、おそらく放棄前からこの場所に生育していたと考えられ、家畜に日陰を提供する目的などで残されていたと考えられる。ワーフルとは中に豚を入れ、残飯や人間の排泄物を処理してもらう施設のことで豚小屋＋トイレの機能を併せ持つ場所である。このワーフルの北側に海岸に生育するオオハマボウが確認されている。オオハマボウはその樹皮や材を

利用することもある有用性の高い植物であるが、琉球列島での主たる利用目的として、本種の葉をトイレットペーパーとするものが有名である。葉を採取後、数時間放置してしおれさせることで柔軟性のある強靱な尻紙とすることができ、使用後はそのまま豚に食べさせることができる無駄のない素材である。本種の葉は日々欠かさず利用することから、ワーフルのそばに必ずというほど良く見られる樹種となっている。今回もフルのそばで確認された本種はこうしたトイレットペーパーとして利用されていたのであろう。ただ、本調査では屋敷2の周囲の土手上の東側でも1株、オオハマボウが確認されている。屋敷における位置関係に加え、この周辺からはワーフルを構成するような石材は確認されていないものの、発掘調査、資料整理や聞き取り調査の過程でワーフルに関連するような情報が得られると面白いと思う。

屋敷1外の一角、ワーフルのそばにイトバショウ数株も確認された。イトバショウは芭蕉布（バサージン）の原料として多くの家庭で自家消費用として植栽されていた。イトバショウはオオハマボウとともに水肥で育てることが可能な植物で、ワーフルの脇に設置されているシーリ（肥溜め）から出る豚の排泄物由来の液肥を適宜利用できるよう、近距離に植えられていたと思われる。

## 最後に

今回の植物調査からこの屋取集落の当時の集落の暮らしの生活様式についての多くの情報を得る機会となった。屋取集落はすでに農民が暮らしている地域に新たに移動してきた士族が集落を立地させるというその成立の性格上、優れた農地や暮らしやすい場所でないことが多く、生計の糧となる農作物の収穫量などでは苦勞をしやすいと考えられる（沖縄市教育委員会 2008a）。現地踏査からは多くの外国原産や本来の生育地でない植物を集落の中に巧みに植栽し利用していた実態が明らかになった。もちろんこの集落の植物利用が当時のその他多くの集落での生活様式と同程度のものではあったかということや、時間経過により遷移が進んだことで陽樹傾向の高い木本類や草本類など、すでにこの環境からいなくなってしまう、利用されていたにも関わらずその情報が得られなかった種の存在など、十分検討しなければならない点はあるものの、今回得られた当時の集落における植物の配置や生育密度などの情報は、現在ではほとんど得ることができない貴重なものとなった。

かつて屋取集落であったとされる場所は本島各地で今現在でも多数確認することができ、その多くは、継続的に住民により利用され続けている。屋敷内や集落内といった生活に密着した場所は人のアクセスがそれほど多くない山野と違い、時代の変遷や、利用資源のニーズの変化に対し（例えば化学繊維製品が行き渡るようになると繊維植物の多くは利用されない邪魔者となり、化学肥料が安価に入手できるようになれば緑肥植物は除去されてしまうといったように）、環境利用の急速な変化が生じやすい場所である。このため自給自足で生活していた当時を知る情報源はもっぱら住民の記憶といったものに限定されている。当山は、生物文化遺産の収集、保全の重要性とともに、話者の高齢化、都市化による生活体験者の減少により自然を利用した暮らしの情報は、その収集自体が難しくなっていることを指摘している。今回得られた結果は、そうした昔の自給自足生活の実情を把握する一助になると考える（当山 2019）。

今回の調査地は先の大戦中に戦局の悪化によって突如放棄され、戦後すぐ米軍に接収され現在まで至ったことで、当時の利用様式を維持したまま時間だけが経過したという稀有な例といえる。住民には不幸なことだったが、集落や屋敷周辺における植物の配置や密度など戦前戦中の植物利用の実態を知る詳細で具体的な情報を得ることができた。今後基地の中などに残存している同様の集落跡などの

情報が増えていくことがあれば、より当時の植物利用に関する知見が集積され、暮らしの詳細が明らかになることが期待される。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり藤彰矩氏（北谷町教育委員会）に議論に参加いただいたり、有益な助言をいただいたりした。ここに謝辞を表したい。

## 引用文献

- 沖縄市教育委員会. 2008a. 屋取集落に生きる一池原上田原・仕明座原遺跡発掘調査報告書一. 沖縄市文化財調査報告書第 34 集. 沖縄市教育委員会. 沖縄市.
- 沖縄市教育委員会. 2008b. 上地のバーキづくり：與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書. 沖縄市立郷土博物館（編）沖縄市文化財調査報告書第 36 集. 沖縄市教育委員会. 沖縄市. 95pp.
- 沖縄市教育委員会. 2010. 沖縄基地内文化財—基地内文化財調査及び市内遺跡試掘調査報告一. 沖縄市文化財調査報告書第 37 集. 沖縄市教育委員会. 沖縄市. 107pp.
- 沖縄市立郷土博物館. 2016. 普及書 沖縄市の自然 やんばるの入口. 沖縄市立郷土博物館. 沖縄市. 184pp.
- 佐藤寛之・天野正晴・中村元紀・宮城直樹・立石庸一. 2013. 琉球大学千原キャンパスに於ける維管束植物相の現状. 琉球大学教育学部紀要 (82) : 211-227.
- 佐藤寛之・藤彰矩. 2020. 北谷城植物調査. 「北谷城」北谷町教育委員会. 北谷町文化財調査報告書第 44 集 : 65-74.
- 大工廻郷友会. 2009. 大工廻誌 基地に消えた古里. 大工廻郷友会. 沖縄市. 293pp.
- 当山昌直（編）, 2019. 消滅の危機にある琉球の生物文化の記録保存から [生物文化遺産] 創出への道を開く (概要報告). 生物文化遺産プロジェクトチーム. 78pp.
- 盛口満（編）2018. 琉球列島の里山 -記憶の記録-. 沖縄大学地域研究所彙報第 12 号. 313pp.
- 盛口満. 2019. 琉球列島の里山誌 おじいとおばあの昔語り. 東京大学出版会. 251pp.
- 米倉浩司・梶田忠 2003-17. BG Plants 和名-学名インデックス (YList). [http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist\\_main.html](http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html) (2017.1.28 ~ 4.6 参照).
- James L. Reveal (7 Dec 2000, <http://www.inform.umd.edu/PBIO/fam/highname.html>; 22 Jan 1999, <http://www.inform.umd.edu/PBIO/pb250/fernfam.html>)
- The Linear Angiosperm Phylogeny Group (LAPG) III: a linear sequence of the families in APG III. E Haston et al. 2009. Botanical Journal of Linnean S y. 161: 128-131.

---

## 付表 1 現地踏査実施日

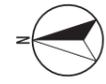
植物相調査 : 2019. 05. 23, 2019. 06. 07, 2019. 07. 16

植物利用調査 : 2019. 06. 07, 2019. 07. 16

## 付表 2 植物目録

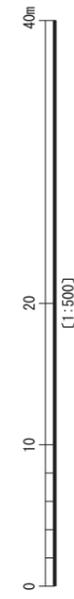
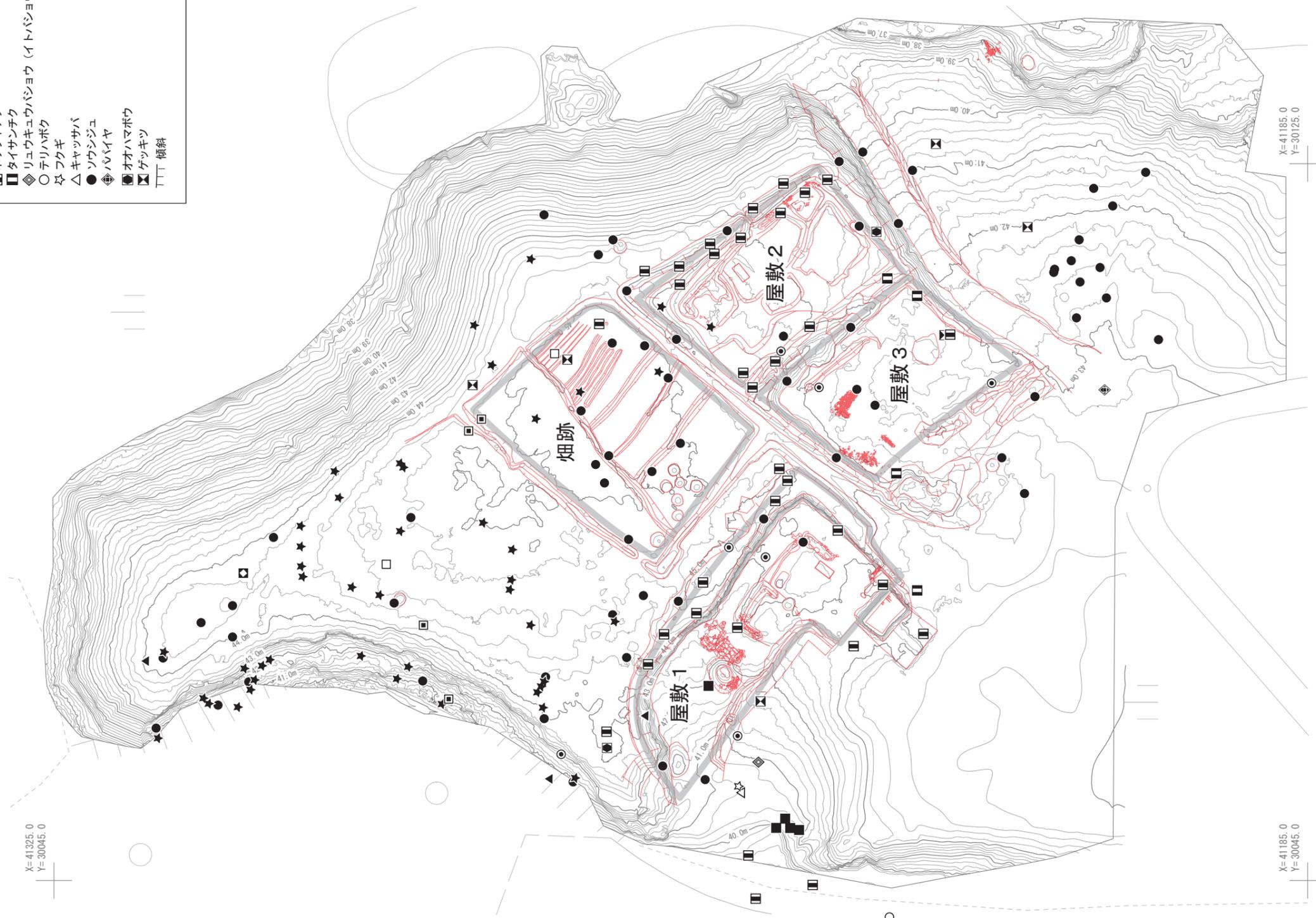
注 付表 2 植物目録については、本報告書では省略しており、『あやみや 29 号』を参照

※第 6 節 植生調査に関しては佐藤ら. 2020 「大工廻八所集落跡 B 地点における植物相と近代屋取集落の植物利用形態の生物文化遺産的考察」、沖縄市立郷土博物館紀要第 29 号『あやみや』より文章を転載し、図版については改めた。



凡例

- ◻ ソテツ
- ▲ リュウキュウマツ
- ◻ イヌマキ
- ◻ クスノキ
- ★ アダン
- ◎ クロツグ
- ピロウ (クハ)
- ▨ ホウライチク
- ▨ タイサンチク
- ◇ リュウキュウバショウ (イトバショウ)
- テリハボク
- ☆ フクギ
- △ キヤツサバ
- ソウシジュ
- ◆ ハルバイヤ
- オオハマボウ
- ⊠ ゲッキン
- TTT 傾斜



第69図 植生分布状況



ソテツ



リュウキュウマツ



イヌマキ





クスノキ



アダン



クロツグ





ビロウ



ホウライチク



タイサンチク





リュウキュウバショウ



テリハボク



フクギ





キャッサバ



ソウシジュ



パパイヤ





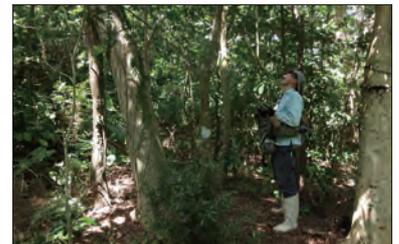
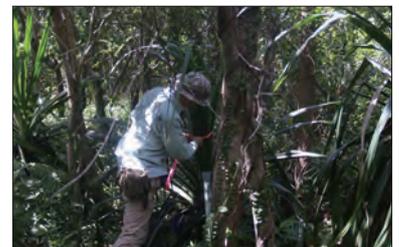
オオハマボウ



ゲッキツ



調査状況



図版 43 植生 6

## 第7節 聞き取り調査および文献調査のまとめ

今回の八所集落跡B地点の発掘調査に際して、現地調査と並行して関連する文献の取りまとめや聞き取り調査も行いました。八所集落及び周辺地域は米軍基地に接収されて長い年月が経っており、八所集落に縁故がある方から話を聞くことはできませんでした。八所集落では郷友会組織が結成されていないため郷友会誌も編纂されていません。大工廻の郷友会が発刊した『大工廻誌』や、その他文献に記載されている情報をまとめ、調査時の参考にしました。聞き取り調査は八所近隣集落出身の方や近隣で農耕を行っていた方を対象とし、戦前の生活の様子や他集落から見た八所集落の印象、戦後の周辺の移り変わりについて話をうかがいました。

### ■ 木々や水に囲まれたくらし ■

“ヤトゥクルーあたりは、琉球国時代、王府の管理地だった”とも言われています。周囲に林が多かった様子が文献資料や聞き取り調査からもうかがえ、「あのあたりは柚山だった」というふうに表現される方もいます。実質的な“王府の管理地”だった当時の明確な範囲・境界線は判っていませんが、少なくとも近隣住民にそういった一帯として意識されていた地域に八所集落は所在していました。大工廻集落から一本橋を越えて八所集落方面に向かうあたりから松林が広がっていたようで、世帯数が多く、屋敷や販売店、公共施設が密集して形成されていた大工廻集落から見ると、八所集落は林に囲まれた中に僅かな屋敷のみが点在している様子から“田舎”として映ったといえます。その反面、大工廻集落は開けた立地で林は少なかったため、世帯によっては焚きつけが不足すると悪天候の日でも一本橋を越えた先から枝や松葉などを拾い集めて来なければなりません。八所集落近辺は日々の焚きつけの確保に困らなかつたばかりか、薪の材料が豊富だったそうです。製糖期には薪を束ねて売ることによって現金収入が得られたため、薪泥棒を封じるために見廻りを行うほどだったという話も聞きました。ちなみに、売る薪の材は、竹でも木でも、焚きつけに使えるものであれば何でもよかったそうです。

八所集落は大工廻集落や越来方面に向かう際には与那原川や比謝川を渡らないといけな立地でした。八所集落の東側を北から南向きに流れる与那原川は、水量も豊かで、川沿いには湿地が広がり、水田地帯として稲作が行われていました。またエビや魚も獲れ、戦後も投網漁をしていたそうです。これらの河川の流路は増水しやすかつたため、雨が降ると、橋の通行が困難になり、川向こうとの往来や宇久田にあった尋常小学校（国民学校）への通学に不便をきたしました。特に白川から大工廻近辺までの川の流路は曲がりくねっているため氾濫しやすいのですが、この流路は人為的に造られたもので、氾濫させることによって土壌が肥沃になり、作物がよく育つたとも言われています。少し上流にさかのぼったあたりに位置している八所集落の傍でも川があふれることは決して珍しいことではありませんでした。大雨で川からあふれた水が引いた後の水たまりからウナギが獲れる、などといったささやかな自然の恵みもあったといえます。ウナギは普段から川に獲りに行っていたそうですが、川があふれると、労力をかけずに近場で捕まえることができたというわけです。

### ■ 戦後の八所集落周辺地域 ■

八所集落及びその周辺地域は戦後すぐに米軍の軍用地となり、立ち入ることができなくなりましたが、軍による施設建設や土地の造成などの影響を免れ、戦前と比べても大きな地形の変化は無い

といいます。この地域には黙認耕作で農作業を行う方々の出入りがあり、当初は戦前同様、主として川沿いの湿地での水稲耕作を行っていたそうです。しかし上流でダム建設工事が開始されると、与那原川の水量は激減したそうです。それによって流域に豊かに広がっていた水田も、水稲耕作ができるような状態ではなくなったといいます。折しもキューバ危機が起こり、砂糖の輸入が困難になったことからサトウキビの取引価格が高騰、さらには日本国内での米余りから減反政策が進められた時期とも重なり、水稲耕作が行われていた湿地部分やその周辺は、キビ畑へと転換されていきました。この転換期にはトラクターなどの農機具のリースも行われるようになっていたようで、今回の調査範囲内にもトラクターを入れたことがあったそうです。また、キビ畑となった元の湿地近くまで運搬用のトラックを入れるために、戦前からあった馬車一台分の幅の勾配のついた道を掘り、土を均しただけの路面に滑り止めのバラスを撒いて通りやすくしたという話を聞くことができました。今回の調査区内には実際にバラスが敷かれた坂道（SF01）がありました。道の両側には溝状の窪みがあり、道の両端にはやや大きめの石がところどころ縁石状に配置されていました。

キビ栽培ブームのような大きな転換期は、その後訪れなかったようですが、キクの栽培を始めた方が散水用に水溜を掘ったり、水溜に水を引くための給水設備を造ったりするなどの簡単な工事は今回の調査区内外で行われていたといいます。聞き取り調査では屋敷1のSG02がその水溜にあたるというものでした。SG02は約4×5mの掘り込みで、床面では重機の爪跡が確認されました。

キク栽培とは別に、今回の調査区あたりで園芸植物を栽培していた方もいたそうで、大きめの植物については、移植することがあれば、その痕跡が残っている可能性もじゅうぶんあるだろう、という話もありました。また自然にも生えてくるゲッキツやクチナシなどの香木は、庭木や生垣、盆栽用として購入需要があったため、抜いて持って行く人がいたといいます。

今回の調査範囲では戦前の屋敷の土手や石柱、道の跡などが確認できましたが、戦後に上述のような人の出入りがあり、またトラクターや重機などの使用もあった中で、その跡を留めてきたものである、という背景・経緯がわかりました。

## ■ 屋敷の中の建物や設備・家の造り ■

戦前、瓦葺きの家に住むことができたのは裕福な世帯だけでした。八所集落の近隣で同じく屋取集落であった白川集落では赤瓦を葺いていた家は集落内に5軒しかなかったといいます。その話をしてくださった白川集落出身の方の実家の母屋は木の柱で茅葺の屋根だったそうです。大工廻集落でさえ瓦葺きの家は少なかったといいます。八所集落もほとんどの家がダキガヤ（リュウキュウチク、ゴザダケザサ）で屋根を葺いていたそうで、瓦葺きの家は4軒のみだったそうです。

今回の調査では石柱が複数本確認されました。石柱の用途について、聞き取り調査では、白川集落出身の方は「畜舎や台所の柱だった」、大工廻集落出身の方は「ヒージャーヤー（山羊小屋）の柱にしていた」と話しており、八所集落跡B地点で見つかった石柱も、台所、もしくは家畜小屋の柱だったと考えられます。石柱と石柱との間は土壁を造り、白川集落出身の方によると、土壁の中には竹を入れていたとのことでしたが、その竹は、編むような手間をかけたものではなかったそうです。

八所集落跡B地点では、かまどと判別できるものや、その跡は見つかりませんでしたが、白川集落出身の方の話では、かまどを造るときは、専門の人に頼み、ちょっとした修理（ひび割れを埋める等）で済む場合は自分たちで田んぼの土と干した藁をまぜたものを塗って済ませたといいます。それでは済まないくらいの壊れ具合であれば、潰して一から専門の人に造りなおしてもらったそうです。

井戸を個人で持つことができたのは、裕福な屋敷に限られていました。今回の調査範囲内では井戸が見つかっていません。八所集落全体でも個人で井戸を持っていた屋敷は少なく、みんな共同井戸を使っていたそうです。そのかわりクムイ（ため池）はあちこちにあったようで、芋を洗ったり家畜の世話に使ったりするような水はクムイのものを使っていたそうです。

## ■ 暮らしをとりまく植物 ■

### 〈農作物と耕作〉

八所集落近隣は田んぼが多かったといえます。聞き取り調査によると「八所の向こう側の湿地も田んぼ、河川の傍は全部田んぼ」というくらい田んぼの多い地域だったようです。文献にも「与那原川流域の白川、知花、登川、大工廻と、中部でも有数の稲作地帯で、風光明媚な田園地帯だったという」との一文があり、この一帯に広範囲で田んぼが広がっていた様子がうかがえます。白川集落出身の方からの聞き取り調査によると「田んぼは、たいがい膝くらいまでの深さがあったが、深いところでは人の身長の方が浸かるほどあり、そういった深い田んぼでは杭を利用して足場を作っていた。足場には木を加工して利用する場合もあれば丸太をそのまま利用する場合もあった。」といえます。

米は、自家消費というより換金作物としての栽培がほとんどでした。特に屋取集落では、田を自ら所有していたのは、ごく僅かな世帯のみで、小作のようなかたちで稲作に携わっている世帯が多かったようです。そのためなおのこと、米を食す機会は少ないものでした。白川集落に住み、田を所有していた家では、男性の小作人に管理を任せており、その田は白川集落と八所集落の間に所在していたそうです。そして田を所有していても、普段の食事は蒸かした甘藷（以下、イモと記載）で、子ども達も学校の弁当には、やはりイモを持って行ったといえます。田を所有していた世帯でさえも、米の食事は特別だったことがわかります。

米同様、換金作物として多く栽培されていたのはサトウキビでした。しかし八所集落で栽培していたサトウキビは、嘉手納の製糖工場に出すほどの量ではなく集落内で加工できる程度の量だったとのことで、集落内にサーターヤ（製糖小屋）があったと文献にも記載があります。また聞き取り調査でも「八所集落にもサーターガマ（製糖窯）があったと聞いている」という情報が出てきています。さらには本書で併せて報告しているように製糖窯跡も検出されています。集落内で製糖されたものは樽に入れて那覇に売りに行ったそうですが、それほど大きな収入源となるようなものではなかったようです。

八所集落近辺の名産とされていた作物としては里芋があげられます。里芋は田芋と違って湿地でなくても栽培することができます。里芋は日々の主食であったイモとは異なり、慶事の料理の食材とされることが多く、これまた日常的には食べられなかった米と炊き合わせてチンヌク（里芋）ジューシーなどの料理で食すことから、少し特別な食材であったと思われます。

イモは上述のとおり日々の主食でしたので、どこの家庭の畑でも必ずといっていいほど育てていましたが、豆腐や味噌・醤油の原料となる大豆もまた、各家庭で栽培していました。白川集落出身の方の話によると、年に一回、旧暦5月に大豆の収穫を行ったといえます。そして、収穫を終えて大豆の葉が落ちているところにイモを植えたそうです。大豆の葉も肥料代わりにしていた様子や、輪作による畑地利用が行われていたことがわかります。屋取集落は、その成り立ちもあいまって世帯ごとの畑の面積は広くないところが多かったようですが、輪作を行うことで限られた畑地を効率的に利用して最大限の収穫を得る工夫がなされていた、と考えられます。

その他の農作物については、地域差があった可能性もありますが、近隣集落出身の方からの聞き取り調査では、八所集落のすぐ北隣で茶の栽培が盛んであったこと、白川集落では田芋やミカン、多少の粟・麦、さらにはキャッサバも育てていたことが話の中に出てきていました。

これらのうちキャッサバについては今回の発掘調査に伴う植生調査において屋敷1の近くで確認されました(第3章 第6節 参照)。戦前から八所集落でも白川集落同様に栽培されていた可能性があります。その他の、茶、ミカン、粟、麦に関しては八所集落での栽培の情報は得られていませんが、地理的にも近い集落で栽培されていたため、八所集落でも栽培されていた可能性は少なからずあると考えられます。また、食文化の観点から考えると、大麦は米の代用として食べていたり、小麦は、それを用いる料理・菓子等も多いことから、自分たちの生活において必要となる分を栽培していた可能性は高いと思われます。

畑の耕し方についてですが、白川集落出身の方の話によると、中には県の指導を受けて畦立てをする家もあったそうですが、畦を作らずに平植えをしている家のほうが多かったそうです。戦前の時点で畦立ては、まだそれほど普及していなかったことが考えられます。特に大豆などは、地面に窪みをつけ、そこに蒔いて育てていたという話も文献で見受けられます。わざわざ畦立てをしないことで、前述のとおり大豆を収穫した後、同じ場所にイモを植えるなど、輪作での畑地利用がしやすかったのかもしれない。

#### 〈屋敷・集落まわりの植物〉

農作物以外でくらしに密接に関わる植物として、屋敷の囲いや敷地・畑地内に植えられた樹木等について述べます。今回、八所集落跡B地点の発掘調査に際して植生調査も行いました(第3章 第6節 参照)。植生調査の成果に関連する話を聞き取り調査の際にも少し聞くことができたので紹介します。※以下〈〉内は話者の出身集落

##### 【竹】

- 屋敷には植えていなかった。竹細工を行うときには、よそから材料を手に入れていた。〈白川〉
- 竹は屋敷の範囲の目印になっていた。〈大工廻〉

##### 【ガジュマル】

- 防風林として植えていた。邪魔になる根は切って薪にしていた。〈白川〉

##### 【クバ】

- 屋敷内に2本ほど大きいクバが植わっていた。クバには大きいクバと小さいクバがあり(品種が異なるものなのかサイズ感的なものなのかは不明)、大きいクバでは扇を作り、小さいクバでは手綱や蓑を作っていた。〈白川〉

##### 【ソウシジュ】

- 葉は生のまま畑や田に鋤き込み、枝や幹の部分は薪として利用した。〈白川〉

竹は八所集落跡B地点でも多く確認されました。屋敷の土手近辺に多く見られることから、大工廻集落出身の方の話のように屋敷囲いとして人為的に植えられたことが考えられます。

同じようにガジュマルも八所集落跡B地点の屋敷の境目と思われる付近で確認されており、白川集落でのように防風林としての役割を担っていた可能性も考えられます。

クバは植生調査の際に5本確認されました。近隣世帯の扇や蓑、綱などの原材料の調達を、これらのクバで賄っていたのかもしれない。

ソウシジュは八所集落跡B地点で数多く確認されました。それぞれの屋敷地の内外を問わず、調査範囲内のあちこちに分布していました。白川集落出身の方の話のように、焚きつけにも使うことができ、田畑の肥料としても重宝されたソウシジュは、日々の生活において万能な植物でした。

## ■ 家畜とリサイクル ■

家畜として一番多く飼われていたのはブタ、次いでヤギで、ウシやウマは裕福な家でないとなかなか飼うことができなかつたといひます。そのほかニワトリを飼っていた家もあったようです。

屋取集落においては、ブタは売るためより自家消費のために養うことが大半でした。飼っている頭数も少なく、人間の主食だったイモの皮をブタにエサとして与えていました。また、ブタを飼っていた場所はフールといい、人間のトイレを兼ねていました。人間は用を足し、ユウナなどの葉でお尻を拭くとフールに捨てました。その排泄物と葉っぱはブタが食べ、さらにはブタの排泄物がフールのとなりに設けられたシーリ（水肥溜め）に溜まります。シーリに溜まった水肥は畑の肥料として活用されました。

ヤギは雑草を食べるので、大人が畑仕事の帰りに近辺の草を刈り取って持って帰ったり、学校から帰宅した子どもが草を取りに行ったりして、それを主なエサとして与えていました。ヤギの排泄物も肥料になりました。

ニワトリは卵を売ることを目的に飼っていたところが多かつたようですが、放し飼いの風習があり、多く飼育すると畑や農作物が荒らされてしまうことから、一世帯あたりの飼育数が制限されていたり、ニワトリが屋敷地外を歩いているところを見廻り係に見つかると没収されることもあったといひます。飼育数が少ないので、卵を売るといっても小遣い程度の収入にしかならなかつたそうです。

## ■ 食べていたもの ■

戦前、主食とされていたのはイモで、晩まで食べる分を朝まとめて炊いていました。汁物やおかずは、あつたり無かつたりで、イモだけで一食済ますこともあったといひます。学校に通う子どもたちは弁当としてイモを持って行き、食べた後の皮はブタのエサにするために持ち帰りました。イモの皮を持って帰らないと親に怒られたという話はよく聞きます。大人数で食事をするようなところは食後にイモの皮がたくさん出てくるので、それを買い取ってまわっていた方がいた、という逸話もありました。

朝、イモを炊く際にイモの上にそらまめの葉を乗せて蒸したという例も聞かれました。こうしてイモと一緒に蒸しあがつたそらまめの葉は、朝食時に味噌汁の実にしたり、味噌あえやチャンプルーにして昼食や夕食のおかずにしたそうです。一日分の食事となるイモをシンメナービで炊きあげるには時間がかかるため、家事を担う女性は、朝は早ければ3時、遅くとも5時までの間に起きて支度をしたといひます。朝に支度したもので、ほぼ夕食まで賄えるようになっていたのは、農作業の合間にいかに効率よく食事をできるようにするかというところから生まれた工夫でもありました。

汁物は上述のとおり必ず出されるものではなかつたようですが、作る場合も、その具としていたのは、先に紹介したそらまめの葉であつたり、イモの葉であつたりと特別なものではありませんでした。折々に畑で栽培されている作物の副次的な部分を具としていたようです。養蚕を行っていた白川集落では桑の芽を汁に入れたりすることもあったそうです。八所集落でも養蚕を行っていたとあるので、類例があつたかもしれませぬ。

豆腐は、家庭で食す程度の量であれば、畑で収穫した大豆を原料に、自家製で賄うことができたといえます。ただ、お祝いや行事のときのごちそうとなると、自家製の豆腐の量では足りず、離れた集落の店まで豆腐を買いに行ったそうです。基本的に自家製ですので、豆腐といえども、こんにちの私たちの食生活のように気軽に味噌汁の具などにできるものでもなかったようです。

キャッサバからとったデンプン（タピオカ）は、白川集落出身の方のお話では、ネギや少しの肉を加えて、お茶うけやおやつなど、小腹を埋めたいときに食べたりしたそうです。池原集落出身の方から聞いた話でもキャッサバデンプンをポーポーやプットゥルーみたいに調理して食べていた、という逸話が出てきました。このあたりではキャッサバのことを“タピオカ”と呼ぶところが多かったようです。

肉類ではブタ肉を主に食べていました。年末にブタを屠殺し、脂をとって甕に貯め、肉は塩漬けにして保存し、それらを次の年末まで少しずつ消費していきました。肉は特別なときにしか食べられないものでした。そのため、慶事などがあって通年の保存量の肉では足らなくなる場合には、そのために店まで肉を買いに行ったり、生きたブタを購入して年末と同様に解体して備えました。

ニワトリを飼っていた家もありましたが、肉を食べるためではなく、前述のとおり卵を販売するのが目的でした。そのため、本来現金収入源である卵が自宅の食卓にのぼるのは、本当に特別なときだけでした。鶏が卵を産まなくなったときは、つぶして、その肉を食べたりすることもあったようですが、そもそも飼っている数が少ないので、滅多に口に入るものではなかったようです。

周辺地域に関しては、つかまえたタカ（サシバ）を食べたという話も出てきています。ネズミをおとりに仕掛け、それを狙って飛んできたタカをトリモチでからめて捕獲していたようです。獲ったタカはジューシーなどにして食べたといえます。

内陸に位置する八所集落付近では、たまに行商人が売りに来たり自ら海沿いの地に出向く機会にしか海産物を手に入れることはできませんでした。その代わりに、近くの川ではウナギやフナ、タナガ（手長エビ）等々、豊富に獲れたといえます。「海のエビよりも川で獲れたエビのほうがおいしかった」という話も聞かれました。また、稲刈りが終わった後の田んぼで投網をしてターイユ（ギンブナ）を獲った、という話もありました。川魚は汁物や揚げ物、味噌煮にして食べたといえます。八所集落のすぐ北隣に住んでいた方の家では、ターイユでカマボコを作ったりすることもあったそうです。

## ■ まとめ ■

屋取集落は、痩せた土地に立地し生活に大変苦労したことが語り継がれる例が少なくありません。しかし『大工廻誌』の中の記述を見ると、八所集落で生活された方は、貧しい生活であったことを思い返しながらも「山も畑も水もあって、とてもいい屋取だったと思う」と、立地に関してはそれなりに恵まれていた印象を持っていたようです。

山が近く林に囲まれた立地は、流通や交通には不便でしたが、薪や焚きつけを豊かに供給してくれました。また自給自足が基本の戦前の暮らしにおいて、耕作や日常生活に必要な水資源が身近にあるということは、とても重要なことでした。川や湿地が近い住環境にあることで、川があふれたり、それによって不利益や不便が生じる、といったことも数々ある中、それをも上回るだけの水利が、そこにはあったのだと考えられます。

八所集落内には芸達者な方がおり、その方の手引きでエイサーも行っていたといえます。世帯数の少ない集落だったためか、子供や女性たちもエイサーに参加していたそうですが、当時、それはあま

り例を見ないことだったようです。

他の集落と比較すると立地環境や世帯数などで見劣りすると思われがちな八所集落ですが、少ない世帯数ながらも、それを逆手に取るように独自のエイサー文化を育もうとしていた様子や、自然に囲まれた環境を生活や農耕に積極的に活かしていた様子がわかります。

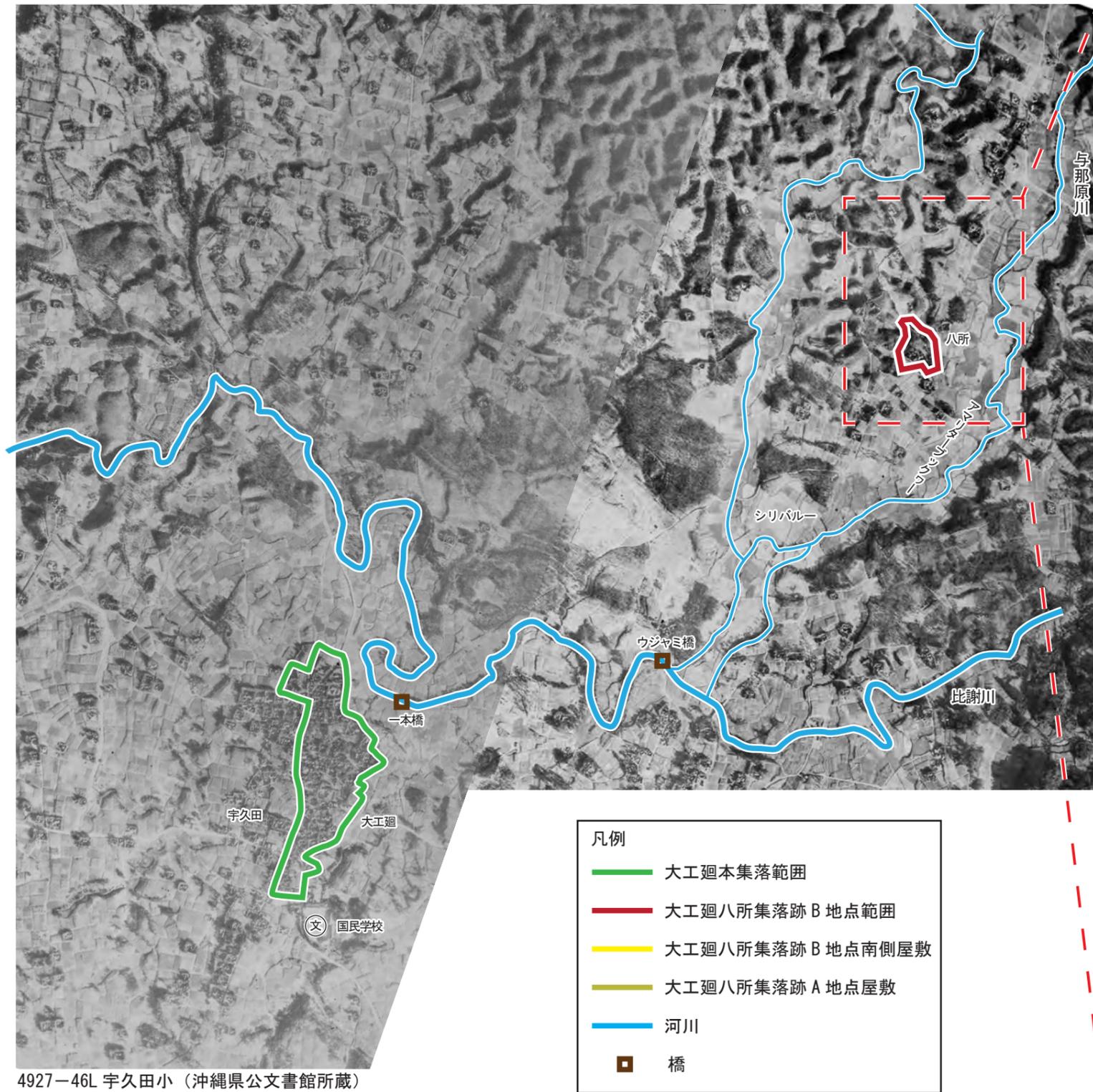
今回の調査範囲は八所集落の中でもごく一部の生活空間にすぎませんが、考古学的な遺構・遺物の報告内容に重ねて、植生調査の結果や本章の内容を複合的にとらえることで、当時の八所集落の生活をうかがい知ることができました。

■ 話者 ■ \* <>内は出身字

I・Hさん	1943（昭和18）年生まれ・男性〈知花〉
K・Rさん	1936（昭和11）年生まれ・男性〈倉敷〉 ※戦後 安慶田に移住
T・Sさん	1923（大正12）年生まれ・男性〈白川〉
T・Yさん	1927（昭和2）年生まれ・女性〈白川〉
H・Hさん	1927（昭和2）年生まれ・男性〈大工廻〉
S・Yさん	1948（昭和23）年生まれ・男性〈池原〉



大工廻八所集落と本集落周辺の様子



4927-46L 宇久田小 (沖縄県公文書館所蔵)

大工廻八所集落周辺の様子



1945年2月28日撮影\_ON\_46LR 東内喜納原付近 (沖縄県公文書館所蔵)

図版 44 調査区周辺状況 (沖縄県公文書館所蔵写真 加筆)

## 第4章 大工廻上与那原遺跡調査成果

### 第1節 調査の方法

#### 調査区設定

今回の調査に先立ち実施された「嘉手納（H27）知花地区文化財試掘調査」ではI－TP43トレンチの北側において遺物包含層と遺構を確認した。さらにトレンチの北側を拡張したところ、遺構は中心部以外には広がらないことが判明した。本発掘調査では敷地造成に伴う伐根作業によって影響のあるI－TP43トレンチと拡張トレンチを調査区に設定した。現地作業は令和元年10月24日から令和元年12月3日までの期間（約2箇月間）大工廻八所集落跡B地点調査と並行して行った。調査面積は約28㎡である。

#### 表土掘削

調査前に不発弾対策として調査範囲全域の磁気探査を行った。その後、担当者立ち合いのもと、重機にて試掘坑のポイントから掘削を開始し、遺物包含層の上面を目安に掘り下げる手法をとった。

#### 包含層掘削及び遺構検出

試掘調査では遺物包含層が確認されたI－TP43トレンチ北壁に沿いサブトレンチを設定後、拡張トレンチにおいて包含層の広がり把握した。本発掘調査では遺物包含層から人力で遺構の検出に努めた。基本的に包含層と遺構は長軸で半裁し、堆積状況の確認を行った。

#### 記録作業

現地での記録作業は主に、三次元点群測量で行い、土層断面図については写真測量を併用した。日々の作業記録や遺構の詳細等の記録写真撮影については35mm一眼レフカメラ（スライド）とデジタルフルサイズ一眼レフカメラ（1500万画素）を併用した。報告書掲載の写真はデジタル画像を使用した。また遺構検出時には高所作業車による全景写真撮影を行った。

### 第2節 層序

今回の調査区は東側に傾斜する丘陵の斜面地に位置しており、標高は41.0～42.5mを測る。層厚は0.34～1.4mである。試掘調査においてグスク時代から近代にかけての遺物包含層等が確認されていた。今回の本調査では遺構の全体が明らかになった。基本層序として4つに区分した。

#### I層（表土・攪乱）

色調は褐色から明褐色土（7.5YR）を主体とし2層に区別した。I a層は表土、I b層は攪乱層。ゴム管が埋設されており、ゴミ袋やガラス瓶等の現代の廃棄物とともに土器・青磁・瓦質土器・沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器・瓦・焼土・石器等が出土した。

#### II層（地山の土を使った造成土）

近現代の造成土。色調は黄褐色土（10YR5/8）を主体とする層。調査区南東側の大きく掘り込まれた部分にて堆積を確認した。土器・瓦・焼土等が出土した。

#### III層（遺構検出面）

グスク時代の包含層。色調は暗褐色から褐色土（10YR）を主体とする層。主に調査区中央付近でレンズ状に堆積、色調・混入物の違いによりIII a・III b・III c層の3層に区別した。遺物包含層と土坑、ピットが確認された。土器・青磁・炉壁・鉄滓（椀形滓）等が出土した。

#### IV層（地山）

国頭マージと呼ばれる赤土である。色調は明褐色土（7.5YR4/6）及び明黄褐色（10YR6/6）である。所々にマンガンを含むIV a層と、石英を多く含むIV b層の2種に区別した。

### 第3節 遺構

遺構としては調査区南西側において、地山をレンズ状に掘り込んだ土坑を確認。平面形状は楕円形で、その規模は長径約2.2m、短径約1.7m、深さ約0.28mである。土坑内よりピットを3基確認した。ピットの埋土は土坑本体と同質・同色である。土坑、ピットともに遺構の性格は不明である。

### 第4節 遺物

本遺跡からの出土遺物は総数92点を数えた。その多くが破片であった。層序別にみるとI層29点、II層7点、遺構検出面のIII層からの出土は56点であった。図化は行わず、図版においては試掘調査・本調査各々で層序毎に主なものを掲載した。以下、主な遺物の種類ごとにその概要を述べる。

第26表 出土遺物一覧

種類	I層	II層	III層	合計
土器	4	4	48	56
青磁	1		1	2
沖縄産無釉陶器	3			3
沖縄産施釉陶器	1			1
瓦	2	1		3
瓦質土器	2			2
円盤状製品	1			1
炉壁?			1	1
鉄滓			1	1
焼土	11	2		13
石器	1			1
石材?			4	4
コクロカメムシ			1	1
ガラス	1			1
炭化物	2			2
合計	29	7	56	92

〈土器〉（図版47- 2・3・13・14、図版48-18～23、図版49-28・31～34）

グスク時代のものと思われる土器が主にIII層から56点出土した。小片で摩耗が激しく、全形をうかがえるものはなかった。胎土を見ると泥質のものが多く、砂泥質のものは極少量であった。泥質のものは、僅かに白色粒と赤色粒が入り、器面がポーラス状になるものが多くみられた。内訳は口縁部が2点、底部が2点、胴部が52点であった。口縁部は口唇部が方形のものと舌状のものがある。胴部器厚は前者が1cm、後者が0.8cmである。底部は平底で器厚は0.7cmと0.9cmであった。

〈青磁〉（図版47- 5、図版48-24）

青磁は2点の出土で皿と思われる。波状の口縁部と、見込みに文様が施された底部である。

〈沖縄産陶器〉（図版47- 6～8、図版49-29）

沖縄産陶器は無釉陶器が3点出土したが、破片のため器種不明である。施釉陶器は外面のみ釉薬を施した袋物と思われる胴部が1点出土した。

〈瓦質土器〉（図版47- 9・10）

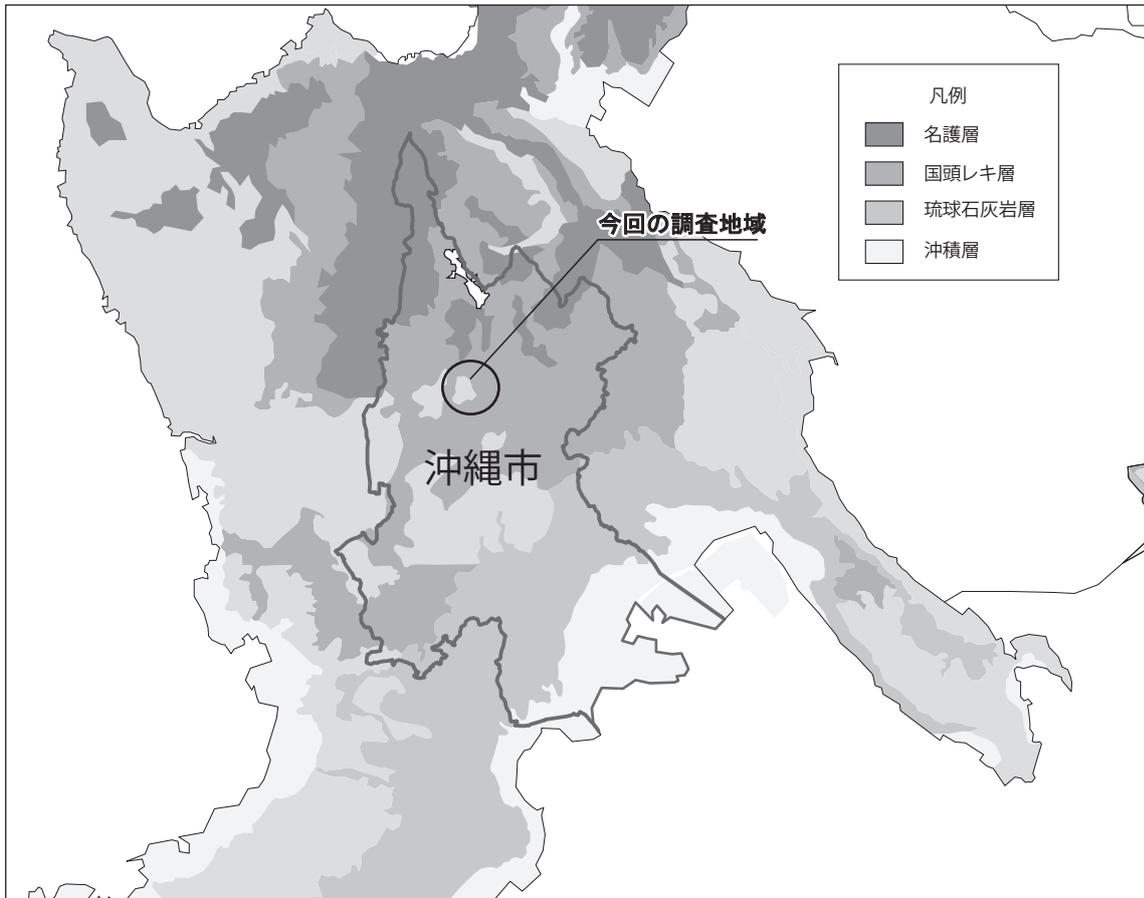
瓦質土器は2点出土した。灰色を呈し胎土に黒・白の砂粒を含み轆轤痕の残る口縁部が1点。橙色を呈し胎土の混入物は少ないが、赤色粒を含む器種不明のものが1点ある。どちらも胎土は砂質である。

〈瓦〉（図版47-11・12・17）

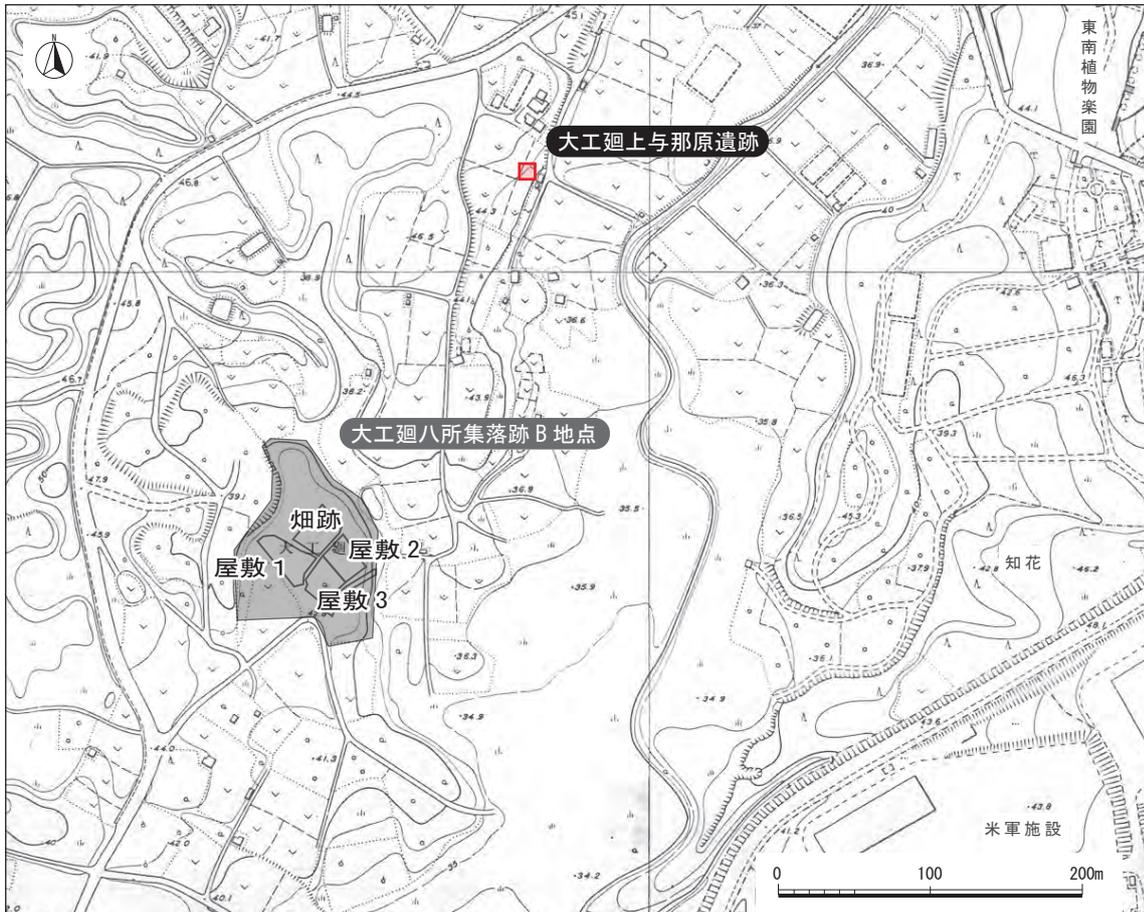
瓦は丸瓦が3点出土した。全形をうかがえるものは1点のみで、裏面には布目と紐跡が残る。

〈円盤状製品〉（図版47- 1）

平瓦の端部を転用した円盤状製品が1点出土した。凹面に布目が残る。



第 70 図 沖縄市の位置と調査区の位置



第 71 図 大工廻上与那原遺跡の調査地点

〈石器〉（図版 49-30）

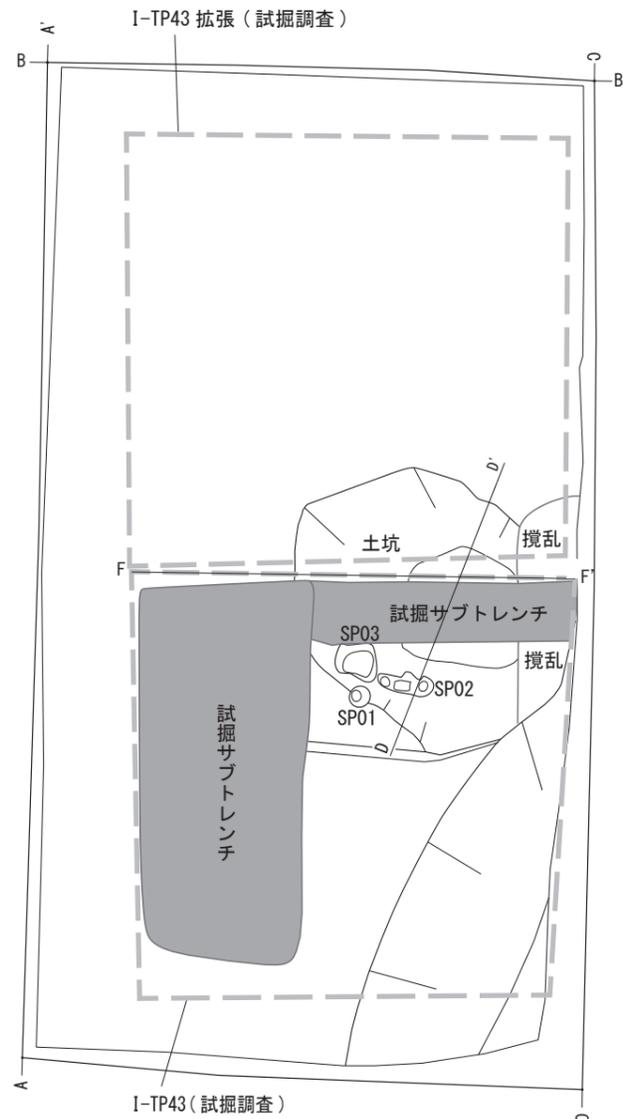
石器は破損品ながら表面の一部が研磨されているものが1点出土した。

〈その他の遺物等〉

焼土は13点出土したが、穿孔されているもの（図版 47-15）が1点確認された。用途は不明である。炉壁と思われるもの（図版 49-35）が1点、椀形滓（図版 48-25）が1点出土した。

また、Ⅲ層包含層より昆虫の外骨格の一部（図版 48-27）が出土し、当館自然史担当学芸員の刀禰により南西諸島に分布するコクロカメムシ *Scotinophara parva* (Yang, 1934) の前胸背及び小楯板と同定された。非常に近縁な種として水稻の重要害虫として知られるイネクロカメムシ *Scotinophara lurida* (Burmeister, 1834) がおり、大阪府八尾市の亀井遺跡の弥生時代後期の堆積物から遺体が発見されている（友国ら, 1993）。本種もイネ科植物を寄主とする水田害虫であり、人間の生活跡から出土したということから、水田に由来する可能性がある。

X=41504.0  
Y=30228.0



X=41504.0  
Y=30235.0



43.0m A A'43.0m

42.0m B B'42.0m

43.0m B B'43.0m

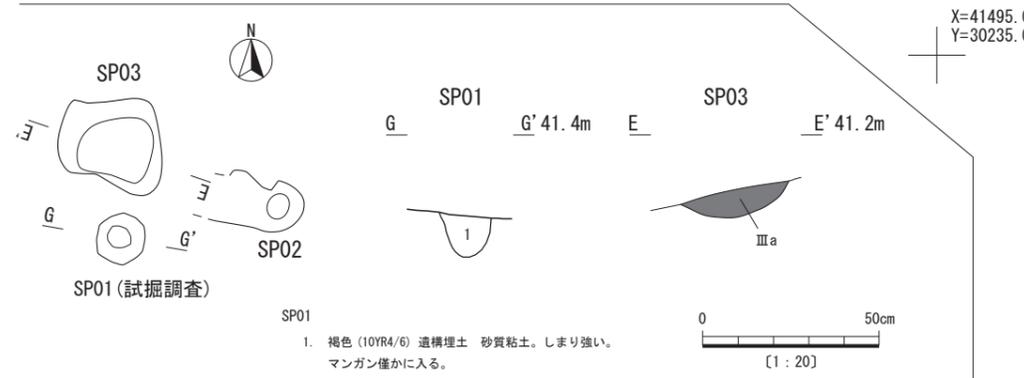
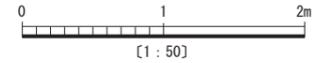
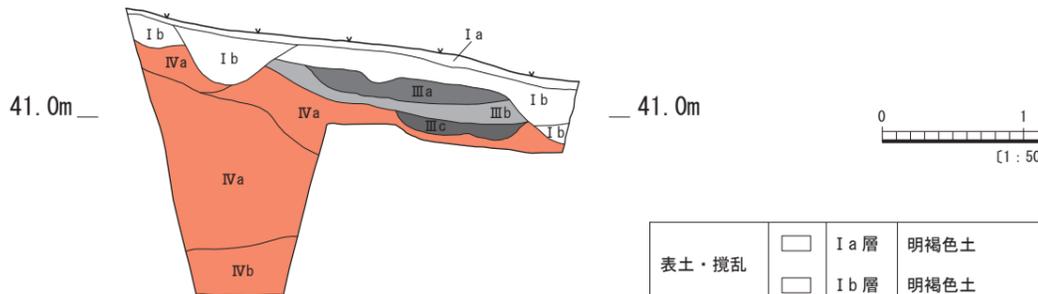
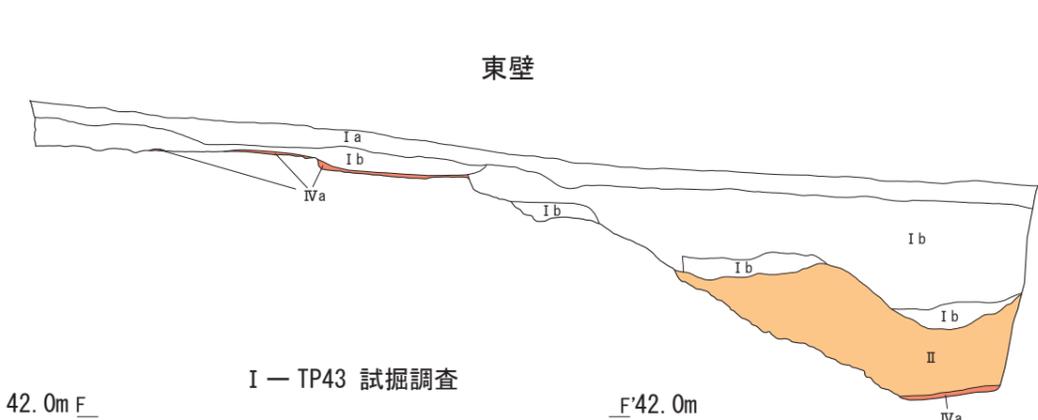
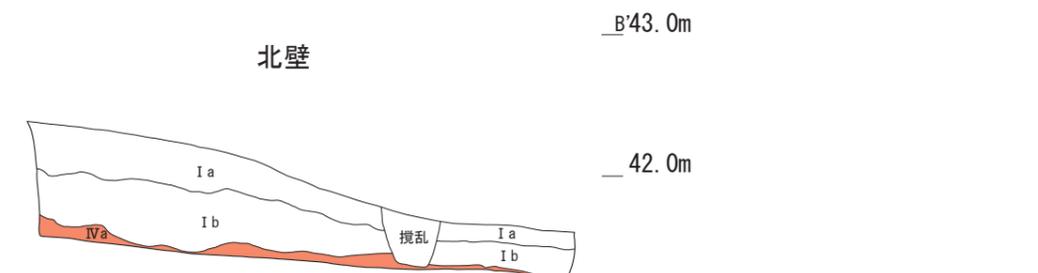
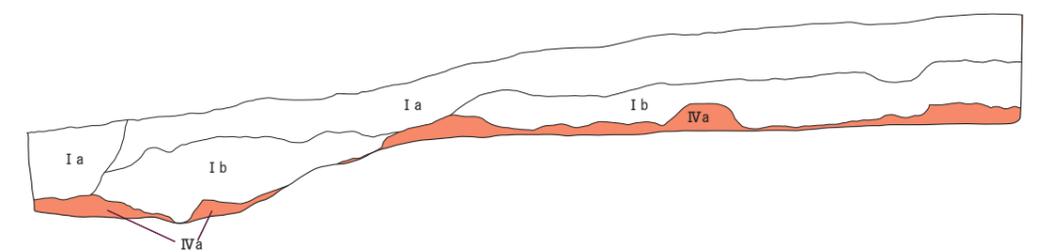
42.0m C C'42.0m

42.0m F F'42.0m

41.0m D D'41.0m

42.0m F F'42.0m

41.0m D D'41.0m



1. 褐色(10YR4/6)遺構埋土 砂質粘土。しまり強い。マンガン僅かに入る。

表土・攪乱		I a 層	明褐色土
		I b 層	明褐色土
地山の土を使った造成土		II 層	黄褐色土
遺構検出		III a 層	褐色土
		III b 層	褐色土 (黄褐色土粒・炭化物・焼土が目立つ)
		III c 層	暗色土 (焼土・炭化物混ざる)
地山		IV a 層	明褐色土 (所々にマンガンを含む)
		IV b 層	明褐色土 (石英多く含む)

第 72 図 大工廻上与那原遺跡試掘調査・本調査 平面図・セクション図



I - TP43 北壁 (南から)



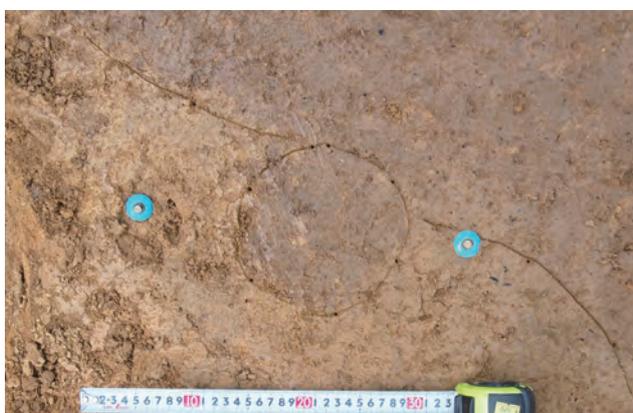
I - TP43 東壁 (西から)



遺構・鉄滓検出状況 (南から)



遺構断面検出状況 (南から)



SP01 検出状況 (南から)



SP01 半裁状況 (南から)



I - TP43 拡張 (北西から)



I - TP43 拡張南壁 (北から)

図版 45 大工廻上与那原遺跡試掘調査 (I - TP43) 状況



調査区設定状況（南西から）



Ⅲ層検出状況（南西から）



Ⅲ層半裁状況（東から）



Ⅲc層検出状況（東から）



Ⅲ層完掘状況（東から）



完掘状況（南西から）



北壁（南から）



東壁（南西から）

図版 46 大工廻上与那原遺跡本調査状況

I 層



1 円盤状製品



2 土器



4 焼土



5 青磁



3 土器



10 瓦質土器



6 沖縄産無釉陶器



8 沖縄産施釉陶器



7 沖縄産無釉陶器



9 瓦質土器



11 瓦



12 瓦

II 層



13 土器



14 土器



17 瓦



15 焼土



16 焼土

Ⅲ層



18 土器



19 土器



21 土器



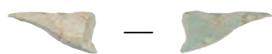
22 土器



20 土器



23 土器

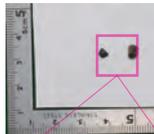


24 青磁



25 鉄滓 (椀形滓)

27 コクロカメムシ



前胸背と小楯板



標本

図版 48 大工廻上与那原遺跡試掘調査 (I - TP43) 出土遺物

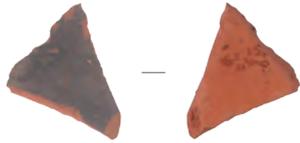
I 層



28 土器



30 石器



29 沖縄産無釉陶器

Ⅲ層



31 土器



32 土器



33 土器



34 土器



35 炉壁

## 第5章 総括

### 第1節 大工廻八所集落跡B地点

ここまで嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内に所在する大工廻八所集落跡B地点の令和元年度の発掘調査成果を報告してきた。以下に今回の発掘調査の成果を、層序・遺構・遺物・植生調査・聞き取り調査の5項目に分け、それぞれ特徴的な部分について触れ、総括とする。

#### 層序について

層序は7つに大別して報告した。

I層は表土で戦後から現代の堆積である。米軍の造成や黙認耕作地として利用されていた状況が観察できた。近代から現代の遺物が混在する形で数多く確認できた。

II層は沖縄戦から戦後までの層である。屋敷3のトレンチ4中央から南東側周辺で観察できた。溶解したガラスや被弾等で発生した火災によるものと思われる薄い焼土面を確認している。また、屋敷1の建物跡（SB01）とフル跡（SVP01）の間からは、薬品瓶や統制磁器等の戦争関連の遺物がまとも出土しており、沖縄戦頃に日本軍または、その関係者が出入りしていたことが考えられる。本調査区内において戦闘があったかどうかについては不明である。

III層は八所集落が機能していた時期の層である。おおむね大正期から沖縄戦までの堆積と考えられる。各屋敷を中心とする多くの遺構や八所集落期の遺物包含層を確認している。また、各屋敷とも、屋敷地として整地した痕跡（造成土）が確認された。中でも屋敷1では傾斜面を平地にするための大規模な造成を確認することができた。

IV層は八所集落期以前の堆積である。屋敷2のトレンチ2で耕作土と思われる堆積が確認された。八所集落成立直前、もしくはすでに周辺で生活をはじめていた人々による耕作と思われる。

V～VII層については自然堆積及び地山である。トレンチ7のV層では、地震等、自然の影響による地割れと思われる状況を確認した。VI・VII層はマージ及び千枚岩の岩盤である。基地移設にかかる調査を通して、はじめて岩盤を確認することができた。

#### 遺構について

遺構は検出層序及び地区ごとに分けて報告した。

IV層検出の遺構としては、焼土坑5基、土坑5基、ピット7基、溝跡、鍬跡が確認された。それぞれIII層直下の堆積であることや、焼土坑（SK01・05）及び土坑（SK09）の年代測定の結果から、八所集落期よりもやや古い、近代から近世頃に展開された遺構と考えられる。八所集落が形成される前に、何らかの耕作や薪炭の確保等、人々の動きが想定される。

III層検出の遺構は、屋敷1から3を構成する土手や建物跡をはじめ、道跡、畑跡等の遺構から当時の生活がうかがえる。屋敷の規模では、屋敷1約510㎡、屋敷2約252㎡、屋敷3約266㎡と、屋敷1の面積が最も広い。また、屋敷1は2基のフル（SVP01・02）やそれに付随するシーリ（SKP01）の存在、建物跡（SB02）周辺に多く見られた総量2,240kgの丸瓦・平瓦の存在が屋敷2・3の状況とは一線を画す状況であった。建物跡（SB02）が総瓦葺きの屋根であったかどうかまでは断定できないが、少なくともアマダイガーラ（雨垂瓦）等、部分的な瓦葺きであったと考えられる。屋敷1が各屋敷の中でも優位的な存在であったと考えられる。屋敷3は事前踏査の際に屋敷東側から南東側にか

て、フルの石材と考えられる石灰岩の切石が地表面上に散乱していたことから、本来はこの付近にフルがあった可能性が考えられる。なお、畑跡については、各屋敷に近接する状況から各屋敷もしくは、いずれかの屋敷が使用する畑であったと考えられる。

Ⅱ・Ⅰ層検出面は沖縄戦から戦後であり、Ⅱ層検出面の遺構を戦中、Ⅰ層検出面の遺構を戦後と判断した。戦中と思われる遺構としては「コ」の字状に形成される土塁（SW01）があり、防御設備のような機能が想定される。具体的な使用については不明であるものの、本調査区から150 mほど西側にある道（現市道38号線）に敵兵が通ることを意識して造られた可能性がある。

## 遺物について

遺物は総数3,226点出土した。出土の特徴として、そのほとんどが各屋敷から得られた資料である。屋敷及び屋敷外に大別して点数を見ると、屋敷1が1,302点、屋敷2が272点、屋敷3が1,410点、屋敷外が242点であった。遺物の種類としては14種で、中国産陶磁器5点、本土産陶磁器497点、沖縄産陶器1,610点、ガラス製品210点、金属製品449点、銭貨9点、石製品・石材47点、プラスチック製品16点、瓦332点、円盤状製品3点、レンガ2点、貝製品1点、獣骨類32点、炭化物13点である。今回の調査で得られた資料は、おおむね大正期から沖縄戦までの八所集落期のものが中心であった。

## 植生調査について

八所集落期やその前後の自然環境及び植物利用の解明を目的として、現地踏査による植生調査を実施した。この調査により計184種（21亜種変種含む）の維管束植物が確認された。

中でも八所集落期の植物利用の痕跡と考えられるものとして、防風林や畑の緑肥として活用されたといわれるソウシジュを多数確認できた。また、各屋敷の土手周辺では、屋敷境界の目印やバーキ・ジョーキ等の生活道具の材料として植えたと考えられる熱帯アジア原産のハウライチク及びタイサンチクを確認することができた。他にも屋敷1フル（SVP01・02）北西側と、屋敷2の土手東側から、トレットペーパーとしてその葉が利用されたといわれるオオハマボウがそれぞれ1株ずつ確認されたことなど、多くの植物利用の痕跡を発見することができた。

## 聞き取り調査および文献調査について

今回の聞き取り調査では1923（大正12）年から1948（昭和23）年生まれの6人の方から話をうかがうことができた。直接の八所集落ご出身の方は居なかったものの、周辺の状況や戦後の土地利用状況を教えていただいた。特徴的な点としては、八所集落内の建物はほとんどが茅葺きであったことや、八所集落に井戸は少なく、水の利用はほとんどが共同井戸かクムイ（ため池）からであったこと等が確認できた。また、八所集落内でもサトウキビの栽培がされていたこと、サーターガン（製糖窯）があったことをご教示いただいた。製糖窯は付編で報告しているように実際に確認、簡易記録を行うことができた。

その他、戦後の土地利用として、道跡1（SF01）は戦前の様子は空中写真でも確認できていたものの、発掘調査で戦前の堆積を確認することができなかった。聞き取り調査において、戦後になって馬車1台分の幅であった道を現在の形に造り変えたという情報が得られた。

## おわりに

これまでの聞き取り調査や文献調査の結果から『八所』と呼ばれていた屋取集落において、はじめての発掘調査を行った。3つの屋敷を中心に当時の畑跡や道跡等、集落を構成する多くの遺構や遺物を確認することができた。また、それだけではなく、八所集落期以前の焼土坑や戦中・戦後の土地利用の一端も垣間見ることができた。

さらに発掘調査以外の調査として、植生調査・聞き取り調査・文献調査を行うことで、当時の状況について、より具体的な情報を集めることができた。

今後については、本調査区周辺に点在する八所集落に含まれる他の屋敷跡との比較や八所集落以前の状況の解明が課題である。八所集落以前については、文献や聞き取り調査の結果から、周辺で炭焼きが行われていたことや、この周辺が首里王府管轄の杣山であったことが指摘されている。周辺の調査の際は、このことを念頭に置きながら慎重に取り組む必要がある。

## 第2節 大工廻上与那原遺跡

嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内に所在する大工廻上与那原遺跡の令和元年度の発掘調査成果を報告した。以下に今回の発掘調査の成果を、層序・遺構・遺物の3項目に分けて記載し、総括とする。

### 層序について

層序は大きく4つに区分して報告した。

I層は表土と攪乱層である。戦後、黙認耕作地として利用されていた状況が観察された。現代遺物をはじめとして、排水もしくは給水に利用されたと考えられるゴム管の埋設が確認された。

II層は地山（マージ）を利用した造成土であった。明確な現代遺物が確認されず、層厚は厚いところで0.6mにも及び、重機利用も想定される状況であったことから、近代～現代にかけての造成であると考えられる。

III層は、グスク時代の遺物包含層である。本調査区唯一の遺構検出面でもあり、出土遺物は土器を主体とする。本調査区よりも標高の高い西側丘陵上からの二次堆積であると考えられる。

IV層はマージの地山である。調査区全体で確認することができた。

### 遺構について

遺構はIII層平面にて1基の土坑と土坑内より3基のピットが確認された。遺構自体の用途は不明であった。ピットの連続性や本調査区の立地が緩斜面であることを考えると、建物跡等の構造物に伴う遺構ではないことが推測される。また、土坑及びピットの埋土は同質・同色であることから、ほぼ同時期かつ一時的に使用されたものと考えられる。

### 遺物について

遺物は総数92点出土した。グスク土器と考えられる土器片が最多で56点を数える。僅かながら青磁や石器のほか、鍛冶関連遺物である椀形滓や炉壁と思われる資料が確認されている。

いずれも本調査区よりも標高の高い西側丘陵上からの二次堆積と考えられる。

## おわりに

今回の調査により、基地造成や黙認耕作等に伴う開発を辛うじて免れた遺構や遺物等の資料を得ることができた。残念ながら本調査区においての遺跡の保存状態は悪く、断片的な情報を記録することしかできなかった。しかし、これまでの周辺踏査や試掘調査等の結果までを総合的に加味すると、遺跡の中心地となる居住域は、本調査区よりも標高の高い西側丘陵上に存在していた可能性が考えられる。丘陵上は後世の削平等の影響により包含層こそ確認できなかったものの、グスク土器や中国産白磁の破片が表面採集されている。また、本調査区よりも標高の低い東側の湿地帯部分では、畦畔や木杭等が確認されており、グスク時代の水田耕作に伴う可能性がある。本調査区の立地は、これらの環境を結ぶ緩斜面に位置し、遺物包含層は西側丘陵上からの二次堆積であると考えられる。土坑・ピットについては詳細不明であったものの今後は、周辺の発掘調査成果とも合わせて、本遺跡における遺跡全体の性格の検討や居住域・生産活動域等、土地利用の差異を慎重に確認していく必要がある。今回の発掘調査成果はそのための貴重な資料となる。

## 参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・集号・発行機関	参考・引用箇所
「広報おきなわ 10月号 No.508」	2016	沖縄市役所	第1章
『沖縄県史 各論編 第四巻 近世』	2005	沖縄県教育委員会	第2章
『沖縄市基地内文化財』	2010	沖縄市文化財調査報告書 第37集	第2章
『沖縄市史 第二巻 資料編1 文献資料にみる歴史』	1984	沖縄市教育委員会	第2章
『沖縄市の遺跡 -第2次分布調査報告書-』	2002	沖縄市文化財調査報告書 第28集	第2章
『沖縄市の自然 やんばるの入口』	2016	沖縄市立郷土博物館	第2章
『沖縄市 緑と水のネットワーク計画』	1993	沖縄市	第2章
「沖縄のさとうきび生産と糖業に関する「覚書」(上)」	1997	斎藤 高宏 / 『農総研季報 (34)』 / 農林水産省農業総合研究所	第2章
『川と水と人間と 第3集』	2002	比謝川をそ生させる会	第2章
『具志川市誌』	1970	具志川市役所 (新垣 幸蒲)	第2章
『白川屋取集落 一屋敷跡発掘調査報告書-』	1985	沖縄市文化財調査報告書 第7集	第2章
「設備システム・事業計画 51 北谷浄水場地下水系水道硬度低減化施設」	2003	『水道技術ジャーナル 第29号』 / 公益財団法人水道技術研究センター	第2章
『屋取集落に生きる -池原上田原・仕明座原遺跡発掘調査報告書-』	2008	沖縄市文化財調査報告書 第34集	第2章
『沖縄大百科事典 上巻』			
『沖縄大百科事典 中巻』	1983	沖縄タイムス社	第2・3章
『沖縄大百科事典 下巻』			
『基地に消えた古里 大工廻誌』	2009	大工廻郷友会	第2・3章
『市街地における水辺空間の再生調査 (比謝川・天願川・報得川)』	2004	沖縄玉水ネットワーク	第2・3章
『沖縄市史 第三巻 資料編2 民俗編 -冊子編-』	2015	沖縄市役所	第3章
『農業と生活 -池原・登川・知花-』	1983	中部農業改良普及所	第3章
『日本原色カメムシ図鑑』 陸生カメムシ類	1993	友国雅章ら / 全国農村教育協会	第4章
『兵隊盃 平和への無限の思い』	1984	加藤六月	本土産 / 兵隊杯
『番号の付されたやきもの -戦時下の瑞浪窯業生産-特別展』	2012	瑞浪市陶磁資料館	本土産 / 統制番号
「いわゆるスンカン・マカイについて」	2002	宮城 弘樹 / 『壺屋焼物博物館紀要 第3号』 / 那覇市立壺屋焼物博物館	本土産陶磁器
『鏡水土砂場原A遺跡-陸上自衛隊那覇駐屯地整備場 建設工事に伴う緊急発掘調査報告-』	2010	那覇市文化財調査報告書第83集	本土産陶磁器
『せともの百年史 -中部地方出土の近代陶磁 瀬戸・美濃窯の近代3-』	2009	瀬戸市制施行80周年記念 平成21年度財団法人瀬戸市文化振興財団 埋蔵文化財センター企画展	本土産陶磁器
『特別企画展 大正二年のせともの屋』	2002	瀬戸市歴史民俗資料館	本土産陶磁器
『特別展 戦時中の統制したやきもの』	2001	(財) 岐阜県陶磁資料館	本土産陶磁器
「アラヤチの製作と焼成について」	2006	赤嶺 由紀子 / 『壺屋焼物博物館紀要 第7号』 / 那覇市立壺屋焼物博物館	沖縄産陶器
「沖縄産施釉陶器に関する基礎研究(1) ~灰釉碗を中心に~」	2010	木村 謙介 / 『壺屋焼物博物館紀要 第11号』 / 那覇市立壺屋焼物博物館	沖縄産陶器

『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』	2000	九州近世陶磁学会	沖縄産陶器
『壺屋古窯群Ⅰ 一人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査ー』	1992	那覇市文化財調査報告書 第 23 集	沖縄産陶器
『壺屋古窯群Ⅱ ー那覇市水道局上水道管改良工事に伴う緊急発掘調査報告ー』	1995	那覇市文化財調査報告書 第 27 集	沖縄産陶器
『壺屋古窯群Ⅲ 一人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査ー』	1997	那覇市文化財調査報告書 第 38 集	沖縄産陶器
「壺屋と古典焼」	1992	津波古 聡 / 『沖縄県立博物館紀要 第 18 号』 / 沖縄県立博物館	沖縄産陶器
『壺屋焼物博物館 常設展ガイドブック』	1998・2009	那覇市立壺屋焼物博物館	沖縄産陶器
「判（ハン）について ー当館収蔵品に見られる資料を中心にー」	2002	内間 靖 / 『壺屋焼物博物館紀要 第 3 号』 / 那覇市立壺屋焼物博物館	沖縄産陶器
『琉球古窯焼 壺屋焼』	2001	那覇市文化協会 古美術骨董部会	沖縄産陶器
『琉球陶器の来た道』	2011	沖縄県立博物館・美術館×那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展 / 沖縄県立博物館・美術館	沖縄産陶器
『琉球の古陶集』	2013	諸見民芸館	沖縄産陶器
『琉球の古陶 ～その美と流れ～』	2017	垣花隆夫	沖縄産陶器
『ガラス瓶の考古学』	2006	桜井準也 / 六一書房	ガラス製品
『企画展 掘り出された硯 ～琉球・沖縄の硯から見た歴史と文化～』	2010	今帰仁村教育委員会	石製品
『平安山原 A 遺跡 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業』	2016	北谷町教育委員会文化財調査報告書 第 38 集	本土産陶磁器・沖縄産陶器・ガラス製品
『第三二軍司令部津嘉山壕群・津嘉山北地区旧日本軍壕群』	2008	南風原町文化財調査報告書 7	金属製品
『神山古集落 普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書』	2019	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 99 集	近代遺跡
『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 1 ー普天間古集落遺跡ー』	2015	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 74 集	窯跡・近代遺構
『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 3 ー普天間古集落遺跡ー』	2016	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 83 集	窯跡・近代遺構
『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 4 ー普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡ー』	2017	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 90 集	窯跡・近代遺構

## 参考 Web サイト

Web サイトページ名	アドレス	参考箇所
『令和 4 年度 基地対策 概要版』 2022 【沖縄市】	<a href="https://www.city.okinawa.okinawa.jp/documents/1819/r4_kititaisaku.pdf">https://www.city.okinawa.okinawa.jp/documents/1819/r4_kititaisaku.pdf</a>	第 1 章
『特別展示 平和のいしずえ 2013 ～くらしのなかの戦争～』【粟東歴史民俗博物館】	<a href="http://www.city.ritto.lg.jp/hakubutsukan/ishizue2013-pamphlet.pdf">http://www.city.ritto.lg.jp/hakubutsukan/ishizue2013-pamphlet.pdf</a>	本土産 / 兵隊杯
『九州歴史資料館収蔵品 飛び出すむかしの宝物 解説シート』 軍用食器金属代用品 / 勲章文碗 立身出世を願った子供茶碗 / 従軍記念杯 久留米歩兵第 48 連隊【九州歴史資料館】	<a href="https://kyureki.jp/wp-content/uploads/2021/03/ondemand_4-1.pdf">https://kyureki.jp/wp-content/uploads/2021/03/ondemand_4-1.pdf</a>	近代磁器
『近代における有田陶業技術の変遷』 1985【鈴田 由紀夫】	<a href="http://www.jshit.org/kaishi_bn1/02_1suzuta.pdf">http://www.jshit.org/kaishi_bn1/02_1suzuta.pdf</a>	近代陶磁器・絵具・道具等

## 付編 製糖窯跡

—造成工事に伴う製糖窯跡発掘調査概要報告—



## 目 次

1. はじめに
2. 調査の経緯
3. 調査の概要
4. おわりに

## 挿図・図版目次

- 第1図 沖縄市の位置と調査区の位置  
第2図 製糖窯跡の位置図  
第3図 製糖窯跡位置図（調査範囲）  
第4図 製糖窯跡

- 図版1 製糖窯跡調査状況  
図版2 製糖窯跡

## 参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・集号・発行機関	参考・引用箇所
『楚南村跡ほかー嘉手納地区（18～23）運動施設移設工事に係る文化財発掘調査ー』	2012	うるま市文化財調査報告書 第17集	製糖施設

## 1. はじめに

近代の屋取集落である大工廻八所集落跡 B 地点の南東部において不時発見された製糖窯跡について緊急調査を行ったので、その概要を報告する。

発掘調査：比嘉 清和・縄田 雅重・比嘉 二規・大城 千明・曾木 菊枝・島田 由利佳・富平 砂綾子・長堂 綾・八田 夕香

資料整理：縄田 雅重・島田 由利佳・富平 砂綾子・長堂 綾

指導・助言：読谷村教育委員会文化振興課課長 上地 克哉

## 2. 調査の経緯

令和 3 年 4 月 26 日当館あてに知花地区内の敷地造成工事に伴う掘削作業中に、遺構のようなものが確認されたとの連絡があった。現地では表土より深度約 1.4 m 地点で千枚岩の石組の上に鉄製の火格子のようなものが確認された。近代の製糖窯の可能性があると判断し、発掘調査を行い記録保存することとなった。発掘調査現地作業は令和 3 年 4 月 27 日から 5 月 6 日までの期間（4 日間）実施した。

## 3. 調査の概要

製糖窯は表土から深度約 1.4 m 地点で確認された。上層は造成土で覆われており、人力での掘削は困難であることから当該地区造成工事業者の協力のもと、遺構上面まで重機による掘削を行った。その後、当館による遺構検出を行い、検出状況の写真撮影と断面図と正面図の実測を行った。時間的制約から平面図及び縦断面見通し図については写真測量を実施し、略図を作成した。

〈遺構について〉

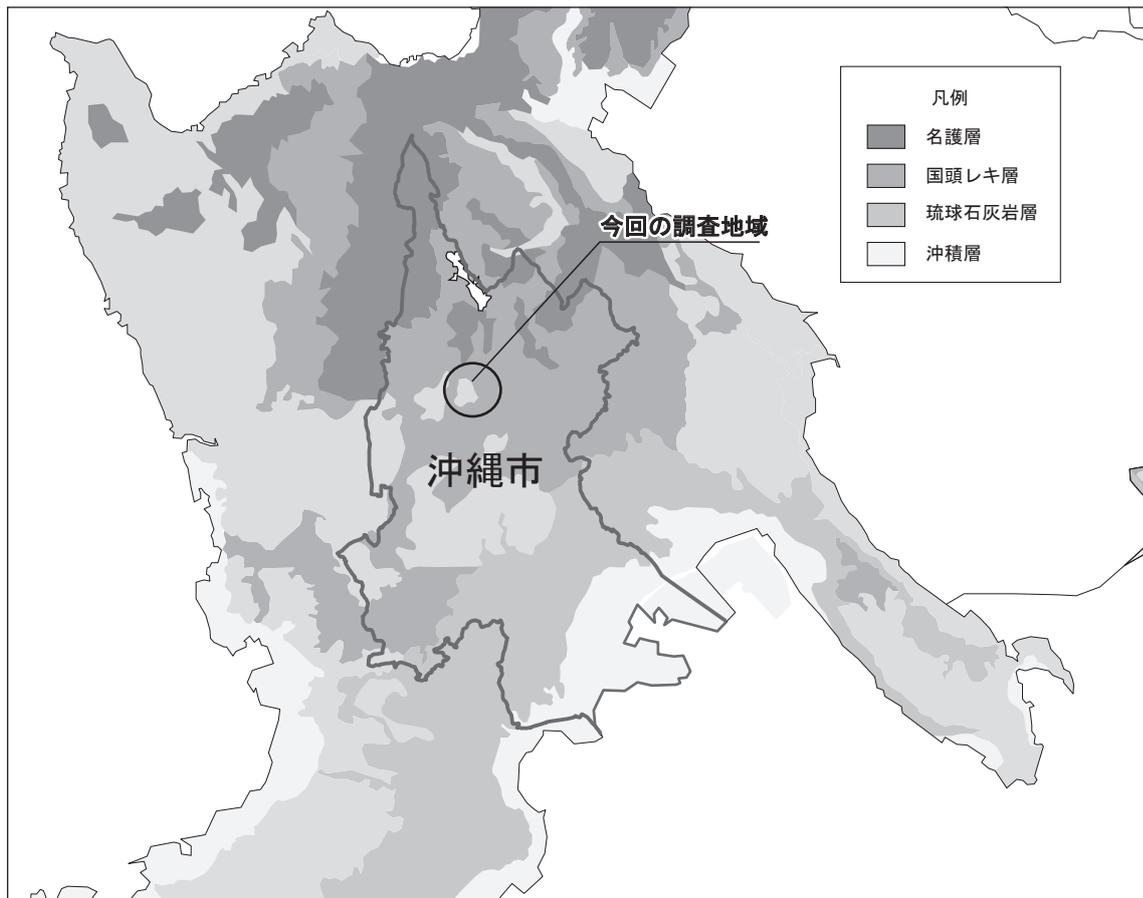
製糖窯の長軸は南―北で規模は約 5.5 × 2.0 m、地山を溝状に掘り込む構造である。南側の床面を掘り込んで空気口を造り、その上部に鉄製の長方形の棒を火格子（ロストル）状に配している。南側から北側に向け燃焼部と煙道部を造っており、東西の壁面に千枚岩を用いた石積みを確認した。特に空気口部分と西側石積みの残存状況が良好であった。空気口には灰が堆積（約 6 cm）しており、燃焼部床面に強い被熱痕と炭跡が確認された。南側の空気口上部、火格子部分から燃焼部にかけて緩やかに傾斜をつけて上り、北側の煙道部分で勾配がきつくなる。

〈遺物について〉

遺構埋土より火格子部分と思われる鉄製の棒（長径約 60 cm、幅約 4 cm）・ガラス瓶（ダグラス社製エンボス加工）・粉末の薬品入れ・化粧クリーム瓶・本土産磁器（小碗）・沖縄産施釉陶器（白化粧碗）等が確認された。

## 4. おわりに

今回の調査で大工廻八所集落近辺において製糖窯の操業がうかがえた。正確な操業時期は不明であるが、おそらく近代の遺構と思われる。大工廻八所集落跡 B 地点の発掘調査成果と共に、主に大正期から沖縄戦にかけて、当時の生活を垣間見る機会となった。今回の調査にご協力下さった当該地区の敷地造成工事関係者の皆様及び、出土遺物に関してご助言下さった上地 克哉様には多大なるご理解とご支援を賜りました。心から感謝申し上げます。



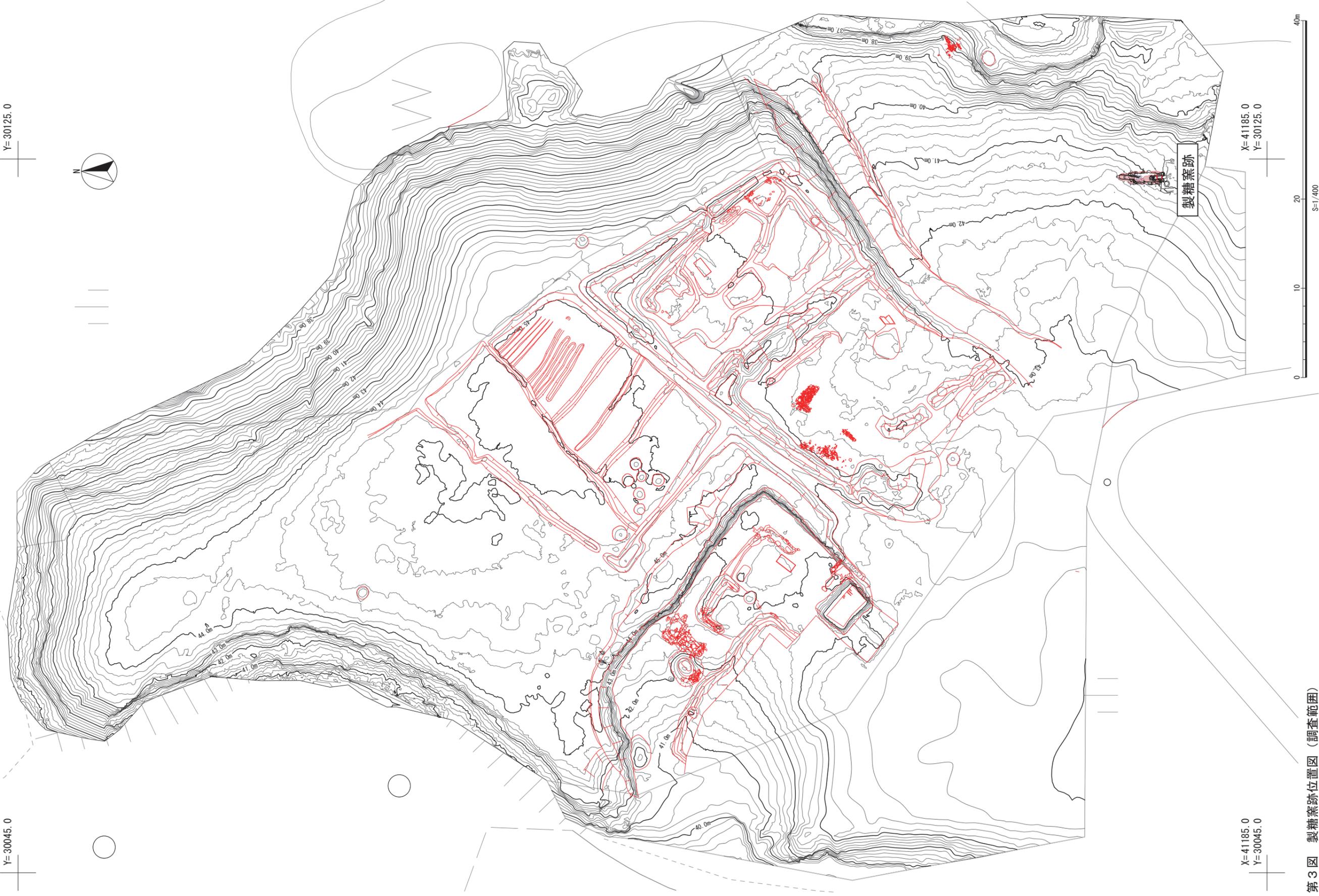
第1図 沖繩市の位置と調査区の位置



第2図 製糖窯跡の位置図

X=41325.0  
Y=30045.0

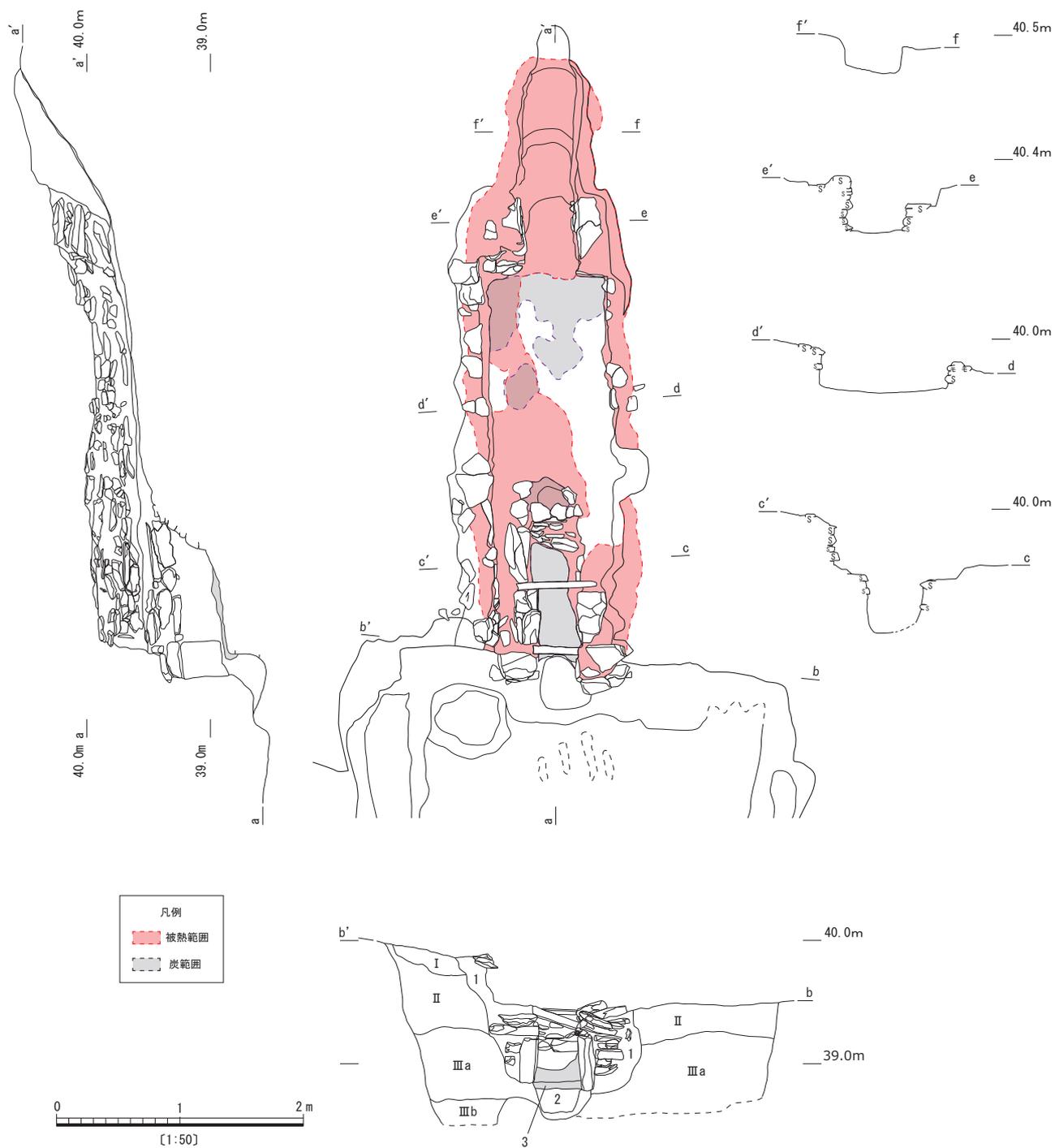
X=41325.0  
Y=30125.0



X=41185.0  
Y=30045.0

X=41185.0  
Y=30125.0

第3図 製糖窯跡位置図 (調査範囲)



製糖窯跡

1. 明褐色 (7.5YR5/6) 土砂質粘土 遺構の掘り方。1cm前後の炭化物が僅かに混ざる。しまりやや弱い。
2. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質粘土 底面に6cm大の隄土塊が混ざる。上部はI層と類似。地山の掘り込みに被熱痕が見られる。しまりやや弱い。
3. 褐色 (7.5YR4/3) 砂質粘土 遺構(窯)の使用面か。炭化物が30%程混ざる。しまり弱い。

基本層序

- I層. 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質粘土 戦前の遺成土。千枚岩片を20%程含む。混ざりの多い、しまりの強い土。
- II層. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質粘土 自然堆積、若しくは地山。僅かに砂粒混ざる。しまりやや強い。
- IIIa層. 明褐色 (10YR6/6) 砂質粘土 地山。上層より黄色強い。しまりやや強い。
- IIIb層. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘性砂 地山。IIIa層より黄色が強く、砂質が強くなる。下方は青味がかかる千枚岩の風化土か。しまりやや強い。

第4図 製糖窯跡



不時発見状況（南東から）



不時発見状況 火格子部分（南東から）



火格子



重機による上面検出状況（南東から）

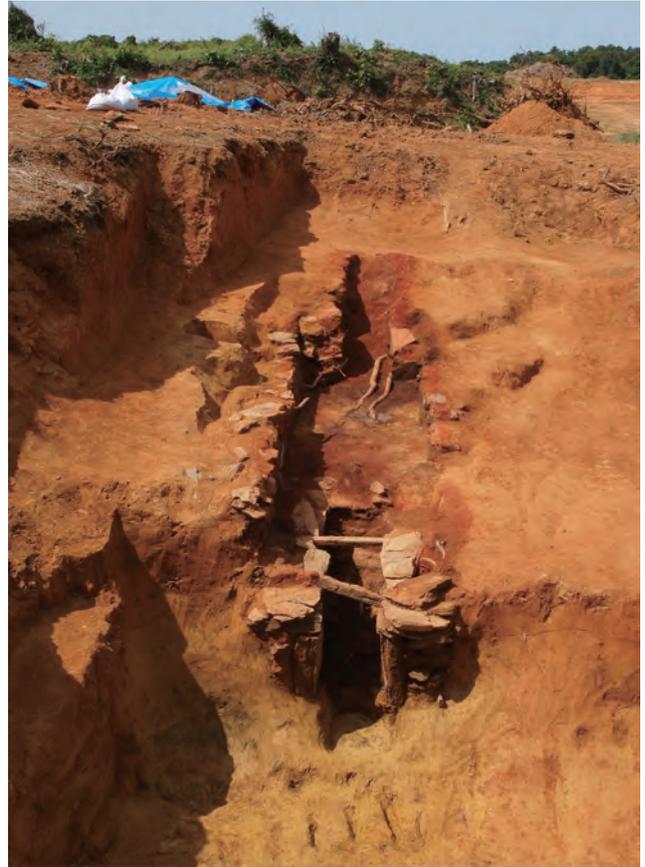


遺構検出作業状況（南東から）

図版1 製糖窯跡調査状況



製糖窯跡 全景（南東から）



製糖窯跡 全景（南から）



製糖窯跡 空気口 正面（南から）



製糖窯跡 空気口 内側（南から）



製糖窯跡 空気口（上から）



製糖窯跡 東側壁面（西から）

図版2 製糖窯跡

## 報告書抄録

ふりがな	だくじゃくやとぅくるーしゅうらくあとびーちてん だくじゃくいーよなばるいせきはっくつちょうさほうこくしよ							
書名	大工廻八所集落跡 B 地点 大工廻上与那原遺跡発掘調査報告書							
副書名	嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内の基地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	沖縄市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 53 集							
編著者名	比嘉二規・大城千明・富平砂綾子・長堂綾・佐藤寛之・翁長武司・仲宗根文子・宮良知子・石川千恵・波木基真・パリノ・サーヴェイ株式会社							
発行機関	沖縄市教育委員会							
編集機関	沖縄市立郷土博物館							
所在地	〒 904-0031 沖縄県沖縄市上地 2 丁目 19 番 6 号 TEL : 098-932-6882							
発行年月日	2024（令和 6）年 3 月 15 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だくじゃくやとぅくるー 大工廻八所 しゅうらくあとびーちてん 集落跡 B 地点	おきなわけん 沖縄県 おきなわし 沖縄市 あざだくじゃく 字大工廻 いーよなばる 上与那原	47211	—	26 度 22 分 18 秒	127 度 48 分 5 秒	20190909 ~ 20200331	約 6,430 m <sup>2</sup>	移設事業
だくじゃく 大工廻 いーよなばるいせき 上与那原遺跡	おきなわけん 沖縄県 おきなわし 沖縄市 あざだくじゃく 字大工廻 いーよなばる 上与那原	47211	—	26 度 22 分 27 秒	127 度 48 分 10 秒	20191024 ~ 20200331	約 28 m <sup>2</sup>	移設事業
せいとうかまあと 製糖窯跡	おきなわけん 沖縄県 おきなわし 沖縄市 あざだくじゃく 字大工廻 いーよなばる 上与那原	47211	—	26 度 22 分 17 秒	127 度 48 分 6 秒	20200427 ~ 20200400	約 11 m <sup>2</sup>	移設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大工廻八所 集落跡 B 地点	集落跡	近代	屋敷跡・畑跡・道跡	中国産陶磁器・本土産陶磁器・ 沖縄産陶器・銭貨・金属製品・ 石製品・貝製品・ガラス製品・ 瓦・レンガ・獣骨		沖縄戦以前の集落を 良好な状態で確認し た。		
大工廻 上与那原遺跡	散布地	グスク時代 ～近世	ピット・土坑	土器・青磁・沖縄産陶器・瓦・ 石器・鍛冶滓		グスク時代の遺構、遺 物を確認した。		
製糖窯跡	生産遺跡	近代	製糖窯跡	近現代陶磁器・ガラス瓶・石 臼		製糖窯の全体構造を 把握できる遺構を良好 な状態で確認した。		
要約 (大工廻八所集落跡 B 地点)	調査地区域は戦前の屋取集落である八所集落の所在地にあたり、屋敷跡や近代遺物が確認された。発掘調査に合わせて植生調査・聞き取り調査・文献調査を行った。今回の発掘調査により、主に大正期から戦前までの屋取集落の生活の様子だけでなく、近世や戦後の土地利用の実態等を考える上でも重要な成果が得られた。							
要約 (大工廻上与那原遺跡)	嘉手納（H27）知花地区文化財試掘調査により遺構・遺物が確認されたため本調査を行った。土坑と遺物が確認された。遺物は土器・青磁・沖縄産陶器などが得られた。土坑・ピットについては性格が不明である。調査区西側丘陵に遺跡主要部分があったと思われる。							
要約 (製糖窯跡)	知花地区敷地造成工事に伴う緊急調査である。遺構北西側に八所集落 B 地点が隣接している。戦前に使用された製糖窯と考えられる。							

---

大工廻八所集落跡 B 地点  
大工廻上与那原遺跡  
発掘調査報告書

嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内の基地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
沖縄市文化財調査報告書 第 53 集

2024（令和 6）年 3 月 15 日

発行 沖縄市教育委員会

編集 沖縄市立郷土博物館

〒 904-0031 沖縄県沖縄市上地 2-19-6

TEL (098) 932-6882

印刷 丸正印刷株式会社

〒 903-0211 沖縄県西原町小那覇 1215

TEL (098) 835-8181

---